

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

- 4 -

福岡県京都郡苅田町馬場所在

馬場長町遺跡

馬場仁王免遺跡

1 馬場長町遺跡 1・2区遠景
(西から)



2 同上 (東から)



1 馬場長町遺跡 3 区遠景
(南から)



2 同上石灰岩焼成窯跡
(南東から)



3 同上 (上空から)

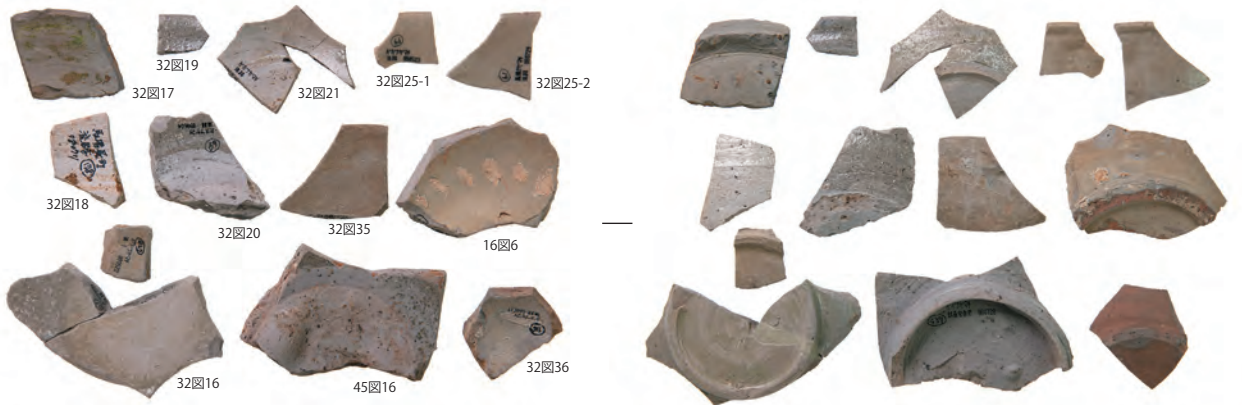




1 馬場長町遺跡 2 区流路跡遺物出土状況 (北から)



2 同上ウミガメ骨出土状況出土状況 (北から)



馬場長町遺跡出土遺物



1 馬場仁王免遺跡遠景（南から）



2 遺跡西側から東方の海を望む



1 馬場仁王免遺跡 5号土坑（西から）



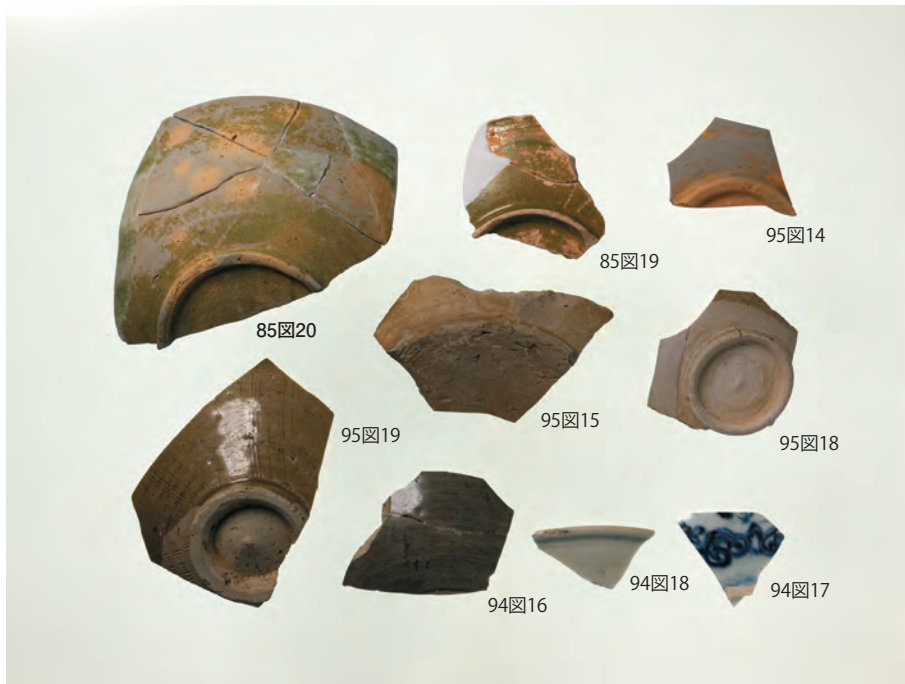
2 馬場仁王免遺跡 5号土坑出土品



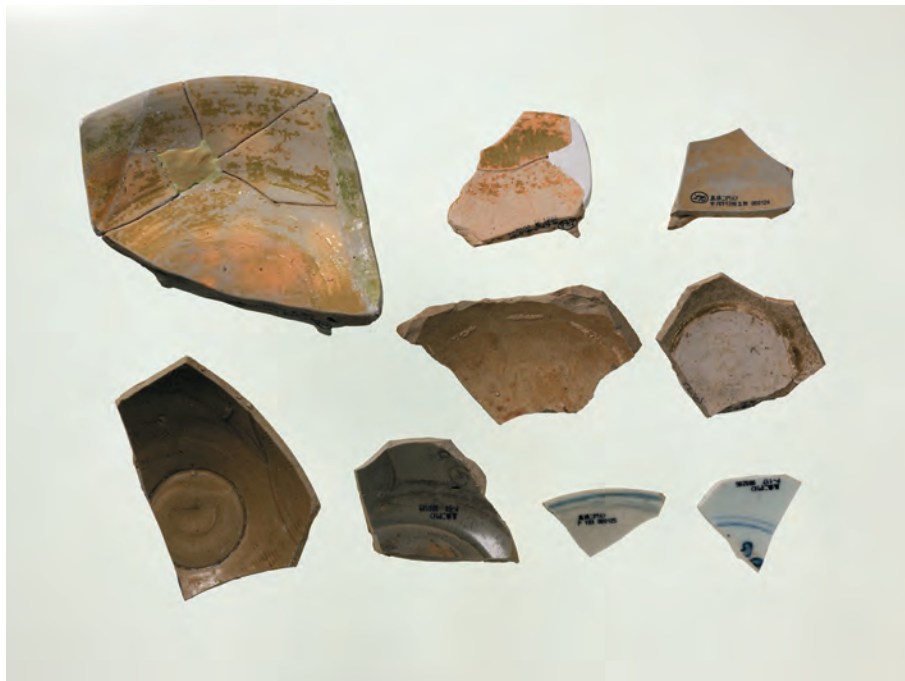
1 馬場仁王免遺跡谷部土器集中出土地点（南から）



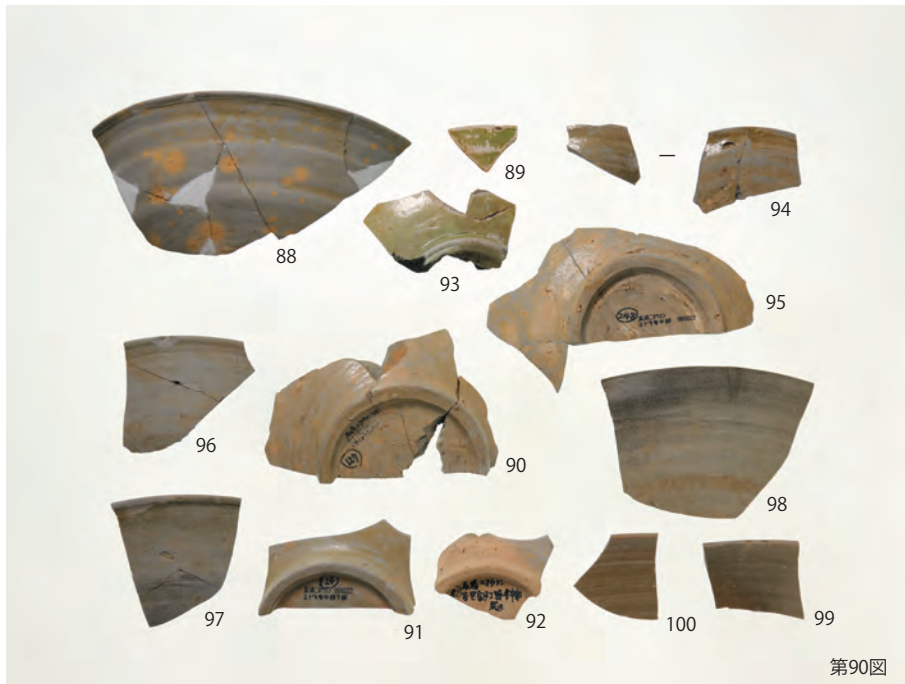
2 馬場仁王免遺跡谷部土器集中出土地点（東から）



|



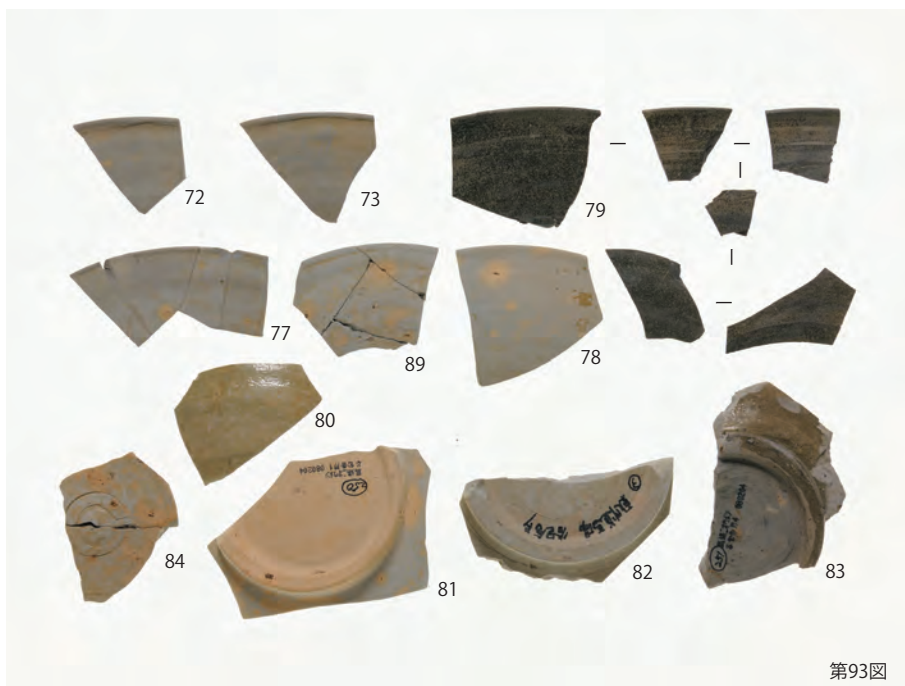
丘陵上（溝、ピット、包含層および検出時等）出土の陶磁器類



第90図



谷部土器集中出土地点出土の陶磁器類



第93図



谷部包含層出土の陶磁器類①



第93図

|



谷部包含層出土の陶磁器類②

序

福岡県では、平成 19 年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成 19 年度から 20 年度にかけて行った、苅田町馬場に所在する馬場長町遺跡と馬場仁王免遺跡の調査の記録です。

馬場長町遺跡と馬場仁王免遺跡は、苅田町東部の丘陵裾に立地しており、馬場長町遺跡は斜面裾部の 1・2 区と丘陵緩斜面 3 区に分かれており、馬場仁王免遺跡は長町遺跡との間の谷を挟んだ細長い丘陵上に所在しています。

今回の調査では、馬場長町遺跡 1・2 区からは、緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯青磁、墨書土器などが出土しており、奈良時代から平安時代にかけての有力者の館跡に隣接する遺跡と考えられ、今後の馬場地区の調査が期待されます。3 区からは中世の小規模な集落と、明治から大正時代の石灰岩焼成窯が発見され、苅田町の主要産業の 1 つである石灰岩採掘の歴史の知る上で貴重な資料を得ることができました。

馬場仁王免遺跡からは、平安時代から鎌倉時代の集落遺跡で、和鏡が副葬された土壙墓があることが確認され、当時の荘園である宇原荘の一端を明らかにすることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成 25 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

例 言

1. 本書は東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡苅田町大字馬場に所在する馬場長町遺跡と馬場仁王免遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第4集にあたる。
2. 発掘調査は西日本高速株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。
3. 馬場長町遺跡の3区は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第3地点、馬場長町遺跡1・2区と馬場仁王免遺跡は4地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は秦憲二・坂元雄紀が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、秦・坂元・海出が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した分布図等は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・葦島・中津・田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改変のため、九州歴史資料館に移管された。
10. 自然遺物の鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、木製品の樹種同定は九州歴史資料館文化財調査室小林啓が行った。
11. 馬場長町遺跡鶴嘴CTスキャンおよび画像化は九州歴史資料館文化財調査室加藤和歳が行った。馬場仁王免遺跡5号土坑出土青銅鏡の3次元デジタルスキャンおよび画像化は、九州国立博物館科学課輪田慧氏の協力を得た。
12. 本書のⅢ-2(1)～(4)については坂元が、Ⅲ-1(5)とⅢ-2(5)についてはパリノ・サーヴェイ株式会社金井慎司が執筆し、その他の執筆・編集は秦が行った。

目次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

写真目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
3	調査・整理の組織	2
II	位置と環境	6
III	発掘調査の記録	11
1	馬場長町遺跡	11
(1)	調査の概要	11
(2)	1・2区の遺構と遺物	12
①	掘立柱建物跡	12
②	土坑	12
③	井戸	22
④	堤状遺構	23
⑤	溝状遺構	32
⑥	流路跡	36
⑦	その他の遺構と遺物	62
(3)	3区の遺構と遺物	85
①	土坑	85
②	井戸	88
③	門状遺構	91
④	溝状遺構	91
⑤	その他の遺構と遺物	99
(4)	小結	118
(5)	馬場長町遺跡の自然科学分析	140
2	馬場仁王免遺跡	161
(1)	調査の概要	161
(2)	基本土層	161
(3)	遺構と遺物	163
①	土坑	163

② 溝状遺構	169
③ 谷部土器集中地点	170
④ 谷包含層出土の土器	175
⑤ ピット出土の土器	182
⑥ 丘陵上の包含層および検出時出土の土器	183
⑦ その他の出土遺物	185
(4) 小結	188
(5) 馬場仁王免遺跡の自然科学分析	192
IV おわりに	195

図版目次

卷頭図版 1	1 馬場長町遺跡 1・2 区遠景 (西から)	
	2 同上 (東から)	
卷頭図版 2	1 馬場長町遺跡 3 区遠景 (南から)	
	2 石灰岩焼成窯跡 (南から)	
	3 同上 (上空から)	
卷頭図版 3	1 馬場長町遺跡 2 区流路遺物出土状態 (北から)	
	2 同上ウミガメ骨出土状態 (北から)	
卷頭図版 4	馬場長町遺跡出土遺物	
卷頭図版 5	1 馬場仁王免遺跡遠景 (南から)	2 遺跡西側から東方の海を望む
卷頭図版 6	1 馬場仁王免遺跡 5 号土坑 (西から)	2 馬場仁王免遺跡 5 号土坑出土品
卷頭図版 7	1 馬場仁王免遺跡谷部土器集中出土地点 (南から)	
	2 馬場仁王免遺跡谷部土器集中出土地点 (東から)	
卷頭図版 8	丘陵上 (溝、ピット、包含層および検出時等) 出土の陶磁器類	
卷頭図版 9	谷部集中出土地点出土の陶磁器類	
卷頭図版 10	谷部包含層出土の陶磁器類①	
卷頭図版 11	谷部包含層出土の陶磁器類②	
図版 1	1 馬場長町遺跡 1 区全景 (南から)	2 同上 1 区全景 (西から)
	3 同上 2 区全景 (上空から)	
図版 2	1 2 区 1 号掘立柱建物跡 (上空から)	2 2 区 1 号土坑掘り上がり状況 (西から)
	3 同左遺物出土状況	4 同上遺物出土状況
	5 同上土層断面 (南から)	
図版 3	1 1・3 号井戸検出状況 (南から)	2 1 号井戸 (南西から)
	3 2 号井戸 (南から)	4 3 号井戸 (南東から)
図版 4	1 1 区 1 号溝状遺構 (南から)	2 同左遺物出土状況 (南から)
	3 同上土層断面 (南から)	4 1 区落ち込み状遺構 (南から)
図版 5	1 堤状遺構 (北東から)	2 同左東西断ち割りトレンチ東側土層 (西から)
	3 同上除去状況 (北西から)	4 同上南北断ち割りトレンチ土層 (東から)
	5 1 区流路跡遺物出土状況 (南から)	6 斜面包含層土層断面 (北東から)

- 7 1区西壁流路跡土層断面（東から）
- 図版6 1 流路跡遺物出土状況（北から） 2 同上ウミガメ骨出土状況（南西から）
3 堤状遺構下遺物出土状況（南東から） 4 流路跡肘木出土状況（南から）
- 図版7 1 3区北東部（南から） 2 3区南東部全景（北から）
- 図版8 1 3区南東部全景（北から） 2 1号土坑（東から）
3 2号土坑（北から）
- 図版9 1 3号土坑（西から） 2 同上検出状況（南から）
3 同上土層断面（北から） 4 同上溝土層断面（東から）
- 図版10 1 5・6号土坑（西から） 2 門状遺構（北西から）
3 1・2号井戸（北西から） 4 1号井戸遺物出土状況（東から）
5 同左土層断面（東から）
- 図版11 1 1号溝状遺構土層断面（東から） 2 2号溝状遺構（北東から）
3 同上土層断面（東から）（北西から） 4 4号溝状遺構土層断面（南から）
5 6号溝状遺構土層断面（東から）
6 7号溝状遺構土層断面・遺物出土状況（東から）
7 14・15号溝状遺構土層断面（北から）
- 図版12 1 石灰岩焼成窯掘削前状況（南から） 2 同左（東から）
3 同上掘り上がり状況（南東から） 4 同左（東から）
5 同上トンネル部土層断面（南から） 6 同左掘り上がり状況（南から）
7 同上天井部（西から）
- 図版13 1・2区出土土器1
- 図版14 1・2区出土土器2
- 図版15 1・2区出土土器3
- 図版16 1・2区出土土器4
- 図版17 1・2区出土土器5
- 図版18 1・2区出土土器6
- 図版19 1～3区出土土器
- 図版20 3区出土遺物
- 図版21 馬場長町遺跡出土土製品1
- 図版22 馬場長町遺跡出土土製品2
- 図版23 馬場長町遺跡出土土・金属製品
- 図版24 馬場長町遺跡出土石・木製品
- 図版25 馬場長町遺跡3区出土獣骨1
- 図版26 馬場長町遺跡3区出土獣骨2
- 図版27 1 遺跡東方から西方京都峠方面を望む 2 遺跡全景（上空から）
- 図版28 1 基本土層①〔A - A'〕（東から） 2 基本土層②〔B - B'〕（東から）
3 基本土層③〔C - C'〕（東から）
4 基本土層④〔D - D'〕（3号溝含む）（東から）
- 図版29 1 1号土坑（南西から） 2 2号土坑（北から）
3 3号土坑（南から）

図版 30	1 4号土坑 (南西から)	2 4号土坑土層 (南西から)
	3 5号土坑 (西から)	
図版 31	1 6号土坑 (南から)	2 7号土坑 (北西から)
	3 8号土坑 (北から)	
図版 32	1 9号土坑 (北から)	2 10号土坑 (南から)
	3 11号土坑 (北西から)	
図版 33	1 12号土坑 (南から)	2 12号土坑土層 (東から)
	3 13号土坑 (南から)	
図版 34	1 1号溝 (北から)	2 1号溝土層 [a - a´] (東から)
	3 2号溝 (北から)	4 2号溝土層 [b - b´ のベルト裏] (西から)
図版 35	1 谷部① (東から)	2 谷部② (西から)
	3 谷部土器集中出土地点の包含層堆積状況および3号溝土層 [c - c´] (西から)	
図版 36	1 谷部土器集中出土地点① (南から)	2 谷部土器集中出土地点② (東から)
	3 谷部土器集中出土地点東側杭 (南から)	4 谷部土器集中出土地点西側杭 (南から)
図版 37	遺構および谷部土器集中地点出土土器	
図版 38	谷部土器集中地点および包含層出土土器	
図版 39	土製品、石製品および金属製品	
図版 40	5号土坑出土鉄製刀子および青銅鏡	

挿図目次

第1図	東九州道福岡工事区調査地点位置図 (1/100,000)	4
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7
第3図	周辺地形と調査範囲図 (1/2,500).....	10
第4図	馬場長町遺跡1・2区遺構全体図 (1/300).....	13
第5図	1・2区1号掘立柱建物跡、1号土坑、1号溝状遺構土層断面実測図 (1/60)	15
第6図	2区1号土坑上位出土土器実測図1 (12は1/4、他は1/3)	16
第7図	2区1号土坑上位出土土器実測図2 (1/3)	17
第8図	2区1号土坑出土土器実測図1 (1/3)	19
第9図	2区1号土坑出土土器実測図2 (5は1/4、他は1/3)	21
第10図	2区1～3号井戸・堤状遺構実測図 (4は1/60、他は1/30)	22
第11図	2区堤状遺構下出土土器実測図1 (1/3)	25
第12図	2区堤状遺構下出土土器実測図2 (1/3)	27
第13図	2区堤状遺構下出土土器実測図3 (1/3)	29
第14図	2区堤状遺構下出土土器実測図4 (1/3)	31
第15図	2区1号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	33
第16図	1・2区1・3・4号溝状遺構、落ち込み状遺構、ピット出土土器・陶磁器実測図 (1/3) ..	35
第17図	1・2区流路跡獣骨出土位置図、土層断面図、不定形落ち込み土層断面図 (1は1/150、 他は1/60).....	37
第18図	1・2区流路跡出土土師器実測図1 (1/3).....	39

第 19 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 2(1/3)……………	40
第 20 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 3(1/3)……………	41
第 21 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 4(1/3)……………	43
第 22 図	1・2 区流路跡出土土師器・黒色土器実測図 (1/3)……………	45
第 23 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 5(1/3)……………	46
第 24 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 6(1/3)……………	47
第 25 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 7(1/3)……………	48
第 26 図	1・2 区流路跡出土土師器実測図 8(1/3)……………	49
第 27 図	1・2 区流路跡出土須恵器実測図 1(1/3)……………	51
第 28 図	1・2 区流路跡出土須恵器実測図 2(1/3)……………	53
第 29 図	1・2 区流路跡出土須恵器実測図 3(1/3)……………	55
第 30 図	1・2 区流路跡出土須恵器実測図 4(3・4・8 は 1/3、他は 1/4)……………	57
第 31 図	1・2 区流路跡出土須恵器実測図 5(1 は 1/4、他は 1/3)……………	58
第 32 図	1・2 区流路跡出土陶磁器実測図 (1/3)……………	59
第 33 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 1(1/3)……………	63
第 34 図	1・2 区斜面包含層出土土師器・黒色土器実測図 (1/3)……………	65
第 35 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 2(4 は 1/2、他は 1/3)……………	66
第 36 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 3(1/3)……………	68
第 37 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 4(1/3)……………	69
第 38 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 5(1/3)……………	70
第 39 図	1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 6(1/3)……………	71
第 40 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 1(1/3)……………	72
第 41 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 2(1/3)……………	74
第 42 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 3(1/3)……………	76
第 43 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 4(1/3)……………	78
第 44 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 5(2 は 1/3、他は 1/4)……………	81
第 45 図	1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 6(1/3)……………	82
第 46 図	遺構検出面・上層包含層・攪乱溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	83
第 47 図	馬場長町遺跡 3 区遺構全体図 (1/300)……………	折込
第 48 図	3 区 1～4 号土坑実測図 (1/60)……………	86
第 49 図	3 区 1～3・5・6 号土坑・門状遺構出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	87
第 50 図	3 区 5・6 号土坑、1・2 号井戸、門状遺構実測図 (1/60)……………	89
第 51 図	3 区 1・2 号井戸出土土器・陶磁器実測図 (5・6 は 1/4、他は 1/3)……………	90
第 52 図	3 区 1・2・4・6・7・10・11・14・15 号溝状遺構土層断面実測図 (1/60)……………	92
第 53 図	3 区 3～6 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	94
第 54 図	3 区 7 号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)……………	95
第 55 図	3 区 7 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	96
第 56 図	3 区 9・10・14・15 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	97
第 57 図	3 区谷部出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	101
第 58 図	3 区ピット出土土器・陶磁器実測図 (1/3)……………	102

第 59 図	石灰焼成窯出土・表採遺物実測図 (15・16 は 1/4、他は 1/3) ……………	104
第 60 図	馬場長町遺跡出土土製品実測図 (1/3) ……………	105
第 61 図	馬場長町遺跡出土イイダコ壺実測図 1 (1/3) ……………	106
第 62 図	馬場長町遺跡出土イイダコ壺実測図 2 (1/3) ……………	107
第 63 図	馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 1 (1/3) ……………	108
第 64 図	馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 2 (1/3) ……………	109
第 65 図	馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 3 (1/3) ……………	110
第 66 図	馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 4 (1/3) ……………	111
第 67 図	馬場長町遺跡出土焼塩壺・製塩土器実測図 (1/3) ……………	112
第 68 図	馬場長町遺跡出土鉢形焼塩壺実測図 (1/3) ……………	113
第 69 図	馬場長町遺跡出土石製品実測図 (1～3 は 1/2、他は 1/3) ……………	114
第 70 図	馬場長町遺跡出土石・金属製品実測図 (5 は 1/2、他は 1/3) ……………	115
第 71 図	馬場長町遺跡出土木製品実測図 1 (1/8) ……………	116
第 72 図	馬場長町遺跡出土木製品実測図 2 (1 は 1/4、2 は 1/2) ……………	117
第 73 図	京都郡・築上郡における 8・9 世紀の甕形土器比較図 (1/12) ……………	121
第 74 図	円筒状土器・煙突の類例 (1/8) ……………	125
第 75 図	長野 A 遺跡出土墨書土器との比較図 (1/3) ……………	126
第 76 図	須恵器重ね焼き模式図 (引用文献 11 を改変) ……………	128
第 77 図	イイダコ壺比較図 (1/9・1/600,000) ……………	133
第 78 図	肘木比較図と復元図 (引用文献 27 より) ……………	136
第 79 図	石灰岩分布図・入水石灰窯実測図 (引用文献 28 を改変) ……………	139
第 80 図	ニホンジカ骨格各部の名称 ……………	142
第 81 図	調査区西壁基本土層図 (1/80) ……………	162
第 82 図	馬場仁王免遺跡遺構配置図 (1/250) ……………	折込
第 83 図	1～7 号土坑実測図 (1/30) ……………	164
第 84 図	8～13 号土坑実測図 (12 は 1/40、他は 1/30) ……………	166
第 85 図	土坑および溝出土土器実測図 (1/3) ……………	172
第 86 図	1・2 号溝土層、谷部土器集中出土地点実測図 (1/40、杭拡大図：1/20、谷土層：1/80) ……	171
第 87 図	谷部土器集中出土地点出土土器実測図① (1/3) ……………	173
第 88 図	谷部土器集中出土地点出土土器実測図② (1/3) ……………	174
第 89 図	谷部土器集中出土地点出土土器実測図③ (86 は 1/5、他は 1/3) ……………	176
第 90 図	谷部土器集中出土地点出土土器実測図④ (1/3) ……………	177
第 91 図	谷部包含層出土土器実測図① (1/3) ……………	178
第 92 図	谷部包含層出土土器実測図② (1/3) ……………	180
第 93 図	谷部包含層出土土器実測図③ (1/3) ……………	182
第 94 図	ピット出土土器実測図 (1/3) ……………	184
第 95 図	丘陵上の包含層および検出時等出土土器実測図 (1/3) ……………	186
第 96 図	出土土製品、石製品および金属製品実測図 (12 は 1/1、他は 1/2) ……………	187
第 97 図	ウマ骨格各部の名称 ……………	192
第 98 図	豊前北部地域の官道推定路線と主要遺跡分布図 (1/200,000) ……………	196

表目次

第1表	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	5
第2表	馬場長町遺跡出土土錘計測表	102
第3表	馬場長町遺跡の種実同定結果	140
第4表	馬場長町遺跡の検出動物分類群一覧	142
第5表	馬場長町遺跡の骨同定結果(1)	143
第6表	馬場長町遺跡の骨同定結果(2)	144
第7表	馬場仁王免遺跡出土土器類一覧表1	190
第8表	馬場仁王免遺跡出土土器類一覧表2	191
第9表	馬場仁王免遺跡の骨同定結果	192

写真目次

写真1	土師器小皿の重ね焼き痕跡	127
写真2	視覚効果のため金雲母を入れた土師器	127
写真3	焼け歪んだイイダコ壺と外器表面の特徴	127
写真4	型作りイイダコ壺底部内面の成形痕	127
写真5	焼塩壺の塩の付着する例(1)と2次加熱のない例(2・3)	127
写真6	墨が付着している土師器杯	127
写真7	重ね焼き痕から復元した須恵器杯蓋と高台付杯の焼成パターン	129
写真8	焼石灰売買文書と見られる帳簿(守利昭氏提供)	153
写真9	馬場長町遺跡の種実遺体	154
写真10	馬場長町遺跡の出土骨1	155
写真11	馬場長町遺跡の出土骨2	156
写真12	馬場長町遺跡の出土骨3	157
写真13	馬場長町遺跡の出土骨4	158
写真14	馬場長町遺跡の出土骨5	159
写真15	馬場長町遺跡の出土骨6	160
写真16	馬場仁王免遺跡の出土骨	194

I はじめに

1 調査に至る経緯

九州内では、九州縦貫自動車道から始まり、大分道や長崎道、宮崎道と高速走路の建設が進められてきたが、東九州側では道路整備が停滞しており、南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。アクセス道路は、農産物・水産物の輸送の効率化や、工場の誘致や企業の進出、観光産業の振興のために欠かすことができず、東九州地域の期待がかけられている。このような中で計画された東九州自動車道は、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約436kmの建設が予定されている。このうち福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る49.4kmで、北九州JCT～苅田北九州空港IC区間については平成18(2006)年2月に開通している。

現在工事が進められている苅田北九州空港IC～県境については、平成17(2005)年10月1日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社(ネクスコ西日本)九州支社が事業にあたっている。既存の椎田道路を利用するため、苅田町からみやこ町の椎田道路に接続する部分、ならびに築城IC、椎田ICの改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。東九州自動車道の整備計画については、報告済みの『東九州自動車道関係埋蔵文化財文化財調査報告-1-雨窪遺跡群』に詳しい。

平成14・15年度に現苅田北九州空港IC部分の発掘調査を実施して以降は、しばらくの間試掘調査のみを行っている。調整会議の中で用地取得が進んだ箇所から順次試掘確認調査を行っており、平成19年度から岩屋古墳群・延永ヤヨミ園遺跡とともに馬場仁王免遺跡の発掘調査に取りかかった。その後試掘確認調査と併行して、多くの発掘調査を実施しており、福岡工事区間の調査は今年度でほぼ終了している。

なお、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議」範囲として、調査対象から外すこととなり、苅田北九州空港IC～行橋IC間については平成18(2006)年、行橋IC～豊津IC間ならびに築上～県境間については平成20年に協議文書を交わしている(苅田北九州空港～豊津間は平成23年に再協議)。ただし、遺跡の内容を知る上で重要と考えられる部分については、「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得たうえで発掘調査を行っている。

2 調査の経過

東九州自動車道路線は、大字馬場地区一帯を包蔵地とする馬場遺跡群の西端部を通っており、平成18(2006)年8月28日～9月5日に、用地取得の進んだ範囲から試掘調査を実施し、その結果B317から320番地と326・327番地については本調査が必要となったことから、平成19(2007)年12月4日に前者を馬場仁王免遺跡として発掘調査に着手した。その後、326番地と327番地の一部については、平成20(2008)年5月7日に馬場長町遺跡として発掘調査に着手した。さらに、

調査中に用地取得の進んだ調査区の東西と北側の丘陵部の用地も試掘し、北側はすでに宅地造成のため削平されていたが、西側と丘陵側は傾斜の緩い部分で遺構が残っていたので、西側を2区、緩斜面側を3区として継続して調査した。

3 調査・整理の組織

平成19(2007)年度から23(2011)年度の調査・報告に関わる関係者は次のとおりである。平成23年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約・整理報告等を行っている。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成24年度
西日本高速株式会社九州支社					
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀(～9.30) 本間清輔(10.1～)	本間清輔
西日本高速株式会社九州支社福岡工事事務所					
所長	竹國一也	竹國一也(～9.30) 福田美文(10.1～)	福田美文	福田美文	源谷秋義
副所長(技術担当)	高尾英治	高尾英治(～7.31) 岩尾泉(～9.30)	高尾英治(～7.31) 入江壮太(10.1～)	岩尾泉(～9.30) 今井栄蔵(10.1～)	松繁浩二 井秀和
副所長(事務担当)	大内智博	塚本國弘(～9.30) 原野安博(10.1～)	原野安博	原野安博	原野安博
総務課長	白川雄二	白川雄二	白川雄二(～9.30)	江口政秋	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之(～5.10) 原野安博(5.11～)
工務課長	上川裕之(～6.30) 大久保良和(7.1～)	大久保良和	大久保良和(～9.30) 石塚純(10.1～)	石塚純	堅山哲二
苅田工事長	石田一彦	石田一彦	石田一彦	石田一彦(～6.30) 堂島淳一(7.1～)	角田成昭

福岡県教育委員会(平成23年度の機構改革により、発掘調査は九州歴史資料館に移管)

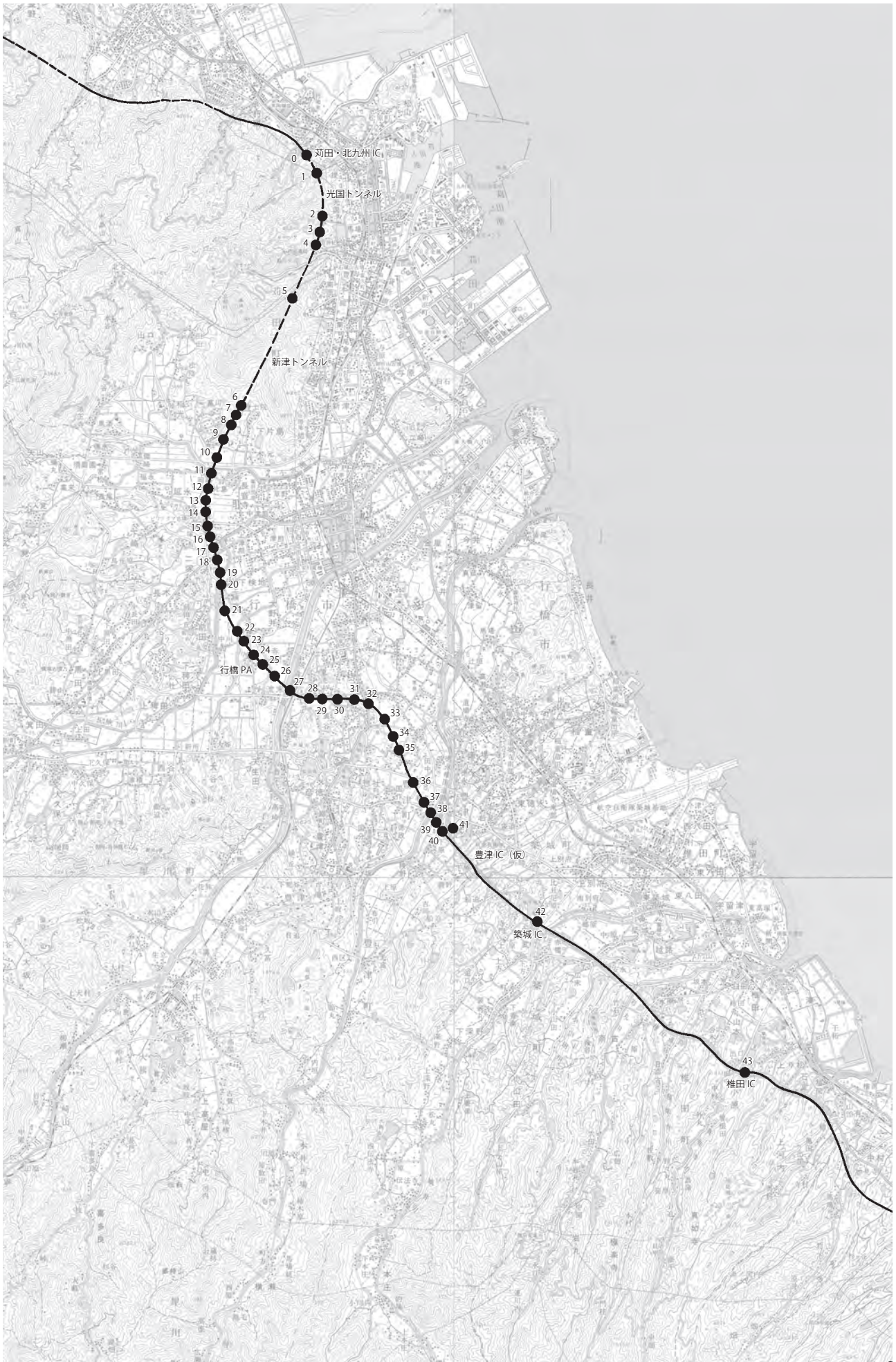
総括

教育長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠
教育次長	檜崎洋二郎	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄
文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘
同副課長	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋
参事	新原正典	新原正典	伊崎俊秋	小池史哲
	池邊元明	池邊元明	小池史哲	
	小池史哲	小池史哲		

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 24 年度
参事兼課長補佐	中 蘭 宏	前原俊史	前原俊史	日高公德	
課長補佐	前原俊史				
庶務					
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫	
事務主査	藤木 豊	藤木 豊			
主任主事	測上大輔	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔	
	柏村正央	野田 雅			
調査・整理・報告					
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文	
参事補佐	濱田信也	濱田信也	新原正典	新原正典	
主査		秦 憲二		秦 憲二	
主任技師	坂元雄紀		坂元雄紀 (アジア文化交流センター)		
臨時職員		海出淳平			

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 24 年度
九州歴史資料館					
館長					西谷 正
副館長					篠田隆行
企画主管 (総務室長)					圓城寺紀子
企画主管 (文化財調査室長)					飛野博文
企画主管 (文化財調査室長補佐)					吉村靖徳
技術主査 (文化財調査班長)					小川泰樹
庶務					
企画主査					長野吉博
事務主査					青木三保
主任主事					近藤一崇
主事					谷川賢治
整理報告					
技術主査					秦 憲二
主任技師					坂元雄紀 (アジア文化交流センター)
技術主査 (保存管理班長)					加藤和歳
参事補佐					小池史哲
主任技師					小林 啓

なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加されたの方々、苅田町および同教教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。



第1図 東九州道福岡工事区調査地点位置図 (1/100,000)

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書 番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都府苅田町大字雨窪			4000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都府苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都府苅田町大字提	4500	H21・23					遺跡なし
3	福岡	馬場遺跡群 (馬場長町遺跡3区)	京都府苅田町大字提・馬場	13100	H16・20・21	1200	H20	H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群 (馬場長町遺跡1・2区 馬場仁王免遺跡)	京都府苅田町大字馬場・南原	35300	H18・19	3900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都府苅田町大字集	32100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都府苅田町大字下片島	30600	H18・20・21・23					遺跡なし
7	福岡		京都府苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都府苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都府苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都府苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都府苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都府苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～	2集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21・22			
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20・21・23	31550	H22～24			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20・21	2900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19・22	16574	H22～24			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21	H24	6集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21			
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013				H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都府みやこ町国作	42940	H20～23	2720+ 7000	H22・23	H24 H25	6集 6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都府みやこ町国作・田中・有久	29491	H20～23	29491	H21～23			H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都府みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	昔見川ノ上遺跡	京都府みやこ町昔見	1132	H21	1132	H22	H25		
39	福岡	昔見中園遺跡 昔見大塚古墳	京都府みやこ町昔見	8218	H21・22	5918	H21～23			H22昔見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 ハツ重遺跡	京都府みやこ町昔見・下原	45510	H19・20・21	22763	H20～22	H23～	3集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都府みやこ町昔見	5080	H21	3580	H21・22	H25		
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21～23	26000	H22・23			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21・23・24					遺跡なし
					H24.8現在					

II 位置と環境

地理的環境

福岡県京都郡苅田町は、北部九州東部の通称「京都平野」の北東部に位置している。北は福岡県第二の都市である北九州市があり、南は小波瀬川を境界として京築地域の中心都市である行橋市に接している。東は瀬戸内海の西端である周防灘に面しており、気象条件がよければ本州の山口県側が見て取れる。西には国指定天然記念物のカルスト台地平尾台がある。

町域は、沿岸部と高城山山系西の盆地である白川地区に分かれている。現在の沿岸部のほとんどは干拓と埋め立てによるもので、それ以前は町内西部を縦断する高城山山系が海近くまで迫っていたため、平坦地が少ない。そのため、河川は川幅が狭く急勾配のため、侵食してV字谷を形成している

歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては行橋市渡築紫遺跡C区(注1)が著名だが、町内からは遺物群として認定できるほどの確実な遺跡は未発見である。発見された旧石器としては、雨窪遺跡(注2)のナイフ形石器、富久遺跡(注3)の三稜尖頭器、新津原山遺跡(注4)、堤遺跡II地区(注5)などの資料が挙げられ、次第に蓄積されつつある。

縄文時代の遺跡では、遺構はないが早期の押型文土器が山口遺跡(注6)から出土している。後期では、著名な浄土院遺跡(注7)があり、火葬骨を収めた西平式の土器棺墓が発見されている。

弥生時代では、前期中頃の葛川遺跡(注8)で、舌状の丘陵の先端部に貯蔵穴を巡る環濠が発見されている。低地の山口遺跡(注9)や黒添宮の下遺跡(注10)、小波瀬川南岸の上片島遺跡群I地区(注11)でも前期の貯蔵穴が見つかった。

中期後半から集落が増加し始める。法正寺木ノ坪遺跡(注12)のように円形竪穴住居跡の段階から長期間営まれた集落もあるが、多くは弥生後期から始まっている。そのうち、稲光遺跡(注14)からは小型仿製鏡やミニチュア武器形青銅器が出土しており河川の祭祀が行われていたことが注目される。

古墳時代に入ると、苅田町の沿岸部には大型古墳が出現する。最古段階に位置する前期初頭の石塚山古墳(注13)(前方後円墳110m)は、銅鏡は完存する7枚のほかにも破片があり、合計11から14面と見られている。その後、5世紀後半の埴輪が樹立された御所山古墳(注14)(前方後円墳119m)と、それに続く5世紀末の番塚古墳(注15)(前方後円墳約50m)が見られる。

沿岸部の群集墳は、5世紀前半から6世紀末まで営々と存続した百合ヶ丘古墳群(注20)をはじめ、松山古墳群(注17)・新津原山古墳群(注18)が5世紀後半から造られる。

この時期の集落遺跡は内陸部に多く、法正寺木ノ坪遺跡(注10)には古墳時代初頭から中期まで集落が存続しており、上片島遺跡群(注19)でも古墳時代前期から断続的に集落が営まれている。黒ミタ遺跡(注20)では後期を中心とする集落遺跡で、竪穴住居跡26基などが検出されている。沿岸部では、城南遺跡(注21)で独立棟持柱を持つ掘立柱建物跡を含む7世紀前半の集落遺跡で、掘立柱建物跡は神殿の可能性が指摘されており注目される。

苅田が文献上に見られるものとしては、『日本書紀』安閑紀2年条の「滕碕・大拔・肝等・桑原・我鹿」への屯倉の設置の記述があり、このうち「肝等」が苅田に比定されている。また、『延喜式』によると豊後に通じる西海道東路には「到津」・「刈田」・「築城」・「下毛」に駅が置かれたと記され



- | | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-------------|--------------|-------------|
| 1 馬場長町遺跡 | 15 若久遺跡 | 29 朽網遺跡 | 43 下曾根大塚古墳群 | 57 石塚古墳 | 71 谷遺跡Ⅰ-A地区 |
| 2 馬場仁王免遺跡 | 16 雨窪古墳 | 30 馬場遺跡 | 44 長野D遺跡 | 58 奥ヤ古墳 | 72 谷遺跡Ⅰ-B地区 |
| 3 馬場Ⅱ遺跡 | 17 中州遺跡 | 31 朽網南塚遺跡 | 45 長野A遺跡 | 59 新津原山古墳 | 73 谷遺跡Ⅲ-B地区 |
| 4 南原西門田遺跡 | 18 松山古墳群 | 32 朽網宮宮遺跡 | 46 観音寺古墳 | 60 恩塚古墳 | 74 谷遺跡Ⅲ-A地区 |
| 5 富久遺跡 | 19 松山城跡 | 33 朽網城跡 | 47 観音寺古墳 | 61 百合ヶ丘古墳群 | 75 谷遺跡Ⅱ-A地区 |
| 6 南原遺跡A地点 | 20 狸山窯跡 | 34 勝円遺跡 | 48 畠山古墳 | 62 猪熊古墳群 | 76 谷遺跡Ⅱ-B地区 |
| 7 石塚山古墳 | 21 狸山A遺跡 | 35 両岡様古墳群 | 49 畠山遺跡 | 63 葛川遺跡Ⅰ-D地区 | 77 谷遺跡群 |
| 8 殿川窯跡 | 22 天観寺山窯跡 | 36 御座古墳群 | 50 上曾根遺跡 | 64 葛川遺跡Ⅰ-E地区 | 78 黒ミタ遺跡 |
| 9 内尾薬師如来坐像 | 23 朽網・原遺跡 | 37 御座遺跡 | 51 近衛ヶ丘遺跡 | 65 金村古墳群 | 79 神後前方後円墳 |
| 10 堤遺跡群 | 24 宇土遺跡 | 38 茶毘志山古墳 | 52 集・城南遺跡 | 66 天疫神社古墳群 | 80 黒添赤木遺跡 |
| 11 神田遺跡 | 25 トギバ窯跡 | 39 上人山古墳 | 53 番塚古墳 | 67 持ヶ迫遺跡 | 81 法正寺木の坪遺跡 |
| 12 雨窪前田遺跡 | 26 御祖神社窯跡 | 40 円光寺古墳 | 54 御所山古墳 | 68 倉石古墳群 | 82 黒添宮の下遺跡 |
| 13 雨窪遺跡 | 27 洗子窯跡 | 41 丸山古墳 | 55 小倉出口遺跡 | 69 山口南古墳群 | |
| 14 向野山窯跡 | 28 山方里窯跡 | 42 荒神森古墳 | 56 莊原池窯跡 | 70 大鑑遺跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

ており、今後の発見が期待される。

奈良時代には、沿岸部の県道須磨園南原曾根線から、殿川沿いに遡上して高城山のふもとの京都峠を越えて白川地区に出るルートに古代官道が走っていたことが想定されているが、現在までの発掘調査では道路状遺構は確認されておらず、現地形や土地区画、地名からも路線を特定することが難しい。官道沿いには重要施設が配置されることが多いが、沿岸部の雨窪遺跡(注2)から緑釉陶器・銅椀・土馬など希少な遺物が出土しており、馬場遺跡(注22)でも土馬が採集されている。また白川地区でも山口遺跡(注9)で土馬が、谷遺跡(注23)で唐三彩の陶枕片が出土しており、これらの遺跡のそばに官道が走っていたと考えられる。

高城山山系から東に延びる丘陵裾には多くの須恵器窯が造られており、「水晶山系窯跡群」と呼ばれる豊前地域の一大須恵器生産地となっていた。北九州市側にはトギバ窯跡(注24)・御祖神社裏窯跡(注25)・洗子窯跡(注26)・山方窯跡(注27)・朽網原池窯跡(注28)が群集し、この窯跡群の所在する丘陵地帯から沿岸部に降りたところにも、狸山窯跡群(注29)・天観寺山窯跡群(注30)・向野山窯跡群(注35)がある。また、これらの群から離れて荘原池窯跡(注32)と殿川窯(注33)が点在している。

平安時代中期になると、豊前地域には膨大な宇佐宮の荘園が形成される。宇原神社付近にあったと考えられる「宇原荘」は宇佐宮弥勒寺領にあたる。この宇原荘の馬場地区には、『京都郡誌』の「京都郡寺院明細帳」によると、阿弥陀堂西恩寺という天台宗の寺院が存在しており、創立年代は不明だが寺院内には奥之坊、中之坊、門前などある大寺で、字名に坊名が残っている。この西恩寺があったと考えられるところには、平清経塚(注34)と伝承される石塔群があり、その中心となる大型石塔は14世紀前半代の地頭クラスのものである。また、苅田町馬場内尾の内尾山宝蔵院には平安末期の丈六仏である薬師如来坐像があり、南原西門田遺跡(注35)からは中世前期の集落から土製地藏菩薩坐像片が出土するなど仏教関連の遺跡・遺物が集中している。また馬場遺跡Ⅱ(注36)では多量の遺物が出土しており、平安時代の祭祀の可能性を残す。

中世遺跡では、山口遺跡(注9)で旧河川から多量の土師器・瓦質土器と青磁・白磁などの輸入陶磁器が1000点ほど、銅鏡・古銭・須恵質の土馬が出土している。

中世山城としては松山城跡(注37)と高城山城跡(注38)に代表されるが、これらの城跡は戦略上の要衝であり、朽網城(注39)のような在地武士団の山城が別に存在している可能性が高い。

注

1 行橋市教育委員会で整理中

行橋市2004「第2編第1章第2節 京都平野の最古の狩人たち」『行橋市史上巻』

2 福岡県教育委員会2004『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-1- 福岡県京都郡苅田町雨窪遺跡群の調査』

3 『苅田町歴史資料館秋の特別展示 豊前地方の旧石器と平尾台産出の動物化石群』に、写真が紹介されているのみで、遺跡発掘調査報告書(苅田町教育委員会1990『富久遺跡』苅田町文化財調査報告書第12集)には掲載されていない。

4 『苅田町歴史資料館秋の特別展示 豊前地方の旧石器と平尾台産出の動物化石群』に、写真が紹介されているのみで、遺跡発掘調査報告書(苅田町教育委員会1995『新津原山古墳群』苅田町文化財調査報告書第25集)には掲載されていない。

5 苅田町教育委員会で整理中

- 6 『菟田町歴史資料館秋の特別展示 豊前地方の旧石器と平尾台産出の動物化石群』に、写真が紹介されているのみで、遺跡発掘調査報告書(注10)には掲載されていない。
- 7 浄土院遺跡調査団 1972 『浄土院遺跡調査概要』
- 8 菟田町教育委員会 1994 『葛川遺跡 I - A ~ C 地区』菟田町文化財調査報告書第 22 集
- 9 菟田町教育委員会 1993 『山口遺跡』菟田町文化財調査報告書第 21 集
- 10 菟田町教育委員会 1987 『黒添・法正寺地区遺跡群』菟田町文化財調査報告書第 6 集
- 11 教育委員会で整理中
- 12 注 11
- 13 菟田町教育委員会 1988 『石塚山古墳発掘調査概報』菟田町文化財調査報告書第 9 集
- 14 菟田町教育委員会 1976 『史跡御所山古墳保存整備管理策定計画報告書』菟田町文化財調査報告書
- 15 九州大学考古学研究室・菟田町教育委員会 1993 『番塚古墳』菟田町文化財調査報告書第 20 集
- 16 菟田町教育委員会で整理中
- 17 菟田町教育委員会 1991 『松山古墳群』菟田町文化財調査報告書第 13 集
- 18 菟田町教育委員会 1995 『新津原山古墳群』菟田町文化財調査報告書第 25 集
- 19 福岡県教育委員会・菟田町教育委員会で整理中
- 20 注 11 で紹介
- 22 菟田町教育委員会 2007 『城南遺跡』菟田町文化財調査報告書第 37 集で紹介
- 23 菟田町教育委員会 1990 『谷遺跡調査報告書』菟田町文化財調査報告書第 11 集
- 24 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 「トギバ窯跡」『天観寺山窯跡群』
- 25 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 「御祖窯跡」『天観寺山窯跡群』
- 26 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 「洗子窯跡」『天観寺山窯跡群』
財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003 『洗子窯跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 299 集
- 27 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 「山方里窯跡」『天観寺山窯跡群』
- 28 木太久守 2006 「朽網原池窯跡出土の須恵器について」『研究紀要第 20 号』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 29 北九州市埋蔵文化財調査会 1981 『狸山A遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 30 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 『天観寺山窯跡』『天観寺山窯跡群』
- 31 北九州市埋蔵文化財調査会 1977 「向野山窯跡」『天観寺山窯跡群』
- 32 菟田町教育委員会 2000 『菟田町の文化遺産 - 菟田町文化財詳細分布地図 - 』菟田町文化財調査報告書第 34 集
- 33 前掲 32
- 34 菟田町教育委員会 1994 『平清経塚』菟田町文化財調査報告書第 23 集
- 35 福岡県教育委員会 2003 『南原西門田遺跡』福岡県文化財調査報告書第 175 集
- 36 菟田町教育委員会で整理中
- 37 菟田町教育委員会 1988 『豊前国松山城跡』菟田町文化財調査報告書第 8 集
菟田町教育委員会 1992 『豊前国松山城跡』菟田町文化財調査報告書第 18 集
- 38 廣崎篤夫 1995 『福岡県の城』海鳥社
- 39 北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査会 2005 『宇土遺跡・朽網城跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 332 集

参考文献

苜田町教育委員会 2000『苜田町の文化遺産 - 苜田町文化財詳細分布地図 -』苜田町文化財調査報告書第34集

梅崎恵司 1993「旧豊前国企救郡衙考」『研究紀要』第7号 (財)北九州市教育文化財団

苜田町教育委員会文化係 2010『苜田町歴史資料館特別展図録 豊前の遺宝 律令時代と豊前国 2010年特別展示図録』



第3図 周辺地形と調査範囲図 (1/2,500)

馬場長町遺跡

Ⅲ 発掘調査の記録

1 馬場長町遺跡

馬場長町遺跡は水晶山系から東に延びる丘陵斜面から斜面裾の流路跡までを遺跡範囲としており、流路跡は丘陵から集まる水が流れていたもので、源流は堤防で仕切られて現在の長江池となっており、先端は丘陵裾に沿って現在の井の口池に流れていたものと考えられる。

丘陵部も調査範囲より西側は急傾斜になっているため、遺跡はそれほど西に広がらず、遺跡の中心部は現在住宅地になっている東側斜面に展開していただろう。斜面裾部では、遺跡の西端が長江池内まで広がっていたものと思われる。対岸の丘陵には馬場仁王免遺跡が立地しており、遺跡の性格が若干異なっている。

調査区は丘陵裾部の緩斜面部とその下の流路跡を範囲とする細長い調査区の1・2区と、丘陵斜面の3区とに分かれる。1・2区は調査の手順から便宜的に南北に分けたものである。調査範囲の、西側は用地範囲境界までだが、東側と北側は試掘調査の結果、緩斜面が大きく削平されており調査対象から外した。南側は馬場仁王免遺跡の立地する丘陵との間に入る谷地形になっており、流路跡の対岸部に試掘トレンチを入れて確認したが、南側には遺物が入っておらず、流路跡の北半分を調査した。1区は標高26mほどで、流路跡との比高差は1m20cm程である。

3区は「中の嶺」と呼ばれる標高73mの丘陵の西斜面で、調査範囲内には標高32～40mほどの間に石垣を伴う3つの平坦面があったが、いずれも近代の整地面であった。このうち2面は盛土であったので、これを重機で基盤層まで除去すると緩斜面となり、南西端から東部中央にかけて谷が入り、そこに山に入るための人道が掘り込まれていた。谷の南側には緩斜面で遺構があり、谷の北側には急斜面を利用した石灰岩焼成窯が造られ、その後背と前面は削平により窯作業場が形成されている。もう1面の平坦面は北東に位置する削平面で、わずかに遺構が存在していた。その平坦面から1段下がった調査区外には丘陵斜面で最も広い平坦面があり、丘陵斜面の遺跡の中心は東側にあっただろう。

(1) 調査の概要

平成20年5月7日に重機を入れて表土剥ぎを行った。進入路が狭いため0.4m³のバックホーしか入らなかった。北端の宅地跡にトレンチを入れてみたところ、基盤層にコンクリート基礎が深く入っており、その周囲には浄化槽や攪乱穴が多く見られたので、宅地跡の部分については調査対象地から外した。斜面裾部の一部は水田にするため大きく削られていた。しかし、旧地形の残っている部分では斜面から連続する遺物包含層が残っており、当初調査範囲に入っていなかったが、トレンチ調査により包含層の広がりを確認できた。ネクスコとの協議により、東側の工事用道路用地を先行することになり、調査範囲を広げるとともに、1区と2区に分けた。

谷部は水が集まるため、梅雨に備えて沈砂池を作り、赤水の流出に備えた。6月4日、梅雨が本格化し、区長と沈砂池の上澄み水を水路に流す協議を行い、用水池に入る水路の弁の開閉を行う条件で了承を得た。6月6日、1区のローリングタワーで全体写真を撮影し、6月9日には2区の調査に着手した。7月7日、丘陵斜面の伐採が終了したため下見をしたところ石垣が見られたことから、これを3区とし継続調査することになった。7月29日ラジコンヘリコプターにより全体写

真を撮影し、8月4日に撤収した。

9月9日、丘陵斜面地の伐採木の撤去終了の連絡を受け、まず0.25㎡のバックホーで確認調査を行い遺跡の範囲を確定するとともに、作業ヤードの整地から開始した。10日には作業員を入れて伐採木の片付け作業を行う。翌11日には掘削前状態の写真を撮影し、表土剥ぎを開始する。石垣周辺を0.25㎡バックホーで慎重に表土剥ぎした後、0.7㎡のバックホーに切り替えて表土剥ぎを続行する。9月17日、日本セメント（昭和22年創業）の標石が出土し、掘削前の大規模な盛土はこの時のものと判明。9月26日、井戸と考えていた石垣の側面に穴が見つかり、そこに鉄骨が入っていることが判明し、窯であることがわかった。10月30日から1週間だけ臨時職員の海出が調査に参加。11月19日九州航空のラジコンヘリによる空中写真撮影。12月19日に片付けを行い、すべての作業を終了した。

（2）1・2区の遺構と遺物

1・2区からは、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、井戸3基、堤状遺構1基、流路跡1条、溝状遺構8条などが検出された。

① 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版2、第5図）

2区斜面中央に位置する。小ピットが集中しており、柱筋が通らないことから検出段階で明確に他のピットと柱穴の判別がつかなかったが、比較的大型のピットから2間×5間の建物に復元することができた。長軸720～747m、短軸400～405m、深さ104cmで、主軸方向は地形に合わせてN-75°30'～50'-Wである。柱穴は深いものでは30cmほどしか残っていないので、土層をとっていない。検出段階で柱痕は不明瞭だったが抜き取り穴と思われる掘り込みを持つものもあった。柱内に石が入るものもあったが、根締めに使用した可能性がある。

出土遺物がなく、時期は不明である。

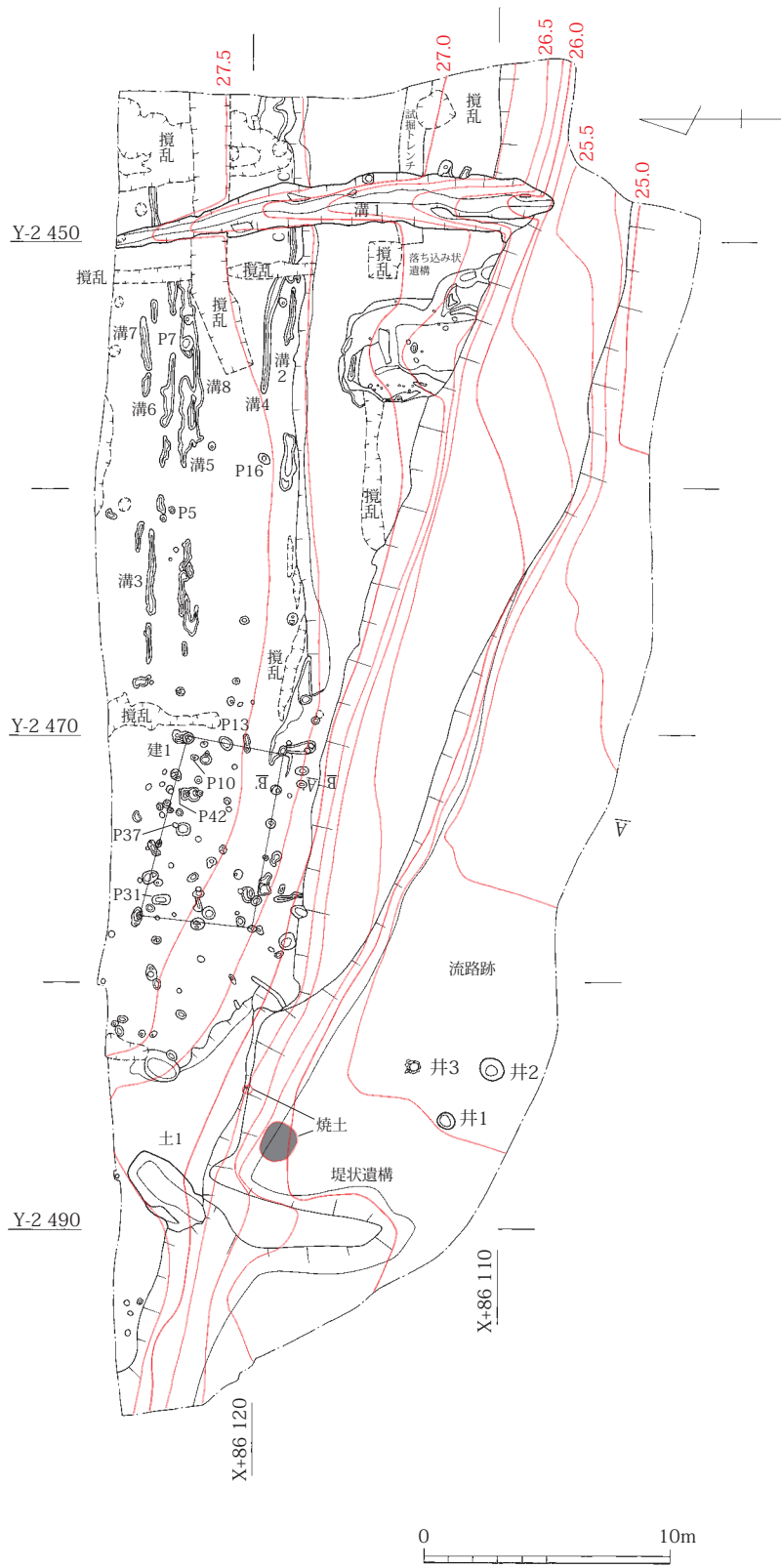
② 土坑

1号土坑（図版2、第5図）

2区西端部に位置し、南端が緩斜面に接し、立ち上がりが出ない不整形で、土層からは立ち上がりが崩れて斜面側に崩壊したように見える。多量の土器を含み、焼土と炭化物が出土し床面は焼けていないので、廃棄土坑と考えられる。床面はほぼ平坦で、長軸37.5cm、短軸20.0cmである。出土遺物は上位を別に取り上げたが、厳密に分かれるものではない。時期は8世紀末から9世紀初頭である。

出土遺物（図版13・21～23、第6～9・60・61・63・64・66～68図）

第6・7図は上位の出土遺物である。第6図は土師器である。1～7は甕で、1は小型品で、内外ナデでハケは見られない。内面は使用のため黒褐色に変色している。2は口縁部が歪んでいるので径の復元は不明確である。外面は器面が剥落しているが、ハケの痕跡が残る。胎土には白色粒子を多く含む。内面にはケズリがある。内面頸部に炭化物の付着が見られ、口縁端部は変色がないことから内蓋が掛かる。3は外面と内面頸部にハケがある。内面はケズリ。2～4は、口縁端部が内



第4図 馬場長町遺跡1・2区遺構全体図(1/300)

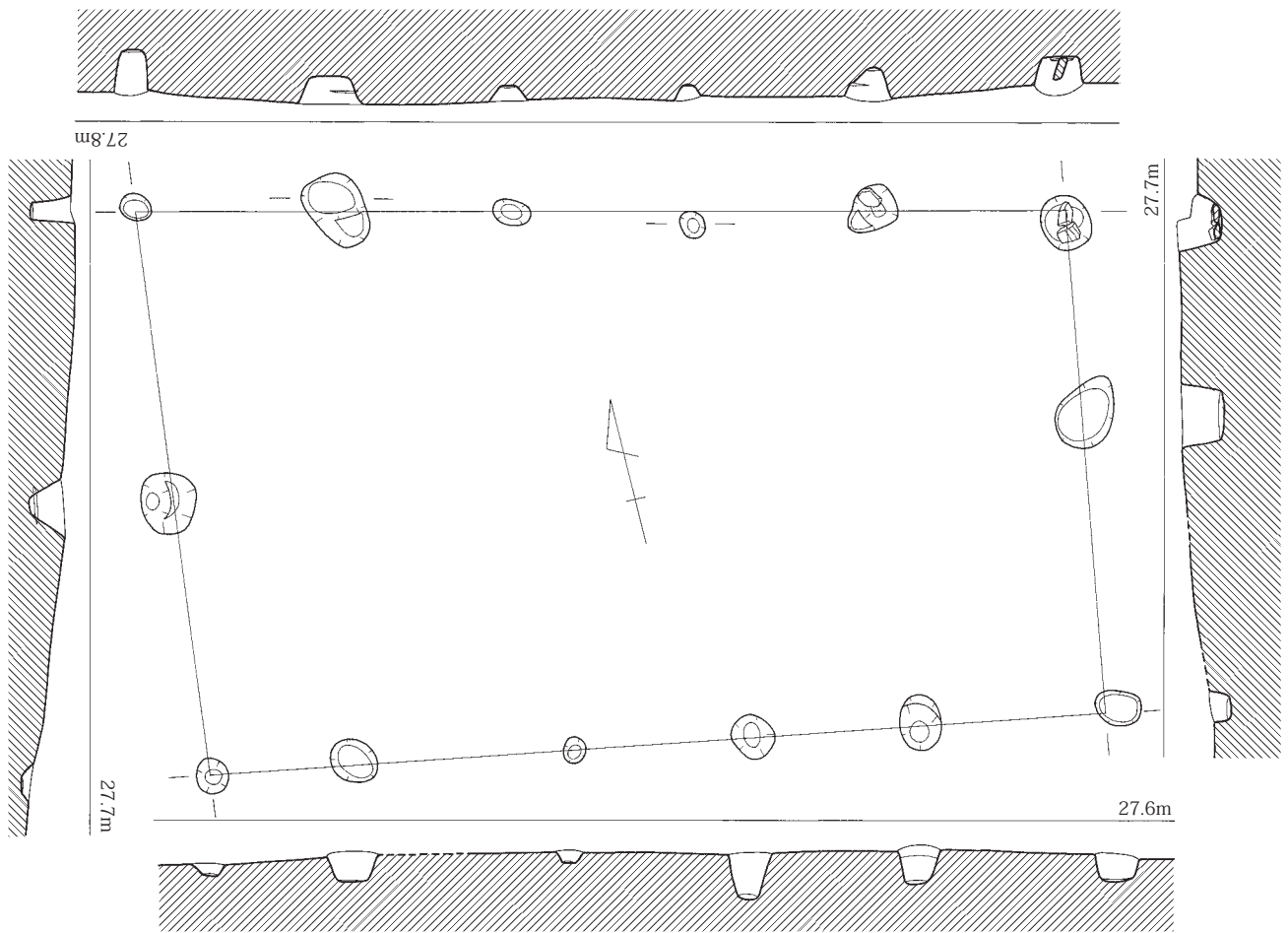
湾し、頸部の接合部は横ナデのため窪む黄橙色を呈する甕で、内面にケズリがあるものの「企救型甕」である。4は外面肩部が幅の広いヨコナデで窪む。内面の変色はほとんどなく、外面は黄白色を呈する。5は内外ナデのみで、胎土には金雲母とカクセン石を多く含む。6は平底の底部で内面に同心円タタキ当て具痕がつくもので、外面は平行タタキの一部が見られる。外面は橙褐色、内面は炭化物が付着し黒褐色を呈する。7は甕の底部で、外面はケズリ。内面は底部を押し出したのち丁寧にナデている。外面は赤化して赤橙色を呈し、内面は炭化物の付着のため暗茶褐色を呈する。

8～11は甕で、8・9は同一個体の可能性が高い。8は口縁下に突帯の接合痕があり、口縁部を平坦に削っているため、須恵器のコシキを模倣したものか須恵器の焼成不良品である。9は底部に蒸気孔の一部が残っている。内外ナデのみで、外面下位にはケズリが見られる。10は把手で器壁の厚さから中位以下に付くものと思われる。板状のものを折り曲げており、上端は体部と接合しない。内面が焼成不良で黒灰色を呈しており、白色粒子を多く混入する胎土である。11は手捏ね成形の牛角形の把手で、接合部に突起部をもつ。内外黄白色で変色がない。胎土は混入物がほとんど入らない。12は置きカマドの底部だが、使用変色がない。内面はケズリ、ハケ調整や白粒子が多く黄橙色の色調は「企救型甕」に近い。

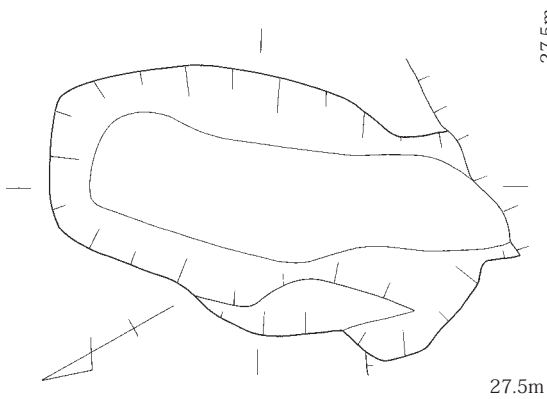
第7図は須恵器である。1～3は蓋で、1の口縁部は約2分の1が残っており、復元径14.1cm。口縁端部は平坦面をもち、先端は尖る。天井部の器壁が薄い部分には回転ヘラケズリが入る。内面側を上にして椀の上に置いて焼成するパターン。2は天井部が約6分の1残存しており、復元口径19.6cmである。突帯のつまみをもつ蓋で1と同じ口縁端部をもち、天井部は回転ヘラ切り。内面口縁部が強く火を受けるとともに、屈曲部に別個体の粘土の付着がある。外面は口縁端部のみが強く火を受けているので、同じ器種を上下に重ねて内面を上にして焼成したものである。3は天井部で約8分の1の残存なので、復元径は不確実である。口縁端部は短い平坦面をもつ。天井部は回転ヘラ切り。椀の上で上下逆に焼成しているが、内面の焼成が弱いことからさらに大きな別個体で完全に覆われて焼成されている。

4～9は杯で、4は部分的に歪みがあるが、口縁部は歪みのない約4分の1から復元して12.8cm。底部は回転ヘラ切りで、胴下位の窪みはナデによるものであり、大きく外反する口縁部も含めて他の杯にはない特徴である。外面の口縁部が灰黒色でそれ以外の部分の青灰色との境界が明瞭であるが、内面は全体に暗青灰色なので同じ器種を重ね焼きした一番上である。5は口縁部の一部が欠けた完形品で、欠けた部分の内外が火を受けて赤化しており、煤も付着しているため灯明皿として使用されたものである。外底は回転ヘラ切りで工具端部が螺旋状に沈線を描いている。傾いた同じ器種の焼成パターンで、焼成不良のためやや軟質である。6は2分の1弱残存しており、復元口径12.8cmである。口縁端部を小さく外反して尖らせている。全体に焼成が弱く、内外灰白色を呈する。同じ器種を重ね焼きで火を受けにくい位置にあったのであろう。7は9割残存しており、口縁部は4分の3が歪みなしに残存する。底部は回転ヘラ切り後ナデっており、底部の端部も粘土のよりによる段がない。同じ器種を重ね焼きパターン。8は約2分の1残存で、復元口径12.8cm。底部回転ヘラ切りで、工具端部が螺旋状に沈線を描いている。底部の縁部はナデているため粘土のよりによる段はない。焼成不良で全面灰白色を呈する。9は約3分の1残存しており、復元口径13.6cm。口縁部内面の一部に煤が付着しており、灯明皿の可能性はある。底部回転ヘラ切りで、工具端部の沈線がある。底部の縁部はナデている。同じ器種を重ね焼きした焼成パターンで内外に火襷あり。

10～13は高台付杯で、10は6割残っており、復元口径15.6cm。外底部ヘラ切り後、中央部を



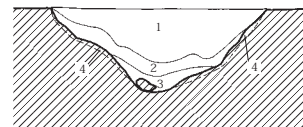
1 1号掘立柱建物跡



2 1号土坑

- 1 にふい灰褐色土、焼土、炭水化物を多く混じる
- 2 暗灰褐色土、焼土、炭水化物を多く混じる
- 3 黄橙色土ブロック（基盤層ブロック）
- 4 にふい茶灰褐色土
- 5 赤橙茶褐色土（焼土ブロック）、壁まで焼けていないので廃棄したものと判断
- 6 黒茶灰褐色土
- 7 にふい赤灰褐色土、焼土混じりの灰褐色土
- 8 黄灰色粘土（基盤層）

C 27.8mC'



3 1号溝状遺構土層断面図

- 1 暗黒褐色土
- 2 暗茶灰褐色土+茶色ブロック（基盤層）
- 3 暗黒灰褐色土
- 4 茶色土 礫を混じる

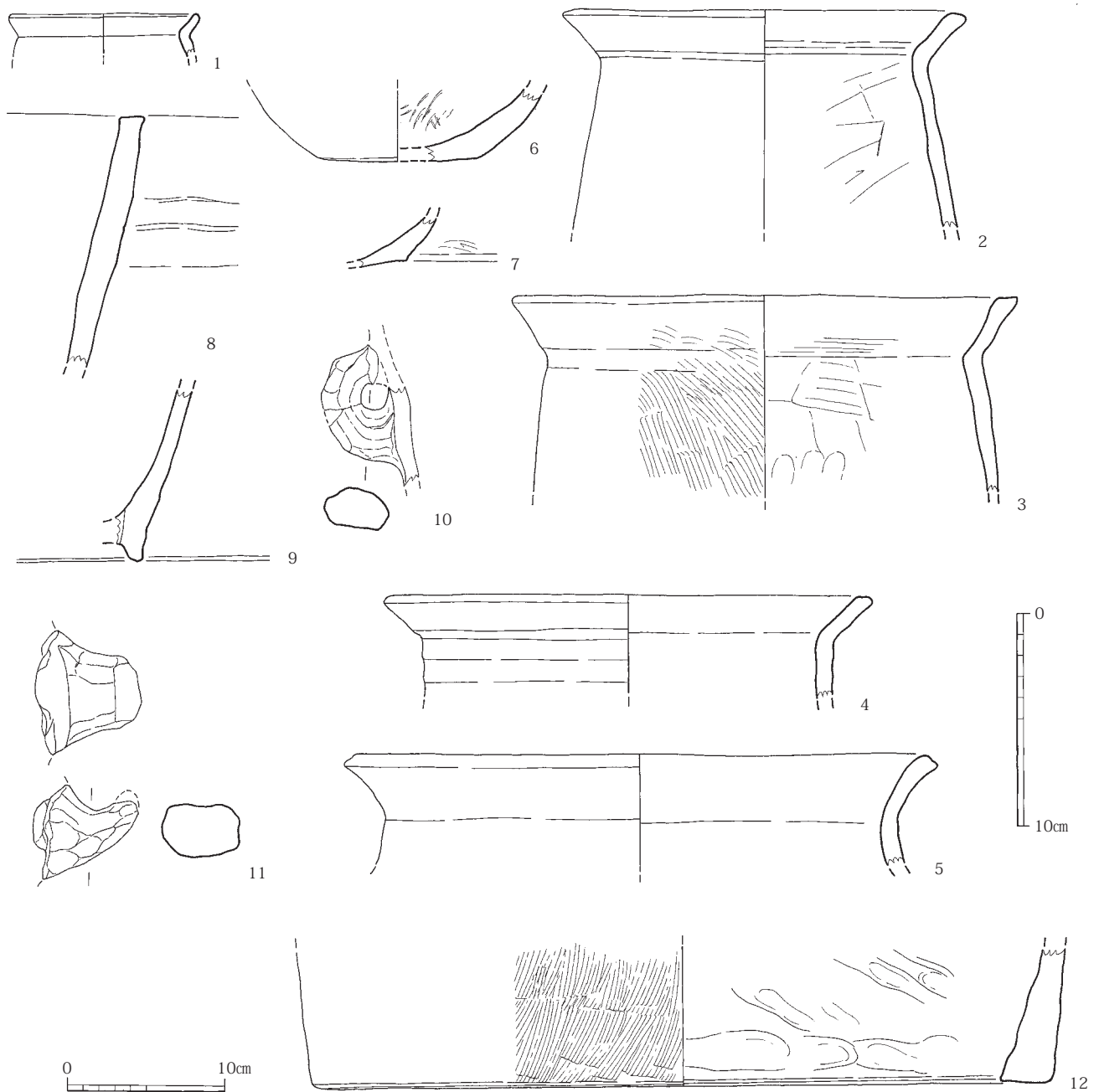
石は加工したのではなく、基盤内か流路内の人頭大の石で中央部の床面直上に集中土層と同じで西から落ちてきているものが多いが、東からの落ちもある。土層は掘り直しては無く逆突形で中央部は流水のためか回んでいる。雨程深いのは水を流すためか



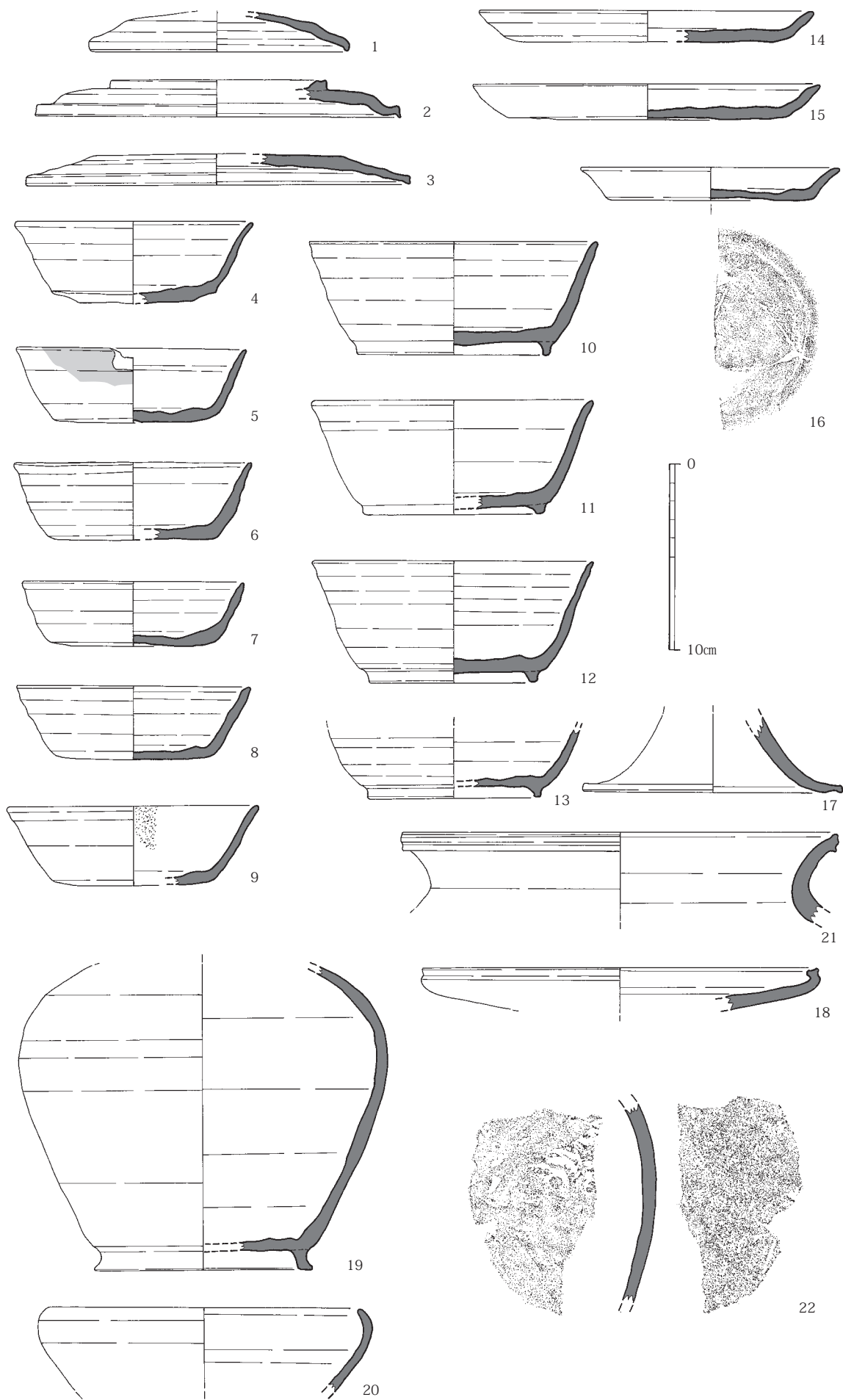
第5図 1・2区1号掘立柱建物跡、1号土坑、1号溝状遺構土層断面実測図（1/60）

除いて回転ナデ。蓋と重なる焼成パターンだが、内面口縁部まで外面と同じ暗灰白色なので、径の小さいものを重ねたため、蓋が内部に落ち込んだであろう。11は底部が約3分の1残存しており、復元口径15.0cm。外底部ヘラ切り後、中央部を除いて回転ナデ。蓋と重ねる焼成パターンである。12は口縁部が約3分の1残存しているが、歪んでいるため復元口径は不正確。底部には歪みなし。胴部にも歪みがあるので、中位の湾曲は歪みの影響だろう。外底部ヘラ切り後、中央部を除いて回転ナデ。蓋と重ねる焼成パターン。外面は火を強く受けて黒灰色を呈する。13は底部の器壁が薄いタイプで、底部が約3分の1残存しており、高台径9.2cm。外底部ヘラ切り後、中央部を除いて回転ナデ。外底部と内面が灰白色で、外面より焼成が悪いので、上に蓋を重ねて正置して焼成している。外面は火を強く受けて黒灰色を呈する。

14～16は皿で、14は約3分の1残存しており、復元口径18.0cm。外底回転ヘラ切り。外面口



第6図 2区1号土坑上位出土土器実測図1 (12は1/4、他は1/3)



第7图 2区1号土坑上位出土土器实测图2 (1/3)

縁部から底部端にかけて斜めに灰黒色を呈するのは、重ね焼き痕だが、変色している弧のラインから口径の小さい別器種である。15は口縁部が8分の1ほどしか残っていないが底部は3分の1あり、復元口径18.0cm。外底は回転ヘラ切りで工具端部が同心円に沈線を描いている。同一器種の重ね焼きパターン。16は約2分の1残存しており、復元口径14.0cmの小型品である。外底は回転ヘラ切り後外縁以外をナデて、その上にヘラ記号を施す。ナデの工具痕や沈線状のものが混じるが、1本の細い沈線のみがヘラ記号である。内面と外面口縁部の一部が淡黒灰色なので、同じ器種の重ね焼きパターンの最上部である。

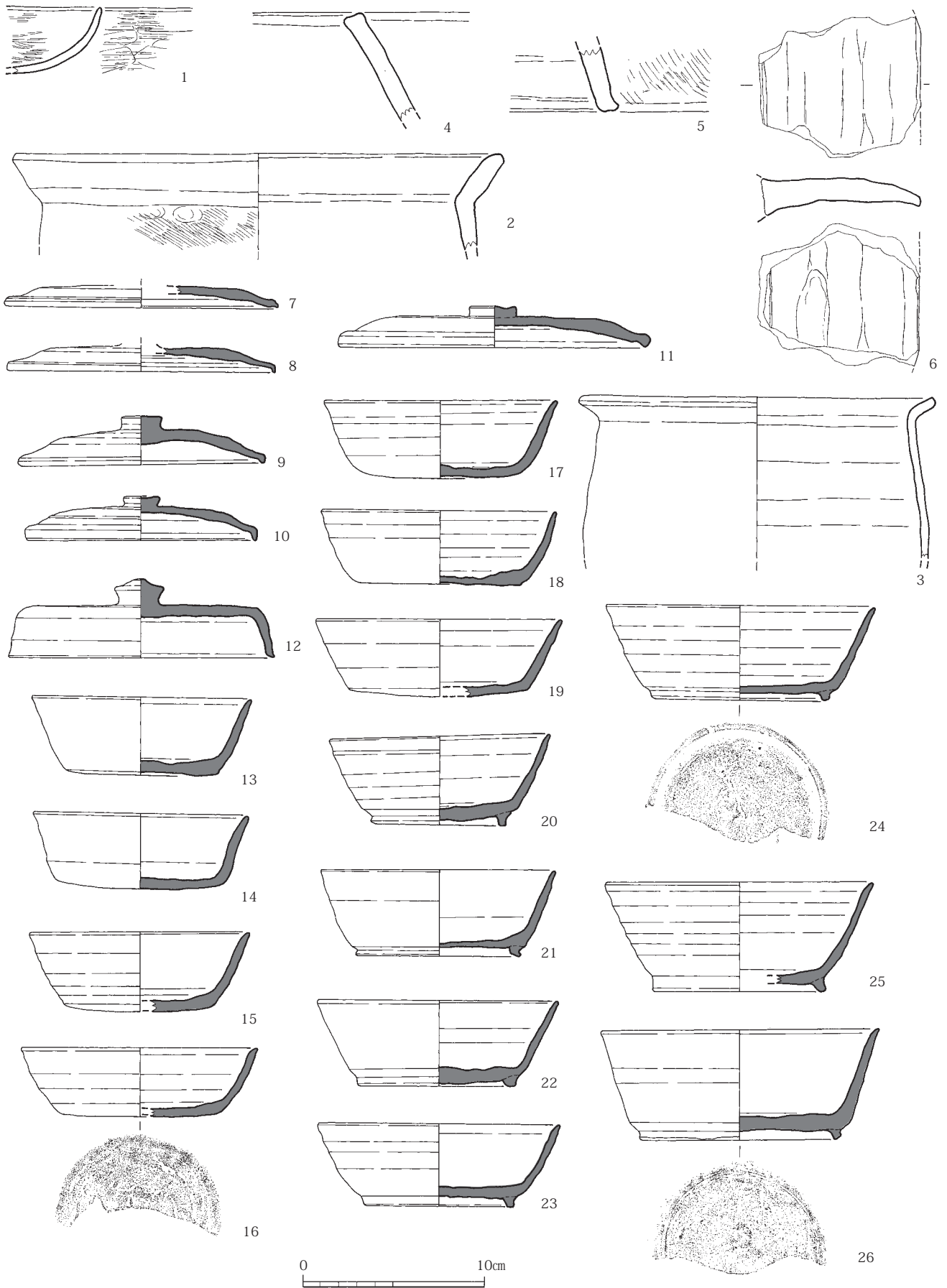
17は高杯脚部で、裾端部は丸みをもつ。裾部が約3分の1残存しており、復元底径14.0cm。内外同じような暗灰色なので、横置きで焼成している。18は高杯の杯部で、約3分の1残存しており、復元口径21.2cm。外面は回転ヘラ切り後ナデている。内面は口縁部が青灰白色で焼成が悪いことから、倒立で別個体に重ねて焼成しているが、完全に密着していないことがわかる。19は壺の胴部で、接合しない2つの破片で、胴部の3分の2が残る。復元底径11.8cm。高台は焼き膨れと焼成時の剥落があるため器壁の厚さが一様でない。図は薄い方をとっている。胴部の片側だけ青灰白色で焼成不良なので横置きで焼成している。内面は全面焼成不良で、頸は細長いものであろう。20は鉄鉢形の鉢で、口縁部が約3分の1残存しており、復元口径16.8cm。内外暗青灰色で重ね焼き痕はない。

21は小型甕で、口縁部が約3分の1残存しており、復元口径23.6cm。内面に灰被りがあるので、正置きして焼成している。22は甕の胴部片で、内面に青海波文のタタキ当て具痕があるが、外面はナデによりタタキ痕は見られない。反転復元できない小片だが、胴径約20cm程度だろう。

第8・9図は1号土坑一括で取り上げたもので、ほとんどは下位出土である。第8図1～6は土師器で、1は椀である。外面胴中位以下はケズリで、その後全面ミガキが入る。反転復元できない小片で、内外赤褐色を呈する。2・3は甕で、2は小片のため復元口径は不正確。外面頸部は接合後のオサエの上にハケ。胎土は白色粒子を含む。使用のためと思われる暗茶灰色の付着物あり。3は小型品で、器壁が薄いのは外器面が剥落しているためである。しかしながら、ハケの痕跡はなく、内面と同じく幅の広いヨコナデであろう。胎土には褐色パミスを含む。4～6は置きカマド片だろう。4は口縁部の小片で反転復元できないが口径30cm程になるだろう。4は器面が内外とも摩滅しているが、5のように外面ハケ、内面ケズリの可能性が高い。両者とも胎土は白色粒子を多く含み、黄橙色を呈する。4は外面が焼成不良で黒色を呈する。6は底部の一部で傾きは不明。湾曲する側が焼成不良で灰黒色を呈する。

7～26は須恵器である。7～12は蓋で、7は約6分の1残存で、復元口径14.9cm。天井部ヘラ切りで、端部には小さな返りがつく。内面の青灰色は杯との重ね焼きのためだが、外面から内面口縁部は火を強く受けていることから、重ね焼きながら焼成不良にならない。8は約4分の1残存で、つまみとの接合部が残っている。復元裾径14.6cm。天井部ヘラ切り。高台付杯との重ね焼きパターンである。9は約2分の1残存で、復元口径13.3cm。天井部ヘラ切り。高台付杯との重ね焼きパターンである。10は約2分の1残存で、復元口径12.5cm。天井部は回転ヘラ切りで工具端部が同心円に沈線を描いている。高台付杯との重ね焼きパターンである。11はほぼ完形で、天井部回転ヘラ切り後ナデ。高台付杯との重ね焼きパターンである。12は壺蓋で、8割残存している。天井部回転ヘラ切り。内面が均一にやや焼成不良なので、身と重ねて焼成したものだろう。

13～19は杯で、13は口縁部が6分の1しかないが、底部は7割残っており、復元口径12.0cm。外底は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。同じ器種との重ね焼きパターン。14は約3分の1残存で、



第8图 2区1号土坑出土土器实测图1 (1/3)

復元口径 12.0cm。外底は回転ヘラ切りで、底端部をナデており、粘土のよりによる段はない。焼成不良で、器面が摩滅している。16・17 と焼成・色調・胎土がよく似ており、形態は異なるが同じ窯の製品かもしれない。15 は、口縁部は4分の1だが、底部は半分残る。外底は回転ヘラ切り後丁寧になでており、粘土のよりによる段はない。同じ器種と重ね焼きパターン。16 は、口縁部は4分の1だが、底部は半分残る。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデており、粘土のよりによる段はない。同じ器種と重ね焼きパターン。外底にヘラ記号の一部が残っている。残存度から「×」ではなく、1本線のみであろう。17 は約半分残り、復元口径 12.8cm で、外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデており、粘土のよりによる段はない。同じ器種と重ね焼きパターンだが、色調と焼成具合が16と同じで、同じ窯の製品の可能性が高い。18 は約半分残っており、復元口径 13.0センチ。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデで、同じ器種と重ね焼きパターン。19 は6分の1残っており、復元口径 13.6cm。焼成不良で器面が摩滅しているが、外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデている。底部の膨らみは歪みによるもので、本来平底である。

20～26 は高台付杯で、20 はほぼ完形で、全体的に焼成不良である。同じ器形の重ね焼きパターン。外底は回転ヘラ切り後、中央以外をナデている。見込みに円形の窪みがあるのが特徴的で、本地域の製品ではないかもしれない。21 は約2分の1残存で、復元口径 13.0cm。外底は回転ヘラ切りで、器壁は薄い。高台の畳付をナデているので湾曲は意図的なものである。蓋と重ねる焼成パターン。22 は口縁部が4分の1残るが、底部は完存し、復元口径 13.2cm。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデで、体部と高台の接合部がナデで窪んでいる。底部の器壁が厚いもので、内面と高台内は重ね焼きのため黄灰白色を呈す。23 は口縁部が約半分残り、底部は完存である。全体的に焼成不良で、重ね焼き痕がわからない。外底は回転ヘラ切り。畳付に幅の狭い板状圧痕の窪みがある。24 は接合しない2つの破片で6割残存しており、復元口径 14.8cm。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデ、その上にヘラ記号を施す。狭い沈線1条のみである。外面胴下位と高台の接合部のナデで稜がつく。蓋と重ねる焼成パターン。25 は3分の1残っており、復元口径 14.4cm。高台の外縁が底部の外に出るタイプで、畳付の幅が広い。器高が高いため胴部の回転ナデの単位が多い。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデている。蓋と重ねる焼成パターン。26 は約半分残っており、復元口径 15.2cm を計るが、やや歪みがあるので不正確である。体部と高台の接合部がナデで窪んでいる。底部の器壁が厚いもので、畳付は外側に面をもつ。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデており、ヘラ記号を施す。残存度から沈線1条であろう。蓋と重ねる焼成パターン。

第9図1・2 は皿で、1 は7割残っている。口径 13.0cm と小型である。外底回転ヘラ切り。同じ器種の重ね焼きパターン。2 は完形でひびが入っているのみである。外底は回転ヘラ切り後丁寧にナデ、その上にヘラ記号「×」を施す。同じ器種の重ね焼きパターン。3 は盤で同じ器種の重ね焼きパターン。外底は高台接合後、回転ヘラケズリ。4 は壺の底部で、器壁が厚い。胴部に焼成時のひび割れがあるので水容器としては使えなかったかもしれない。そのため、ヒビある高さで打ち搔いて椀として再利用した可能性がある。胴部の一部と高台が重ね焼きのため青灰色を呈する。5 は大甕で、口縁部は8割残っている。復元口径 42.3cm を測り、頸部に2本沈線のヘラ記号がある。

第60図42 は上位出土の棒状土錘片である。

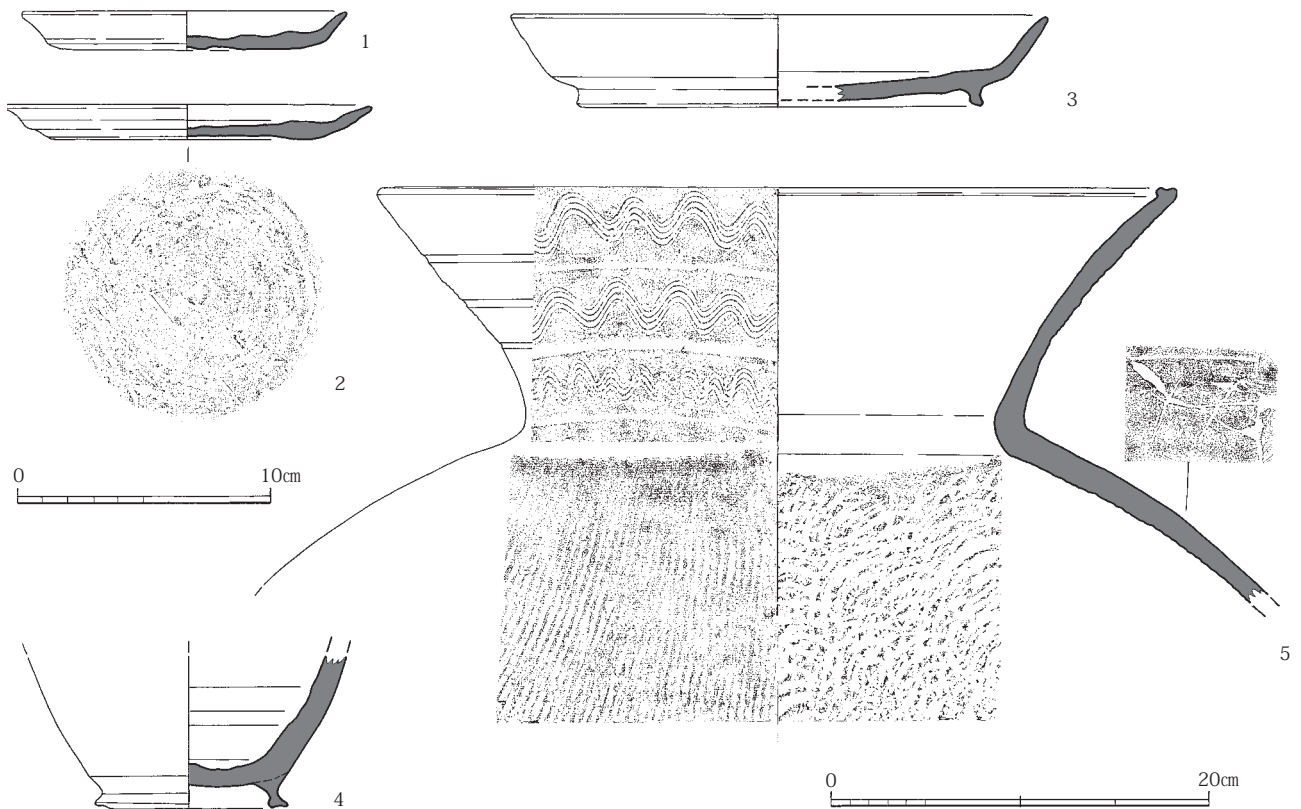
第61図33・35 は上位出土のイイダコ壺の底部で、器壁が薄く、内面が強くナデ押さえられているので、凹凸が大きい。

第63図21、第64図7、第65図3、第66図1・2・8・10、第67図1 は焼塩壺で、このうち第65図3、第66図1・2・8・10 は斜面包含層と流路跡に同一個体と見られる破片が存在する。

第 63 図 21 は上層出土で、口唇部は指オサエで、内面には摸骨の凹凸がある。灰白色を呈し、器面の残りがよく。器壁が薄い。同一個体 9 点がある。第 64 図 7 は口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅の広い指オサエで、胴部片の内面には摸骨の隆起線による沈線がある。第 65 図 3 は堅緻で、口唇部が内面側に折り曲げられている部分と尖っている部分があり、口唇部の調整は指オサエである。2 次変色や器面の荒れがなく、焼塩壺として使用されていない。口縁部が小さく折り曲げられる特徴は第 63 図 21 にあり、布目や胎土は酷似している。第 64 図 11 も布目や胎土は酷似している。第 63 図 5 と内器面のヒビや胎土・器壁の厚さなどが近似するので、同一個体の可能性がある。同一個体 27 点がある。

第 66 図 1 は橙褐色を呈し、外面に粘土の重なり部の窪みが残る特徴をもつもので、口縁部と胴部上側の破片内面に入る斜めの沈線は布目の折り畳み部分で、胴部上側片の内面の縦沈線は摸骨痕だろう。同一個体 4 点がある。2 の胎土は精良で堅緻で、内面の布目の目が細かいもので、口唇部は上に尖る。口縁部は板状工具によるオサエだろう。胴部上辺には縦に深く入る凹線があり、内面は平滑な曲面なので割竹の摸骨だろうか。同一個体 17 点がある。第 67 図 1 は上位出土で、図上接合である。8 は内外器面が剥離していて、内面の布目は残っていない。精良軟質で第 65 図 2 と同様に口縁部の板状オサエの間にあたる部分に粘土の隆起による瘤を持つ。同一個体 5 点がある。10 は軟質で黄灰白色を呈しており、外面にはやや変色があるので 2 次焼成はしているだろう。同一個体 3 点がある。

第 68 図 2・6 は鉢形焼塩壺で、器壁が薄いもので、口縁部がやや内湾する。内面はナデで、いずれも布目はなく、胎土が精良で軟質である。2 は外面上半に塩が付着する。



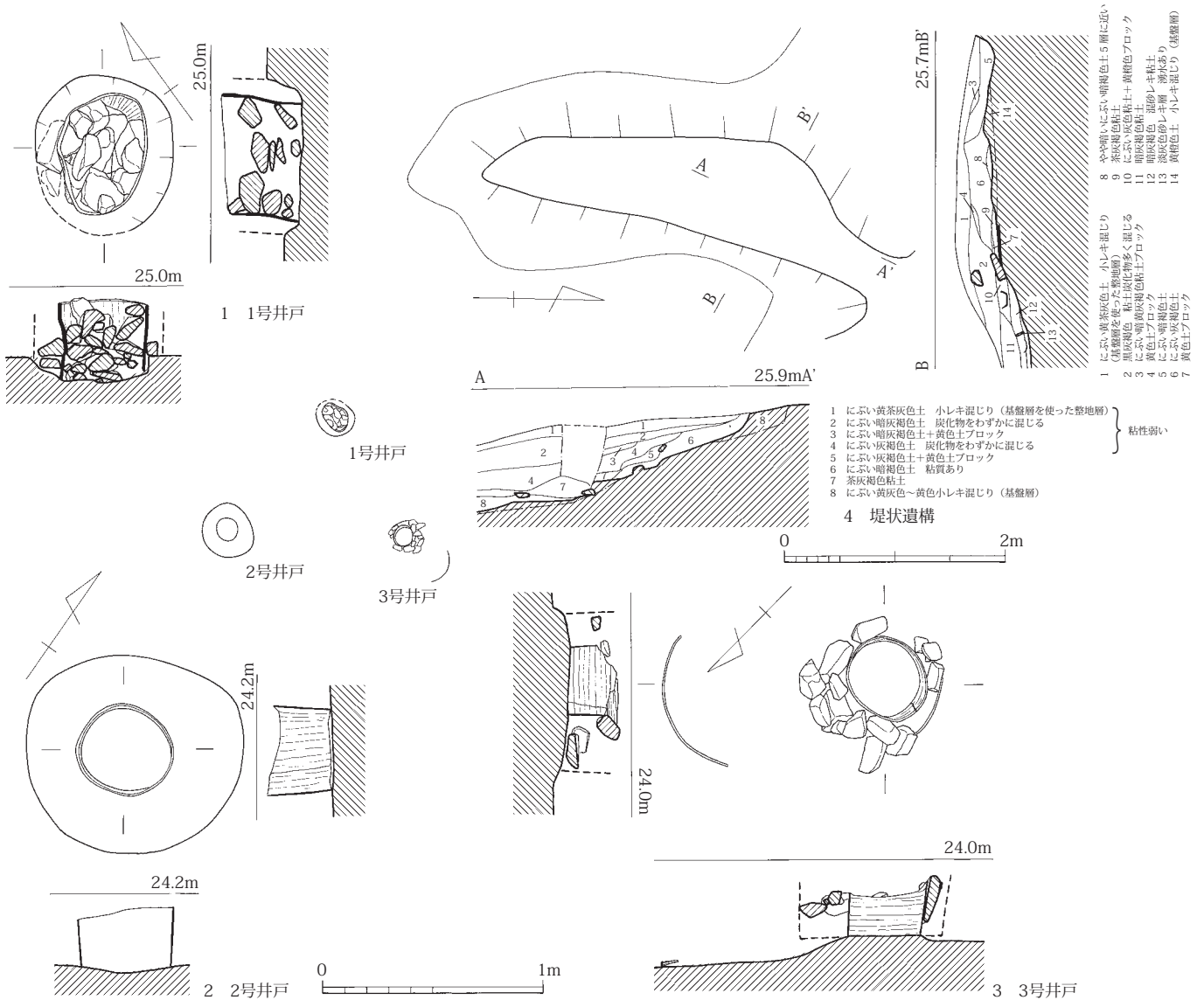
第 9 図 2 区 1 号土坑出土土器実測図 2 (5 は 1/4、他は 1/3)

③ 井戸

流路跡の床面から3基の井戸が近接して検出された。出土土器がないので時期を特定できないが、井戸は流路の整地後に掘られているので堤状遺構が成立した後であることから早くとも9世紀以降だろう。

1号井戸 (図版3、第10図)

流路床面の西側から検出されたもので、井戸枠が見つかるまで、上面からは確認できなかった。裏込め土も埋土も流路埋土とほとんど変わらず、井戸枠内には流路埋土に含まれる礫が入っていた。井戸枠は薄く、軟質で礫に押されて変形しており、取り上げることができなかった。曲げ物ではなく幹を削り抜いたものであった。井戸枠は歪んでいるが、径40cmに復元でき、裏込めまで含めると径72cmである。



第10図 2区1~3号井戸・堤状遺構実測図 (3は1/60、他は1/30)

2号井戸（図版3、第10図）

流路床面の西側から検出されたもので、井戸枠が見つかるまで、上面からは確認できなかった。裏込めも推定範囲でしかない。井戸枠は曲げ物ではなく内面にはノミ痕が見られた。薄い幹を削り抜いたものが数枚重なって円形をなしていた。軟質で取り上げることができなかった。井戸枠は径42cmで、裏込め掘形では径100cmである。

出土遺物（第72図）

2は断面方形か円形になる筒状のものが半裁したもので、上下端は平坦面なので組み合わせ部材だろう。

3号井戸（第10図）

流路床面の西側から検出されたもので、井戸枠が見つかるまで、上面からは確認できなかった。埋土は流路埋土とほとんど変わらず、裏込めは確認できなかった。井戸枠外には礫が集中していたが、床面から離れており、井戸枠を固定したものではない。井戸枠の外部に井戸枠の破片があり、本来まだ上に井戸枠があったことがわかる。井戸枠は曲げ物の底を抜いたもので、井戸枠は歪んでいるが、径35cmに復元できる。

④ 堤状遺構（図版5、第10図）

1号土坑の南に流路に伸びる盛土であり、断面台形で上部の平坦面の幅は120cmほどしかなく、人が通ることはできる。先端は崩れたように見え、本来はまだ長かったのかもしれない。盛土を除去すると、流路跡の床面が検出され、下部構造らしいものは見られなかった。盛土内には遺物をほとんど含まず、構築面に多くの土器と長い自然木が出土した。

堤状遺構下からの出土遺物が8世紀末から9世紀初頭を下限としているので、それ以降に構築されたものである。

出土遺物（図版13・14・22・24、第11～14・63～67・70図）

堤状遺構下の遺物は、厳密には流路跡に含まれるが、堤状遺構の時期を捉える土器群であることからここで掲載する。

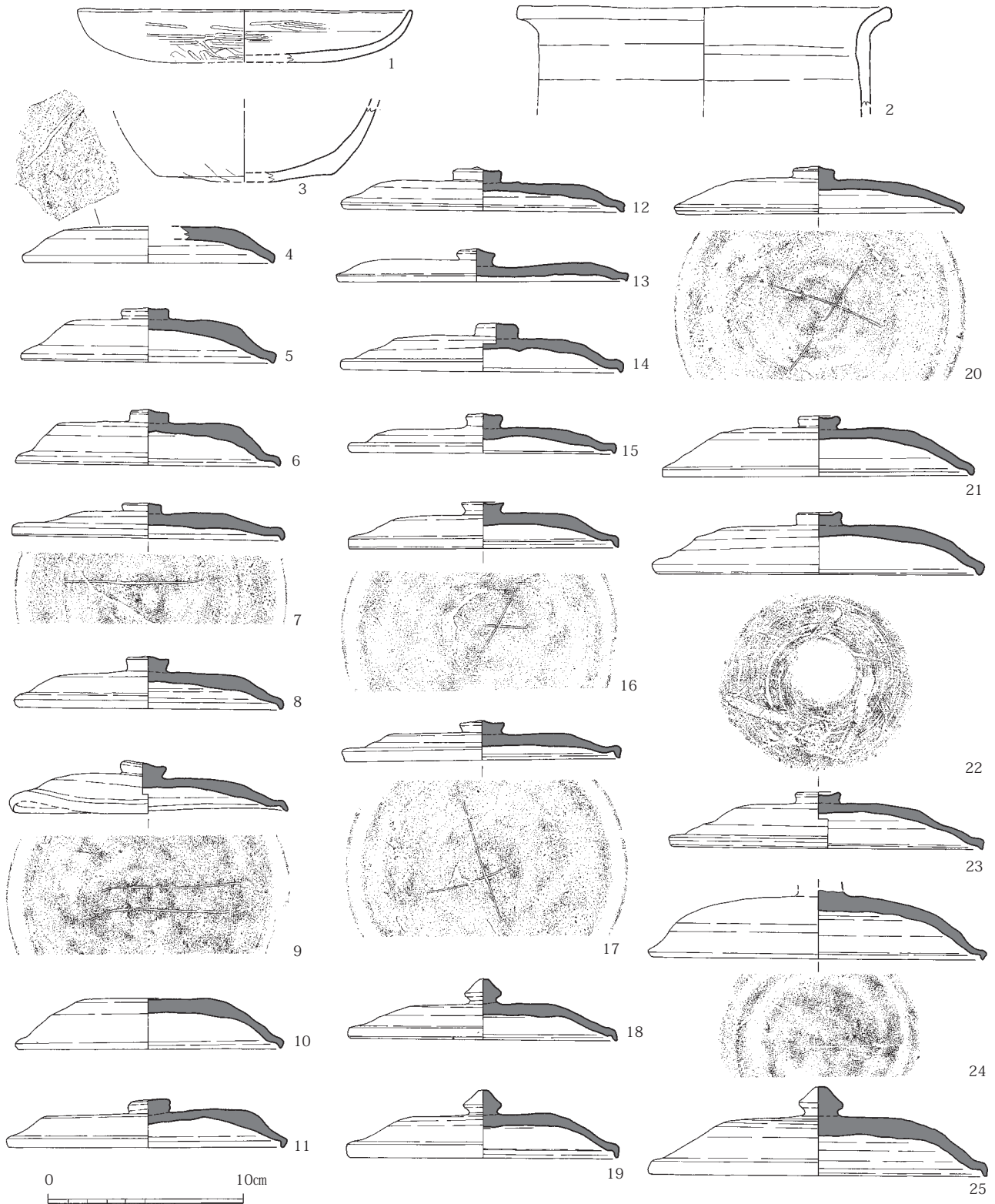
第11～14図は堤状遺構の下から出土したもので、第11図1～3は土師器である。1は杯で、接合しない2片で7割残存する。復元口径17.2cm。胴中位以下はヘラケズリ後、全面ミガキ。橙褐色を呈する。2・3は甕で、2は内外に幅の広いナデによる窪みをもつ小型の甕E類で、内外赤灰白色を呈する。胎土には褐色パミスが入る。3は甕の底部で、平底の中央部を押し出しており、出ている部分の内面はナデ、外面はオサエ。使用のため外面は赤変し、内面は炭化物が吸着して暗褐色を呈する。

4～25は須恵器の蓋で、4は小片だが、外面にヘラ記号があるので掲載した。口縁部が10分の1程度しかないので裾径は不正確だが、小型品であることは間違いない。内面に灰被りがあり、外面の口縁端部が灰黒色なので、杯との重ね焼きの最上部である。5の口縁部は対面部分が残存している。天井が回転ヘラ切り後、端部はナデで平滑に仕上げている。杯との重ね焼きパターン。6は3分の1が残存し、復元口径13.6cm。天井が回転ヘラ切り後、端部はナデで平滑に仕上げている。7は完形で、裾部の1部に小さな歪みがある。天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。天井部は全面灰を被っており。内面は端部のみ灰黒色を呈するので、天井部を上

した重ね焼きである。ヘラ記号は内面側にあり、端部が消えているが、長い1本沈線である。8は縁が欠けただけの完形品で、天井は回転ヘラ切り後、全面ナデで平滑に仕上げている。杯と重ねる焼成パターン。9は縁部が欠けただけの完形品だが、歪みがあり、裾部の1部にひびが入っている。天井は回転ヘラ切り後、端部をナデで平滑に仕上げている。内面も水引きの窪みをナデ消して平滑にして2本沈線のヘラ記号を施している。天井部は全体の半分にガラス化した灰被りがあり、内面に色調差がないので、同じ器種をずらして重ね焼きしたものであろう。10は口縁部は4分の1で歪みがあるが、天井部で3分の2が残存している。復元裾径13.8cm。天井は回転ヘラ切り後、端部はナデで平滑に仕上げている。杯と重ねる焼成パターン。11は一部欠損したほぼ完形で、天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。つまみの接合位置が中心からややずれている。天井部の端は器壁が厚い。杯と重ねる焼成パターン。12は口縁部が一部欠けている完形品で、天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。内面側は灰を被っているので、杯と重ねる焼成パターンの最上部である。13は半分残存し、復元裾径14.5cm。天井は回転ヘラ切り後、端部はナデで平滑に仕上げている。回転ヘラケズリの工具端で螺旋状の沈線が入る。内面は水引きの窪みが大きく、返りもナデで窪んだものである。天井側の端部を除いて灰被りがあり、内面も端部が灰黒色なので、立て掛けパターン。14は一部欠けた完形品で、天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。内面裾部はナデによる窪んでいる。天井端部の器壁が厚い。つまみは中央からずれて接合されている。同一器種の重ね焼きパターン。15は半分残存し、復元裾径13.7cm。天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。外面裾部はナデによる窪んでいる。内面裾部には工具端の段がある。同一器種の重ね焼きパターン。16は7割残存しており、天井は回転ヘラ切り後、中央部以外をナデで平滑に仕上げている。重ね焼きの最上部に被せる焼成パターン。内面に細かい沈線で「×」のヘラ記号を施す。17は内面に色調差がないことから、身とセットで焼成している。外面は天井部を除いて灰被りがあり、重ね焼きした個体の端部が融着している。幅が狭いことから、小型壺の高台畳付の一部だろうか。内面に細かい沈線で「×」のヘラ記号を施す。18・19は宝珠つまみを持つもので、18は9割、19は7割残存する。両者とも内外水引きの窪みをナデ消して平滑にしており、天井端部はナデでなく、ヘラ削りで仕上げている。つまみの接合部も丁寧で、接合痕が残らない。内面に色調差がないことから、身とセットで焼成したか、外面にも重ね焼き痕跡がないので単体で伏せ焼きしたもの。外面に灰被りもない良品である。20は8割残存しており、天井部は回転ヘラ切り後、端部をナデで平滑に仕上げている。回転ヘラケズリの工具端で螺旋状の2本単位の沈線が入る。内面に細く浅い「×」のヘラ記号が入る。同一器種の重ね焼きパターン。つまみは中央からずれている。21の口縁部は6分の1だが、天井部は半分残存しており、復元口径16.0cm。裾部はわずかにゆがみがある。天井部は回転ヘラ切り後、端部をナデで平滑に仕上げている。杯と重ねる焼成パターンだが、天井部と内面の高台痕の径の差が大きい。22は半分残っており、一部歪んでいる。復元口径17.0cm。天井は回転ヘラ切り後、天井部を全面ナデで平滑に仕上げている。裾部は水引きの窪みが大きい。杯と重ねる焼成パターンだが、天井部と内面の高台痕の径の差が大きい。23は口縁部が半分残っているが、天井部は完存しており、復元口径16.2cm。天井は回転ヘラ切り後、端部をナデで平滑に仕上げている。その上に3ヶ所凹線が均等に入るので、ヘラ記号の1種であろうか。外面裾部はナデによる窪んでいる。杯と重ねる焼成パターンだが、天井部と内面の高台痕の径の差が大きい。24は大型の蓋で、裾部の1部とつまみが欠損するのみである。天井は回転ヘラ切り後、端部をナデで平滑に仕上げている。杯と重ねる焼成パターンだが、天井部と内面の高台痕の径の差が大きい。内面中央に細かい沈線で「×」

のヘラ記号がある。25は裾縁が一部欠けた完形で、18・19と同型品の大型品である。調整方法も焼成方法も同じだが、内面の水引き痕の消し方は弱い。均一な作りの良品である。

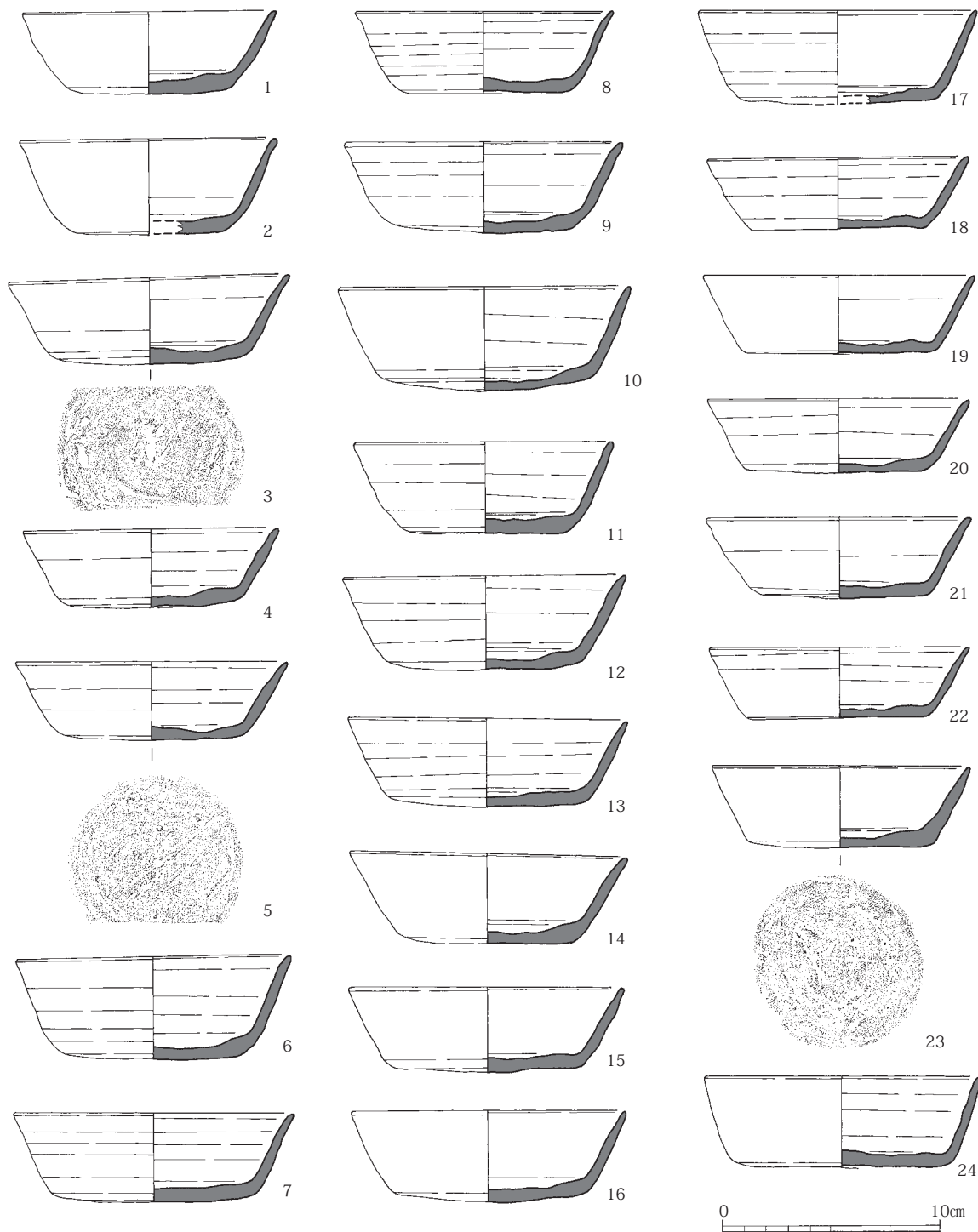
第12図は須恵器杯である。1は半分残存しており、復元口径11.8cm。底部は回転ヘラ切りで、中央部以外をナデで平滑にしている。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで内外面に火襷がある。



第11図 2区埴状遺構下出土土器実測図1 (1/3)

2は半分残存しており、復元口径 12.0cm。底部は回転ヘラ切りで、中央部以外をナデて平滑にしており、丸みが強い。ナデ後に粘土が付着している部分がある。全体的に焼成不良。同一器種の重ね焼きパターン。3は8割残存で、底部は回転ヘラ切りで、中央部以外をナデて平滑にしている。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで、内外面に火襷がある。外底部の段はヘラケズリでなくヘラ切りによるもの。4は7割残存で、底部は回転ヘラ切りで、粗くナデて平滑にして1条沈線のヘラ記号を施す。底部端はナデでわずかに丸みをもつ。同一器種の重ね焼きパターン。5は半分残存で、底部は回転ヘラ切りで、丁寧にナデ仕上げされ、板状圧痕が付着した後、1条沈線のヘラ記号が入る。内底は水引き痕を2本の凹線でナデている。同一器種の重ね焼きパターン。6の口縁部は対面が残っており、底部は完存している。底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。中央部には板状圧痕もあったようだがナデ消されている。同一器種の重ね焼きパターンだが、瓦器碗のようなグラデーションの変色で、軟質である。7は3分の1が残存しており、復元口径 13.0cm。底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで、内面に火襷がある。8は9割残存しており、口縁部の外傾の大きさは全体にほぼ等しい。底部は回転ヘラ切りで、工具端でできる沈線が底部端に残るので、端部のナデはなくほぼ平底である。傾いた同一器種の重ね焼きパターン。9は8割残存しており、底部は回転ヘラ切りで、工具端の沈線が見られるが、底端部じゃナデて平滑になっている。同一器種の重ね焼きパターンだが、内外3色に分かれており、瓦器碗のそれに似る。10は口縁部が1部欠けた完形である。底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。内外面に火襷がある。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで、全体的に焼成がやや不良。11は欠けやヒビや歪みのない完形である。底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。底面に植物茎の圧痕あり。胴下位と底部の接合部がナデで窪んでいる。外面の口縁部の重ね焼き痕跡は波打っているのは、重ね焼きした個体の口縁部が歪んだためか。12は9割残存しており、底部は回転ヘラ切り後中央以外を平滑にしている。胴下位と底部の接合部がナデで窪んでいる。傾いた同一器種の重ね焼きパターン。13は8割残存しており、底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。外面の水引き痕は明瞭に残る。傾いた同一器種の重ね焼きパターン。14は7割残存しており、底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。板状圧痕あり。同一器種の重ね焼きパターン。全体的に器面が摩滅している。15は口縁部が半分しかないが、底部は完存しており、復元口径 12.8cm。底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。同一器種の重ね焼きパターンの一番下である。16は3分の1が残存しており、復元口径 12.8cm。底部は回転ヘラ切りで、端部をナデて平滑にしている。板状圧痕あり。内面は口縁部のみ火を強く受けており、内底は焼成不良。外面は外底が焼成不良になっているので、重ね焼きの一番下である。全体的に器面が摩滅している。17は3分の1が残存しており、復元口径 13.0cm。底部は回転ヘラ切りで、端部のナデはほとんどない。内外面の口縁部の灰白色と青灰色との境界は不明瞭で、内外底部が焼成不良になっているので正置の同じ器種の重ね焼きである。18は3分の1が残存しており、復元口径 12.2cm。底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げで平坦にしている。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで、内外面に火襷がある。19は口縁部が4分の1だが、底部は完存しており、復元口径 12.6cm。底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げで平坦にしている。内外面に火襷がある。内面は口縁部のみ灰白色で、内底は焼成不良。外面は外底が焼成不良になっているので、重ね焼きの一番下である。20は欠けやヒビや歪みのない完形である。底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げで平坦にしている。内外面に火襷があり、22と酷似しており、同一窯での生産であろうか。外面は外底が焼成不良になっているので、重ね焼きの一番下である。21は口縁部が欠けているだけの完形品だが、欠けている部分はヒビが

焼成段階に入っている。底部は回転ヘラ切りで、工具端によってついた沈線が螺旋状をなす。端部をナデて平滑にしている。内外面に火襷がある。重ね焼き痕跡は偏っているので、同じ器種の重ね焼きが傾いている。22は7割残存しており、底部は回転ヘラ切りで、工具端による沈線が螺旋状に入るが、これをナデて平坦にしている。同一器種の重ね焼きパターンで、内外面に火襷がある。20と色調・焼成が酷似する。23は7割残存しており、底部は回転ヘラ切りで、ナデて平滑にして、細かい沈線の1本線のヘラ記号が入る。全体的に器面が摩滅している。内底は焼成不良。外面は外底が焼成不良になっているので、重ね焼きの一番下である。24は3分の1だが、底部は完存しており、復元口径12.8cm。底部は回転ヘラ切りで、工具端によってついた沈線が螺旋状をなす。端



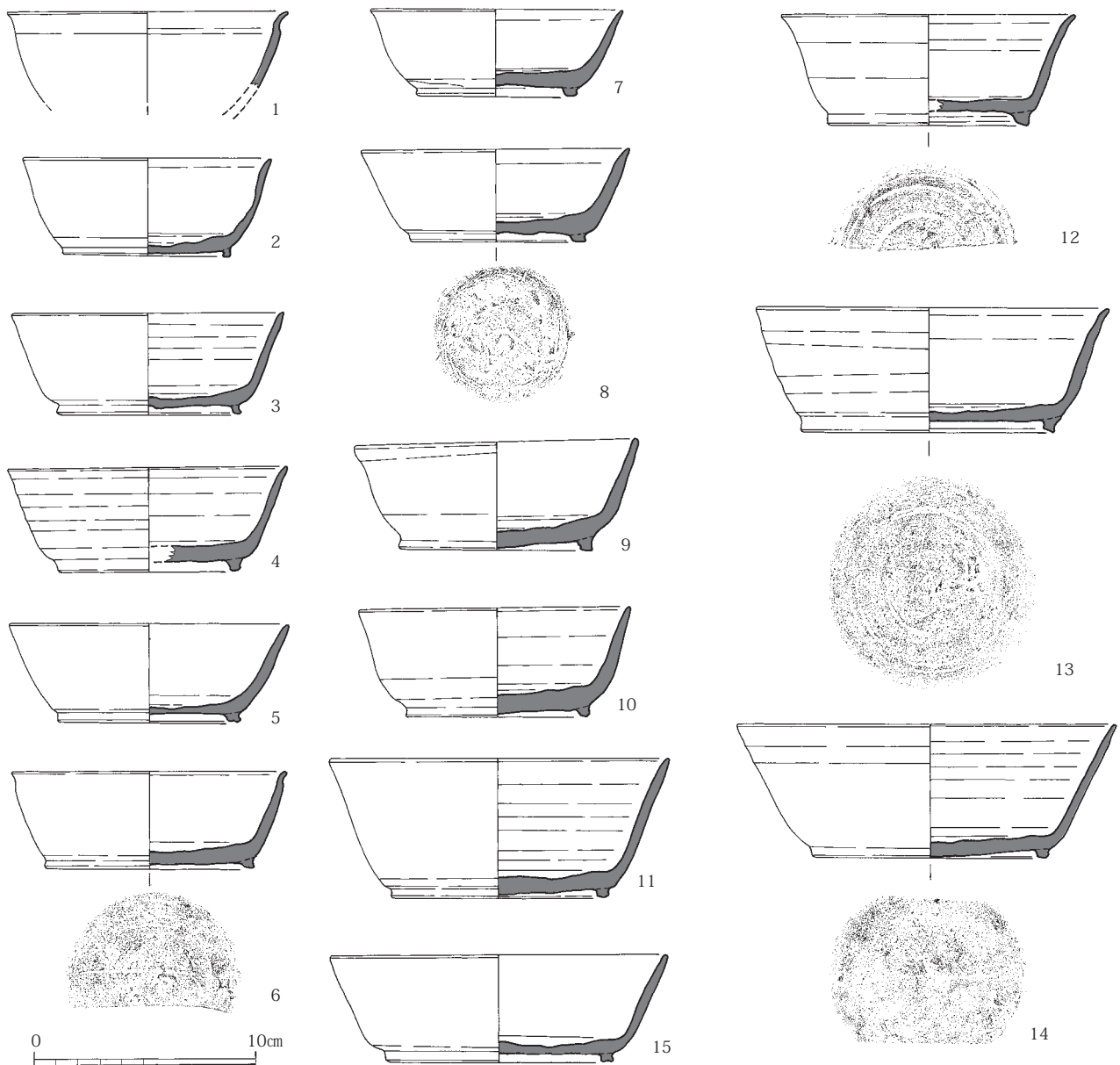
第12図 2区堤状遺構下出土土器実測図2 (1/3)

部をナデて平滑にしている。傾いた同一器種の重ね焼きパターンで、内外面に火襷がある。

第13図は須恵器高台付杯である。1は8分の1程度しかない口縁が外反するタイプで、復元口径12.6cm。同一器種の重ね焼きパターン。2は9割残存する小型品で、外底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げされている。高台との接合部の内側は未調整。高台部は焼成不良で、蓋と重ねる焼成パターン。3の畳付は幅の広いところと狭いところがあり、図は狭いところをとっている。外底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げ。蓋と重ねる焼成パターン。4は約半分残っており、復元口径11.2cm。底部は回転ヘラ切りで、中央部以外ナデ。蓋と重ねる焼成パターン。5は約半分残存しており、復元口径12.6cm。畳付に沈線が入る。外底部は回転ヘラ切りで、端部ナデ。胴下位と高台接合部を抉り状にナデる。器面が摩滅しており本来の色調がわからないので焼成方法の復元はできない。ただし、高台内のみ器面が残っている。6は口縁端が小さく外傾するタイプで、口縁部はわずかしかなかったが、底部は半分残存している。復元口径12.4cm。底部は回転ヘラ切りで、高台との接合部のナデが窪んでいる。中央部もナデ仕上げしないまま深い「×」字ヘラ記号を施しており、他の同器種とは異なっている。焼成方法の復元ができるほどの色調の差は見られなかったが、紫灰白色の色調も他の同器種とは異なっている。7は2と同じサイズの小型品で、口縁部は3分の1だが、底部は約半分残っている。復元口径11.4cm。外底部は回転ヘラ切りで、工具痕が飛びカンナ状につき、ナデ仕上げなし。内外面の口縁部が火を強く受けているので、同じ器種で重ね焼きするパターンである。8は9割残存しており、外底部は回転ヘラ切りで、工具痕が飛びカンナ状につく。ナデ仕上げしないまま細い沈線の1本線のヘラ記号が入る。全体的に器面が摩滅している。畳付は丸みがある。9は8割残存しており、外底部は回転ヘラ切りで、工具痕が飛びカンナ状につくがナデ仕上げされている。蓋と重ねる焼成パターン。10は約半分残っており、復元口径12.2cm。外底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げ。口唇部はナデによる面をもつ。焼成・色調は9に酷似する。11は口縁部はわずかしかなかったが、底部は完存している。復元口径15.3cm。外底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げされている。高台と胴下位の接合部は細かく抉るようにナデされている。全体的に焼成不良で橙褐色のまま還元されていない。12は約半分残っており、復元口径13.2cm。外反する口縁部下に1条の稜線が入る。このことと焼成・色調が1に酷似する。外底部は回転ヘラ切りのみで、6と同じく紫灰白色の色調と深い「×」字ヘラ記号をもつ。同一器種の重ね焼きパターン。13は口縁部がわずかに欠けた完形品で、外面口縁部下には1のようなナデの稜が入る部分がある。畳付は内傾しており、高台の内側接合部はナデで抉れている。外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げして「×」字ヘラ記号を入れている。蓋と重ねる焼成パターン。14は口縁部が3分の1しかないが、底部は完在する。内面は直線的なナデで水引き痕を消している。畳付は内傾する。蓋と重ねる焼成パターン。15は口縁部がわずかに欠けた完形品で、外面口縁部下には1のようなナデの稜が入る部分がある。高台には変形している部分があるが、図化している部分が本来の形状で、畳付に沈線が入る。外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げしているがひび割れている。蓋と重ねる焼成パターン。

第14図1から16は皿である。1は約半分残存しており、復元口径14.7cm。外底部は回転ヘラ切りで、ナデ仕上げされている。内面は同器種の重ね焼きで焼成不良だが、外面は変色がないので重ね焼きの最下部だろう。2の口縁部は約半分残っているが、底部は完存している。復元口径13.6cm。外底部は回転ヘラ切りで、端部はナデて平滑にされている。同一器種の重ね焼きパターンである。3は約半分残存しており、復元口径15.0cm。口縁部が大きく外反する。外底部は回転ヘラ切りで、端部はナデて平滑にされている。同器種の重ね焼きパターンである。4は8割残存して

おり、外底部は回転ヘラ切りで、端部はナデで平滑にされている。焼成は同器種の重ね焼きパターンであるが、全体に火を受けすぎており、ひっつきが多い粗悪品である。5は口縁部が約半分残っているが、底部はほぼ完存している。復元口径 13.6cm。外底部は回転ヘラ切りで、工具端部による沈線が螺旋状に入る。中央部以外ナデで平滑にしている。外底に沈線が1条入るが、ヘラ記号にしては短い。焼成は同器種の重ね焼きパターンである。6は7割残存しており、中央部以外ナデで平滑にしている上に、1条の沈線のヘラ記号が入る。内外面に焼成時のヒビの入る不良品で、焼成は同器種の重ね焼きパターンである。7は9割残存しており、中央部以外ナデで平滑にしており、板状圧痕が残る。外底に焼成により抜け落ちた窪みがある。焼成は同器種の重ね焼きパターンである。8は7割残存しており、外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げされている。内底は縦方向のナデで水引き痕を平滑にナデている。口縁部は丸みを持つ部分と外傾する部分があり、双方図化している。焼成は同器種の重ね焼きパターン。9は半分残存しており、復元口径 15.0cm。外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げされている。内底は縦方向のナデで水引き痕を平滑にナデている。外底に沈線が3条あるが、中央の長いものだけがヘラ記号の可能性をもつ。焼成は同器種の重ね焼きパター



第13図 2区堤状遺構下出土土器実測図3 (1/3)

ンで、内面口縁部は灰被り。10は7割残存しており、外底部は回転ヘラ切り後中央以外をナデ仕上げされている。そのため中央部には工具端による沈船が螺旋状に残る。底部端は丸みを持ち、結果として中央部は平底状を呈する。下には同器種の重ね焼きをしているが、内面に載せた器種は径が小さい。11は4分の1ほどしか残っていないが、口縁部の丸みが強く、外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げされている。火襷が内外に入る。12は3分の1残っており、復元口径15.4cm。外底部は回転ヘラ切り後、端部をナデられているため底部が丸みをもつ。焼成は同器種の重ね焼きパターンだが、外底部は半月状に焼成不良部分があるので、重ね焼きの最下部である。13は接合して完形になるもので、外底部は回転ヘラ切り後、稜線だけがナデ仕上げされている。端部はナデで平滑にされているので底部に丸みが生じている。器壁が厚く、全体的に焼成不良だが、焼成は同器種の重ね焼きパターン。14は6割残存で、外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げされている。焼成は同器種の重ね焼きパターンだが、内面は重ね焼きのずれが大きい。外面に灰被りがあるので、倒置状態で重ねたものか。外底に墨書らしいものがあるが、判然としない。15は口縁部が6分の1しかないが、底部は中央まで残っている。復元口径14.6cm。外底部は回転ヘラ切り後、端部をナデられている。焼成は同器種の重ね焼きパターンだが、内外ともずれが大きい。16の口縁部は半分ほどしかないが、底部は完存している。外底部は回転ヘラ切りで、工具端部による沈線が螺旋状に入る。端部がナデられており、口縁部はナデで細長く外傾している。焼成は同器種の重ね焼きパターンだが、灰被りが波打っていることから壁に立てかけられて重ね焼きされた可能性が高い。

17は口縁部が欠損しただけで9割残った長頸壺で、胴下位は回転ヘラケズリでカキ目状に見える部分もある。外底部は回転ヘラ切り後、静止ヘラケズリで仕上げされている。高台内の焼成が不良で、肩部に灰被りがあるので、正置して焼成されている。

18は小型器種の底部で、完在しており、外底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げされている。内面の焼成が不良なので、小型壺の可能性が高い。

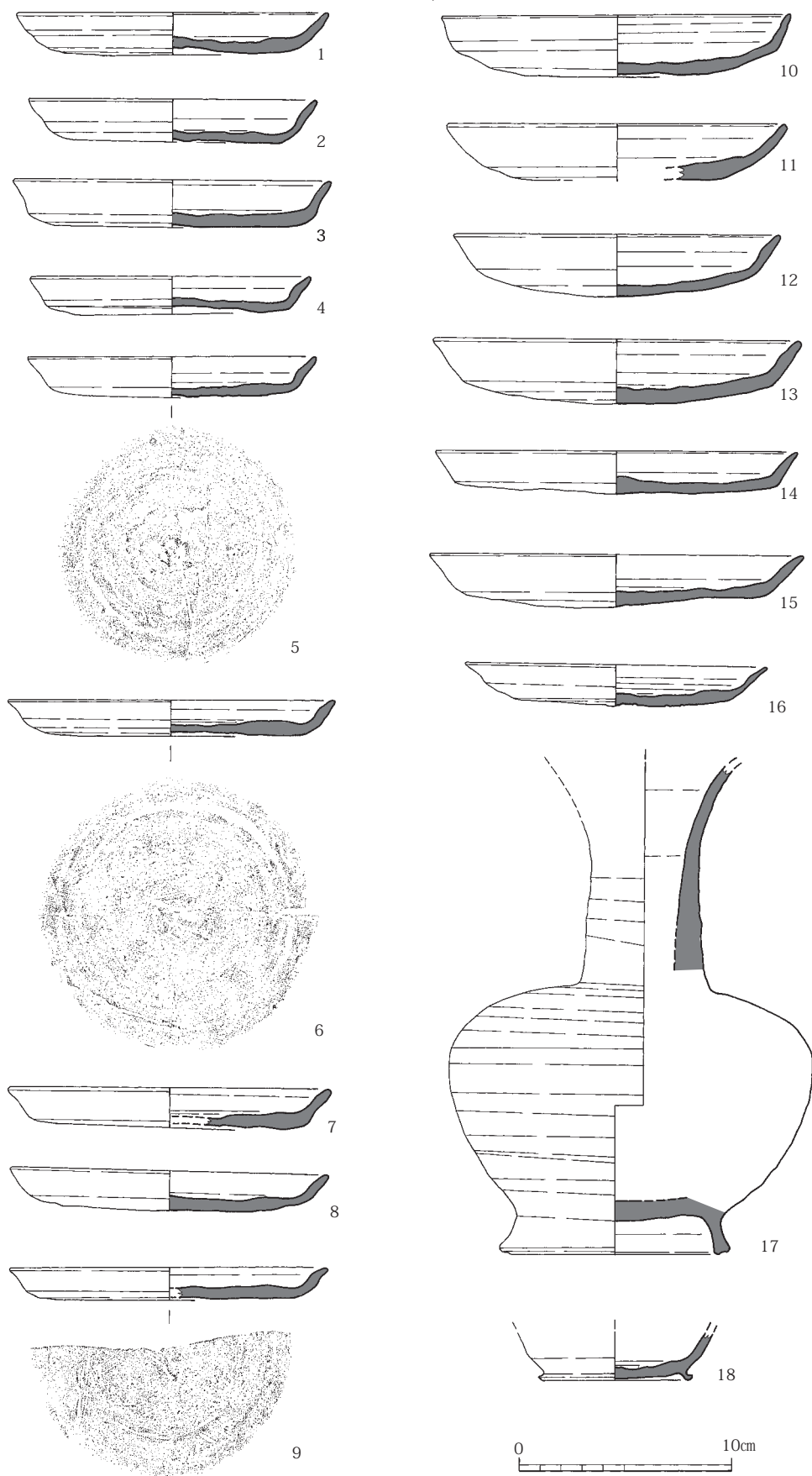
第63図16、第64図10・12、第65図2・8・9、第66図6・9、第67図3・4は焼塩壺である。このうち、第64図10・12、第66図9、第67図3は斜面包含層に、第65図9・第66図6は流路に、第67図4は斜面包含層と流路跡の両方に同一個体と考えられるものがある。

第63図16は口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅の広いオサエ。

第64図10は口縁部片で反転復元できない小片である。口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅の広い指オサエで、胴部片の内面には摸骨の隆起線による沈線がある。口縁部片の布目は横糸が集まってしまったことで横に太い凹線と縦糸のみが残る部分があったもの。同一個体1点がある。12は口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るものだが、部分的に内側に突出している。口唇部は板状工具によるオサエで、精良で軟質。同一個体16点がある。第64図1と同じ特徴の胎土である。

第65図2は焼塩のための2次焼成をしていないもので、胎土が精良である。口縁部片は内面の沈線を境にして布目の角度が変わることから、布目を折り畳んで方向を変えた痕跡である。口縁部片も胴部片も外面には広い平坦面を持ち、面の間は瘤状に隆起する。これは第64図12・13にも見られる。同一個体5点がある。8は内面の布目が特徴的なもので、横糸が不規則に寄ったものである。2次焼成による変色がない。同一個体に2点ある。9は大型の破片で、2次焼成で堅緻になっている。口縁部片の内面には布の折れによる段がある。同一個体1点がある。

第66図6は大きい破片で、堅緻で、内外面よく残っている。口縁部に小さく内側に折れる部分があり、第65図6に近い。このことから、器面が残っていながら混入物が露出するものは、第66



第14图 2区堤状遺構下出土土器実測図4 (1/3)

図6のようにスリップのような薄い器面があったものが剥落したことがわかる。下端部に器面が残っていないが布目がスタンプしか残っていない部分があるが、これも器面が薄く剥がれるためである。内面には布目の重なる部分があり、段になっている。同一個体16点がある。9は器面が内外摩滅しているが、内面の布目は残っている。混入物多く、胴部片に斜めにはいる凹線が3本ある。口唇部は上に尖り、口縁部の調整は不明。

第67図3は精良堅緻で、内面の布目が細かく、第66図2・3に胎土は酷似する。縦に凹線が入り、それ以外は平滑な曲面なので割竹の摸骨か。同一個体10点がある。4は図上接合しているが、器面の残りの悪い小片のため同一個体の認定が不確定である、内面に縦に凹線が入る。同一個体13点がある。

第70図1は堤状遺構内出土の砥石で、長石英製で1,352gを測る。半分に割れたものの欠損面を粗く整形して再利用している。整形面以外使用しており、鉄の刃を縦に擦った傷が多く残る。

⑤ 溝状遺構

溝状遺構は調査時に8号までつけたが、2～8号はいずれも不整形で東西方向に走る小溝であり、畑の畝の可能性が高い。遺物が出土した2・3号のみ説明し、4～8号まではほぼ同様なので省略した。

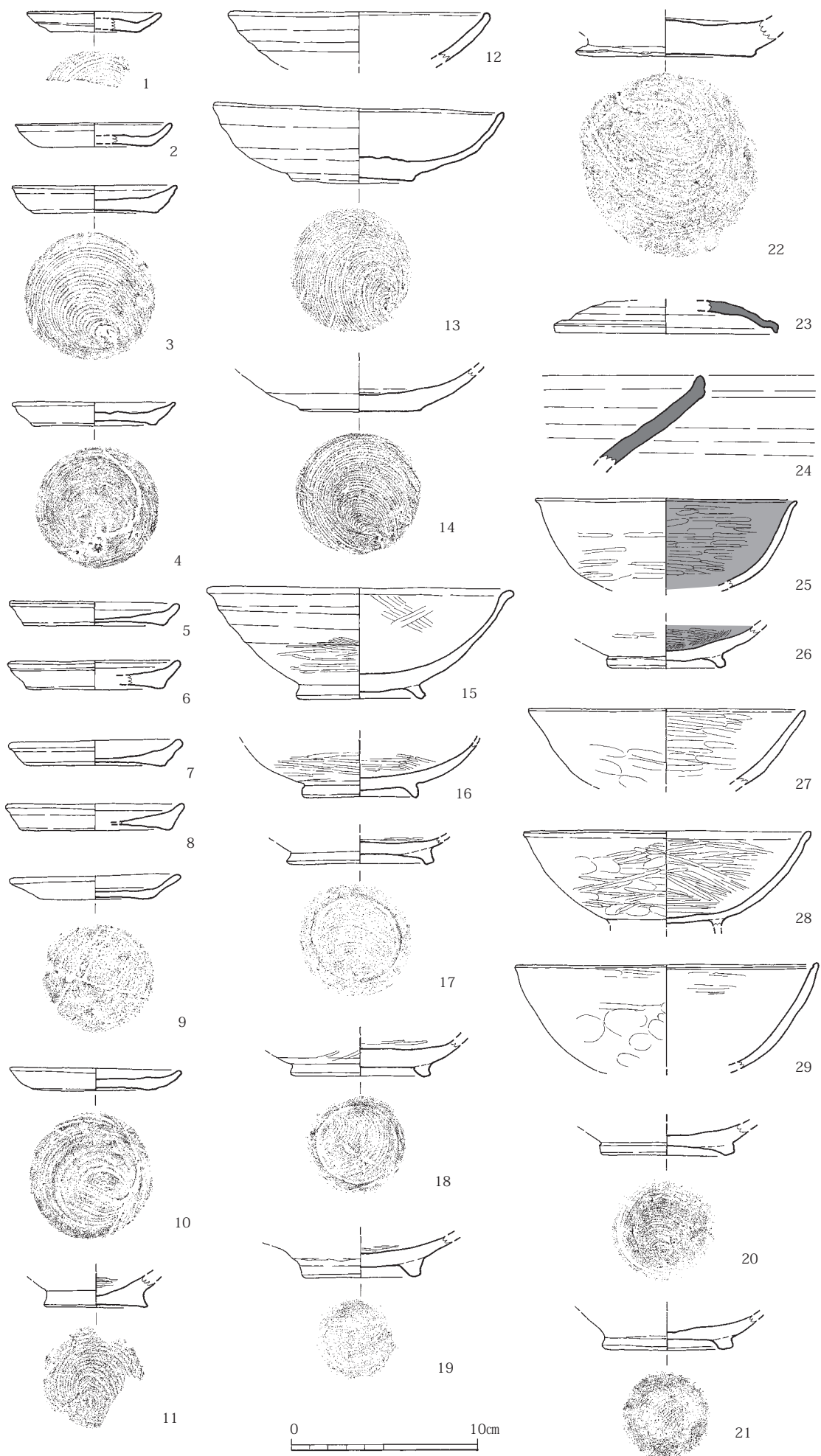
1号溝状遺構（図版4、第4・5図）

1区の緩斜面を南北に直線的に縦断しており、断面三角形を呈する。丘陵側の調査区外には若干伸びていただろうが、現道下にあたるため拡張できなかった。中央部が窪んでいるのは流水で削られたためだろう。土師器と人頭大の礫が床面中央から集中的に出土したが、敷いた状況ではなく、堆積層の傾斜と同じで西から流れ込んだものと考えられる。1号掘立柱建物跡の敷地を区画したものでしょうか。埋土は大きく上下2層に分かれている。

出土土器は、一部に混入もあるが11世紀後半から12世紀初頭の良好なセットである。ミガキの入る椀の高台の形態が、15の外傾する細長いものから19の断面台形を経て21の断面方形へと変化する段階のものまであるので、時期幅がある。小皿は底部と体部の接合部が肥厚するものがあり、体部が内湾して口縁部が尖るもの（第15図3・4・10）と、体部が外反して口縁部に丸みをもつもの（第15図5～8）があり、前者から後者へ変化したものと見られる。また、15図23～26、16図4・5は9～10世紀代の混入である。

出土遺物（図版15・21・23、第15・16・60・69・70図）

第15図は土師器である。1～10は小皿で、摩滅しているものもあるが、すべて底部糸切りである。3～8・10は胎土・色調が酷似しており、いずれも混入物なく精良で軟質で、変色のない黄白色であり、同じ工房のものであろう。このうち、3・4・10はいずれも完形で、上げ底の底部と丸みのある胴部、丸みをもって小さく外傾する口縁部をもつ。4の外底縁の赤化部分が3の内底の赤化部分と一致し、10の外底にも同じ赤化部分が見られ、これらのいずれも内底の水引き痕の中央部をナデ消す癖が見られることから、同一工人による製品であろう。（写真1）5～8は底部の中央の器壁が薄くなる特徴をもち、5・6・8は厚く丸みをもった短い口縁部をもつ。7は3・4・10に近い口縁部をもつので、両者の双方の特徴をもち、これに対して1・2・9はいずれも異なる胎土である。1は外面口縁下に意図的なものかはわからないものの沈線が入る。3分の1残存する極小の皿で、復元口径7.0cm。2は4分の1残存する極小の皿で復元口径8.2cm。混入物の多い橙色系で、9は口縁部に



第15图 2区1号沟状遗构出土土器实测图(1/3)

やや厚みがあり、底部の端部はナデで平滑にするという特徴をもつ。半分残存し、復元口径 8.8cm。外底には板状圧痕がある。内外黄橙色を呈する。11 は防長系の高台付皿で、底部は完存。内外黄灰白色を呈する。

12～14 は杯で、12・13 は褐色パミスを含む胎土や黄橙色の色調が同じなので、同じ産地のものだろう。底部糸切りで、内外ナデ。12 は小片のため復元口径は不正確。13 は 7 割残っており、内底の高まりと高台状の底部は回転ヘラケズリによるもの。外底は回転糸切り後板状圧痕がつく。14 の底部は完存している。内底は回転ナデで窪んでおり、外底も 13 のような高台状ではない。やや堅緻で、にぶい黄灰橙色を呈する。

15～22 は土師器碗で、15・17～22 は精良な胎土で基本的には黄灰白色を呈する。このうち、18・19 はスリップが掛かったように粒子が細かい点で他のものとは異なる。15 は口縁部は 3 分の 1 しかないが、底部は完存している。復元口径 15.9cm で、内面の 3 本の傷は箸の使用痕の可能性がある。器面が摩滅しているため拓本を掲載していないが、糸切りで高台との接合部をナデているので底が丸みをもって見える。

16 は砂粒の多く入る特徴的な胎土で、底部は 3 分の 2 が残る。内面の 2 本の傷は箸の使用痕の可能性もある。高台内は糸切りだろう。17・20・21 は底部片のみではあるが底部は完存している。高台がやや外傾しており、外底内の高台の接合部のナデ幅が広いという特徴をもつ。18・19 は内外平滑で、18 は底部 8 割残存、19 は半分が残っている。高台内面は 18 はナデだが、19 は削られている。22 は底部片のみではあるが底部は完存している。内底は回転ナデで窪んでおり、器壁の厚さから鉢の底部だろう回転糸切りのため粘土のよりが著しい。

23・24 は須恵器で、23 は裾部の蓋片で 8 分の 1 ほどしかなく、復元口径は不確か。小型品であることは間違いなく、碗の上で重ね焼き焼成している痕跡がある。24 は東播系の鉢で、小片のため径を復元できない。

25・26 は黒色土器碗で、口縁部はわずかで、胴部で 4 分の 1 残存している。復元口径 14.0cm。外面口縁部まで黒化しており、胴中位以下は黄橙色を呈する。底部と胴下位の接合部はヘラケズリ。26 は底部で完存しており、白色粒子と金雲母を多く含む特徴的な胎土。回転ヘラ切りの中央をハケで消している。

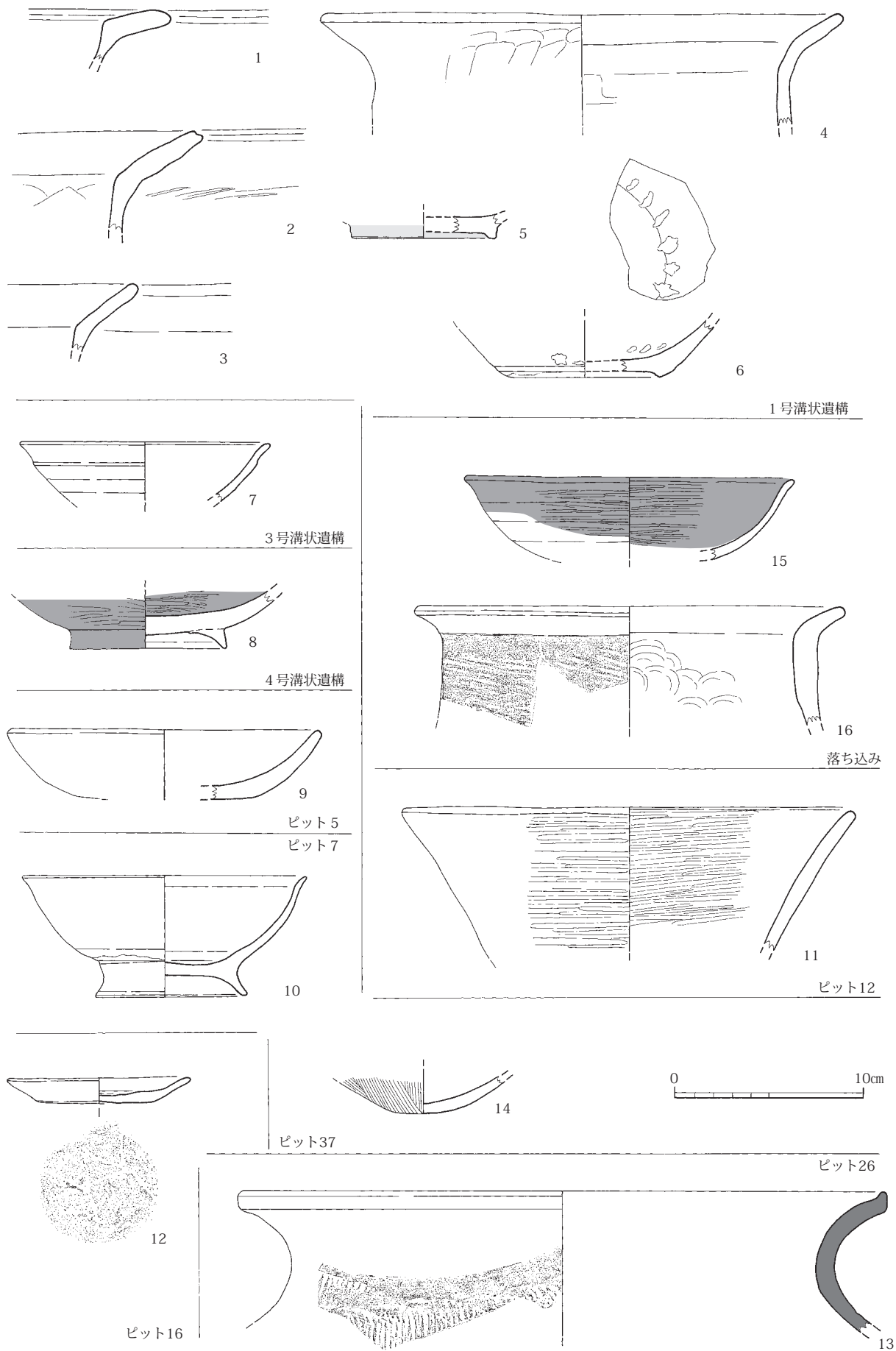
27～29 は瓦器碗で、27・29 は 8 分の 1 程度の小片で内面口縁部に沈線が残る。27 は復元口径 14.6cm。口縁下がナデで窪んでおり口縁部が外反しているが、29 は外面口縁部に丸みをもつ。27 は焼成不良で外面が黒色化していない。28 は 6 割残存しており、高台の欠損部まで黒色化しているので、焼成段階で高台が剥落したものだろう。内底には板状工具によるオサエが巡っており、押し出し技法で丸みが作られている。

第 16 図 1～3 は土師器の鍋で、いずれもカクセン石を多く含む。いずれも反転復元できない小片で、頸部にナデ工具端部の痕跡が残る。4 は土師器の甕で、口縁部の 6 分の 1 程度残っており、復元口径 28.0cm。鍋と同じ胎土だが、ヨコナデが飛びカンナ状に段をもつ。内面にヨコナデとケズリによる稜が 2 つ見られる。

5 は緑釉陶器の皿の底部で、削り出し高台。8 分の 1 の小片なので復元底径は不正確。須恵質の胎土で、釉薬の発色が流路出土の第 32 図 16 に酷似するが別個体である。6 は越州窯青磁碗の底部で、4 分の 1 が残る。畳付は釉剥ぎ。見込みに胎土目跡が並ぶ。発色が悪く内外緑灰白色を呈する。

第 60 図 3 は球形土錘。48 は棒状土錘で、穿孔した後粘土の突出を押さえている。

第 69 図 17 は砂岩製の砥石で、上下 2 面を使用しており、側面と端面は整形面で、欠損面は整



第16図 1・2区1・3・4号溝状遺構、落ち込み状遺構、ピット出土土器・陶磁器実測図(1/3)

形していない。106 gを測る。

第70図3は扁平な鉄片で、端部が残っていないので、器種不明である。

2号溝状遺構（図版1、第4図）

1区中央部の1号溝状遺構の西に位置し、東西方向に走る。幅30cm、深さ25cmほどの小規模な溝で、東端は1号溝状遺構に接している。切り合いは不鮮明であった。埋土から銅銭が出土しているだけで、時期を特定できない。

出土遺物（図版23、第70図）

第70図5は元豊通宝で、銅銭ながら鉄錆に覆われる。1078年初鑄。

3号溝状遺構（図版1、第4図）

1区北西端に位置し、東西に走る。幅30cm、深さ4cmほどの小規模な溝で、削られているのみで、本来はまだ延びていたものと思われる。出土遺物から10世紀前半にあたる。

出土遺物（第16図）

7は土師器の椀の小片で、内外ナデ調整、色調は内外灰白色を呈する。

4号溝状遺構（図版1、第4図）

1区中央部に位置する。2号溝状遺構の北にあり、湾曲する東端は接する可能性がある。幅40cm、深さ10cmほどで、やや規模が大きい。出土遺物から10世紀後半の所産だろう。

出土遺物（第16図）

8は黒色土器の椀で、外面も灰黒色だが一部に黄橙色があることから、本来は内黒とした。底部は糸切り後に高台を貼り付けている。

⑥流路跡（巻頭図版1・3、図版1・5・6、第17図）

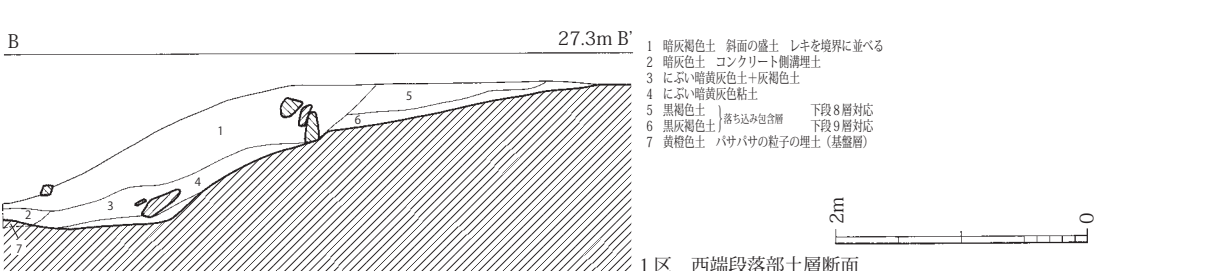
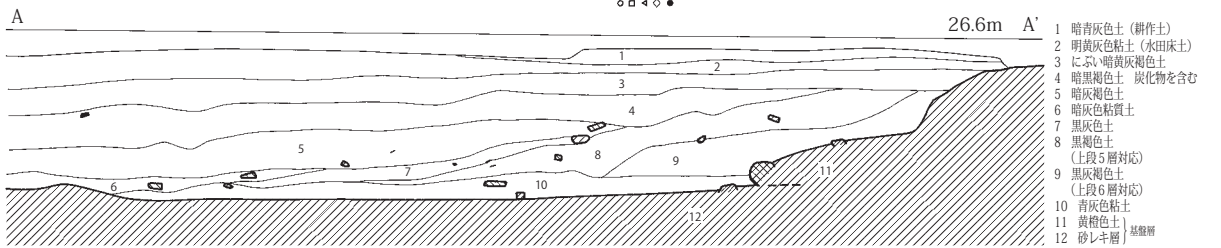
1・2区の東側に位置するもので、流路跡自体は仁王免遺跡が立地する丘陵との谷全体にあり、その上流は現在仕切られて溜池となっている。流路跡は河川の支流ではなく、丘陵から谷地形に集まることで成立しているので、水量は一定していなかったものと思われる。

試掘した結果、遺物が入るのは1・2区の緩斜面の裾部のみであることがわかった。そのため流路跡の北半分を調査した。斜面からの流入土に覆われるのは南北とも同じ条件だが、北側には井戸が存在することから井戸を掘ることができるほど埋め立てられていたと考えられ、その埋め立て土の残った範囲から遺物が出土しているものと考えられる。この埋め立ての面については調査時に確認できなかったが、井戸枠の検出された高さと同層から考えると、獣骨を含む7層以下が埋め立て土であり、その上の5・6層は出土土器から11世紀後半代の包含層で、5層上面は緩斜面とほぼ同じ高さになっているので、遺構こそ検出されなかったものの、11世紀以降の生活空間となっていただろう。下層の7～9層は黒色土系の堆積層で多くの遺物や炭化物を包含する。最下層の10層は遺物が少なくグライ化しており、基盤層の漸移層だろう。

出土遺物（図版15～17・21～24、第18～20・60・63～70）

第18図～第20図1～3・11・12は流路出土の土師器杯で、ほとんどが口縁部8分の1ほどの小片から復元口径を出しているので口径は不正確である。

第18図は器面の摩滅しているものもあるが、1～8は外面口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズ



第 17 図 1・2 区流跡獣骨出土位置図、土層断面図、不定形落ち込み土層断面図 (1 は 1/150、他は 1/60)

りで、内外ミガキが入るもので、1～3は丸底だが、4～6は器高が低く、平底気味になり、7の内面下半には板状のあて具痕が見られる。また、口縁部が丸みをもって外傾する。

10は、外面胴部はオサエ、内面下半には板状のあて具痕が見られ、その上にミガキが入る。底部まで残っているのに、中央部が平底になっていることがわかる。11・12は摩滅して不明瞭だが、内面口縁部にミガキの痕跡がある。13は約半分残っており、内面に板状のあて具痕があり、外面胴下位に指オサエがある。外面の口縁下にはナデによる稜のある部分とない部分がある。14から17は内外板状のあて具痕が見られるもので、口縁部の幅が広く、14・15は傾きが小さく器高が高いが、16・17は口縁部がやや傾き、器高が低くなる。18～21は内外板状のあて具痕が見られるもので、口縁部の幅が広く、外傾する。21は6割残っている。22～25は口縁部が外反するもので、26・27は口縁部が外反し、内外面の口縁下に段をもつ。28・29は口縁部が大きく外反し、ヨコナデも2段になる。30は平底で回転ヘラ切りであろう。色調はほとんどが黄橙色だが、ミガキの入るものは橙褐色が多く、17・22・25・26は黄灰白色を呈する。15・25は黒斑がある。

第19図1～9は前述の土師器杯の器高の低いもので、小片のため復元口径は不正確。いずれも内面は板状工具のあて具痕で、外面は、1・3・5が指オサエで、2は欠損のため不明。4は器面摩滅で観察できないが7・9と同様に板状工具によるオサエだろう。6は同じ板状工具のオサエで凹凸が大きい。8は3分の1が残る口縁部片で、2・4・7・8は黄灰白色を呈し、1は黄橙色、他は橙褐色を呈する。

10～14は須恵器を模した土師器杯で、10・11は回転ヘラ切りで、端部のみナデしているため上底状を呈する。変色が著しい。12・13は胎土が精良で、表面は非常に平滑にナデられている。外底は回転ヘラ切りの中央以外をナデている。14は器壁が厚いもので、回転ヘラ切り後ナデられている。粘土のよりで胴下位と底部の間に段ができています。金雲母を多く含む胎土で搬入品である。

15～21は土師器皿で、15は半分残っており、外面指オサエで、内外ミガキ。16は外面ヘラケズリで、内面はミガキ。17・18は外底回転ヘラ切りで端部のみナデ仕上げ。19～21は1～9のさらに器高の低いもので、杯というよりは皿にあたる。15～18は橙褐色を、19・20は黄橙色、21は黄灰白色を呈する。

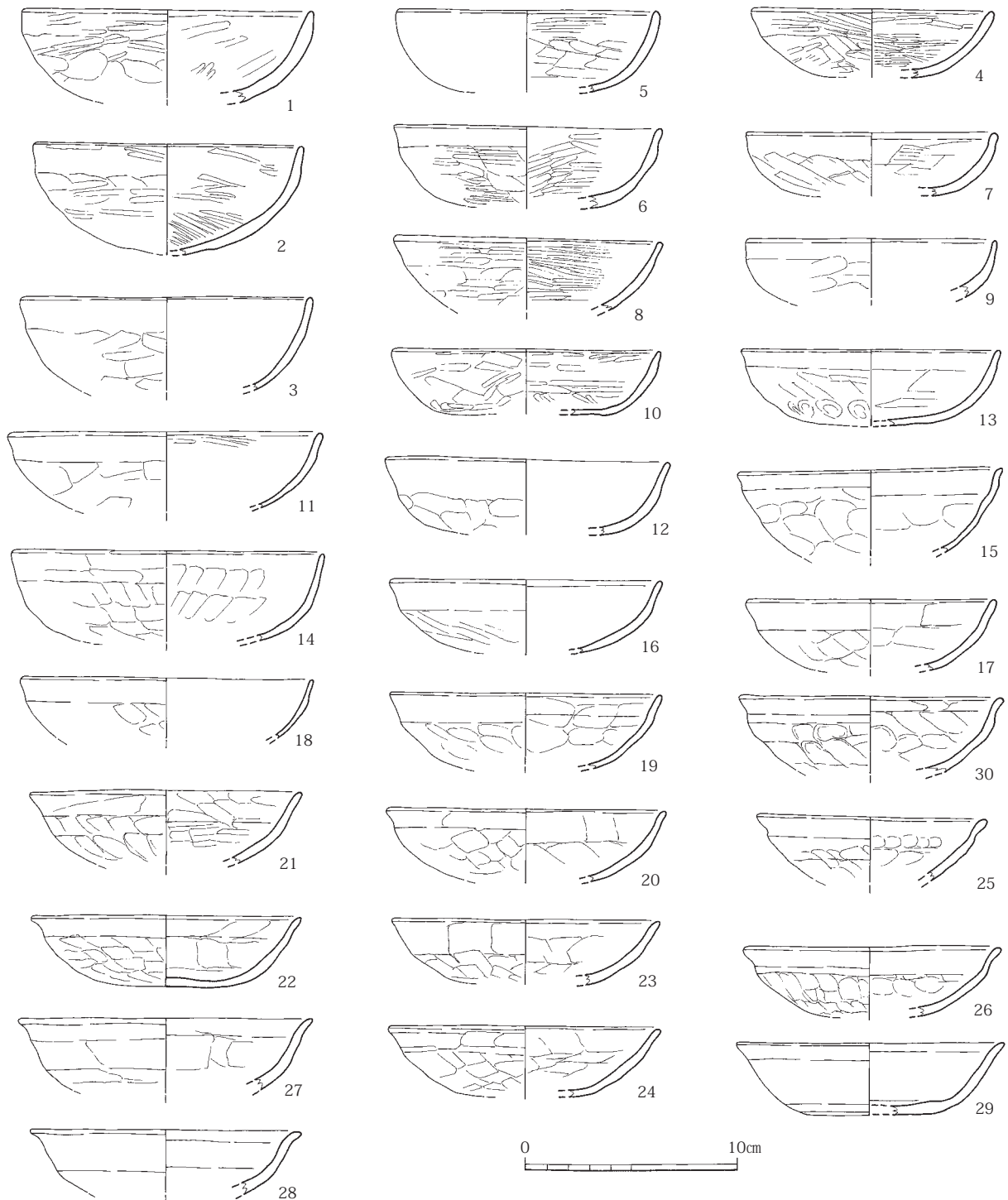
22から31は杯で、22は口縁部が4分の1残る小型の杯で、内外面胴部が板状工具によるオサエで、黄灰白色を呈する。23は9割残っており。外面にハケの入る土師器杯で、企救型甕のように白色粒子を多く含む胎土である。底部は器面が摩滅しており、切り離し技法は不明。24は口縁部がわずかしか残っていないが、底部は4分の1残存する。胴下位に1条の凹線があり、底部は回転ヘラ切り後、ナデている。

25～27・29～31は外面に水引き（ナデ）による幅の狭い凹凸がつく土師器杯で、25は外底回転ヘラ切りで、端部のみナデている。外底の回転ヘラ切りの中央を押し窪ませているのが特徴的で、26・28はケズリ残りのため肥厚している。26はややくすんでいるが、外底の回転ヘラ切り後の端部のナデ仕上げや胎土は28に酷似する。27は外面がくすんでおり、胴下位は湾曲するので高台状の底部を有する器形である。胎土は粗放な点で29と酷似する。28は4分の1残存しており、外面胴部には回転ヘラケズリの工具端が沈線をなす。外底は回転ヘラきり後、端部をナデ仕上げしている。また、板状圧痕が残る。精良な9世紀に多い胎土で、黄橙色を呈する。29は底部糸切りで、30は6分の1残っており、外面の凹凸が小さいものの、単位は見られる。外底は糸切りで、内外黄白色を呈する。31は外面に28と同じ回転ヘラ削りの工具痕が沈線状に残る。色調は黄灰白色を呈する。

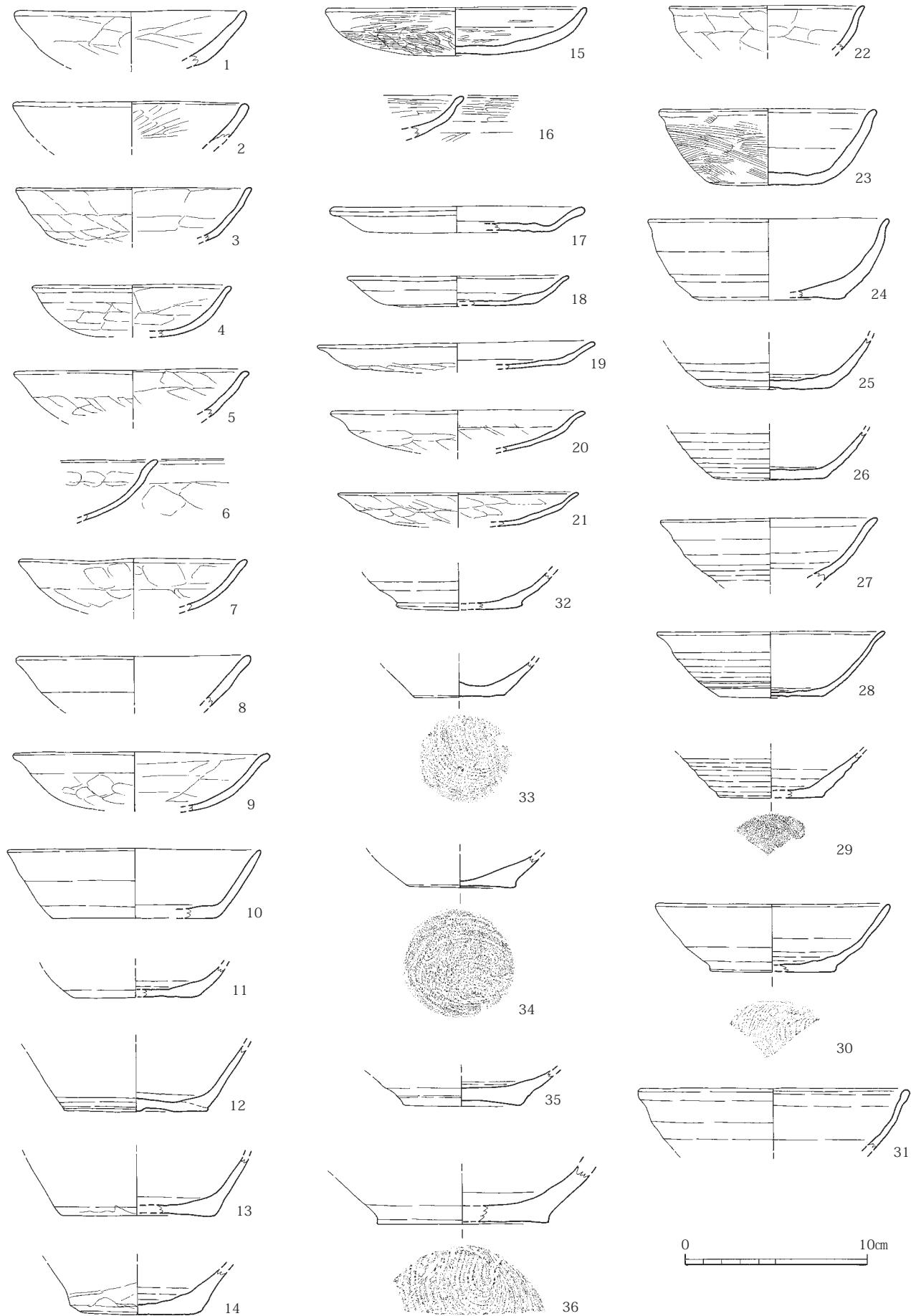
32は外底が回転ヘラ切りの工具痕の沈線が1条を残しナデ消されており、丸みを帯びている、

胴下位に水引きの窪みがあり、底部が同じく高台状の、30に近い器形になるだろう。外面の一部に基本的な色調である黄灰白色が残るものの、ほとんどは黒灰色で、内面もにぶい黒灰色を呈する。33は内底が水引き後未調整のため、中央が隆起しているのが特徴で、胴下位と底部との間の段はない。底部は完存しており、胎土は粗放。黄橙色を呈する。34は金雲母を大量に含む特徴的な胎土で、底部の中央部の器壁は薄い。35は外底部糸切りで、粘土粒が付着している。高台状に胴下位をナデ窪ませている。36は金雲母を含む胎土だが、34ほど目立たない。外底は糸切り後未調整。内面は発色が悪く、器壁が厚いことから大型器種の底部であろう。

第20図1～3・11・12は土師器小杯で、1は底部は静止ヘラケズリ後未調整。口縁下にナデ窪み



第18図 1・2区流路跡出土土師器実測図1(1/3)

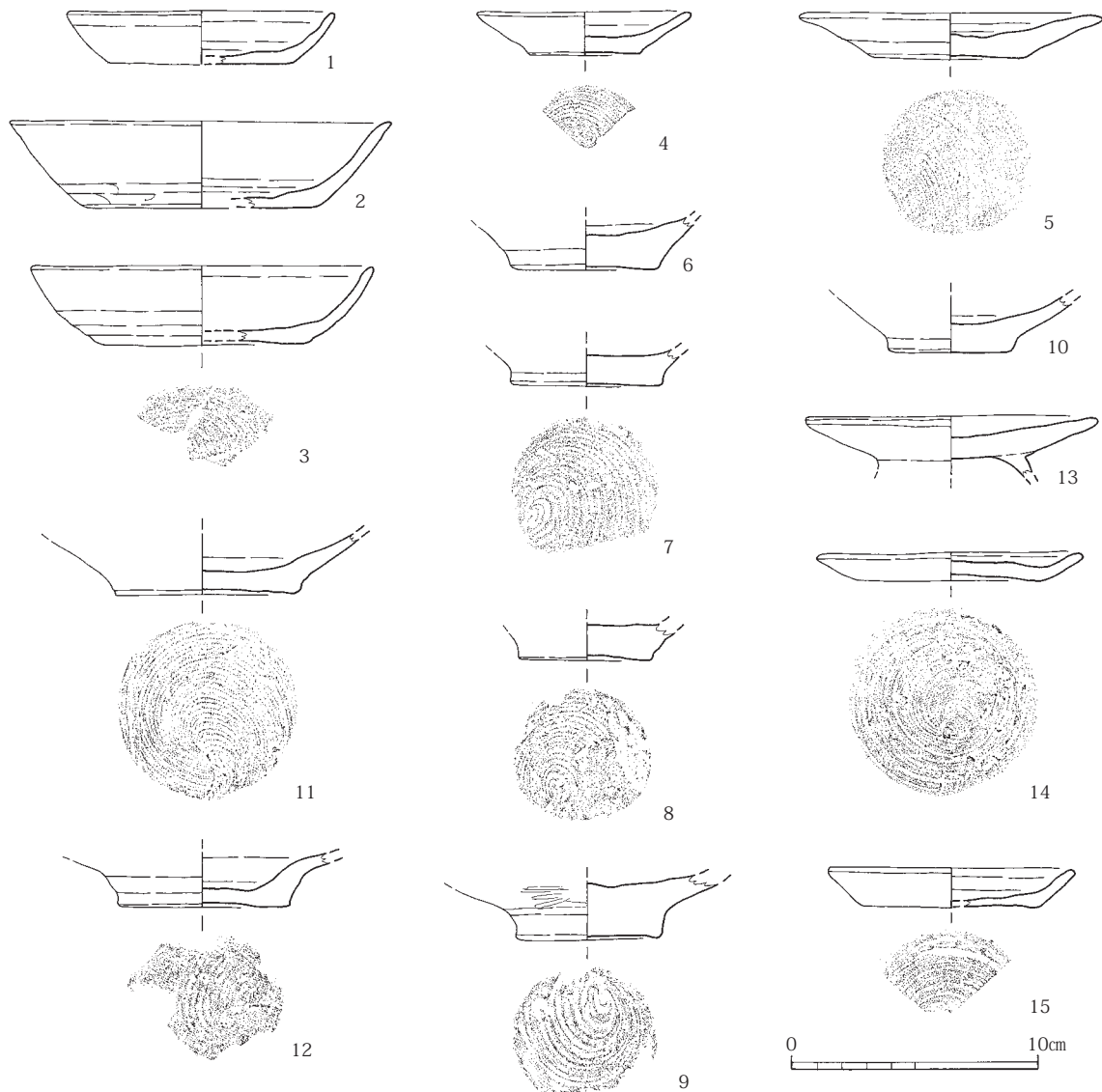


第19图 1·2区流路跡出土土師器実測図2(1/3)

がある。黄灰白色を呈する。2・3は土師器杯で、2は褐色パミスを含み、暗橙褐色を呈する。口縁部はわずかしかないが、底部は4分の1が残る。外底は回転ヘラ切りで、胴下位が肥厚している。内面口縁部が黒化している。3は外底糸切りで、内外に2次的焼成を受けた変色がある。11・12は大型品で、内底が水引きで窪む。11は精良で黄灰白色、12は粗放で軟質で、黄橙褐色を呈する。

4～15は土師器皿で、4は極小の皿で口縁部はわずかだが、底部は4分の1が残る。精良な胎土で、内外灰白色を呈し、変色なし。5は皿で外底のヘラ記号状の工具痕は沈線でなく、斜めに幅広く入っているので偶発的なものだろう。カクセン石を多く含む。6～9は底部が高台状の皿で、6はカクセン石を多く含み、7は内面に幅の狭い回転ナデが入る。8は見込みに種子が抜け落ちた圧痕が2つ見られる。9は器壁が厚い大型器種で、金雲母を大量に含む特徴的な胎土で、底部は糸切り。10は底部の糸切りをナデ消している。7・10は内面が灰黒色を呈する。13は高台付皿で、高台部分が欠損しているのみで、皿部は完存。カクセン石を多く含む胎土で、5・6と同じである。14・15は扁平な小皿で、14は7割残っており、器面摩滅。焼成が強すぎるようで、内外淡赤橙色を呈する。15は1と同様に内面にナデ窪みがある。色調は1が黄橙色なのに対し、15は灰白色を呈する。

第21図は土師器椀である。1～3は胴部が内湾しつつ、口縁部は小さく外傾するもので、1・2



第20図 1・2区流路跡出土土師器実測図3(1/3)

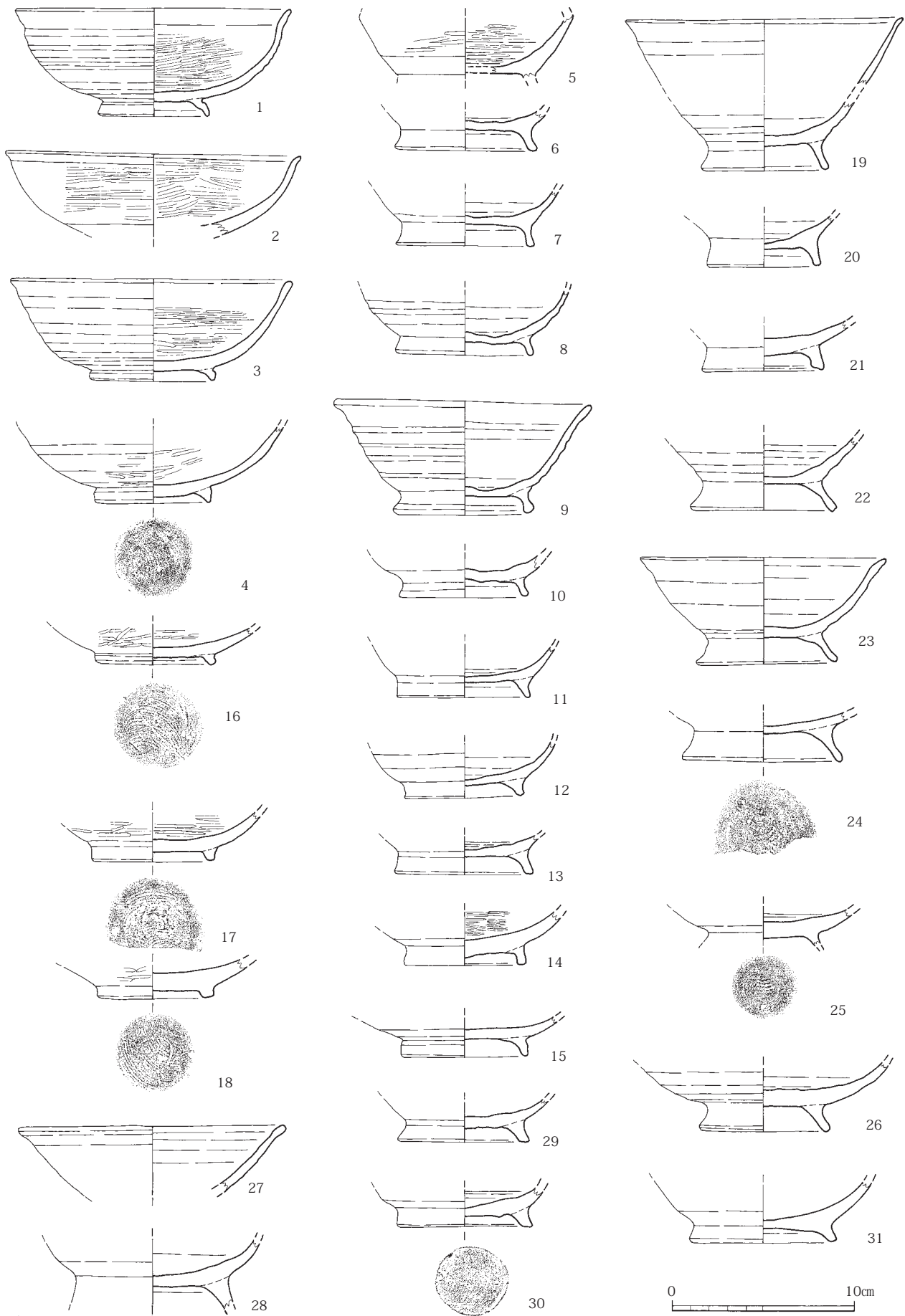
は外面上半を回転ヨコナデ後、ヘラミガキ。外面下半は回転ヘラケズリで、3はヘラケズリのみになっている。内面はいずれも丁寧なミガキが入る。外底は回転ヘラ切りで、1はヘラ切り痕をナデ消している。1・3は高台と胴部の接合部外面側に大きな挟りが入る特徴が一致している。4は黄灰白色と黄橙色が斑に入る色調と精良で堅緻な胎土が1と同じで、外面のヘラケズリ後部分的にミガキが入る。外底は糸切り。5は高台残欠が部分的に残るものである。9世紀に多い胎土で、内面は丁寧なミガキ、外面は回転ヘラケズリの上に部分的にミガキ。外底は回転ヘラ切りで、胴下位を肥厚している。6・7は外面がナデによる凹凸はなく、外底の回転ヘラ切り痕がナデ消されている点で共通する。5から7は橙褐色を呈する。

8～10は外底のヘラ切り後、丁寧にナデて、中央部は窪ませている。内底は外底に対応して高まりがある。8・9は外面に回転ナデの凹凸が著しい。9は装飾的に凹凸を入れている。10は内底にネズミらしい小型動物の爪の痕跡が残る。11は回転ヘラ切り後未調整だが、中央を窪ませる点で8・9と一致するが、内面側は突起しておらず、外面の凹凸もない。黄橙色を呈する。12・13は外底ヘラ切り後中央部以外をナデており、内底はナデ窪む。黄橙白色を呈する。14は外面回転ナデ、内面ミガキで、外底ヘラ切り後中央部以外をナデており、中央部が突出する。内面に焼成不良な重ね焼き痕がある。径が同器種の底部と一致する。15は器面が摩滅しているため観察できないが、外底は糸切りで、内外灰白色を呈する。胎土はざらつきが多い。16から18は灰白色で、いずれも外底は糸切り。内外面ミガキで、7は外底に「×」字、9は「○に一本線」のヘラ記号が入る。16・17は14と同じく内底に重ね焼き痕があり、精良な胎土である。19は口縁部と底部を図上接合したもので、19・20は外底回転ヘラ切り後中央部以外をナデており、内底はナデ窪む。黄橙白色を呈する。21は器面の摩滅が著しく、調整を観察できない。内底は窪んでいない。19～21はカクセン石の多いざらつく胎土である。22は内底はナデで中央は盛り上がる。外底は回転ヘラ切り後中央部にハケを入れる。橙褐色を呈する。23は外面には胴下位に凹凸があり、口縁部はナデ。外底は回転ヘラ切り後中央部にハケを入れる黄灰白色を呈する。24は外底糸切りの後、中央部以外をナデ窪ませている。中央部はスリップがかかったように黄灰白色を呈する。25は外底ヘラ切りの後、中央部以外をナデ窪ませている。26は外底ヘラ切りの後、中央部以外をナデている。胴下位は回転ヘラ削り。それより上はナデ。27・28は金雲母を大量に含む特徴的な胎土で、外底回転ヘラ切り後中央部以外をナデており、底部の中央部の器壁が薄くなっているのも特徴的である。29は外面は褐色パミスを大量に含む特徴的な胎土で、橙褐色を呈する。外底部は糸切りで、高台との接合部はナデ窪んでいる。30は金雲母を大量に含む特徴的な胎土。内底は大きくナデ窪んでいる。31は黄灰白色で、混入物が少なくざらつく胎土。器面が摩滅しているため調整は観察できない。

第22図1・2は土師器の椀で、1は白色粒子が多く混入する粗雑な胎で、搬入品だろう2は丸みのある底部で、外面は回転ヘラ切り後、縦方向のヘラケズリが入る。外面は黄橙色だが、内面はにぶい暗黄灰色で、焼成不良。

第22図3～30は黒色土器である。3は杯で、内面は口縁部が黒灰色で、それ以外は淡くなっているが、器面摩滅によるもので本来的には黒色である。外底は上げ底状で、ハケが入るため切り離し技法は不明。外面は黄橙色と橙褐色が斑に入る色調。

4～11は淡黄橙色を基調とする、器壁の薄いものである。4は半分残っており、胴下位はケズリ、それより上はナデで、部分的にミガキが入る。外底はナデ仕上げのため切り離し方法不明。高台と胴下位の接合部は深い挟りが入る。5は外面上半がヨコナデ、下半がケズリで、両方にミガキが入る。内面は口縁部の黒化が弱い。6は外面胴部が回転ヨコナデの窪みが細かく入る。外底は回転ヘラ切



第21图 1·2区流路跡出土土師器実測図4(1/3)

りで、未調整。内面の黒色は口縁部までかかる。7は胴中位で外傾し、口縁部は内湾する。胴下半は回転横ナデの凹凸が入り、上半は横ナデ。8は、高台径がやや小さいもので、外底回転ヘラ切りで、中央部以外ナデ。9は大型で、器幅の狭い高台の剥離痕が残る。外底は焼成不良で、外面胴部は黄橙色だが、外底部のみにぶい黄灰色を呈する。胴中位は回転ヨコナデの工具端が段を作っている。10・11は外面は回転ヨコナデの工具端が段を作っている。外底は回転ヘラ切り後、端部のみナデ。

12～16は灰白色を基調とするものである。12は口径で6分の1しか残らない小片のため復元口径は不正確。口縁部が外傾するもので、外面はナデ。13は7割、14は半分残存し、両方とも底部が下に押し出され、外面胴上半はヨコナデ、下半はケズリ。外面口縁部まで黒化している。15は図上接合したもので、外面にミガキあり。16は外面ケズリの上にミガキあり。外底は回転ヘラ切りで、中央を静止ヘラケズリ。17・18は器壁が厚く、外底は糸切りである。17は内外ミガキ。高台と胴下位の接合部は深い抉りが入る。黄橙色と黄灰白色が斑に入る色調を呈する。18は精良で堅緻な胎で変色しているが、灰白色を基調としている。外面胴下位は回転ヘラケズリで、ミガキはない。19～22は黄橙色を基調とする粗放な胎土で、黒斑が底部に半分かかる特徴が共通している。19・20は外底回転ヘラ切りで、中央部以外ナデ。21は外底中央に板状圧痕があるので、切り離した後高台を貼り付けるまでの間に置いた板の痕跡だろう。22は7割残っている。金雲母を多く含む粗放な胎土で、外底は全面ナデ仕上げ、外面は工具によるナデの工具端で段ができています。これに比較的近い胎土が23だが、金雲母が入らない。外底は全面ナデ仕上げ、外面は工具によるナデの工具端で段ができています。24は畳付に平坦面をもつもので、高台内は焼成不良になっている。外底回転ヘラ切りで、端部のみナデ。25は外底回転ヘラ切りで、端部のみナデ。

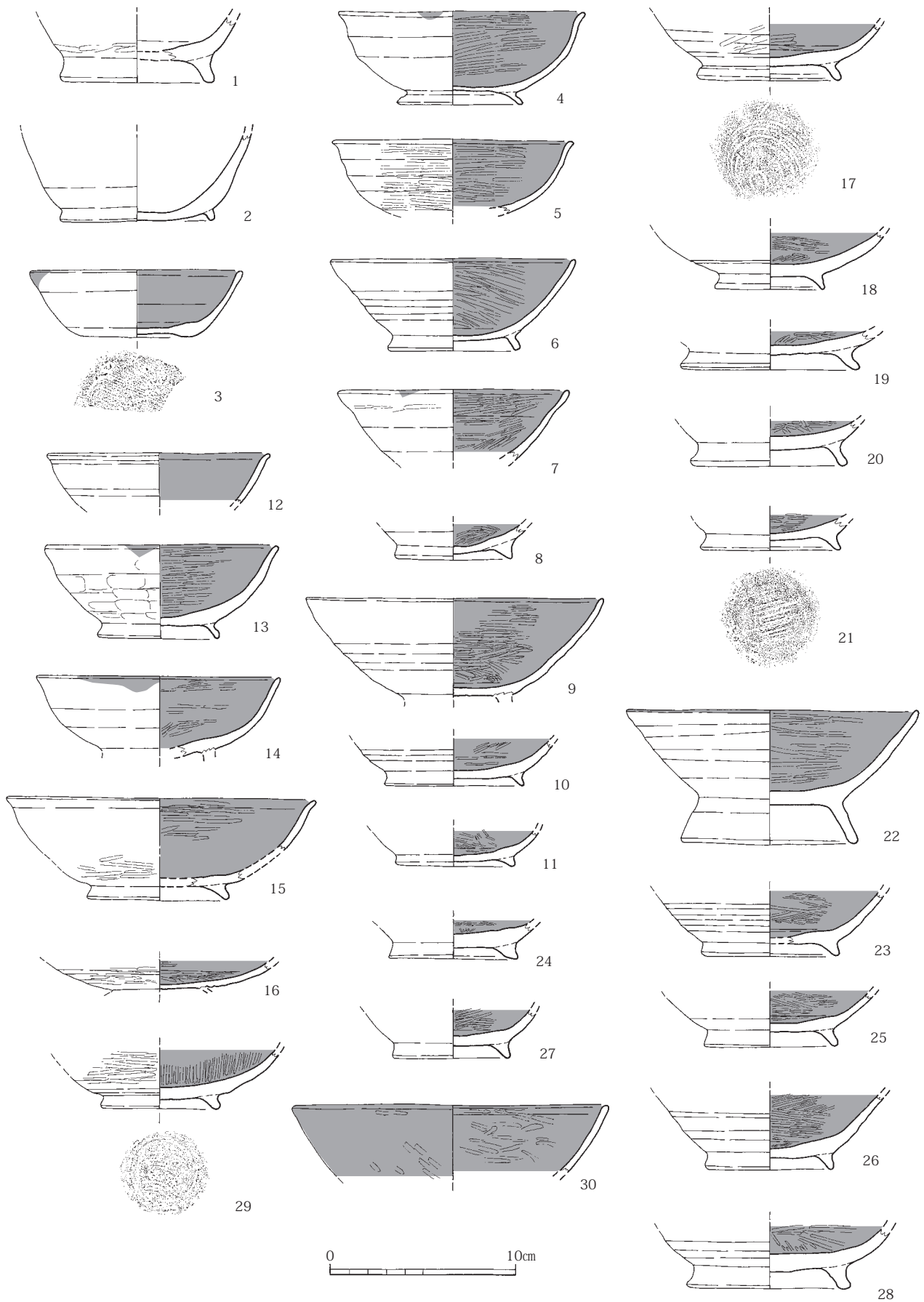
26は外面がナデの工具端で凹凸ができています。外底も回転ヘラ切りで、中央部以外ナデ窪んでいる。27は外底回転ヘラ切りで、飛びカンナ痕がつく。28は器壁の厚いもので、黄灰白色を呈する。ざらつく胎土で、外底は高台との接合部がナデ窪み、中央部は粗い静止ナデ。29は胴下半が回転ヘラケズリで、外底は糸切り。30は黒色土器Bの小片で、内面はミガキだが、外面はミガキが不明瞭である。復元口径は不正確。

第23図は土師器甕で、1～8は外面頸部以下に目幅の広いハケをケズリのように深く施す「企救型甕」で、白色粒子を多く含み、黄橙色を基調とする。1～3は小型品のため、ハケ目も細かく、内面頸部にもハケが入るのどイレギュラーなものもあるが、口縁形態と胎土からこのグループに含まれる。

9は小型甕で器面観察ができず、口縁形態も不明確なのでどの分類に属するかわからない。10～12は外面に目の細かいハケが入るもので、口縁部は短く湾曲するものである。13～15は器壁が薄く、口縁部内面に稜を持たずに大きく湾曲して外反するもので、13は口縁部にカクセン石を多く含み、黄橙色を呈する。これに対して14・15はにぶい黄灰色を基調とする。

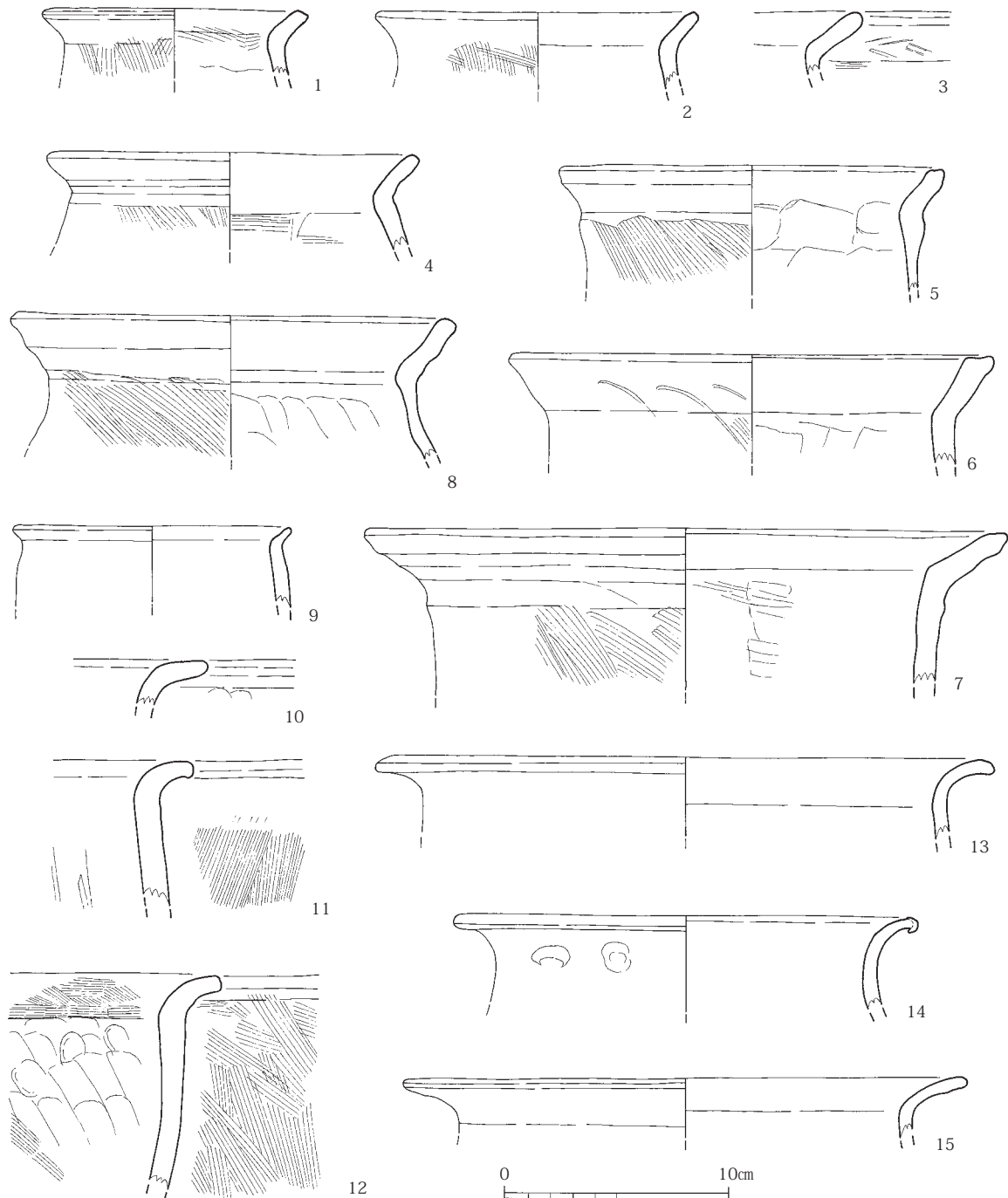
第24図は頸部以下にタタキをもつ土師器甕で、混入物の少ない堅緻な胎土をもつものである。内面は青海波文の当て具痕があるものもあるが、ほとんどは無文で、弧状に圧痕が残る。内面頸部はケズリで、その工具端が稜線をなす。4は小型品であるため内面は全面炭化物が付着しており、外面も変色が著しい。7は外面にほとんど使用変色がない。ほとんどのものが横方向のタタキ目であるが、8は部分的に縦方向がある。9は縦横に入る。外面はやや煤けて灰褐色を呈し、内面は黄灰白色で部分的に使用変色が見られる。器壁が薄く、器面の残りがよいので、煎熬に使用された痕跡はない。

第25図は土師器の甕で、1～3は小型甕のため、口縁が矮小化しているので分類が困難なもの



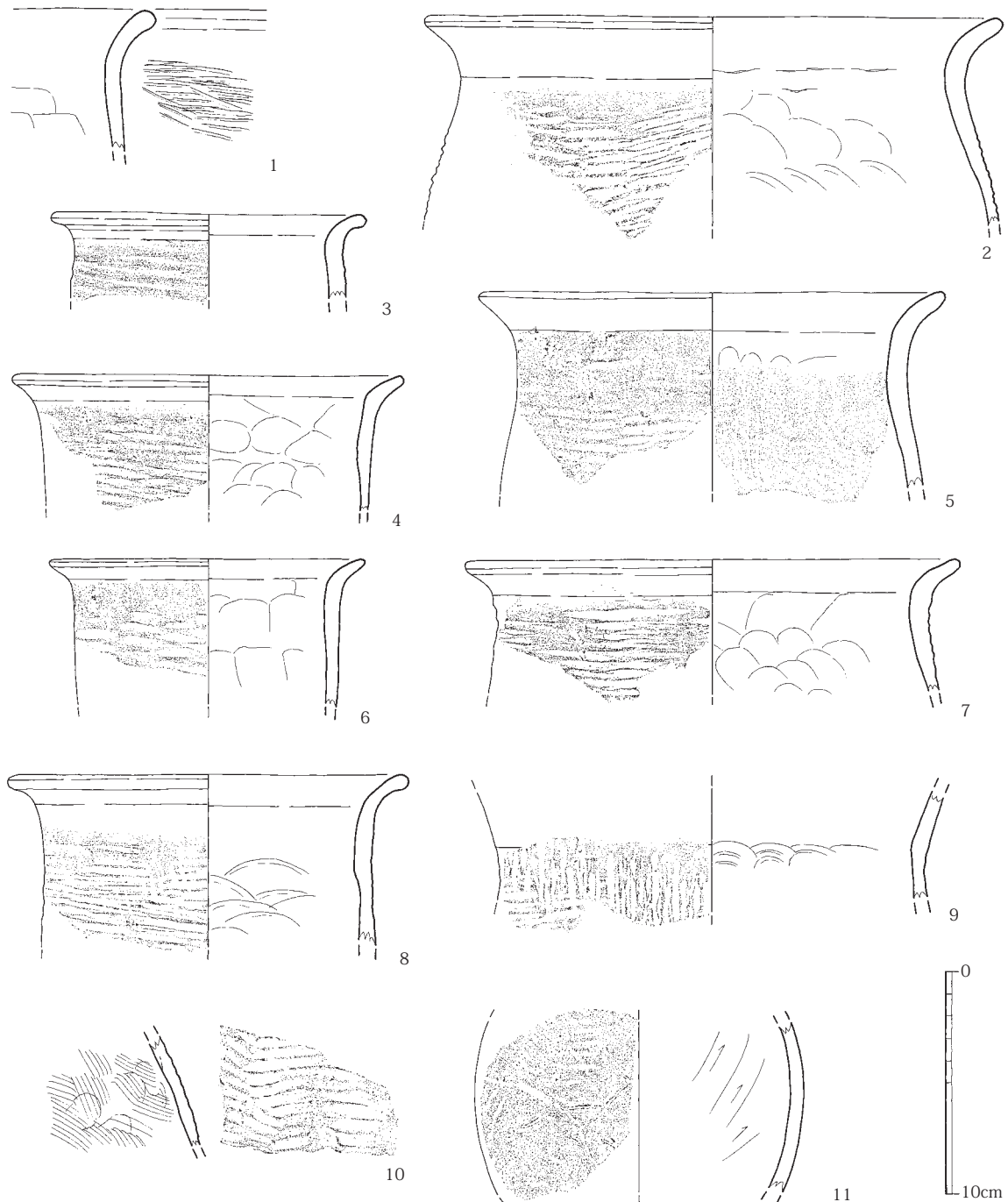
第 22 図 1・2 区流路跡出土土師器・黒色土器実測図 (1/3)

である。1は外面がケズリられている。2は褐色パミスを含む軟質な胎土で、外面はハケではなく、工具端の痕跡だろう。3は歪みがあるため復元口径は不正確。内外黒色で、本来の色調はわからない。4～8は外面が粗いナデで、ゴワゴワし、内面はケズリの入るもので、頸部内面に平坦面をもつ。胎土はさまざまだが、5・6は黄灰白を基調とするもので近似する。9・10は内外平滑になでられているが、幅の広い凹凸はなく、内面のケズリもナデ消されている。10の内面は全面黒化している。11・12は幅の広いナデ窪みを持つ甕で、内面はケズリ。12は内面にタテハケがあるが、基本的にはケズリ。胎土は精良で、内外橙褐色を呈し、8に近い。使用変色がない。13・14は幅の広いナデ窪みを持つ底部で、底部は押し出されている。13は下端がケズリで、それ以外は幅が広く窪みの大きいヨコナデ。底部と胴部の境には稜があり、その下には工具痕の窪みがある。

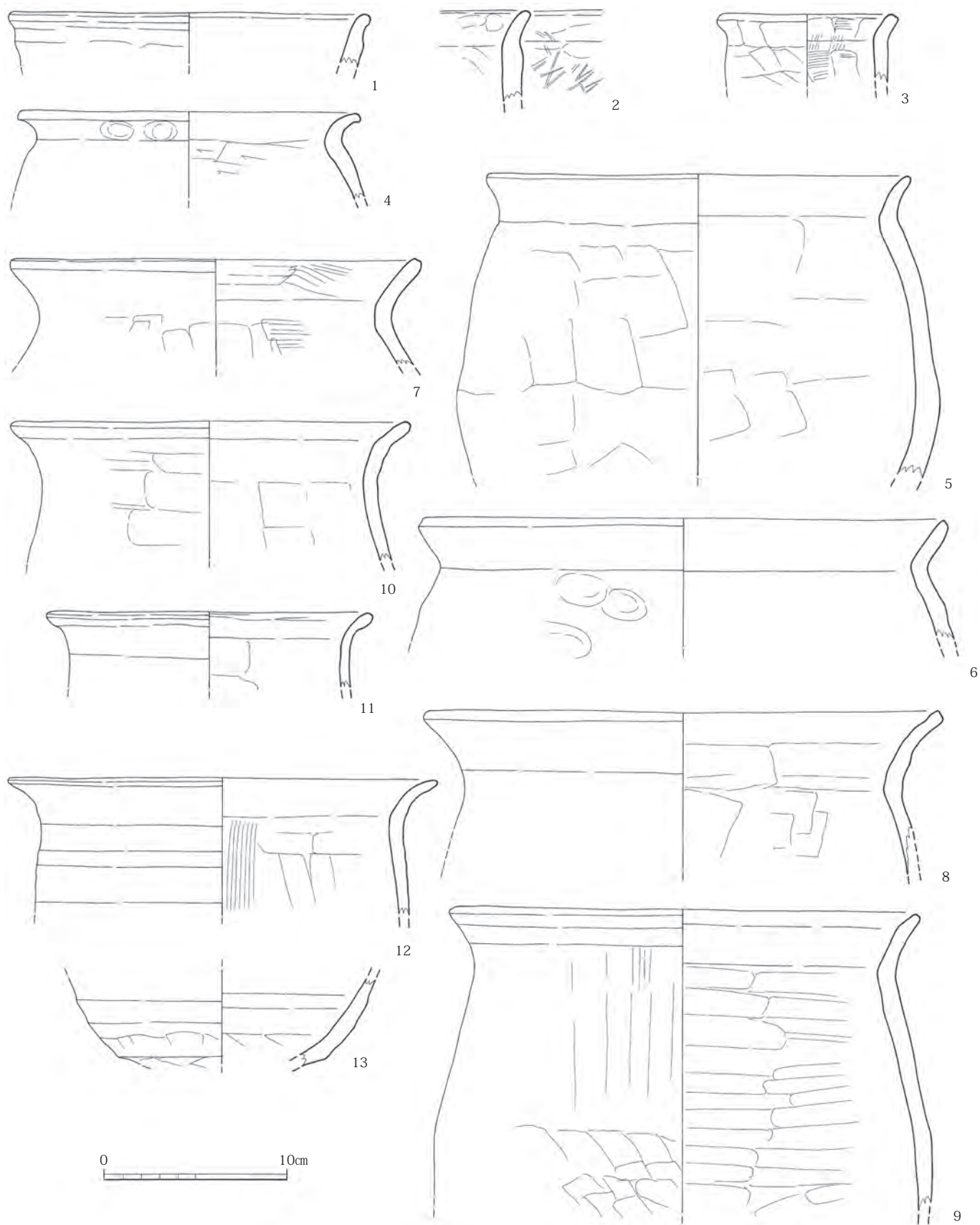


第23図 1・2区流路跡出土土師器実測図5(1/3)

第26図1は土師器蓋で、非接合の2個体で6分の1残存する程度なので、復元裾径は不正確。精良な胎土で、内外橙褐色を呈する。2は須恵器を模倣した土師器鉢だが、内面がにぶく変色しているのが火にかけるものか。3・4は土師器鉢で、外面は板状工具によるオサエで、内面は工具端部がハケのように見えるケズリ。黄灰白色で変色なし。胎土も近似しているが、同一個体ではない。5は土師器羽釜の口縁部で、器面が残っているが変色は見られない。6～10は土師器甑で、胎土はさまざまだが、6・7・10は褐色パミスを含むざらつく胎土で、近似する。8・9は黄灰白色を呈し、堅緻なので近い。形態もそれぞれ同じようなタイプである。11～13は置き竈で、11・12は口縁部片と思われるが、変色がなく使用されていない。胎土はどちらも、企救型甕と近似する胎土である。13は底部分だが、どの部分か特定できないので、傾き不明で図化しているが、接合部の湾曲から見て、径の小さい上位部分であろう。外反している面の方がくすんでいる。14は胎土からみて、



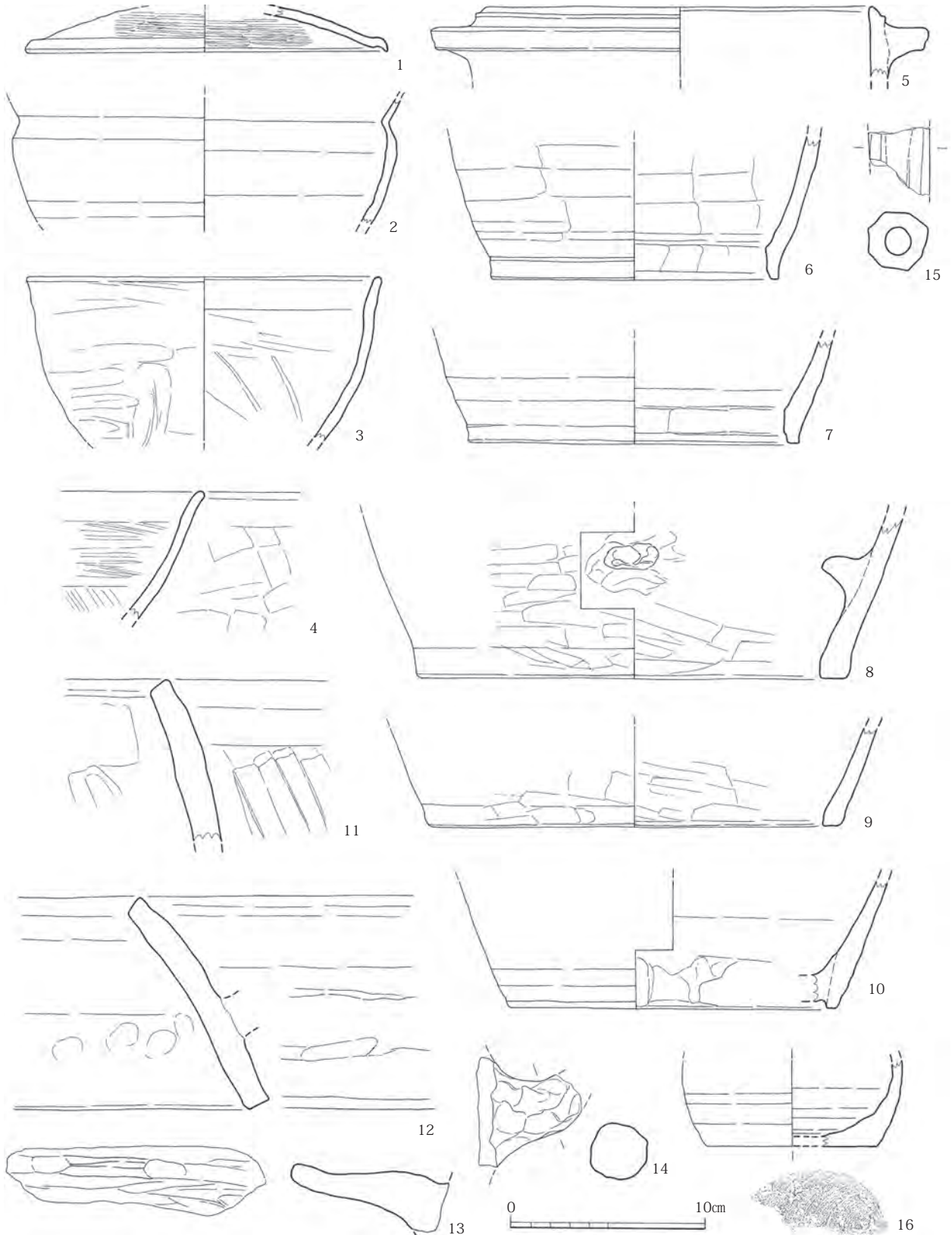
第24図 1・2区流路跡出土土師器実測図6(1/3)



第 25 図 1・2 区流路跡出土土師器実測図 7 (1/3)

8・9につく土師器甑の把手であろう。15は高杯の脚部であろう。精良な胎土である。16は鉢が壺で、全体に煤けているが、内面には墨か黒漆のような光沢のあるタールが付着している。

第27図1～14は須恵器蓋で、1は縁がわずかに欠けた完形で、口縁部にやや歪みあり。1と3



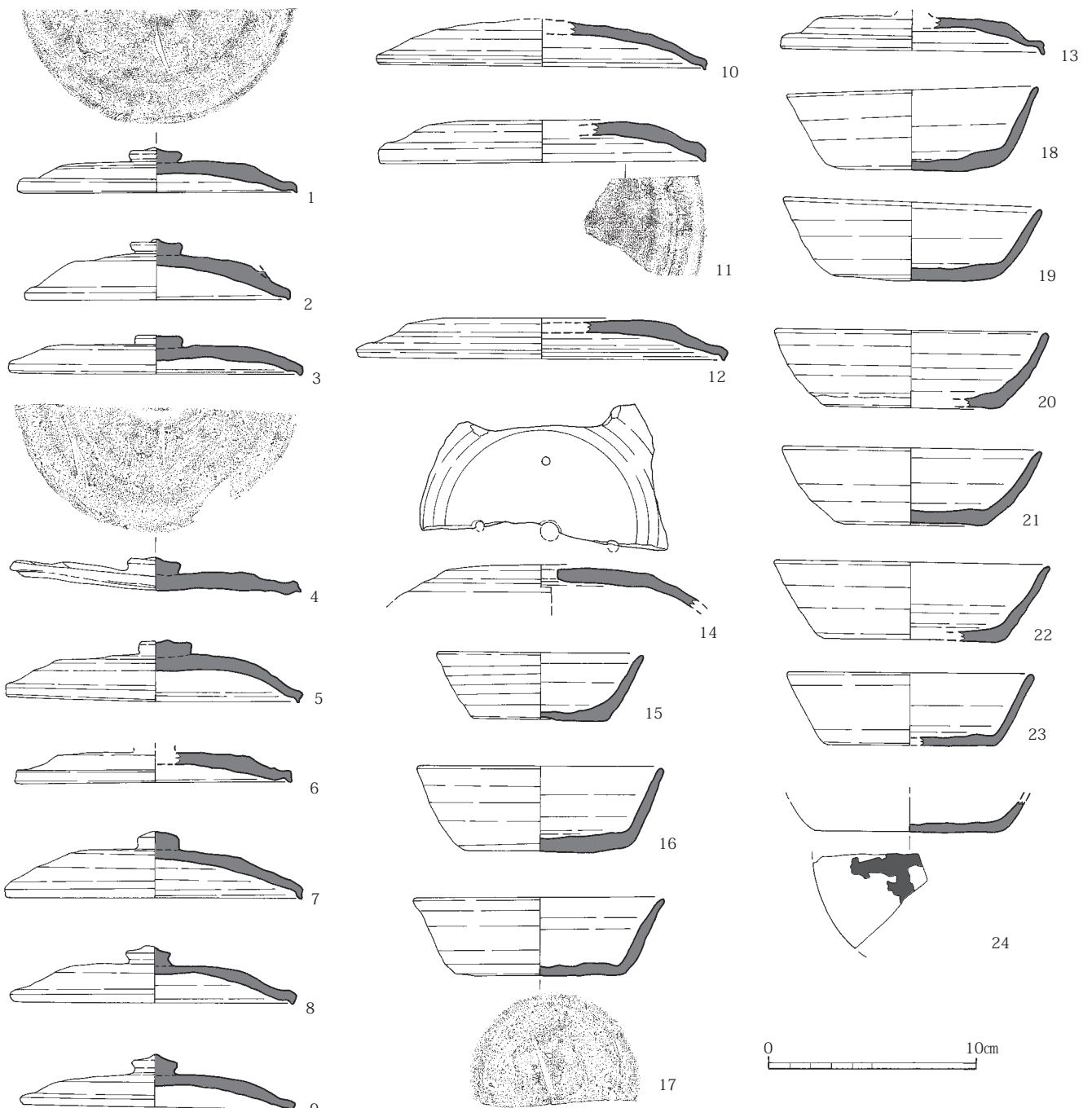
第26図 1・2区流路跡出土土師器実測図8(1/3)

にはつまみの下から天井部端まで入る短い1条線のヘラ記号がある。天井部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。内面は水引き痕をナデ消している。杯と重ねる焼成パターン。2は上面に重ね焼きした杯の口縁部が融着している。口径は8分の1しかないため、復元口径は不正確だが、天井部まで残っている。天井部は回転ヘラ切り後端部のみナデ仕上げ。杯と重ねる焼成パターンの最上部である。3は欠けや割れのない完形で、天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしているが、沈線が残る。内面は水引き痕をナデ消している。外面は部分的に灰被りが著しく、内面は重ね焼き痕がないことから、重ね焼きの最上部にやや傾いて正置したものである。4は、一部に欠けのあるほぼ完形で、天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしているが、沈線が残る。内面は水引き痕をナデ消している。口縁部は歪み返り部分が反り返っている。外面は均等に灰が被っており、内面は口縁部のみ灰黒色なので、椀に正置して被せている。返りの反り返りは蓋自身の重みのためへたったためであろう。5は一部に欠けのあるほぼ完形で、天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしている。内面は水引き痕をナデ消している。つまみは中央からややずれて貼り付けられている。つまみの周囲だけ特に焼成が不良なので同一器種の重ね焼きパターンか。6は6分の1しかない小片のため、復元口径は不正確。天井部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしている。内面は水引き痕をナデ消している。杯と重ねる焼成パターンだが、全体的に焼成不良。7は、天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしている。外面は杯の上に倒置して重ねる焼成パターンだが、内面は約半分が焼成不良である。8は9割残存し、天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしている。ヘラ工具痕の沈線が螺旋状に残る。内面は水引き痕をナデ消している。杯と重ねる焼成パターンである。9は約半分残存する。天井部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしているが、ヘラ工具痕が残る。内面は水引き痕をナデ消している。杯と重ねる焼成パターンである。色調と重ね焼き痕が8と酷似している。10・11は4分の1残存の小片で口縁部にやや歪があるので復元口径は不正確。天井部の丸みも歪みのためで、本来は平坦である。天井部は回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げしており、ヘラ工具痕が残る。内面は水引き痕をナデ消している。杯と重ねる焼成パターンで、内面に灰を被る。両者は色調や焼成パターンが近似しているが同一個体ではない。11は口縁部がわずかしかないが、天井部は半分残る。内面に1条沈線のヘラ記号あり。13は天井部を回転ヘラ切り後端部をナデ仕上げ。杯と重ねる焼成パターンで、重なる部分は焼成不良で小豆色を呈する。14は香炉の蓋で、穿孔が径の最も大きい中央孔を中心に十字形に3箇所残っており、本来4箇所あったもので、内面が煤けている。天井部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、内面は水引き痕をナデ消している。焼成不良だが、重ね焼き痕は見られない。

15～24は須恵器の杯で、15は半分残存する小型品で、外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、平坦である。内面は水引き痕をナデ消している。外面下半にはナデの凹凸が残る。重ね焼き痕は見られない。16は口縁部はわずかしかないが、底部は完存している。外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、螺旋状に工具端の沈線が残る。端部は丸みをもつ。内底は水引き痕のままだが、中央部が丸く窪む。同じ器種の重ね焼きパターンである。17は口縁部が3分の1、底部は半分残っており、外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、螺旋状に工具端の沈線とヘラ記号が残る。平坦である。内底は水引き痕のままだが、中央部が丸く窪む。同じ器種の重ね焼きパターンだが、火襷がつく。18は、口縁部は4分の1、底部は完存しており、外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、端部はわずかに丸みを残す。全体に焼成不良で、重ね焼き痕は見られない。19は8割残存しており、外底部は回転ヘラ切り後端部をナデしており、端部はわずかに丸みを残す。同じ器種の重ね焼きパターンだが、全体に焼成不良。20は口縁部が6分の1しかない小片のため

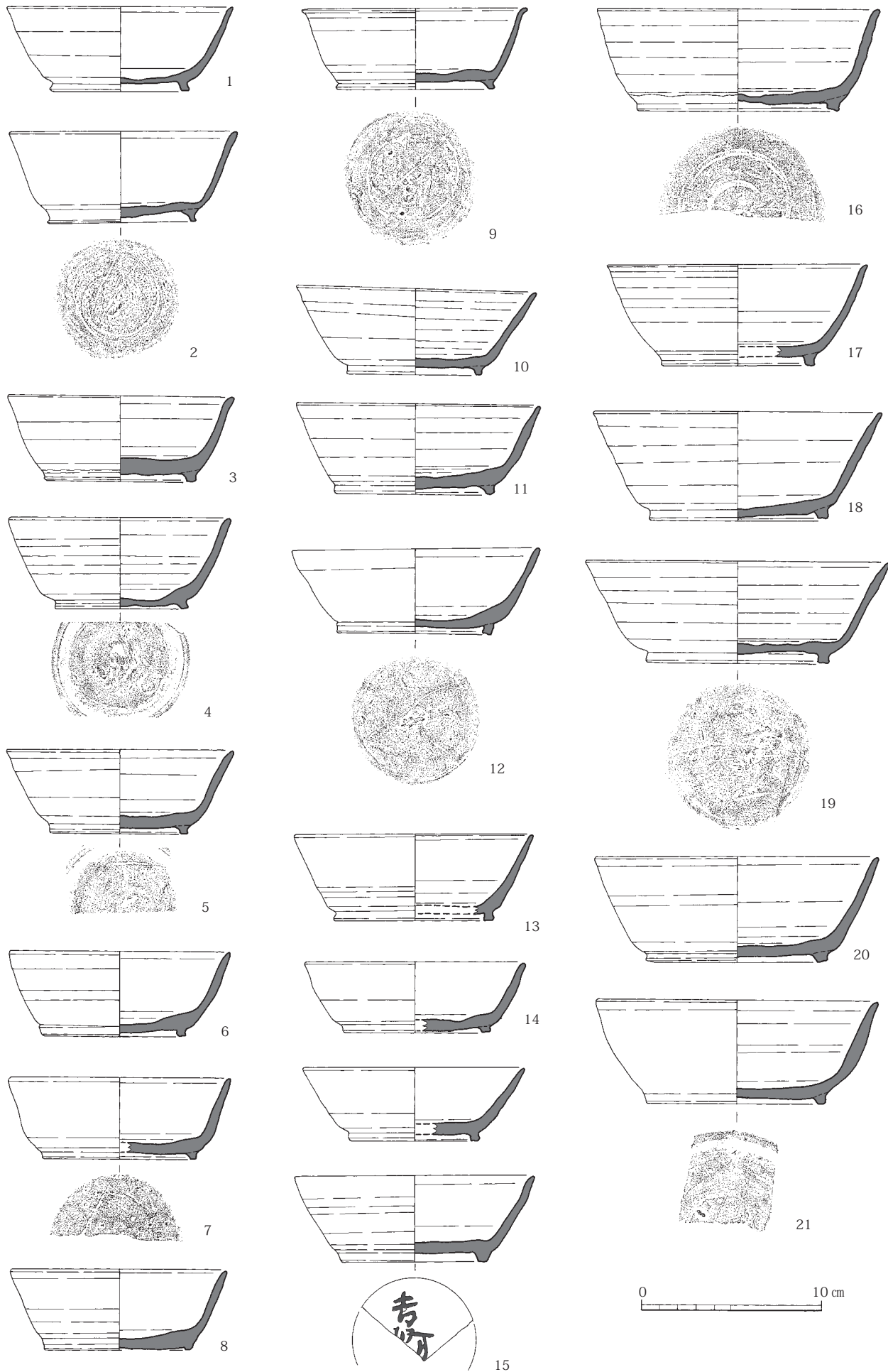
復元口径は不正確。外面はナデ工具による段がつく。外底部は回転ヘラ切り後端部をナデ。全体に焼成不良で、重ね焼き痕が見られない。21の底部は回転ヘラ切りで、外面暗灰白色、内面黄灰白色で、全体的に焼成不良。22は口縁部と底部径が3分の1残っており、外底部は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、端部はわずかに丸みを残す。同じ器種の重ね焼きパターンだが、全体に焼成不良。23は口縁部が4分の1、底部が半分残るもので、18と同様に火襷がつき、底部の処理も近いが、器壁の厚さが異なる。同じ器種の重ね焼きパターン。24は底径で8分の1残る小片なので復元底径は不正確。外底部は回転ヘラ切り後端部のみナデ。墨書土器で、「寺」の一部か、上下逆で「吉」の一部かもしれない。

第28図は須恵器高台付杯で、1は口縁部がわずかしかないが、底部は3分の1残存する。外底部は回転ヘラ切り。蓋と重ねる焼成パターンで、全体に焼成不良。2は口縁部が8分の1、底部は



第27図 1・2区流路跡出土須恵器実測図1(1/3)

完存している。外底は回転ヘラ切り後端部のみナデで、ナデ仕上げせずに沈線2条のヘラ記号を入れる。このパターンは第28図21と同じ。内底は水引き痕を縦方向のナデのみで仕上げている。同じ器種の重ね焼きパターン。3は口縁部の3分の1が残る。外底は回転ヘラ切り後中央以外をナデる。内面は水引き痕の中央をタテナデ。蓋と重ねる焼成パターンで、全体に火を強く受ける。4は6割残存する。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げして同じタイプのヘラ記号が入る。拓本では割れ目がヘラ記号のように見え「×」字に見えるが、拓本に出にくい浅く細い1条線刻で書かれている。底部は半月状に焼成不良があるので、重ね焼きの最下段であろう。5の外底は回転ヘラ切り後中央部以外を静止ヘラケズリで仕上げしており、高台に近い部分に沈線が入る。これは静止ヘラケズリの上から入っており、ケズリ方向とは異なる方向なので、工具の傷ではなく沈線1条のヘラ記号と考えられる。同じ器種の重ね焼きパターン。6は7割残存している。側面に丸みがあり、外底は回転ヘラ切り後端部のみナデで、高台は中心からずれて貼り付けられているため、部分により底部端との距離に差がある。重ね焼き痕を想定できる色調差がない。7は外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、中央部を帯状にナデた後、そこに沈線のヘラ記号を入れる。ヘラ記号の端部が欠損しているので、1条なのか、2条なのか、「×」なのか判別できない。8は口縁部がわずかしかないが、底部は完存している。外底は回転ヘラ切り後中央以外をナデ仕上げしており、重ね焼きパターンがわからないほど全面焼成不良。9は口縁部がわずかしかないが、底部は完存している。外底は回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げしており、浅く細い沈線で「×」が入る。蓋と重ねる焼成パターンで、内面は焼成不良。10の口縁は対面部分が残っており、底部は完存している。内面はナデの凹凸が多い。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、蓋を上下に重ねる焼成パターン。11は口縁がわずかしか残っていないが、底部は完存している。外底は回転ヘラ切り後中央以外をナデ仕上げしている。弧状の沈線があるが、工具端によるもので、ヘラ記号ではない。重ね焼きパターンがわからないほど全面焼成不良。蓋と重ねる焼成パターンで、外面の一部が火を強く受けている。12は9割残るほぼ完形で、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、浅く細い×字のヘラ記号1条沈線が入る。蓋と重ねる焼成パターンで、外面の一部が火を強く受けている。13は口縁部・底部ともに6分の1しかない小片のため復元口径は不正確。胴下位に強いナデによる窪みがあり、畳付には凹線が入る。口唇部は内側に肥厚して丸味をもつ珍しい器形。蓋と重ねる焼成パターンである。14は半分残存するもので、外底は回転ヘラ切り後中央に板状圧痕がある。蓋と重ねる焼成パターンである。15は口縁がわずかしか残っていないが、底部は8割残っている。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、胴部下半には強いナデによる窪みができている。蓋を上下に重ねる焼成パターンである。16は外底に螺旋状のヘラケズリ痕が残る。外底に十字のヘラ記号あり。17は口縁がわずかしか残っていないが、底部は4分の1が残っている。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしている。蓋と重ねる焼成パターンである。18は8割残っている。外底は回転ヘラ切り後荒くナデ仕上げしており、2条単位の工具端による螺旋状沈線が残っている。蓋を上下に重ねる焼成パターンで、外面の一部が火を強く受けている。内底中央はタテナデされている。19は底部が完存しているが、口縁部がわずかしかなく、歪みのため体部が外に傾いているようなので、復元口径は広めになっている。本来は18と同じ口径であろう。外底は回転ヘラ切り後中央以外をナデ仕上げしており、中央部は粗くナデて「×」字のヘラ記号を施す。蓋と重ねる焼成パターンである。20は半分残っており、外底は回転ヘラ切り後荒くナデ仕上げしており、全体に焼成不良のため重ね焼き痕なしで、軟質。内底は中央部を水引き痕をタテナデしている。21は口縁部が4分の1しかないが、底部は半分残る。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、幅が狭いが深い2条沈線のヘラ記号が入る。蓋と



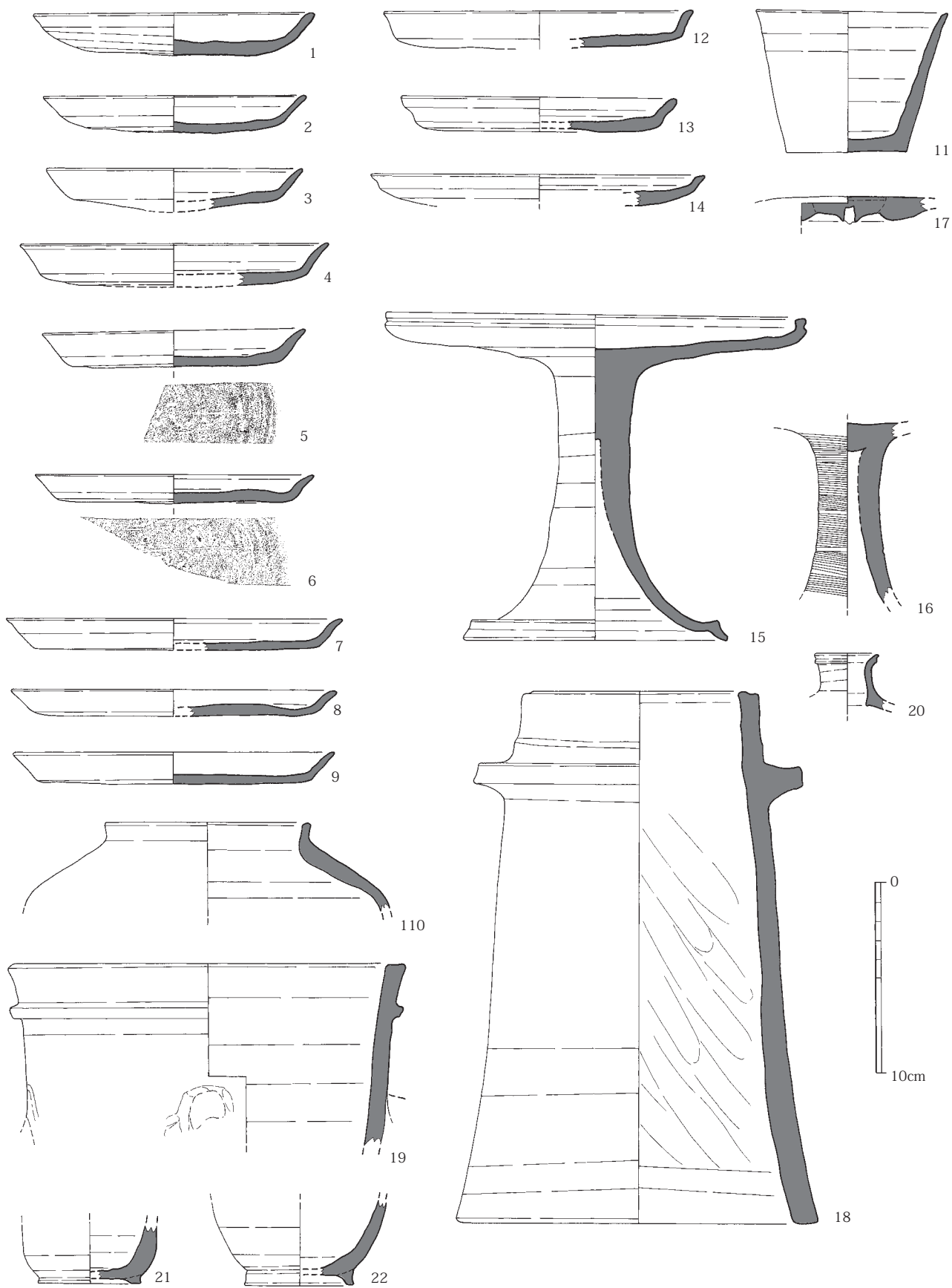
第28图 1・2区流路跡出土須恵器実測図2(1/3)

重ねる焼成パターンである。22は口縁がわずかしかなかったが、底部は4分の1が残っている。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、そこに墨書で「吉徭」と書かれている。

第29図1～9は皿で、1は口縁が欠けただけのほぼ完形で、外底は回転ヘラ切り後荒くナデ仕上げしている。同一器種の重ね焼きのため外面のみ火襷が入る。2は8割残っており、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、工具痕が2条の沈線が残る。外底は焼成不良、内面は扇形に火を強く受け、灰被りもあり、焼成方法が特異である。3は4分の1残存しており、底部端にナデ窪みがある。外底は中央部のみ焼成不良で、内面は同一器種の重ね焼き。4は4分の1残存しており、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、細く浅いヘラ記号が入る。底部端はナデで丸みをもつ。同一器種の重ね焼きパターンだが、内面は火を強く受けており、上の個体との間に隙間が大きかったと考えられる。6は口縁部と底部端は対面が残っている。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、細く浅いヘラ記号が入る。それに平行して2条の短い沈線が入るが、これもヘラ記号かは不明。底部端はナデで丸みをもつ。同一器種の重ね焼きパターンで、片側が良く焼けている。7は4分の1残存しており、やや歪みをもつ。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、内底の水引き痕もナデている。外底は不整形の焼成不良範囲がある。内面は同一器種の重ね焼きパターン。8は4分の1残存しており、やや歪みをもつ。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、内底の水引き痕もナデている。外底中央には同一器種がずれて重なった焼成パターンで、灰被りも見られ、倒置している。9は口縁部はわずかだが、底部は3分の1が残っており、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、底部の端は突出している。外底の工具痕は沈線状に残る。同一器種の重ね焼きパターンがずれたものと思われる。

10は短頸壺で、内外に焼き膨れがある。外面は灰被りだが、内面は焼成不良なので、蓋を被せて焼成している。11は鉢で、9割残存する。外底は回転ヘラ切りで、内底とともにナデ仕上げしている。外面は火を強く受けており、灰被りも見られるが、内面全面と外底面は外面ほど火を受けていないので、正置して上に何か被せている。

12～16は高杯で、12はわずかしかなかった小片のため復元口径は不正確。外面は回転ヘラ切りで、内底の水引き痕はナデ消している。外面は火を強く受けており、灰被りも見られ、内面は全面外面ほど火を受けていないので倒置して焼成している。内面は同一器種の重ね焼きパターン。13は杯部が半分残っている。外面は回転ヘラ切りで、器壁が厚い。焼成不良のため焼成方法が復元できない。14は口縁部の3分の1が残っており、外面は火を強く受け、内面は灰被りが著しい。したがって、正置して単独で焼成したものである。外面は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。内面は灰被りのため不明。15は、口縁部はわずかだが、脚部が3分の1あり、口縁部から裾まで残っている。外面は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。内面は丁寧なナデ仕上げ。杯部は良好な焼成だが、脚部は焼成不良で小豆色を呈する。脚部が杯部に隠れて十分な火を受けなかったためだろうか。16は脚部の一部で、外面カキ目状のナデで、沈線は意図的に2条入る。杯内面と脚部の一部に灰を被っている。17は平瓶の天井部だろうか。穿孔は内面から行っており、貫通していない。外面は灰を被るが、内面は焼成がそれほど強くない。18は煙突状土製品である。口唇部に凹線がある。口縁下はヘラケズリ後未調整で、鏝より下の丁寧なナデに比べると粗雑である。裾部端面には凹線は入っていない。内面はオサエ後ナデで、下端はケズリ。重厚である。19は甌で8分の1が残存する。外面はケズリ、内面はナデ。把手の接合痕が残っている。口唇部と口縁下の突帯上面に灰被りがあるので、正置している。20は頸部と体部の接合部が斜めなので、小型の平瓶の可能性もあるが、色調や焼成から22の底部と同一個体になる可能性が高い。



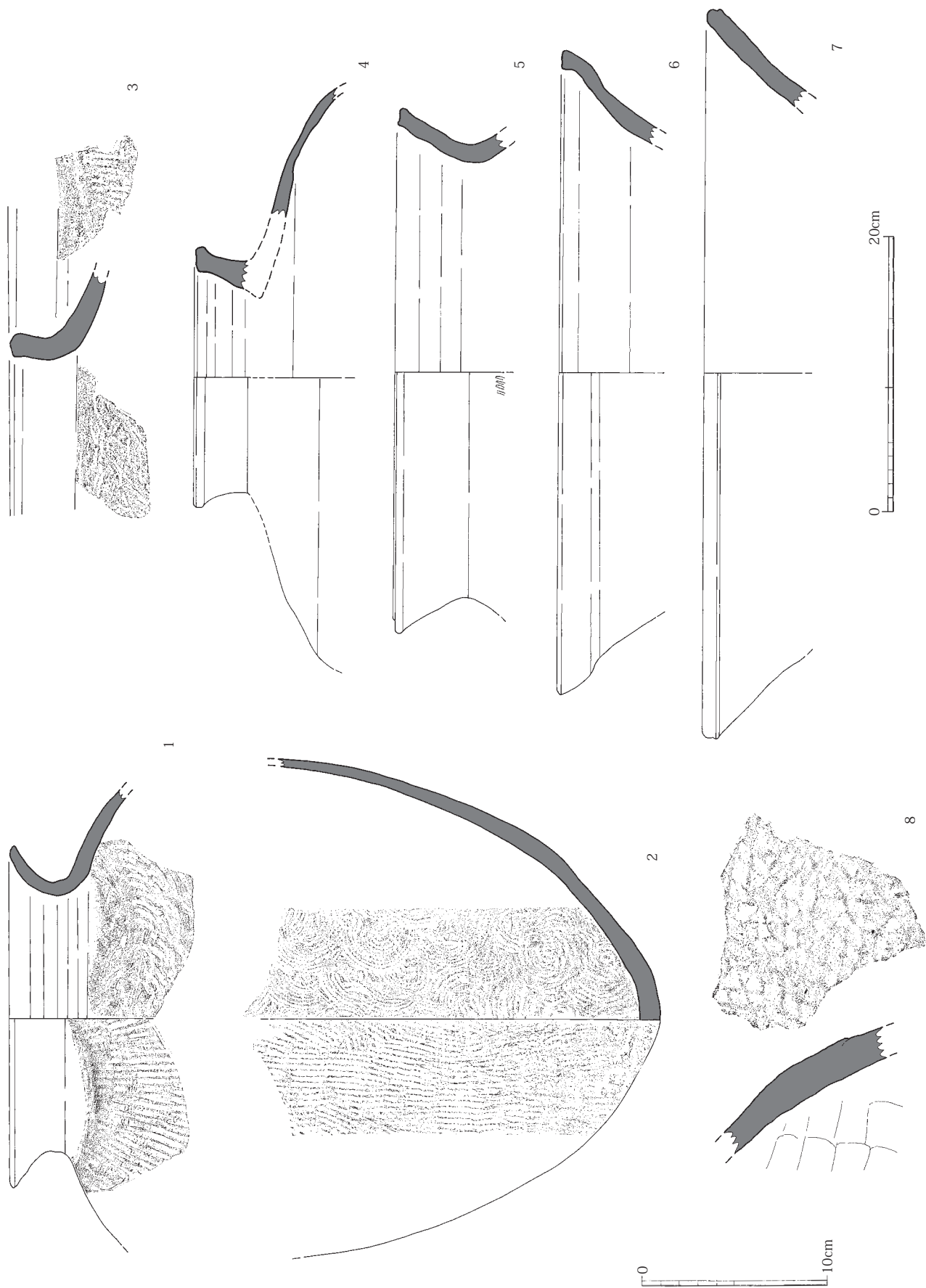
第 29 图 1・2 区流路跡出土須恵器实测图 3 (1/3)

底部は丁寧なナデ仕上げ。21は外底部に灰被りがないので、正置して焼成している。22も小壺の底部で、底部は丁寧なナデ仕上げ。正置して焼成するパターンである。

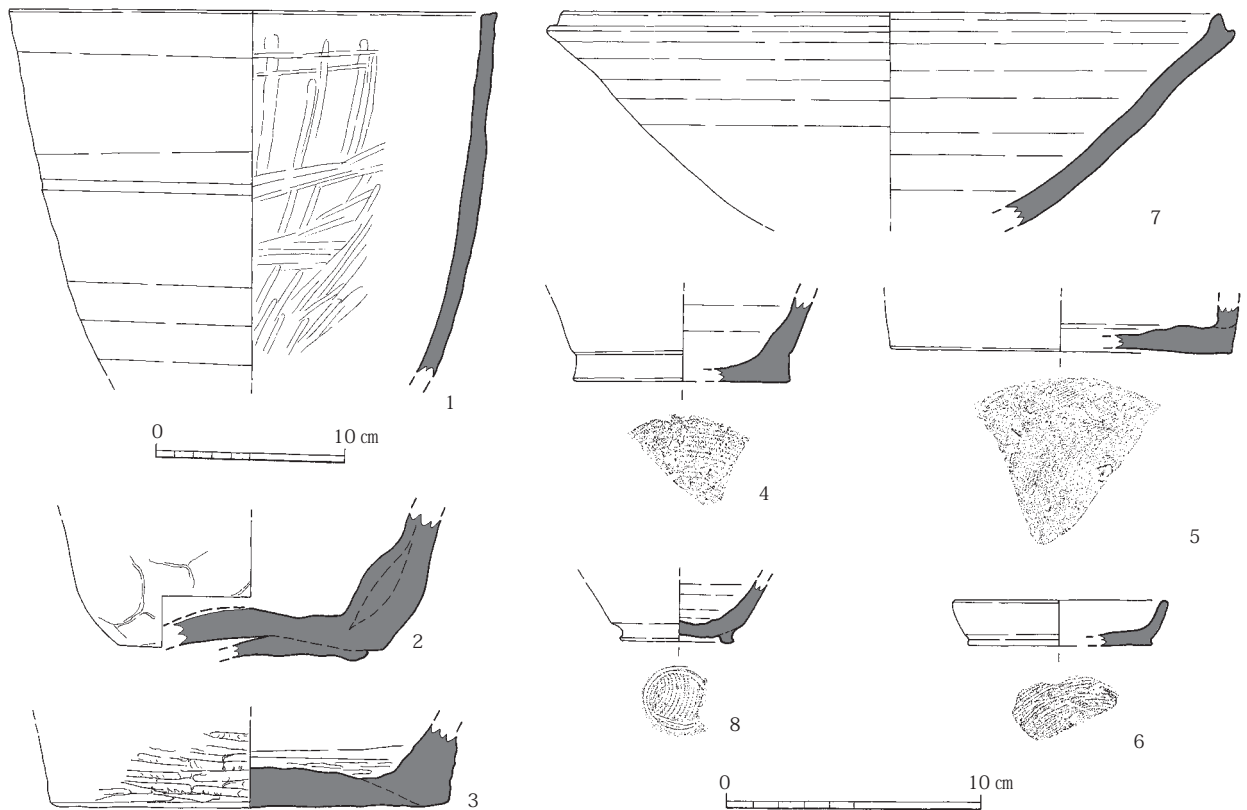
第30図は須恵器の甕で、1は甕の口縁部で、頸部に3段のナデの平坦面がある。焼成は良好で、内外に色調差なし。灰被りもなし。2は甕の胴下半で、底部まで残る。底部が尖っているのは歪みのため、内底には平坦面がある。しかし、砂目と融着する土器片の位置は平坦な内底をめぐっておらず、焼成段階で傾いていた。胴中位には自然釉の流れがある。内面のタタキ当て具はほぼ水平に移動している。3は反転復元できない小片で、口縁部内面に稜をもつ窪みがある。外面は自然釉がかかる。4は小片で復元口径は不正確。頸部に焼き膨れがあり、口唇部には融着した別個体の破片があり。口縁部に別個体を置いて焼成したことがわかる。肩部は図上接合。5は小片で復元口径は不正確。頸部に焼き膨れがあり、肩部にタタキの痕跡がある。口唇部と内面以外に灰被りが見られるので、上に別個体を被せて焼成したことがわかる。6・7は大甕で、6はナデているが、器面に白色粒子が多く見られる。7は小片で復元口径は不正確。外面にナデの段がある。8は器壁が厚いので大甕の破片と思われるが、小片のため傾きは不明。格子目タタキをもち、内面は当て具がナデ消されている。焼成不良。

第31図1は甌の口縁部で7割残っているが、把手部分は欠損している。甌外面の凹線は意図的なもので、内面にミガキがある。内面は胴上半が暗灰黒褐色に変色しており、下半は変色がない。2は壺の底部に蓋が融着したものである。外面はヒビ割れ、焼き膨れもある。蓋の下に隠れているが、ヘラ記号らしい沈線がわずかに見られる。外底は中央部が焼成不良になっており、蓋の天井部と接して焼成されたことを示している。3は外面胴部下位までタタキが入る壺で、底径で4分の1ほど残存している。外底に親指大の窪みがあり、そこにケズリが入る。焼成に関連する痕跡を消したのだろうか。内底は未調整でナデられていない。瓶山窯系か。4は小壺の底部で、4分の1ほど残存している。外底糸切りである。内底中央の灰被りの範囲が広いので、口の広いものだろう。焼成は良好で、外面に灰被りはない。篠窯系か。5は底径で6分の1ほど残存している壺であろう。内底中央の灰被りの範囲が広いので、口の広いものだろう。焼成は良好で、外面に灰被りはない。外底糸切り痕の上に胎土目を置いたような痕跡がある。6は小皿で、底径で8分の1ほど残存している。外底糸切り痕の上に板上圧痕らしいものがある。内底は水引き痕跡を粗くナデ消している。東播系か。7は4分の1ほど残る東播系のこね鉢で、外面の口縁部のみ灰黒色で、同器種の重ね焼きパターンである。8は小壺の底部で、底径で6割ほど残存している。外底は糸切り後、高台を接合して内外の接合部を抉るようにナデている。内底は小型品のためケズリで仕上げている。外面胴部の一部に灰被りがあるので、横に倒して焼成している。篠窯系か

第32図は陶磁器類である。1～18は緑釉陶器で、16～18は須恵質でほかは土師質である。1は6割残っている椀で、光沢をもった黄灰色を呈するが、部分的に緑色がある。内底の発色が悪いのは重ね焼きしたためである。2は口縁下に稜をもつ椀で、光沢のある淡緑色に発色する。3・4も1と同様に発色する椀の口縁部と底部片であり、3は内外底部の発色が悪く、重ね焼きのためである。5は緑白色に発色する皿で、口径で4分の1が残っている。胎は灰白色の間に黒灰色を挟む。灰白色の胎土なので焼成不良か。6・7は外反する皿の口縁部で、明緑色の釉が斑に剥離している。6は濃い緑色が上掛けされているようにも見えるが小片のため不明瞭だが、7は9と同じ発色で、口縁部内面に濃い緑釉が掛かっており二彩といえる。8は底部の小片で、6・7と同じ明緑色に発色する。9は底径で3分の1が残存する底部で、黄緑白色に発色しており、剥離がない。7と同一個体の可能性がある。10は皿の底部で半分残存している。黄緑から淡緑色で光沢をもって発色し



第30図 1・2区流路跡出土須恵器実測図4(3・4・8は1/3、他は1/4)



第31図 1・2区流路跡出土須恵器実測図5(1は1/4、他は1/3)

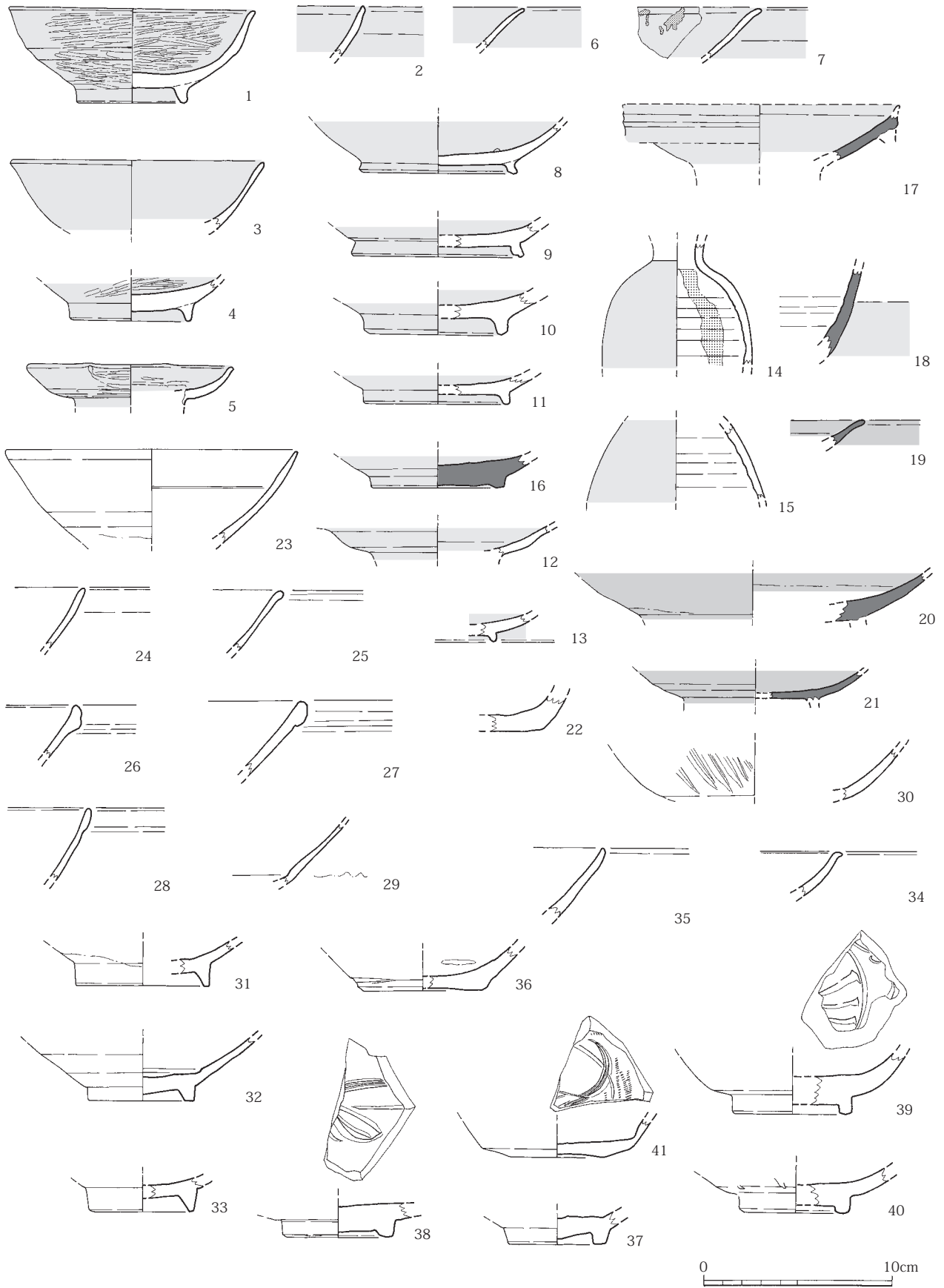
ており、外面は明緑色の釉が斑に剥離しており、内面は重ね焼きのため底部の発色が悪い。11は高台径で4分の1が残存する底部で、1・3・4と同じく光沢をもった黄灰色を呈する。12は口縁下まで残る小皿の胴部片で、10の発色に近いが、光沢が部分的にしか残っていない。13は底部の小片で、10の発色に近いが、外面は緑の発色が弱い。14は小壺で、頸部は半分が残っている。内面には釉垂れがある。6～8と同じ明緑色に発色しており、斑に剥離している。15は小壺の胴部小片で、厚く釉が掛かっており、黄緑の釉の上に濃緑が掛かっているので二彩といってよい。多くのものは黄灰白色系の胎土だが、15は堅緻で他のものとは異なる。

16は皿の底部で、緑の発色のない部分は灰釉のように見える。内底は重ね焼きのため釉が定着しておらず、剥離している。17は壺の口縁部片で、内外にわずかに緑釉が残る。18は外面ケズリなので、壺の胴下半であろう。釉は外面に残っているが、透明釉状で緑の発色はわずかなので灰釉の可能性もある。灰白色の胎で、17とは胎が異なる。

19～21は灰釉陶器皿で、光沢をもって斑に濃淡のある灰色に発色する。21・22は高台内が露胎で、内底に釉剥ぎがある。21は釉溜まり部分が緑色に発色する。

22は焼き締め陶器で、備前焼であろう。壺の底部片で、外底は切り離し後ヘラケズリ。23～34は白磁碗で、24は口縁部で8分の1ほどしかない小片で、内面に沈線がある。25は器壁が薄く、暗く発色する。接合しない2片があるが、反転復元できない小片である。26～28は玉縁口縁で、乳白色に発色する。30は片切彫りが入る。31・32は内面に深い蛇ノ目釉剥ぎがある。33は緑灰白色に発色する。34は小皿の口縁部片。

35～42は青磁で、35・36は越州窯青磁碗で、35は碗の口縁部片で、発色が悪く光沢がない。36は内面は発色不良で灰白色を呈する。胎土目跡が内底にあり、底部には目跡痕が残っている。37は同安窯系の青磁碗で、暗灰緑白色に発色する。38～41は龍泉窯系碗の底部片で、38は片切彫



第 32 图 1·2 区流路跡出土陶磁器实测图 (1/3)

りの劃花文が内底に入る。暗緑灰色に発色している。39は片切彫りの劃花文が内面に入り、底部は片切彫りの花文。暗黄緑灰色を呈する。40は片切彫りが入るが、鎬連弁はない。暗緑灰色に発色している。41は同安窯系の小皿で、暗緑灰色に発色する。外底は釉剥ぎで、内底には櫛書き文の花文が入る。

第60図2・4～9は球形土錘、13～16は有溝球形土錘で、球形土錘とは溝の有無の差異しかない。溝はわずかししか入らないものもある。18は球形土錘の大型品で、厳密に言えばキウイ形だが、橐形より球形に近い。20・22・23～25はラグビーボール形、26・27は太い管形。32・33・35・37・38・40は端部をカットした面があるので太い管形というべきだろう。44・46・50・52～54は棒状土錘。55～57・59・60はフィゴの羽口で、57は摸骨痕跡がなく、オサエ幅が広い。60は外面に摸骨痕をもつもので、菩提廃寺で見られるものに近い。摸骨により柱形に成型したものだろう。

第61図1・3・5～7・10・11・13・14・16・18～20・22・24～26・28～31、第62図1・2・4～12・14・15～17はイダコ壺で、第62図4を除いていずれも口縁部が肥厚し、肩部が膨らみ、底部は尖り気味になる。色調は焼成と2次の影響の有無により異なるが、基本的には褐色パミスを含む黄橙色の胎土である。内外面は口縁部ナデで、内面はナデのみだが、底部は強くオサエながら強くヨコナデされている。23は落ち込み状遺構出土片と接合した。4は器壁が厚く、指オサエ痕が目立つ手捏ね成型で、搬入品である。第62図1・14・17は斜面包含層出土片と接合した。

第63図2・5・9・11・14・22、第64図2～4・9・15、第65図1・4～6・10、第66図4、第67図6・7・10・11・12・13は焼塩壺で、このうち第64図2・4、第65図1・4・5・10は斜面包含層出土片に同一個体の可能性があるものがある。

第63図2の口唇部は幅の広いオサエ。接合しない同一個体があるが、それは口唇部がほぼ平坦なので、部分的な差異があるようだ。5の口唇部はオサエで、胎土は4に近いが、内面の布目がないのは小片であることから偶然布が掛からなかった部位の可能性もある。しかし、内器面のヒビの入り方は第65図4に近く、本来布目はなかつただろう。9の口唇部は残りが悪く調整不明。内面に布目がないのは器面摩滅による可能性が高い。11の口唇部は板状工具によるオサエ。内面に布目がないのは器面摩滅による可能性が高い。14の口唇部は器面が荒れており、調整不明。口唇部と内面口縁部に塩の付着がある。また、内面は緑灰色に変色しており、カビの付着などではないだろう。22の口唇部は指オサエで、内面には摸骨の凹凸で布目が褶曲しており、口縁部にも歪みがある。また、内面に布目の端部につく紐痕が残っており、下部には布目の寄りによる凹凸がある。

第64図2は精良な胎土で、器壁が薄く、口唇部は板状工具によるオサエ。内面の布目跡は目が細かく、摸骨は平面が平滑で窪みが直線的で、口縁部は隙間が大きかったため粘土が内面に突出している。外面には煤が付着し、同一個体35点がある。3は反転復元できない小片で、同一個体の胴部片は器面が剥落しており、器壁が薄くなり、内面の布目も残っていない。内面口縁下に突帯がある。胎土は精良で、口縁部片の内面には塩が付着している。布目は目が細かい。4の外面は全面塩が付着している。内面に布目がないのは摩滅のためだろう。同一個体16点がある。9の口縁部片が反転できない小片である。胴部片は径と傾きから底部付近である。口唇部は幅の広い指オサエ。15は口縁部の粘土の寄りが内面に付着するもので、胴部片の1つには目の細かい布目が見られるので、本来全面布目であろう。摸骨の隆起による凹線が入る。同一個体2点がある。第65図1は、第64図1・第65図9と同様に、器面が残っているにもかかわらず混入物が露出している堅緻な胎土だが、口唇部が内面側に折り曲げられており、口唇部の調整も板状工具によるオサエで異なる。内面には第63図22と同じような紐痕が3条入り、布の重ね合わせ目の段につながっ

ている。同一個体6点がある。4は口縁部が大きく歪んでいる。口唇部が内面側に折り曲げられている部分と尖っている部分があり、口唇部の調整は指オサエである。内面には第64図2のように平滑な曲面をもつ摸骨痕があり、内面には器面が残っているが布目はない。炭化物が付着している。5の口縁部片は口唇部が尖っており、口唇部の調整は指オサエである。胴部片の内面には摸骨痕の凹凸がある。第64図1・第64図14・第65図1のように器面が残っているにもかかわらず混入物が露出している胎土が特徴的で、堅緻。第63図7と胎土が近似する。同一個体21点ある。6は布目と胎土が第65図3に似ており、色調は焼塩製作のための焼成をされたものとされていいものの差である。同一個体9点がある。10は、変色が少ないものの器面が荒れており、内面の布目が剥落している。口縁部の内面には粘土が折り込まれた部分があり、第65図3に近い。同一個体が24点ある。

第66図4は第65図10に酷似するもので、第65図2と同様に口縁部の板状オサエの間にあたる部分に粘土の隆起による瘤を持つ。同一個体49点がある。

第67図6は底部で、2次焼成した痕跡がない。未使用品か。7は内面に塩が付着し、外面は2次焼成により赤変したものである。10～12は変色と器面摩滅が著しい。13は布目の細かいもので、外面は剥落している。

第68図4・7・11・12・14は鉢形の焼塩壺で、口縁部が肥厚し、胴中位に屈曲を持つものである。屈曲部から底部に向かっては器壁が薄い。内面はナデで、いずれも布目はない。器面が残っているものはわずかである。4は口縁部に塩が付着する。

第69図1～3は打製石器で、1は黒曜石製の未成品である。下面と1側面は両面から刃潰し加工されているが、残りの1辺には刃が作られていない。そのままスクレーパーとして使用すれこともできるが、石鏃の製作途中と考えた。4.5 g。2はチャートの2次加工剥片であり、尖頭器を加工する目的だったものではないか。10.8 g。3は新しく剥離した面を除くと風化が著しい黒曜石で、旧石器の可能性もある。素面を下にすると側面の2面は大きな剥離面で先端の加工はしていないので、2次加工剥片であろう。6.5 g。第69図4は、緑泥片岩製砥石で、3面使用しており、欠損後の再利用はされていない。緻密で硬質な石材なので、再利用されなかったか。116 g。第69図5は円礫を利用した磨石で、面がある部分が使用面と考えられる。617 g。第69図6は石鍋転用のミニチュア容器で、長方形の把手部分を利用している。転用品の下半部が灰白色で上半分が灰黒色なのは石鍋の内外面の色調のためである。22 g。第69図7・12は石鍋片で、7は流路跡出土の長方形の把手のつく口縁部で、転用はない。36 g。12は口縁部と平行に欠損部を整形して再利用している。石鍋としての復元図(12-2)と再利用品としての図(12-1)の両方を掲載している。134 g。

第70図2は扁平な鉄片で、鎌と思われるが刃が残っていない。

第71図は流路跡の床面から並んで出土した建築部材である。1・2とも67cm前後の角材の一つの木口面の角を丸く加工したもので、木口面自体はほぼ水平である。対面の木口面もほぼ平坦で、加工はない。角材の側面には略長方形の窪みと繰り込みがある。この繰り込みはやや内側に挟れており、別の材との強い組み合わせを意図している。繰り込みの長さは両者とも21cmで、その太さの角材と組み合わせる。貫通しない窪みと木口の丸みの特徴から、肘木と考えた。材質は両者ともスギである。第72図1は井戸の木枠であり、流路跡の3基の井戸の側から出土した。3基の井戸自体が攪乱を受けた痕跡がなく、井戸が掘られる前の床面から出土しているので、別の井戸のものだろう。径の大きい木を年輪に沿って剥ぎ、両面を手斧で薄く加工している。側面を平行にする意図は見られるが、丁寧な整形ではない。いくつかの部材と組み合わせで円形したものだろう。堤状

遺構下からの出土遺物が8世紀末から9世紀初頭を下限としているので、それより下がることはないだろう。材質はクスノキ科である。第72図2は中空の方柱状のものの半欠品で、先端に段があるので挿入して使用するものだろう。

⑦その他の遺構と遺物

ピット出土の遺物（図版15・21、第16・60図）

第16図9はピット5出土の土師器杯で、器壁が厚いのが特徴である。器面が摩滅しており調整不明。外面は黄橙色だが、内面は2次的に火を受けて変色している。9世紀前半か。第16図10はピット7出土の土師器椀で内外変色なし。10世紀後半。第60図58はピット10出土のフイゴの羽口で、先端に鉄滓が融着している。第16図11はピット12出土の土師器鉢で、4分の1が残存している。9世紀後半の所産。第60図19・37はピット13出土で、19は橐形の土錘で、37は太い管形土錘である。第16図12はピット16出土の土師器小皿で、7割残っている。口縁部は器壁の厚い部分と実測しているが、薄いところもある。黄橙色を基本とするが、部分的に灰黒色に変色しているので灯明皿として使われた可能性を残す。10世紀前半。第16図13はピット20出土の甕の口縁部で、10分の1程度しか残っていない。外面は平行タタキ、内面には青海波文の一部が見えている。9世紀代か。

第60図39はピット31出土の太い管形土錘である。第16図14はピット37出土の甕の底部の小片で、外面の煤が失われている範囲がほぼ円形を成すことと、その内面側が黒灰色に変色しているので、ここを底部として実測している。外面は丁寧なハケ、内面はケズリ。

落ち込み状遺構（図版4、第4図）

1区中央部の緩斜面の裾に不整形な窪みがあった。西側には小ピットが1直線に並ぶように検出されたが、人為的に掘られたものではなく、地形の落ち込みに包含層が堆積したものであろう。遺物を含むので、整地した可能性はある。

出土遺物から、11世紀中葉には埋没あるいは整地されたものであろう。

出土遺物（図版21・23、第16・60・70図）

第16図15は黒色土器の椀で8分の1ほどしか残っておらず、復元口径17.7cm。外面も胴中位まで黒色化する。11世紀中葉。16は落ち込み出土の土師器甕でタタキが入る。器壁が厚く、黄灰色を呈する。頸部は直線的で、胴部が張る器形である。9世紀後半か。

第60図1・11は球形土錘、21は橐形土錘、36は太い管形土錘、41は大型の管形土錘、43・47は棒状土錘である。

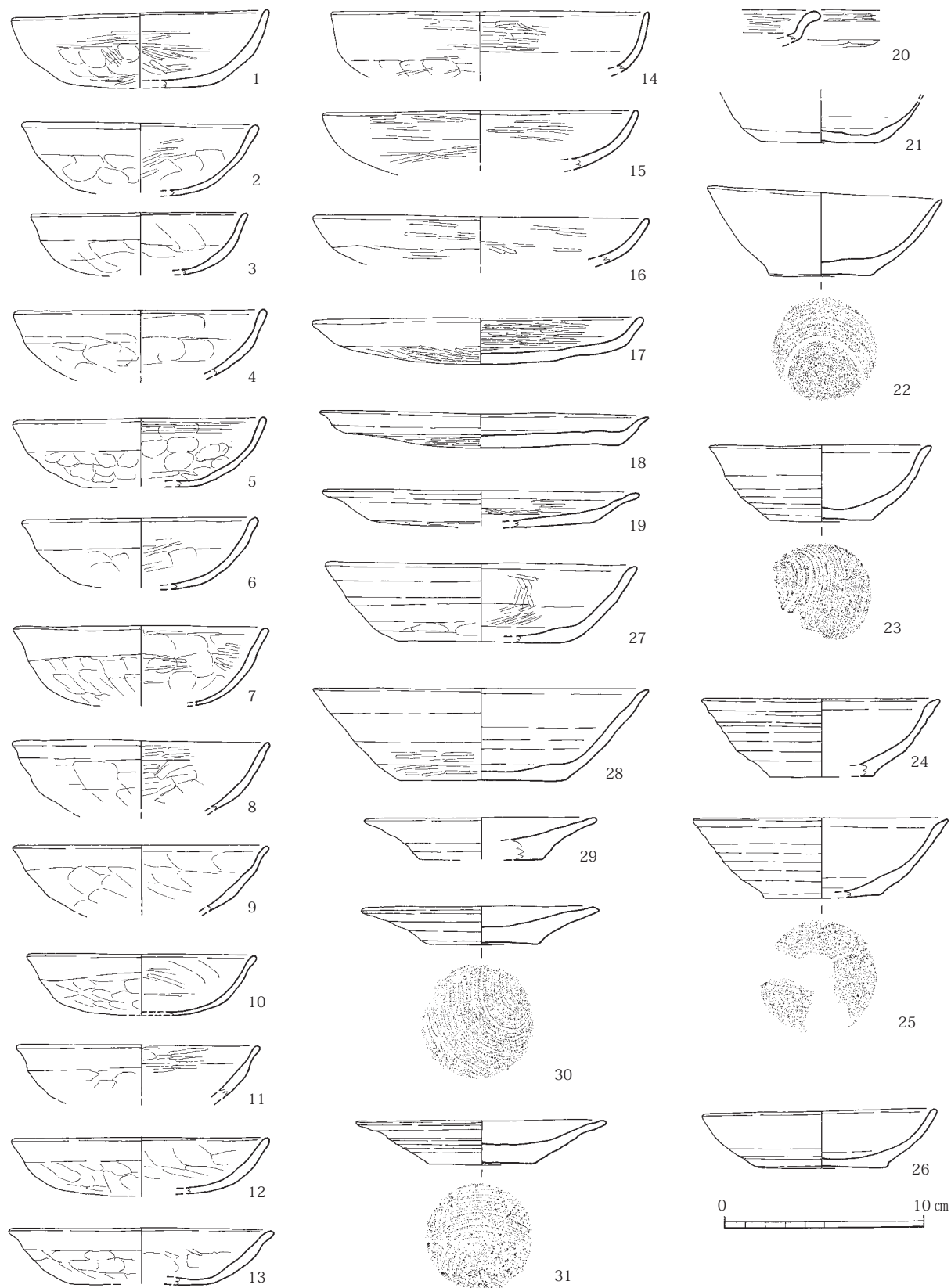
第70図4は手斧で、刃の両端が摩滅している。

斜面包含層出土遺物（図版17・21～24、第33～45・60～69図）

8世紀前葉を上限とし、10世紀末を下限とする。

第33図は土師器の杯で、1は8割残っており、口縁部をナデているが、その上にミガキが入るので、稜ができていない。胴中位は指オサエで、外底は平底。黄橙色を呈する。2は器面が摩滅し、口縁に歪みがあるが、口縁部が肥厚してやや外反している。橙褐色を呈する。3～13は口縁部のナデのため口縁下に稜があり、胴部は小さな板状のオサエ痕、内面の胴中位にオサエ工具によく屈曲が見られる。色調はいずれも黄橙灰白色だが、10・11・12は黄灰白色のみになっている。

14～19は皿で、14～17は内外ミガキで、黄橙褐色を呈する。17は外底中央が焼成不良なので正置して焼成したことがわかる例で、外底は指オサエのみ、外面胴部と内面にはわずかにミガキが残っている。18・19は外底に回転ヘラケズリが入り、端部はミガキが入る。18は橙褐色だが、19



第33図 1・2区斜面包含層出土土師器実測図1(1/3)

は黄橙色と黄灰白色が斑に入る。

20は口縁部が肥厚し大きく外反するもので、小片である。21は外面にカキ目状の細かい段がある。回転ヘラ切り後、粗くナデている。その上に入っている沈線についてはヘラ記号の可能性も残すが、端に位置するのでここでは傷とみなした。灰白色を呈する。

22から25は小杯で、22は外面が平滑だが、23～25の外面は回転ヘラケズリの凹凸を等間隔に意図的に残しており、内面は平滑にナデている。いずれも外底は糸切りで、白雲母とカクセン石を多く混入する胎土で黄灰白色を呈するが、22は金雲母が多量に入る。

26は完形の皿で口縁部がひび割れている。外底は回転ヘラ切りを荒くナデ消している。胴下位の沈線は底部切り離し時の工具痕で、意図したものではない。内面は黄橙白色だが、外面はにぶい灰褐色に変色している。金雲母を含む。

27・28は大宰府系の杯で、両者とも外底回転ヘラケズリが入り、胴下位はケズリによる平坦面ができる。器面が摩滅しているが、内面もミガキだろう。

29～31は底部が厚い皿で、外底は糸切りで暗灰茶褐色を呈するところは共通するが、31は回転ヘラケズリの凹凸を等間隔に意図的に残しており、口縁部が薄く延びている。内面は平滑にナデている。外底は糸切りで、白雲母とカクセン石を多く混入する胎土で黄灰白色を呈する。

第34図は1～3は碗の口縁部で、いずれも黄橙灰白色を呈する。内外ミガキが入る。1は底部にヘラケズリがあり、高台は付かず、端部はナデて丸みを持たせている。4～13は碗の底部で、4は回転ヘラ切り後、高台との接合部のみナデ。内底にはオサエ痕があり、中央部は底から押し上げられている。5は回転ヘラ切り後、粗くナデており、内底にはオサエ痕がある。6は回転ヘラ切り後、丁寧にナデており、中央部のみ窪むが、内底は押し上げられていない。内底にはオサエ痕もない。7は回転ヘラ切り後、高台との接合部のみナデ。内底にはオサエ痕があり、中央部は底から押し上げられている。8～10は外底は回転ヘラ切り後、丁寧にナデており、内面も水引き痕をナデている。11は白雲母とカクセン石を含む特徴的な胎土で、器面摩滅のため調整不明。12は高台に半円の孔の空くもので、内外橙褐色を呈する。焼成後に穿孔されている。

14・15は小型の短頸壺で、14は内外丁寧にミガキで、15は回転ヘラ切り後、丁寧にナデており、中央部のみ窪むが、内底は端部に工具痕の段がある。

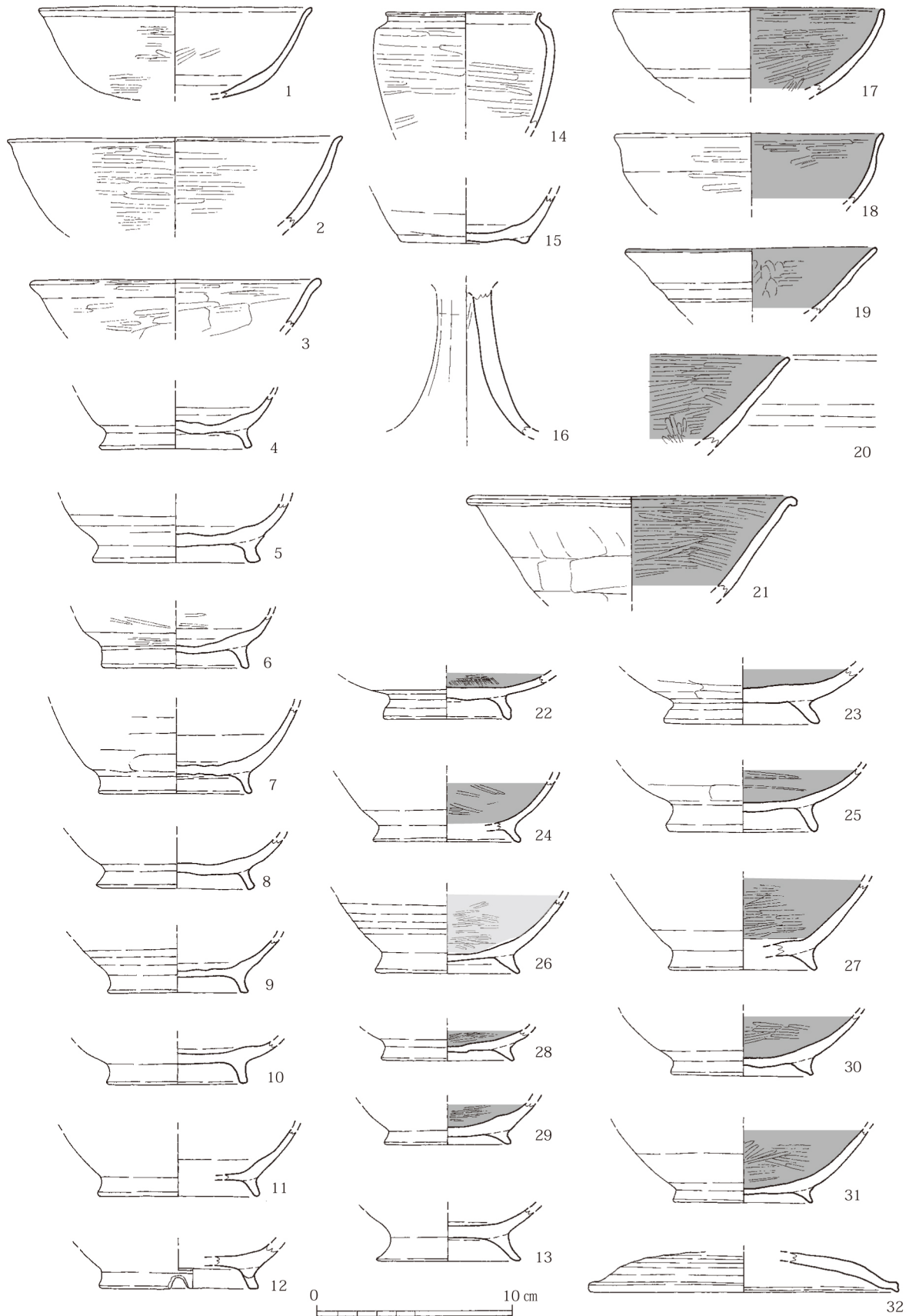
16は高杯の脚部で、外面は面取りされている。内外橙褐色を呈する。

17から31は黒色土器で、20と27は外面の色調と内面のミガキの光沢があることから、同一個体の可能性が高い。21は黄白色で、外面にケズリが入ることが22に近い。22～25は高台端部が肥厚するもので、22・23は回転ヘラ切り後、端部は丁寧にナデているが、中央部はケズリが入る。外面胴下位はケズリ。26は27と同様に外面はナデで、26は幅の狭い凹凸が入る。28～31は外底が回転ヘラ切り後、端部は丁寧にナデているが、中央部はケズリが入る。外面の胴下位はケズリ。29はにぶい黄灰白色で、丁寧にナデられているところが24と共通している。

32は土師器の蓋の小片で復元径は不正確である。橙褐色を呈する。器面が摩滅しているが、ミガキがあったものと思われる。

第35図1～4は土師器の鉢で、1は器壁が厚く、白色粒子を多く混入する鉢で、目の細かいハケが丁寧に施されている。内面はケズリ状のナデで、ナデの工具痕が見られる。内面は変色が見られる。2は胎土が精良で、変色がなく、内面はハケ状のケズリが入る。胴下位はオサエ痕がある。3は胎土が精良で、変色がなく、口径が小さいことから鉢だろう。4は胎土が精良で、変色はしているが、本来黄灰白色である。内外上半はナデで、下半が外面はナデとオサエ、内面はケズリ後ナデ。

5は土師器の甑の底部で、円盤の中央に穿孔があり、その周りにも方形の穿孔が配置されており、須恵器の甑の蒸気孔に近いことから、須恵器の焼成不良の可能性もあるが、ここでは須恵器を模



第34図 1・2区斜面包含層出土土師器・黒色土器実測図(1/3)

倣した土師器とした。胎土は精良で黄橙色を呈する。

6～9は土師器の置き竈で、6・7は裾部の小片で傾き不明である。6は内湾する側の面は灰黒褐色をもち、火を受けているが、裏面は焼成がない。7は先端が内湾する側の端だけに変色している。8・9は置き竈の裾部で、8は接地部分に突線がある。外面はハケ、内面はオサエで、白色粒子の混入多い。9は精良で変色がない。

第36～39図は土師器の甕である。第36図は土師器の甕で、2・15・16を除いていずれも白色粒子を含む胎土である。4は胴下位が膨らむ器形だろう。2・15・16はハケの特徴が同じで、混入物と色調が異なる。小型品なので、混入物を変更したものだろう。色調も他のものが黄灰白色だが、茶橙褐色を呈している。10の内面は横方向のケズリが明瞭に残っている。

第37図1～13は36図と同じ特徴をもつ企救型甕である。14は小型品のため胎土・焼成が異なるが、ハケは類似している。第36図2・16に近く、外面は粗いハケ、内面はケズリで、茶褐色を呈する。15は内外ケズリのみで、ハケはない。17は黄白色を呈し、茶褐色の砂粒を含む特徴的なもので、



第35図 1・2区斜面包含層出土土師器実測図2(4は1/2、他は1/3)

18は茶褐色で白色粒子を多く含むもので、内面口縁部にハケが入る。19～21は内面オサエ、外面ハケの底部で、いずれも小型品のものだろう。20は内面全面に炭化物が吸着している。

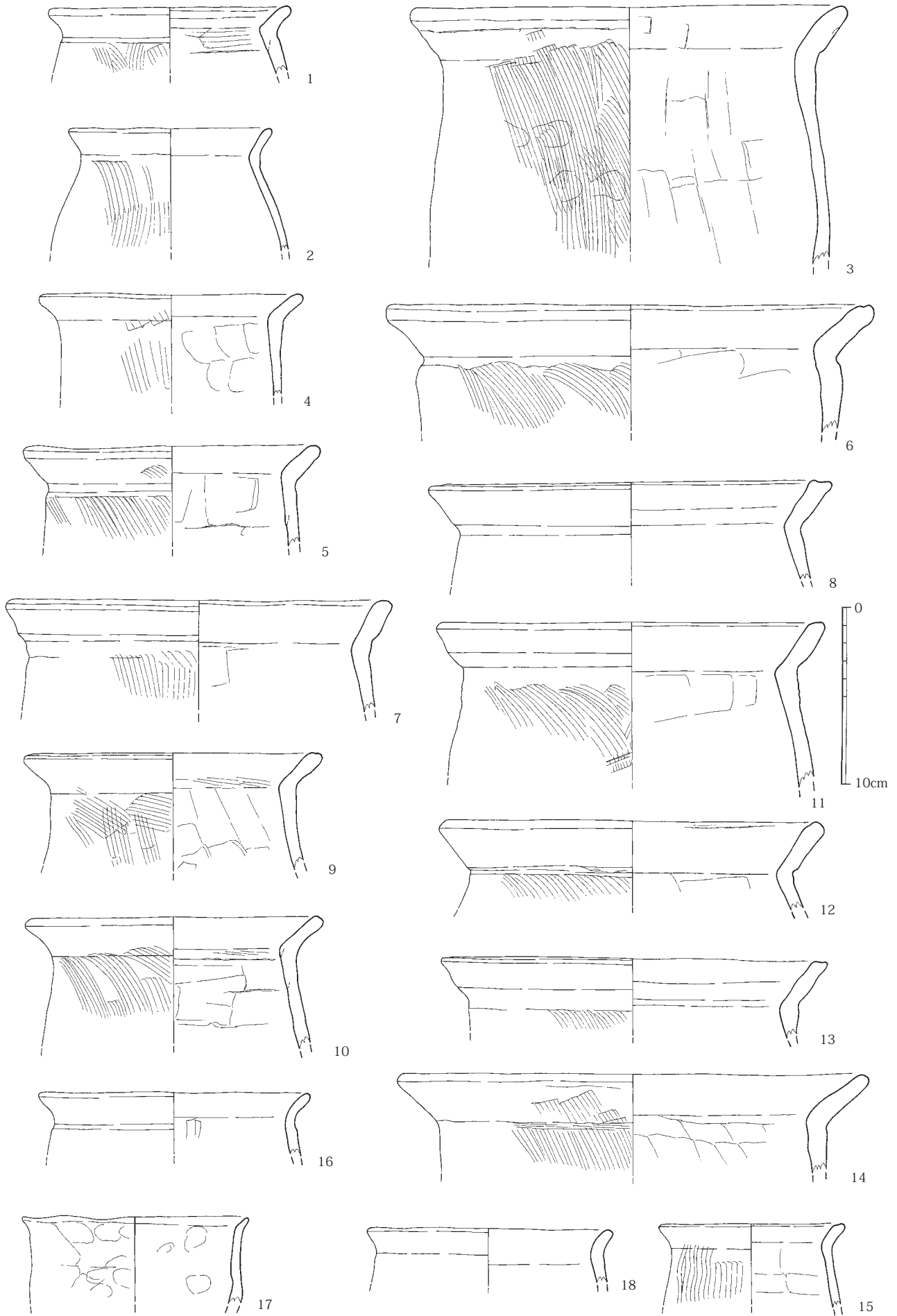
第38図1～4は口唇部に明瞭な面をもつ。褐色パミスを含む胎土の特徴が同じである。ヨコナデのみで、3・5・6は頸部に大きなナデ窪みがあり、内面口縁部にはナデによる段がある。2は白色粒子の混入が著しく、口唇形態も異なっているので、製作技法は同じだが製作産地が異なる。8～13は底部と胴部の間に明瞭な段がつくもので、段の下はオサエで窪んでいる。押し出し技法によるものだろう。8は1の胴部・底部の可能性があり、7も色調や胎土に近い。

第39図は土師器甕で、1～4は内外ケズリ状のナデの調整で、1～3は黄灰白色から黄橙色で混入物が少ない胎土だが、4は橙褐色で混入物の多いもので、胎土が異なる。5～8はタタキをもつ土師器甕胴部片で、傾きは不正確である。いずれも黄橙色で、混入物が少ない同じの特徴をもつ胎土である。9～11はタタキをもつ土師器甕で、9・11は器壁が厚い。9は黄白灰色の色調と胎土が3に近い。11は傾きから鉢形になる可能性もあり、内外煤付着がない。10は小型甕で、頸部は格子状にタタキが入っている。内面ケズリ。カクセン石と白雲母を多く含む胎土。

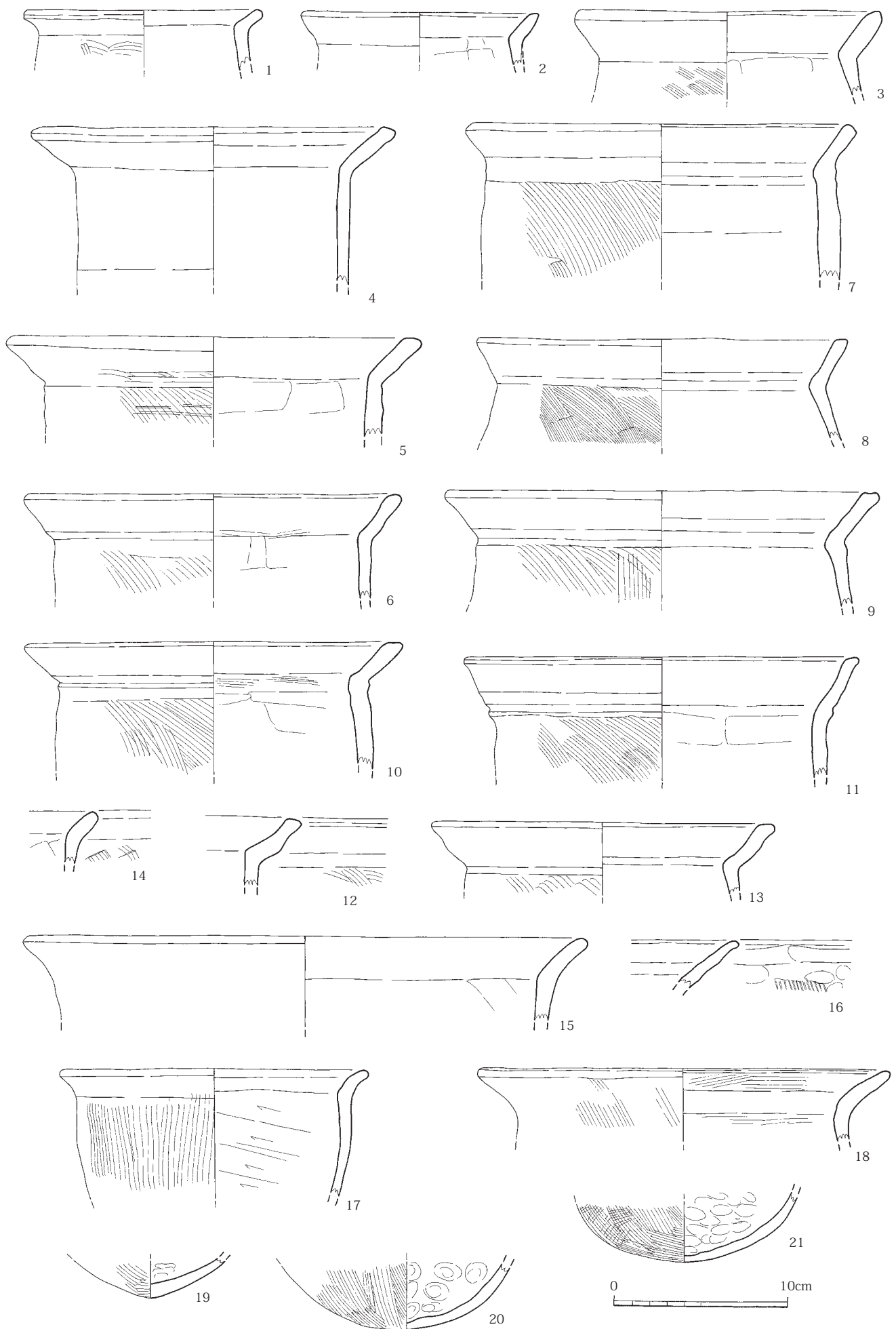
第40図から第45図1～12は須恵器である。第40図は蓋で、1の天井部は端部のみ丁寧にナデている。内面中央部にヘラ記号のような沈線があるが、浅く細いため、断定できない。つまみとの接合部が欠損しているので、本来つまみはつくものである。杯と重ねる焼成パターンである。2の天井部は丁寧にナデている。外面は口縁部以外同じ色調で、内面は中央部のみ火を強く受けていないので、変則的な重ね焼きパターンである。

3の天井部を丁寧にナデている。杯と重ねる焼成パターンである。4は天井部を丁寧にナデている。2と色調が同じで、重ね焼き痕も同じであるが別個体。5は8割残存しており、天井部は丁寧にナデている。杯と重ねる焼成パターンである。つまみは中央部からややずれて貼り付けられている。6は欠けのない完形で、天井部は丁寧にナデている。杯と重ねる焼成パターンである。外面に短い1条沈線のヘラ記号あり。7は口径の4分の1が残存し、天井部がやや窪む平坦面をもつもので、天井部は内外とも丁寧にナデている。杯と重ねる焼成パターンである。8は縁の一部が欠ける完形品である。天井部は内外とも丁寧にナデている。外面には植物の実の圧痕がついている。内面にヘラ記号らしい浅い沈線があるが、不明瞭で中央を通らないことからヘラ記号ではないと考えた。杯と重ねる焼成パターンだが、内面は灰を被っているので、重ね焼きの最上部である。

9は9割残存しており、天井部は内外とも丁寧にナデている。杯と重ねる焼成パターンである。だが、内面は径が小さく、杯身ではない小型品を重ねたのではないか。10は半分残っており、天井部は内面は丁寧に、外面は粗くナデており、外面には粘土が貼り付いている。杯と重ねる焼成パターンである。つまみの周囲のみヘラケズリ。11は縁が欠け、つまみが失われているが、それ以外は完形である。つまみの接合部に凹線が入る。杯と重ねる焼成パターンである。12は7割残っており、天井部は内面は丁寧に、外面は粗くナデている杯と重ねる焼成パターンである。13は7割残っているが、歪みがある。天井部は外面は粗くナデている。杯と重ねる焼成パターンで、内面側には灰被りがある。14は9割残っており、つまみが扁平で大きく、外面天井部は回転ヘラ切り後未調整なので異質。重ね焼き痕なし。15は縁が欠けたのみの完形で、天井部外面は回転ヘラ切り後粗くナデているが、工具による段が螺旋状に残っている。天井部に1条の短い沈線があるが、非常に短く不鮮明なので図化していない。外面の4分の3に灰被りがあるので、正置して灰の被らない部分に別個体を重ねて焼成している。16は縁が欠けているが接合して完形になるもので、天井部は、回転ヘラ切り後内面は丁寧に、外面は粗くナデている。杯と重ねる焼成パターン。全体に

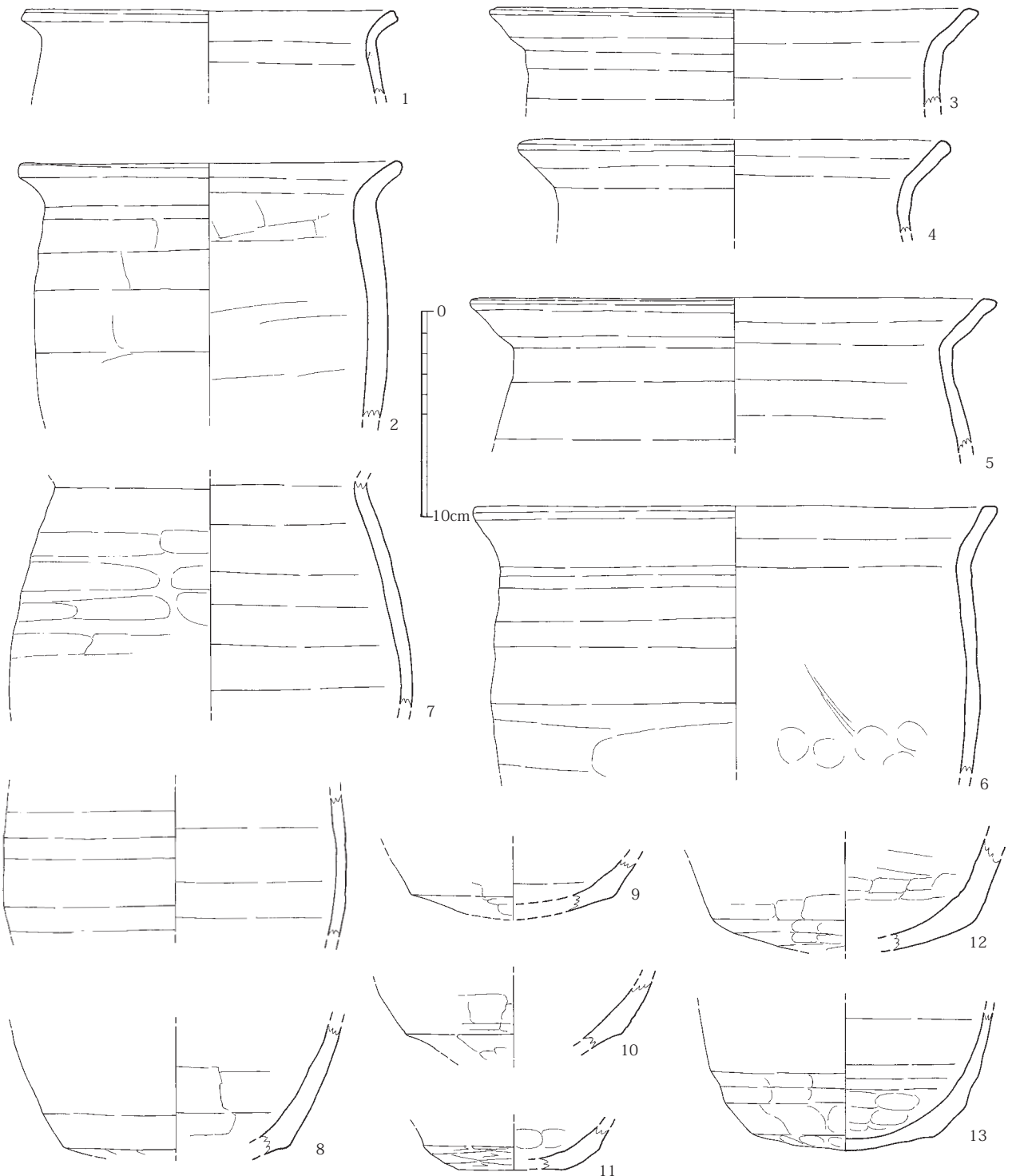


第36图 1·2区斜面包含層出土土師器実測図3(1/3)



第 37 图 1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 4 (1/3)

焼成不良なので軟質。17は6割残存しており、やや歪みがある。裾部にはナデ窪みをもつ面がある。天井部の内面は丁寧に、外面は粗くナデている。外面に灰被りがあるので、正置して灰の被らない部分に別個体を重ねて焼成している。18は8割残っており、天井部は、回転ヘラ切り後内面は丁寧に、外面は粗くナデている。内面の裾部に灰被りがあるので杯と重ねる焼成パターン。天井部が平坦なのは本来の形態である。19は8割残っている。歪みの大きいもので、裾が反り返っているので天井部が焼成時に窪んだ結果平坦化したものである。外面に灰が被っており、内面は均一に焼成不良なので、身と重ねて焼き、さらに天井部に別個体を重ねて焼成したために重みで窪んだもの



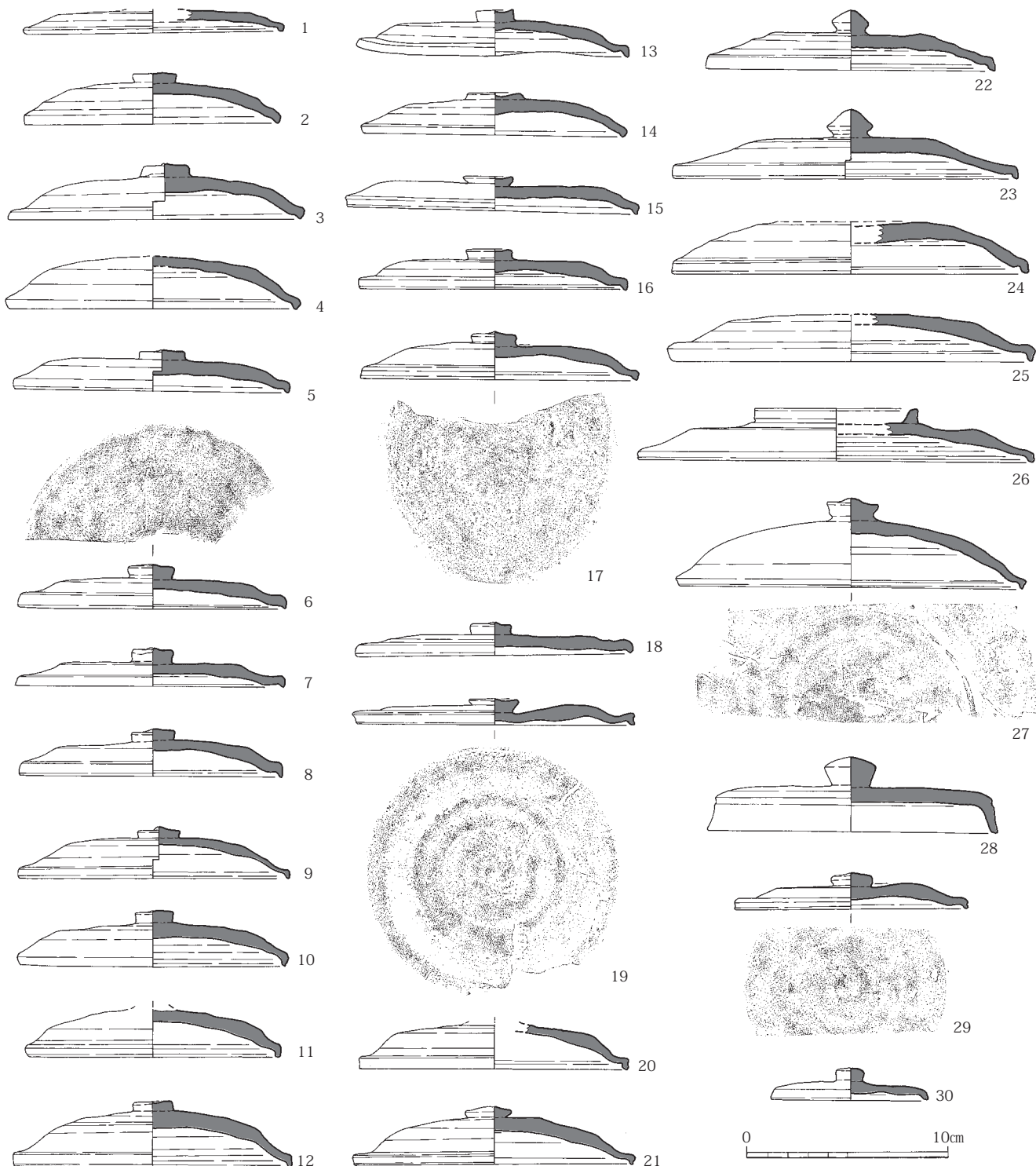
第38図 1・2区斜面包含層出土土師器実測図5(1/3)

だろう。20は6分の1ほどしかない小片だが、天井部平坦で、回転ヘラ切り後ナデ仕上げのない例である。焼成不良で重ね焼きの痕跡がわからない。21は8割残っており、天井部は回転ヘラ切り後、内面は丁寧に、外面は粗くナデている。杯と重ねる焼成パターン。



第 39 図 1・2 区斜面包含層出土土師器実測図 6 (1/3)

22～25は天井部が平坦面をもち宝珠つまみをもつもので、いずれも丁寧な作りである。22は8割残存しており、天井部は窪むが、外面が強く火を受けており、内面は均一な色調なので同じ径の蓋と対面に重ねて焼成したものだろう。23・24は裾の受け部に沈線が入るもので、25の受け部は平坦面をもつ。23は7割、24は3割残存しており、どちらも正置して焼成していた。25の天井部は、回転ヘラ切り後内面は丁寧に、外面は粗くナデている。杯身と重ね焼きするパターン。26の天井部は回転ヘラ切り後内外粗くナデており、内面には1条沈線のヘラ記号が入る。杯と重ねる焼成パターンで、内面側には灰被りがある。27はわずかしこ残っていないため復元径は不正確。天井部



第40図 1・2区斜面包含層出土須恵器実測図1(1/3)

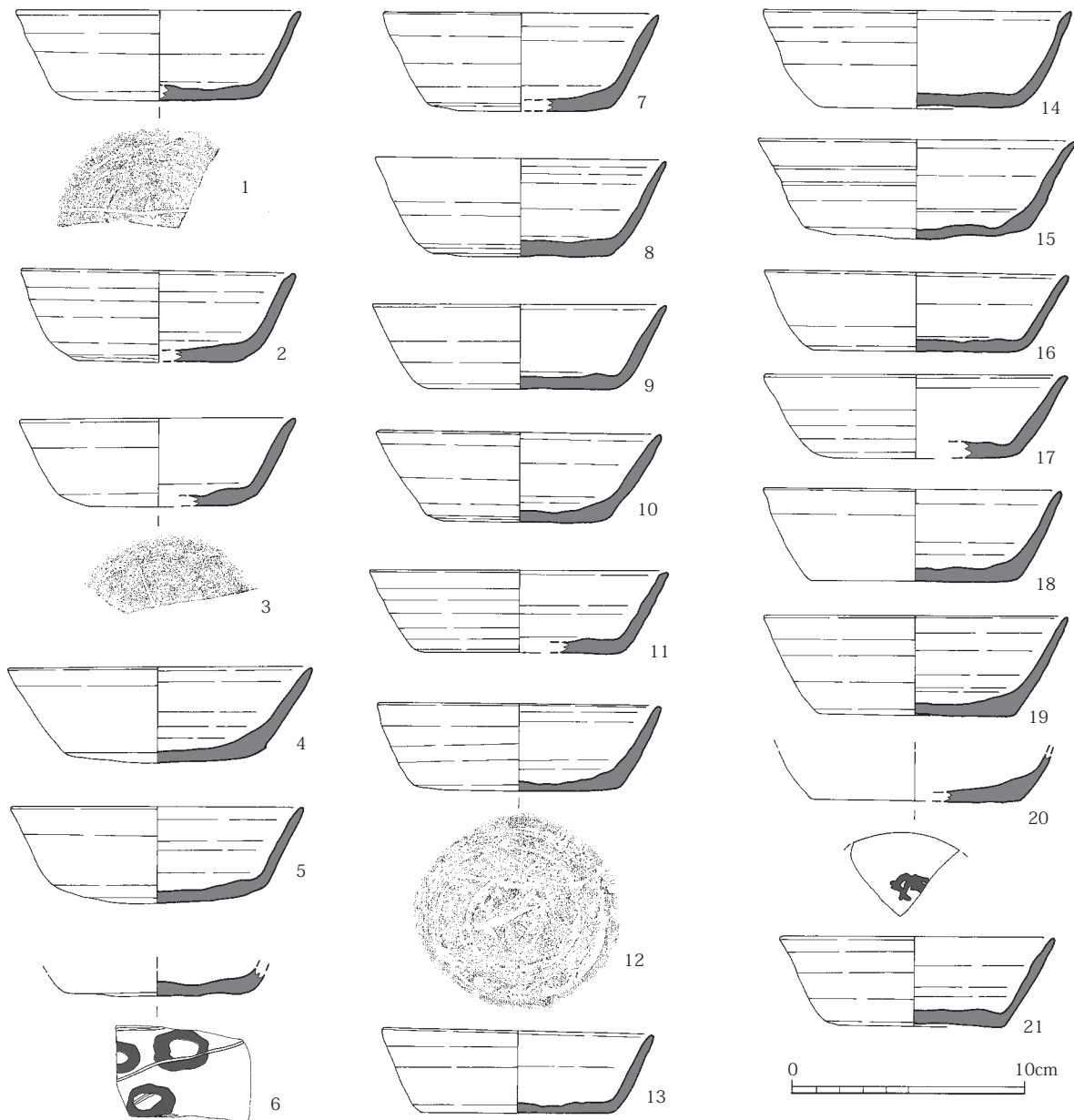
は回転ヘラ切り後内外粗くナデしており、杯と重ねる焼成パターンである。

28は回転ヘラ切り後内外丁寧になでられていて、3割残る。外面には灰被りがあり正置きして焼成している。29は小型品でほぼ完形である。受け部はナデ窪んでいる。天井部は回転ヘラ切り後外面を粗くナデているため、螺旋状の段が残る。内面は丁寧にナデて1条沈線のヘラ記号が入る。外面側に灰被りがあるので正置きして焼成するパターン。30は小型壺の蓋で、回転ヘラ切り後内外丁寧にナデられている。外面側にガラス化した灰被りがあるので正置きして焼成したパターンである。

第41図は杯で、1の口縁部はわずかしかなかったが、底径は3分の1が残る。外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げし、ヘラ記号を入れている。底部の残存度から「×」字にはならないが、2条線の可能性を残す。同一器種の重ね焼きパターン。2は外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げ、口縁部を強くナデているため尖っている。3割残存する。重ね焼き痕がない。3は、口縁部はわずかだが、底径は3分の1が残る。外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げし、ヘラ記号を入れている。4は外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、底縁の一部は平坦だが、一部は丸みをもつ。口縁部を強くナデているため尖っている。重ね焼き痕がない。5は口縁部を強くナデているため尖っている。外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、底部が丸みをもつ。外底の端部にヘラ記号状の浅い線が入るが、偶然ついたものと考えられる。同一器種の重ね焼きパターン。6は小片のため全体像がわからない墨書土器で、丸を3つ描いたものである。外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げし、2条線のヘラ記号を入れている。7は外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、胴下位に丸みがあるが、底部は平坦化している。口縁部を強くナデているため尖っている。重ね焼き痕がない。8は外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、中央部を削っており、異質である。重ね焼き痕がない。9は外底を回転ヘラ切り後未調整で、中央部は粘土の高まりが残っている。外底が焼成不良なので、正置で焼成しているが、内面には重ね焼き痕がない。10は外底を回転ヘラ切り後未調整で、工具端による螺旋状の段が残る。外面胴下位に大きなナデ窪みが入る。同一器種の重ね焼きパターン。11は外面のナデの凹凸の幅が狭いもので、外底が焼成不良なので、正置で焼成しているが、内面には重ね焼き痕がない。口唇部は面をもつ。12は9割残存で、外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、工具端による螺旋状の段が残る。中央部に斜めに入れた幅の広い沈線のヘラ記号がある。同一器種の重ね焼きパターン。13は半分残存する。外底を回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。内外に火襷が入るが、重ね焼き痕跡なし。14は口縁部に焼成段階のヒビが入るもので、底部の器壁が厚く、内外に火襷があり、底部は焼成不良。同一器種の重ね焼きパターンがやや傾いている。15は外底を回転ヘラ切り後粗くナデしており、工具端による螺旋状の段が残る。平底だが、端部には丸みがある。同じ器種を重ねる焼成パターンだが、色調は瓦器椀のようなグラデーションをなす。16は外底を回転ヘラ切り後未調整で、中央部は粘土の高まりが残っている。平底だが、端部には丸みがある。口縁部が大きく開き、外面にはナデの工具端の段が残る。17は外底を回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。内外に火襷が入るが、重ね焼き痕跡なし。18は外底を回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。同じ器種を重ねる焼成パターンで、全体的に焼成不良。19は平底で、外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げしている。同じ器種を重ねる焼成パターンだが、色調は瓦器椀のようなグラデーションをなす。全体的に焼成不良。20は底部に墨書が入るものだが断片なので判読できない。底径で6分の1ほどしかないので復元底径は正確でない。外底を回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げで、外面胴下位にナデの面がある。21は平底で、外底を回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。外面のナデの凹凸の幅が狭いもので、内底が焼成不良。

第42図は高台付杯で、1は2つの大きな破片が接合して完形になった。外底を回転ヘラ切り後

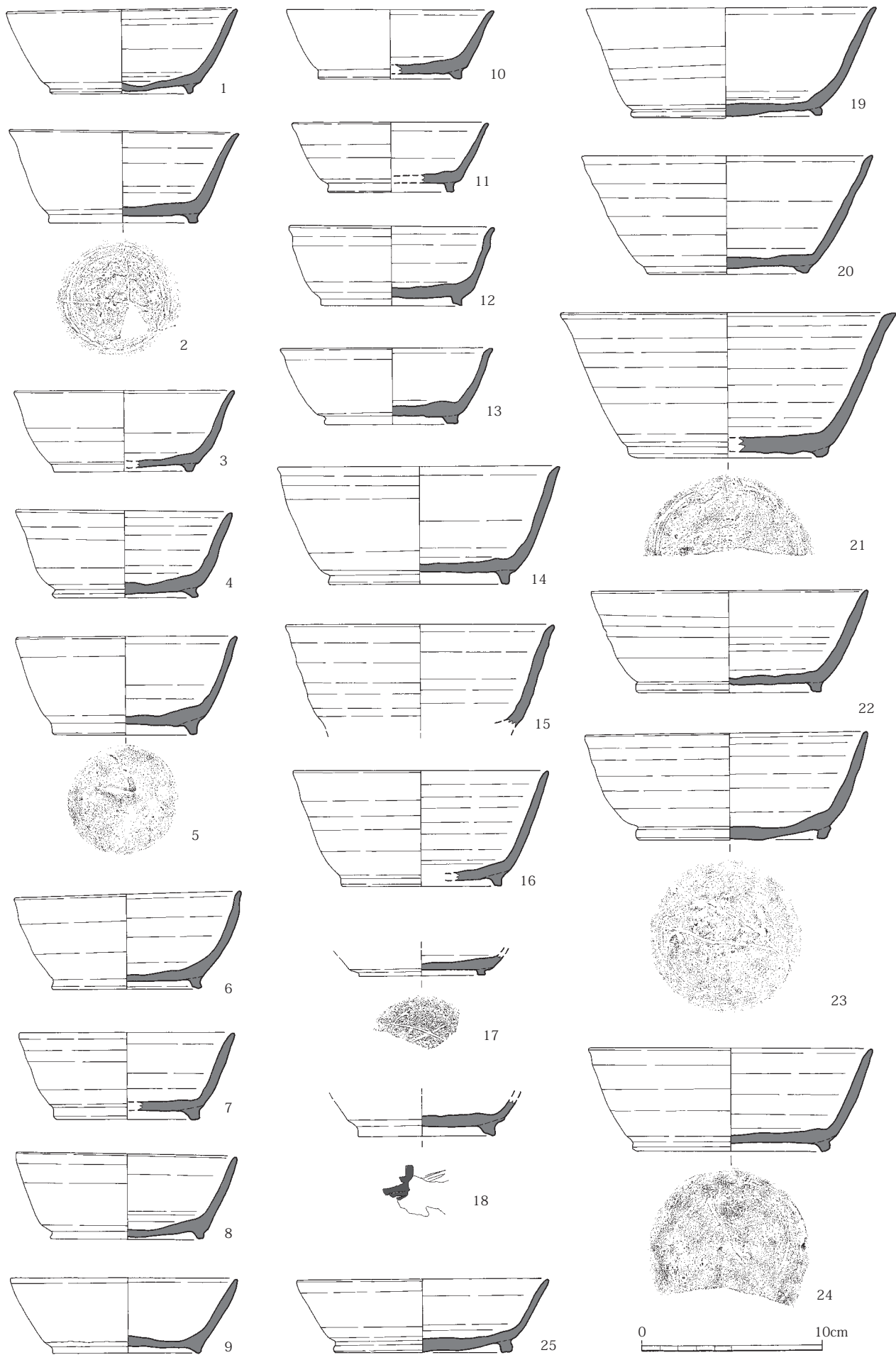
高台との接合部のみナデ仕上げ。高台と胴下位の接合部を削り込む。外面に3つの弧の重ね焼き痕があり、変則的な重ね焼きをしているようだ。2は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げ。高台と胴下位の接合部を削り込むようにナデている。全体的に焼成不良だが、色調は瓦器碗のような灰黒色と灰白色をなす。外底のヘラ記号はヘラ切り痕のため歪んでいるが1条の沈線である。3は胴部の内外の表裏にあたる位置に炭化物の付着が見られたが、墨書ではない。外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げ。高台と胴下位の接合部を削り込む部分がある。外面に弧の重ね焼き痕があり、変則的な重ね焼きをしているようだ。4は外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げで、高台と胴下位の接合部を削り込むようにナデている。重ね焼き痕はなく、全体的に焼成不良。5は外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げで、短く幅の広いヘラ記号が残る。積み重ね痕がない。6は8割残っており、外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げ。畳付に凹線か沈線が入る。重ね焼き痕はない。7は口縁部が小片だが、底径は半分残っている。外底を回転ヘラ切り後高台との接合部と中央をナデ仕上げで、重ね焼き痕がない。8は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部の



第41図 1・2区斜面包含層出土須恵器実測図2(1/3)

みナデ仕上げ。口縁部は内外に小さなナデ窪みがある。積み重ね痕がない。9は外底を回転ヘラ切り後粗いナデ仕上げで、内底は盛り上がっている。10は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、工具端が飛びカンナ状に残る。内底は水引き痕をナデ消している。高台はへたれており図化した部分は直立しているが、本来はやや削り込んでいる。同じ器種の重ね焼きパターンである。11は底部の中央部が欠損しているため不明瞭だが、回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げだろう。蓋と重ねる焼成パターンである。12は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、工具端が飛びカンナ状に残る。内底は水引き痕をナデ消している。畳付に凹線が入るもの。蓋を上下に重ねる積み重ねパターンである。13は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、工具端による沈線が螺旋状に入る。畳付に凹線が入るもの。外面に弧状の重ね焼き痕があり、変則的な重ね焼きをしている。内面は変色がなく、外面が強く焼けているので、倒置したものかもしれない。14は8割残存するもので、外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、工具端による凹線が残るがこれはヘラ記号ではなく偶発的なものだろう。蓋と重ねる焼成パターンである。口縁部には焼成段階のヒビが残る。15は土師質だが、土師器にない器形なので焼成不良の須恵器とした。16は4分の1が残る。外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、畳付に凹線が入るもの。積み重ね痕がない。17・18は高台部分で、17は外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げして深い線刻の「×」字のヘラ記号が入るもので、胴下位と高台の接合部のナデは稜がつく。蓋を上下に重ねる重ね焼きパターンである。18は外底を回転ヘラ切り後高台との接合部はナデ仕上げで、中央部も粗くナデした後、2本の短く併走する沈線のヘラ記号がある。墨書は右半分が欠損しているため字が判読できないが、「吉」であろう。19は胴部上半が歪んでいるため、中間的な位置の傾きで図化している。外底を回転ヘラ切り後ナデ仕上げし、内底も水引き痕を粗くナデ消している。蓋を上下に重ねる重ね焼きパターンである。20は底部が完存するが、胴部はわずかしかないために歪みの有無がわからないため、傾きについては不正確である。外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げしているが、中央部に粘土の高まりが残る。畳付に凹線が入るもの。重ね焼き痕がない。21は半分残存しているが、口縁部に歪みがあるため、傾きはやや不正確。外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、2条のヘラ記号が浅く細く入る。蓋と重ねる焼成パターンであるが、焼成不良で軟質なため、内底は器面が荒れている。22は8割残存しており、外底を回転ヘラ切り後高台との接合部のみナデ仕上げで、工具端による4本の沈線が螺旋状に残る。蓋と重ねる焼成パターンである。23は外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、1条沈線のヘラ記号が浅く入る。内底も水引き痕を粗くナデ消している。内面のみ焼成が弱いので、蓋を被せて焼いたものだろう。24は半分残存しており、外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし1条沈線のヘラ記号が浅く入る。内底も水引き痕を粗くナデ消している。内面胴下位には工具端で施された沈線がある。25は3分の1が残っており、外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げしているが、飛びカンナ痕は残っており、中央部は削っている。畳付に凹線が入るもの。積み重ね痕がない。

第43図1～16は皿である。1は口縁が4分の1だが、底部は半分残っており、底部は内面の水引きで押されて膨らんでいる。外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、中央は削っている。同じ器種の重ね焼きパターンで、全体的に焼成不良で軟質。2は7割残っており、外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、中央は削っている。同じ器種の重ね焼きパターンだが内面は半分だけ変色しているため、ずれて重なっていたようだ。全体的に焼成不良で軟質。3は3割残存する。外底を回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、中央は欠損しているため削りの有無は不明。同じ器種の重ね焼きパターンだが全体的に焼成不良なので不明瞭。4は7割残っており、外底を回転ヘラ切り後粗くナ



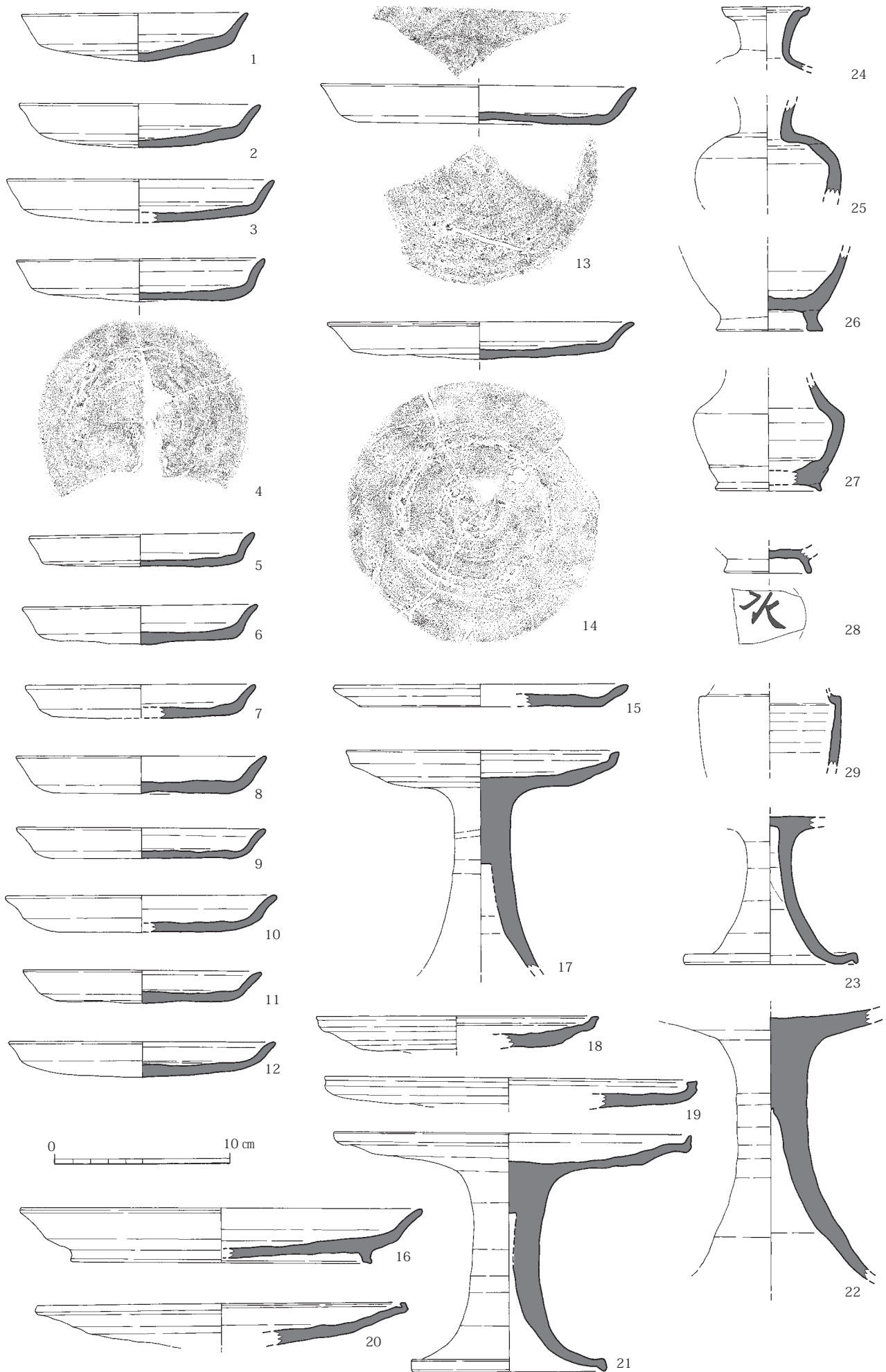
第 42 図 1・2 区斜面包含層出土須恵器実測図 3 (1/3)

デ仕上げし、中央は丁寧にナデて「×」字のヘラ記号を入れる。同じ器種の重ね焼きパターンだが、全体的に焼成不良で黄白色呈しており、不明瞭。5は2つの破片が接合する完形で、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面は弧状の重ね焼き痕があり、ずれが見られる。7は口縁・底径が6分の1だけ残ったもので、外底は回転ヘラ切り後端部のみナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面は弧状の重ね焼き痕があり、ずれが見られる。8は口縁・底径が4分の1だけ残ったもので、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターン。9は口縁・底径が半分残ったもので、外底は回転ヘラ切り後端部のみナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターン。10は口縁・底径が6分の1だけ残ったもので、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面は中央に重ね焼き痕があり、小さい径の別個体と重ねている。11は歪みがあり、傾きはその影響を受けている。外底は回転ヘラ切り後端部のみナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面側はややずれがある。焼成不良で黄灰色を呈する。12は口縁・底径の3分の1が残っており、外底は回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面側はややずれがあり、内面側に灰被りが見られる。内面の細かい傷は箸痕の可能性はある。13は口縁部はわずかしかないが、底径は半分が残る。底部にやや歪みがあるもので、外底は回転ヘラ切り後端部だけナデ仕上げし、そこに短く幅の広い1条沈線のヘラ記号を入れている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面側はややずれがあり、火轆きが残る。14は7割残っており、外底は回転ヘラ切り後粗くナデ仕上げし、1条沈線のヘラ記号を入れている。同じ器種の重ね焼きパターン。15は口縁・底径の4分の1が残っており、底部に歪みがあるため極端な平底に凶化されている。外底は回転ヘラ切り後端部のみナデ仕上げしている。同じ器種の重ね焼きパターンだが、外面側はややずれがある。

16は須恵器盤で、口縁・底径の4分の1が残っており、底部に歪みがあるため底部が窪んで凶化されている。外底は回転ヘラケズリで仕上げられている。同じ器種の重ね焼きパターンで、内面側に灰被りがある。

第43図17～23は須恵器高杯で、17は杯部の一部と脚部が残っており、杯部は口縁がわずかしかないが、中央部まで残っている。内外ナデ仕上げしており、脚内面に灰被りがあるので倒置して焼成している。18は杯部が半分残ったもので、内外ナデ仕上げしており、内面に灰被りがあり、不鮮明な重ね焼き痕があるので、上下に重ねた状態で横置きして焼成している。19は口縁部の小片で、復元口径は不正確である。内外ナデ仕上げしており、外面に灰被りと重ね焼き痕があるので、倒置して焼成し、別個体を杯部に重ねている。20は口縁の4分の1が残っており、内外ナデ仕上げしており、外面に灰被りがあり、内面にも重ね焼き痕があるので、上下に重ねた状態で横置きして焼成している。21は9割残存しており、内外ナデ仕上げしており、内面にも重ね焼き痕があるので、上下に重ねた状態で横置きして焼成している。22は大型品の脚部で、内外ナデ仕上げしており、内面にも重ね焼き痕があるので、上下に重ねた状態で横置きして焼成している。23は小型品の脚部で、裾径は6分の1が残っている。全体的に焼成不良だが、内面が特に焼成が弱く、逆に脚内部がよく焼けており、倒置して焼成したものであろう。

第43図24～28は須恵器の小壺で、24は頸部外面にのみ自然釉の釉垂れがあるので、斜めに置いて焼成している。25は頸部が偏って接合されているが、平瓶ではなく、小壺と考えた。外面肩部に均一に杯かぶりがあるので正置して焼成している。内面は肩部に接合痕跡が残っているが、接合部内面は調整していない。26は器壁の厚い高台がつくもので、外底は回転ヘラ切り後丁寧にナ



第 43 图 1·2 区斜面包含層出土須惠器实测图 4 (1/3)

デ仕上げ。焼成は良好で、灰被りなし。胴下半は完存している。27の頸部は図上接合で、体部は4分の1が残っている。火を強く受けている。28は高台内に墨書が入るもので、「水」の1字が入る。外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。29は短頸壺で外面に灰被りがあり、横置きして焼成している。口縁部は欠損しているが、器壁の厚さからみても、あまり上に延びないだろう。

第44図は須恵器の甕で、1は大甕で、口縁部の4分の1が残っている。内面は同心円文のタタキ当て具痕。内面と肩部に灰被りがあるので正置して焼成している。2は中型甕で内面の同心円文のタタキ当て具痕はナデ消されている。外面はカキ目が交差しているため、ハケのように見える。内面口縁部には灰被りがないが、頸部にはあるので、口縁部に何か重ねて焼成した可能性がある。3は大甕で、4分の1が残っている。白色粒子の混入が目立つ。内面に灰被りあり。焼成良好。4は中型甕の胴下半で、半分が残っており、底部は完存している。焼成不良部分が接地した場所だが、目跡はない。焼成良好。5は中型甕の胴部片で径の6分の1が残っている。外面は格子目タタキで、内面の同心円文のタタキ当て具痕は斜め上に動いている。肩部に弧状の重ね焼き痕があるので、別個体を肩に乗せて焼成している。6は大型甕の胴下位片で径の4分の1が残っている。拓本では不明瞭だが、外面は格子目タタキである。

第45図1は須恵器の鉄鉢形鉢で、外面下半は回転ヘラケズリで、それ以外はナデ。内面下半は重ね焼きのため焼成不良で、色調の境界が不鮮明なので、同じ器種を重ねたものだろう。2・3は須恵器の平瓶で、2は7割残っているが、把手はまったく残っていない。また、口縁部はわずかしなため、斜めに図化しているのは復元である。外底は回転ヘラケズリ後丁寧なナデ仕上げ。胴部外面は工具痕が残るがヨコナデである。焼成は良好。3は体部が6割残っている。外底は回転ヘラケズリ後丁寧なナデ仕上げ。胴部外面はヘラケズリ。内面はケズリ状のナデ。焼成が強く、灰が被っている。4は小型の平瓶の把手であろう。断面略方形で、不均一に面取りしている。端部がわずかに湾曲しているので、一端はコの字型地の角に近い位置のものと思われる。断面が略方形で面取りが粗いことから、三足土器の脚部の可能性も残す。

5～8・10は須恵器の壺で、5は小型の壺の胴部で半分が残っている。外面には沈線が入る。焼成が強く、灰が被り、ひつつきもつく。自然釉の釉垂れもある。6は胴部の小片で、肩部に沈線入る。斜めに沈線が入っており、ヘラ記号の可能性もあるが、不明瞭なので、図化していない。肩部に灰被りあり。7は高台径の3分の1が残るもので、胴下位に刺突列点文のような痕跡があるが、部分的なので意図的なものか不明。内面に灰が厚く被るので、広口がつく器形だろう。8は胴下半が完存しており、外面はヘラケズリで、外底の調整は灰被りのため不明である。横置きして焼成されており、胴の片側に自然釉がかかる。10の外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げで、「×」字のヘラ記号を入れている。内面は積み上げ痕をナデ消していない。焼成は内面が弱いものの、高台内は外面胴部と同じ色調なので、横置き焼成だろうか。

9は高台付鉢で、胴外面下位にカキ目がある。外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ仕上げ。焼成は内面が弱いものの、高台内は外面胴部と同じ色調なので、横置き焼成だろうか。11は甌の底部の小片で、蒸気孔の一部が残っている。変色はない。12は須恵器の甌の把手で、方柱状のものを折り曲げており1端のみ体部に接合している。

13～15は緑釉陶器で、13・14は光沢のある明緑色に発色し、剥離が少ない。15は小壺の底部片で、外面の底部まで施釉しており、淡緑白色に発色する。器面自体が剥離しているが、釉も斑に剥離している。いずれも胎は黄灰白色である。

16は灰釉陶器の皿で、焼き膨れがある。高台と内底は釉剥ぎされており、重ね焼きのため焼成

不良でもある。

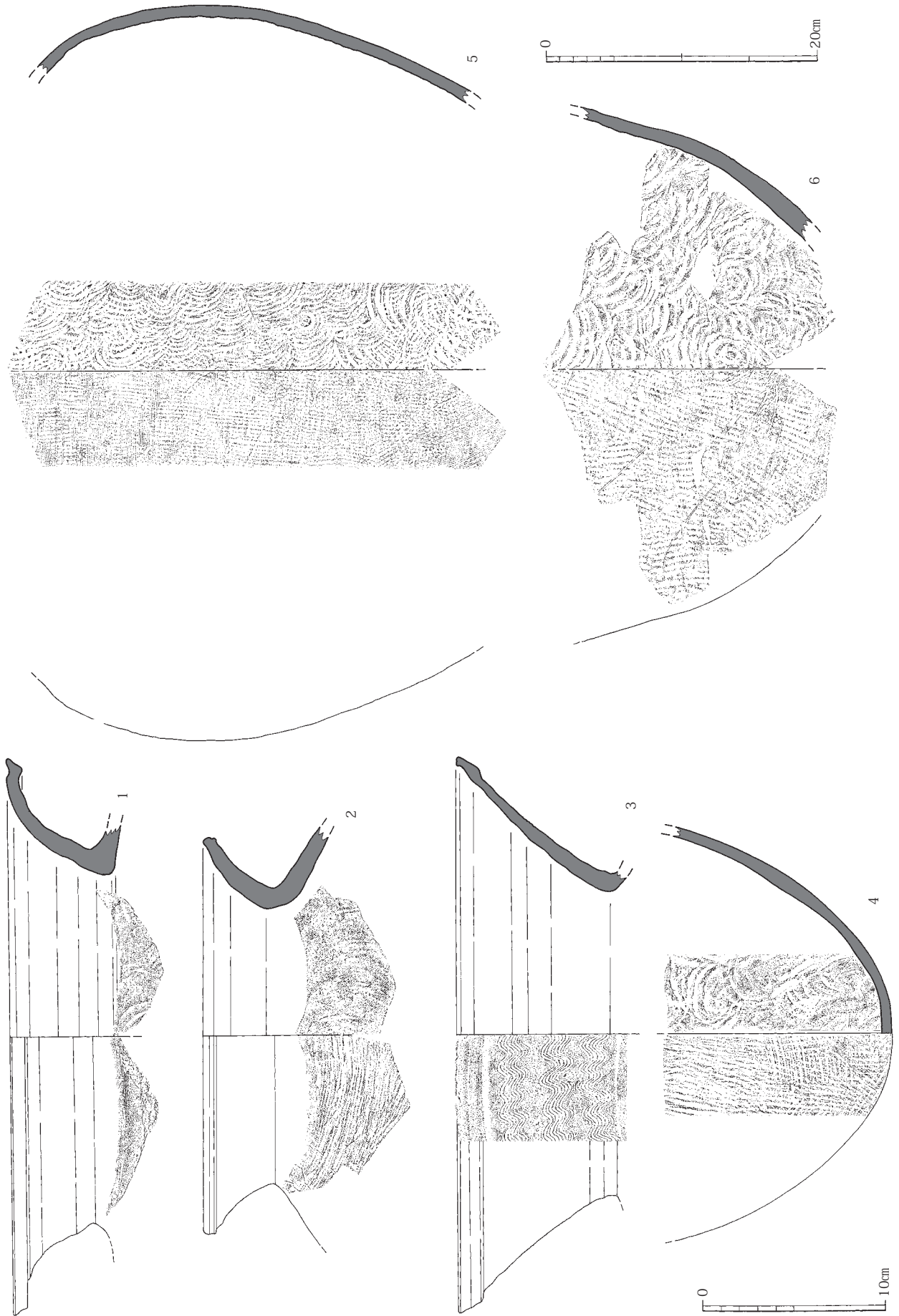
第 60 図 17 は有溝球形、28 は管形、45・49・51 は棒状土鍾である。

第 61 図 4・9・12・17・30・32・34、第 62 図 13 はイイダコ壺で、第 61 図 4 を除いて、内面は強いナデで、器壁は薄く、口縁部は肥厚する。内外にぶい暗黄灰褐色を呈する。

第 63 図 1・3・4・6 ～ 8・10・12・13・15・17 ～ 20・23・24、第 64 図 1・5・6・8・11・13・14・16、第 65 図 7、第 66 図 3・5・7・11・12、第 67 図 2・5・9・14・15 は砲弾形の焼塩壺である。

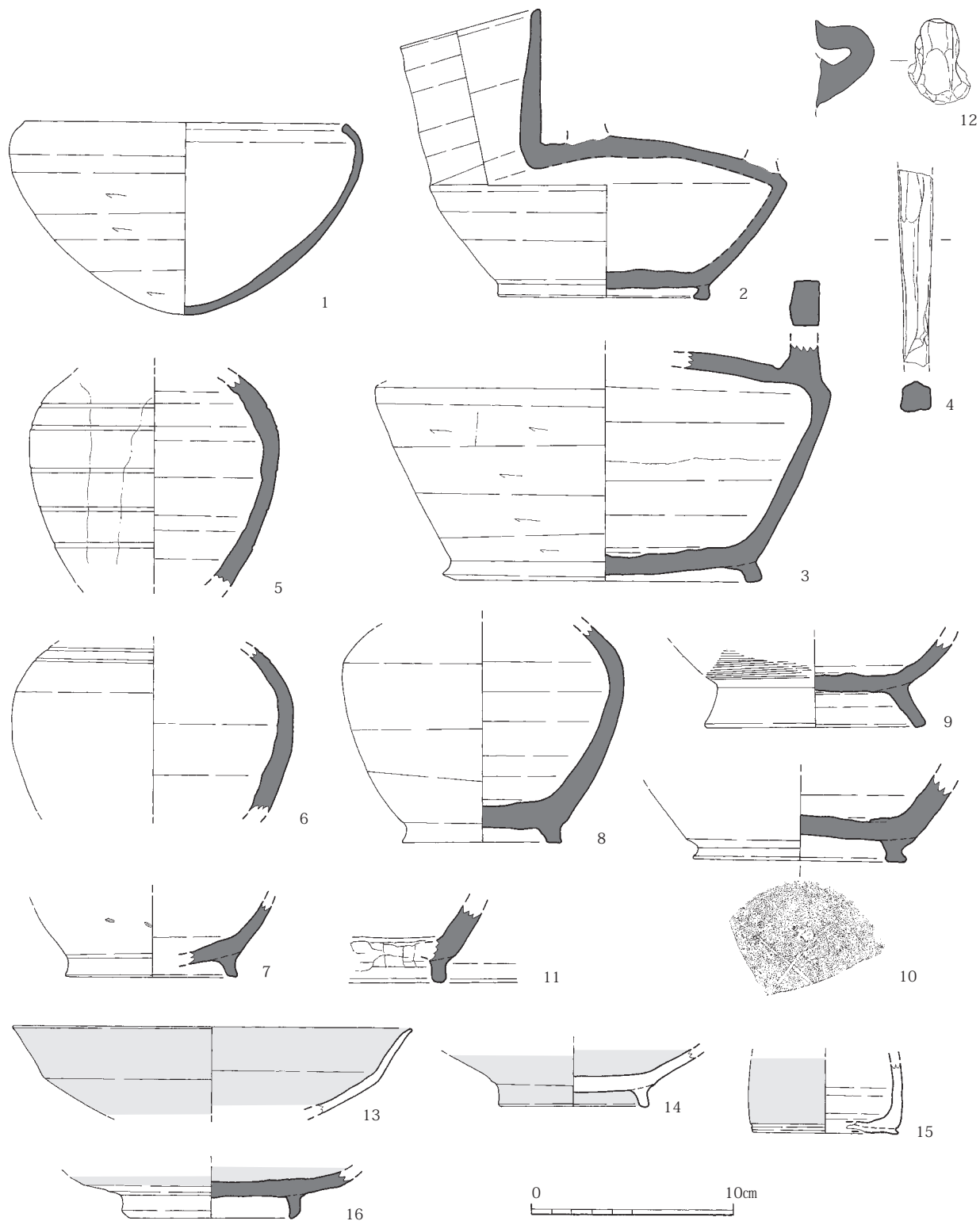
第 63 図 1 は外面口縁部に塩の付着がある。口唇部の調整は不明。3 は布目の目が非常に細かいもので、摸骨の段がある。胎土は比較的堅緻。口唇部はオサエ。同一個体の口縁部と胴部の位置関係は不明。4 の口唇部はオサエで、同一個体と見られる破片が 39 点ある。6 の口唇部は幅の広いオサエ。7 は口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、内面口縁下に突帯がつく。同一個体と見られる破片が 10 点ある。8 は口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、胎土は比較的堅緻。褐色パミスの大粒の粒子が入る。内面には摸骨のものと思われる凹凸がある。同一個体と見られる破片が 17 点ある。10 の口唇部はオサエで、内面口縁部に塩の付着がある。12 の口唇部は器面が荒れており、調整不明だが、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもの。口縁部から傾きを復元すると浅鉢形になるが、類例から見て部分的な変異にあたる小片と考えた。内面の布目は細かく、一見すると布目がないように見える。内面には摸骨痕と思われる段があり、胎土は比較的堅緻。口唇部の調整は不明。同一個体と思われるもの 4 点がある。13 の口唇部は残りが悪く、調整不明だが、内面側に折り曲げられず上に尖る。内面の布目は細かい。傾きが不正確で、内面には摸骨痕と思われる段があり、内面の横方向の数条の沈線と無関係に布目が入るので摸骨に突起があったのだろう。同一個体と思われるもの 5 点がある。15 の口唇部は内面側に折り曲げられず上に尖り、内面口縁下に突帯が入る。内面には摸骨痕の段があり、口唇部は幅の広いオサエ。胎土は比較的堅緻で、内面の布目は細かい。非接合の小津部片との位置関係は不明で、胴部片内面には段差が大きい。同一個体と思われるもの 2 点がある。17 の口唇部は板状工具によるオサエで、内面に布目がないのは器面摩滅による可能性が高い。口唇部内面側は内面側に粘土が寄る部分がある。同一個体と思われるもの 6 点がある。18 の口唇部は残りが悪く調整不明。焼成が強かったためか内外黒灰色を呈し、やや堅緻である。19 は精良な胎土で、内面は黄灰白、外面は口縁部が黄灰白色で、口縁下は赤変する。口唇部は残りが悪く調整不明。拓本を掲載していないが、内面にわずかに布目が残っている。同一個体 27 点がある。20 の口唇部は指オサエで、内面には摸骨の凹凸がある。23 は比較的大きい破片で、器面の残りも良い。胎土・色調は 18 に似ているので、同一個体の可能性がある。内面は口縁部をのぞいて灰黒色で焼成不良。内面の沈線は摸骨痕跡と思われるが、器形に対して斜めに入っているうえに途中で角度が変わっている。ちょうどこの沈線の対面にあたる位置にも段がある。同一個体 1 点がある。24 は器面の残りがよく。器壁が薄い。内面には摸骨の凹凸がある。胴部内面の部分的に布目がなく縦糸だけが数本残っており、そこだけ器面が膨らんでいるのは布の破れ目であったからだろう。

第 64 図 1 は器面が残っているにもかかわらず混入物が露出している胎土が特徴的で、堅緻。口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅の広い指オサエで、胴部片の内面には摸骨に入る窪みに粘土が入ったことによる隆起線がある。同一個体 16 点がある。5 は胎土が精良なことが特徴で、口唇部は板状工具によるオサエで、摸骨の上端で屈曲している。同一個体 43 点がある。6 は口縁部片が反転できない小片である。口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は板状工具によるオサエで、胎土は堅緻で、粒の



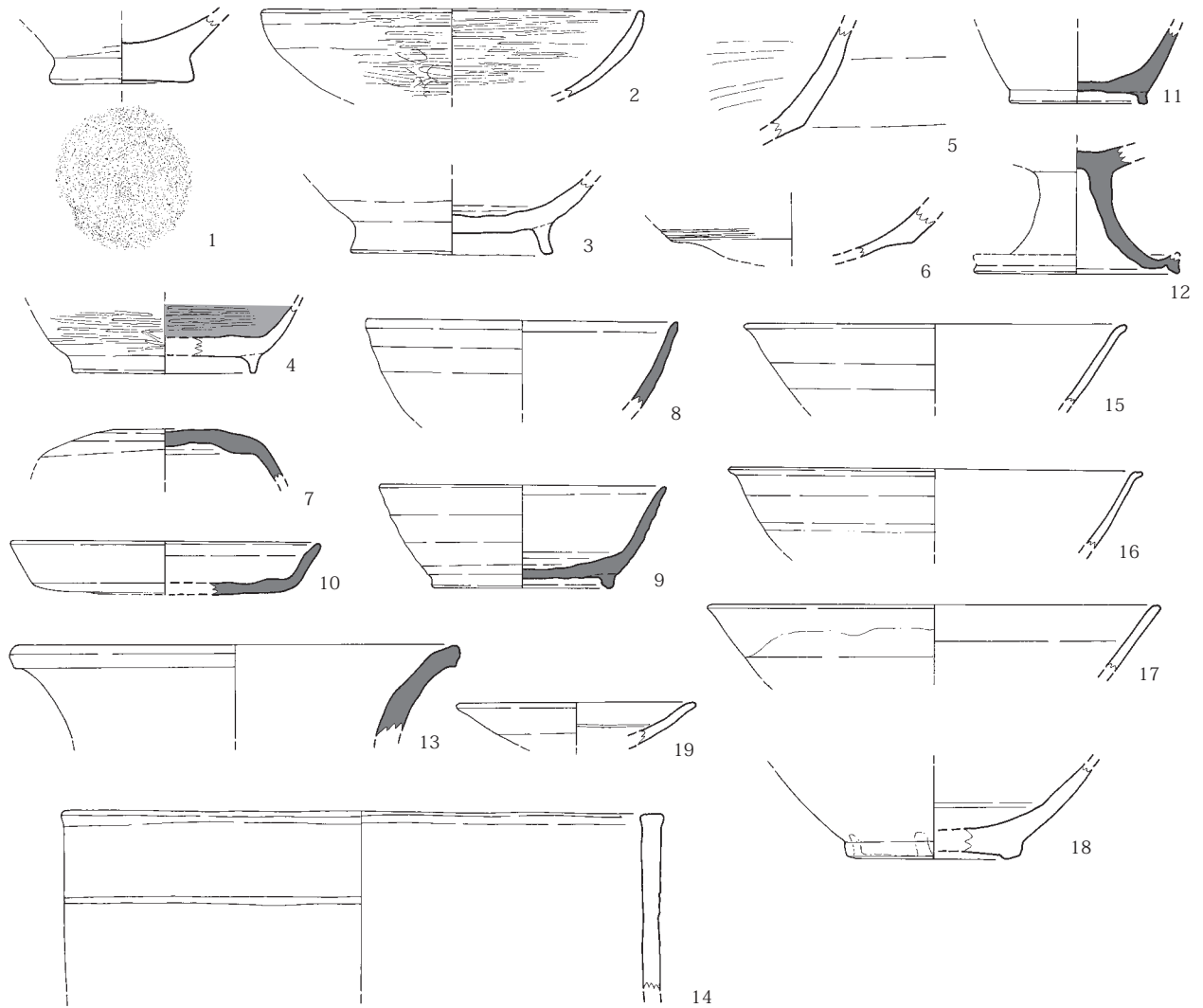
第44図 1・2区斜面包含層出土須恵器表測図5(2は1/3、他は1/4)

大きい褐色パミスが入る。摸骨の隆起線による沈線が斜めに入る。同一個体4点がある。8は口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は板状工具によるオサエ。布目は目が細かく、口縁部片の内面には布目の重なりがあり、胴部片には摸骨の隆起線による沈線が入る。同一個体14点がある。11は口縁部片が反転できない小片である。口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅

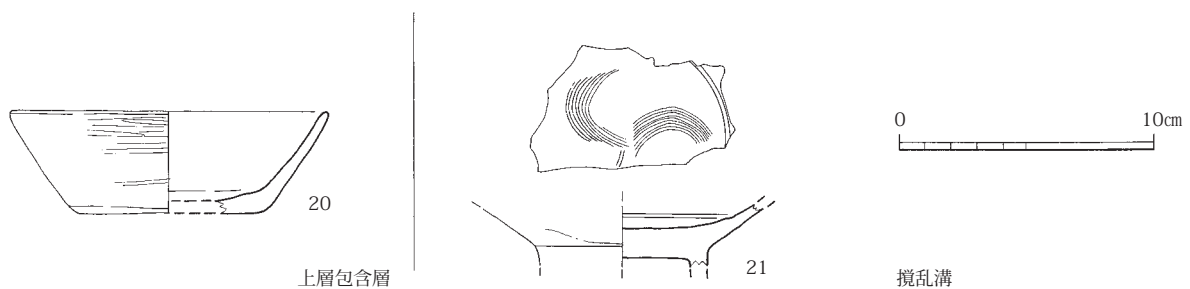


第45図 1・2区斜面包含層出土須恵器実測図6(他は1/3)

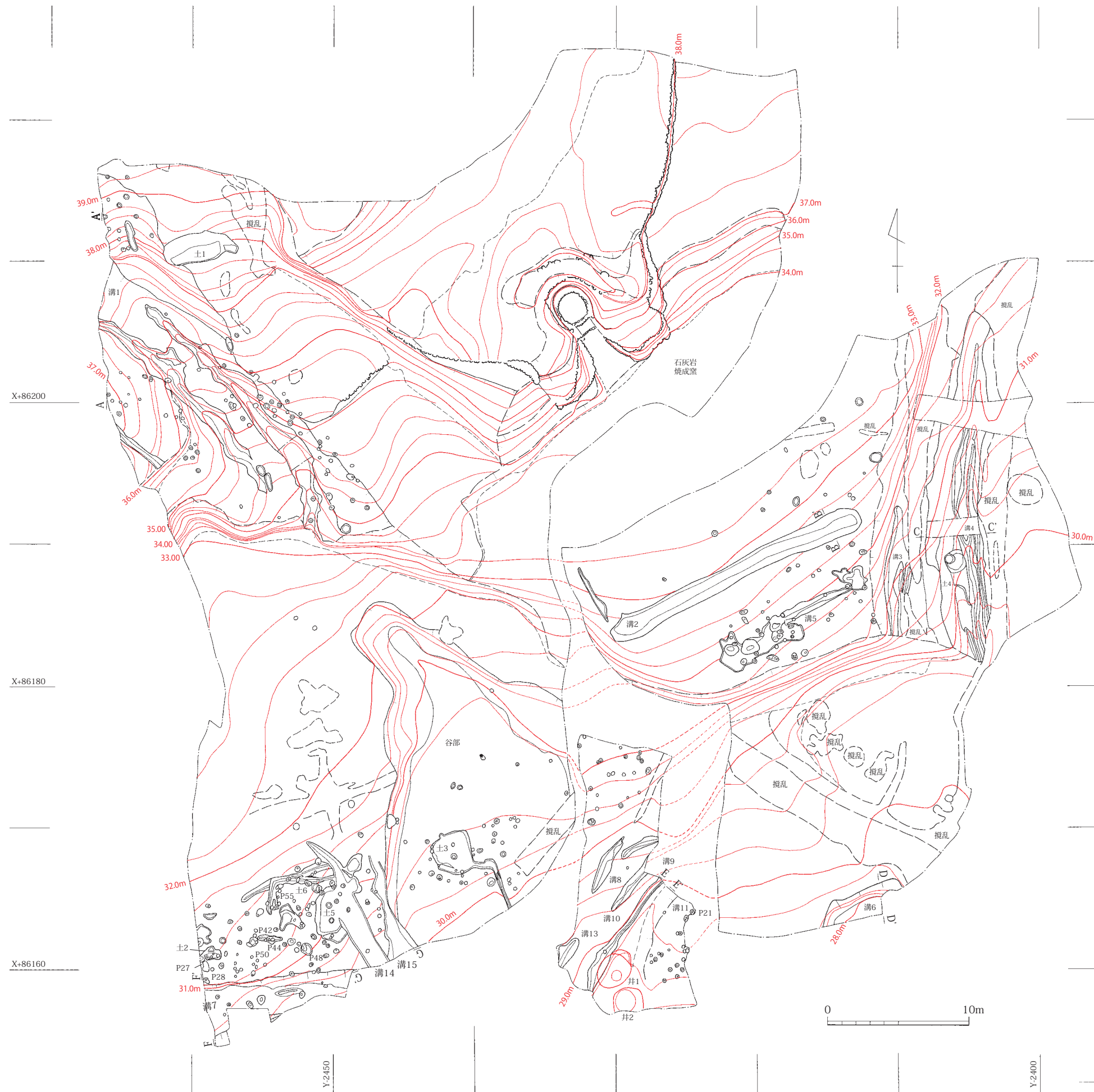
の広い指オサエで、口縁部に塩の付着があるも。同一個体2点がある。13は口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るものだが、部分的に内側に突出している。口唇部は板状工具によるオサエで、精良で軟質。口縁部と胴部片の双方に塩が付着しており、口縁部は外面から口唇部を経て、内面上端の一部まで見られる。内面の布目は目が細かく、縦糸が目立つ。12と13の口縁部の隆起部分は内面に突出する部分の内面の凹凸が一致するので同じ摸骨を使用している。14は器面が残っているにもかかわらず混入物が露出している胎土が特徴的で、堅緻。口縁部と胴部片の位置関係は不明で、口唇部が内面側に折り曲げられず上に尖るもので、口唇部は幅の広い指オサエで、胴部片の内面には摸骨の隆起による凹線が入る。同一個体2点がある。



遺構検出面



第46図 遺構検出面出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第 47 図 馬場長町遺跡 3 区遺構全体図 (1/300)

16は第63図3に胎土・焼成・色調が近く、比較的堅緻。摸骨の隆起による凹線が入る。同一個体1点がある。

第65図7は布目が第65図6に似ているものだが、器壁の厚さが異なるので同一個体ではない。同一個体15点ある。

第66図3の胎土は精良で、器面は残っているのでまちがいなく内面に布目がないもので、2のように胴部上辺には縦に深く入る凹線がある。このことから、この凹線は布目の重なりによるものでないことがわかる。同一個体21点がある。5は口径が小さいもので、口縁部がやや内傾している。胴部片内面の粘土の突起は布の破れ部分だろう。器面が摩滅しているが布目はある。底部片は同一個体ではなく、器面の残りが良い。第53図3に酷似する。同一個体9点がある。7は軟質で精良で、胴部片内面には布目の重なりがある。口縁部の沈線は布目の折り畳み部分である。2次焼成の変色がなく、底部がやや赤化しているのみで、使用していない可能性も残る。同一個体19点がある。11は口縁端部が小さく内傾する点が5に酷似する。精良で軟質。内面に布目痕はない。口縁部はオサエの凹凸がある。底部は内面が灰黒色を呈するので、内器面は剥落している。同一個体25点がある。12は精良な胎土で布目の目の細かい特徴をもつもの。

第67図2は内面に炭化物が付着したもので、布目の折込部分が底面中央からずれた位置にあり、その外面が窪んでいる。9は精良軟質な胎土の底部で、内底部の充填部分で剥離している。布目は剥落したものと思われる。剥落面に付着しているのは塩だろうか。15は精良で堅緻胎土の胴部片で、縦に摸骨の窪みがあり、斜めに入る窪みで欠損している。黄橙色を呈するが、変色がなく、未使用品の可能性がある。同一個体25点がある。16は内外面に塩が付着する小甕の口縁部で、器壁は剥落しているにしても薄い。反転復元できない小片。

第68図1・3・5・8～10・13は鉢形の焼塩壺で、いずれも胎土が精良で軟質である。1は器壁の薄い鉢形で、口縁部が肥厚し、胴中位に屈曲を持つものである。底部に向かって器壁が薄い。内面はナデで、いずれも布目はない。器面が残っているものはわずかである。

第69図16は軽石製の半球形の製品で、平坦面は滑らかに加工しているので欠損面ではない。6g。

遺構検出面出土遺物（図版19・23、第46・61・62・67図）

第46図は、1は防長系の底部が肥厚する杯で、底部は完存している。傾きが大きいので椀になる可能性もある。外底は糸切り。内外黄灰色を呈する。10世紀後半。2は杯で口径は6分の1残存する。外面口縁部はヨコナデ、胴部はケズリで、内外ミガキ。内外橙茶褐色を呈する。8世紀後半。3は椀で、外底は回転ヘラ切り後未調整。内面は器面の摩滅が著しいのは使用のためか。外面が橙色なのに、内面が黄灰白色なのは器面が失われているためである。マール状の胎である。9世紀中葉。4は黒色土器で、外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。高台径で3分の1残存する。10世紀後半。5・6は甕の底部で、底部を押し出すもので、胴下位との間に段があり、底部は器壁が薄い。8世紀後半から9世紀前半。5は内面には炭化物が吸着しており、黒化している。6は外面胴下位にケズリがハケ状に入る。

7～14は須恵器で、7は蓋である。外面ヘラ切り後ナデ消している。8・9は高台付杯で、8は胴下位まで残っているものと思われ、器高の低い小型品であろう。同じ器種の重ね焼き焼成パターンである。8世紀後半。9は口縁部が半分、底部は完存する高台付杯で、外底はヘラ切り後ナデ消している。8世紀後半。10は皿で、口縁・底径ともに4分の1が残存する。同じ器種の重ね焼き焼成パターンである。11は小壺の底部で、半分残る。内底に灰被りがあるので正置して焼成して

いる。12は高杯の脚部で、内外ナデ、焼成良好で、色調差なし。13は甕の口縁部で、歪みがあるため復元口径は不正確だが、中型甕であろう。内面に灰被りがあるので、正置して焼成している。14は甑で、外面口縁下に沈線がある。内外黄橙色で、黒斑があり、部分的に灰白色がかかる。焼成不良品で、8世紀後半か。

15～19は白磁で、15～18は碗である。15・17は黄灰白色、16は灰白色に発色している。16は外面胴下位が釉剥ぎ。18は乳白色に発色する碗底部である。19は小皿で、乳白色に発色する。15～19は11世紀前半から12世紀前半。

第61図2・8・21、62図3はイイダコ壺で、いずれも口縁部が肥厚し、肩部が膨らみ、底部は尖り気味になる。色調は焼成と二次的影響の有無により異なるが、基本的には褐色パミスを含む黄橙色の胎土で、内外面は口縁部ナデで、内面はナデのみだが、底部は強くオサエながら強くヨコナデされている。62図3は図上接合で、完形に復元できる。67図8は焼塩壺で、外器面の残りが悪く、やや赤変している。

上層包含層出土遺物（図版 〃、第46図）

第46図20は上層包含層出土の土師器杯で、内面口縁部と外面には煤が付着しているので、灯明皿だろうか。口径で4分の1残存。9世紀中葉。

攪乱溝出土遺物（図版 〃、第46図）

第46図21は攪乱溝出土の白磁碗で、内面は櫛歯文による花文。外面胴下位は露胎。乳白色に発色する。12世紀前半。

（3）3区の遺構と遺物

3区からは土坑6基、溝状遺構15条、門状遺構1基、石灰岩焼成窯跡などが検出された。

① 土坑

3・5・6号土坑は竪穴建物というべきものであったが、柱穴が不確定なので土坑として掲載する。

1号土坑（図版8、第48図）

丘陵の斜面に沿って掘られた不整形プランの土坑で、床面がほぼ平坦であることからテラス状をなす。出土遺物がほとんどなく、性格も時期もわからない。長軸526cm、短軸220cm、深さ80cmほどを測る。出土遺物からは時期を特定しにくい。14世紀か。

出土遺物（第49図）

1は土師器杯で、小片のため復元底径は不正確である。器面摩滅で調整不明。

2号土坑（図版8、第48図）

谷の南側の緩斜面の端部に位置する小型の土坑で、遺物が比較的多く出土したことから土坑とした。平面略方形の廃棄土坑だろう。長軸112cm、短軸110cm、深さ20cmほどである。

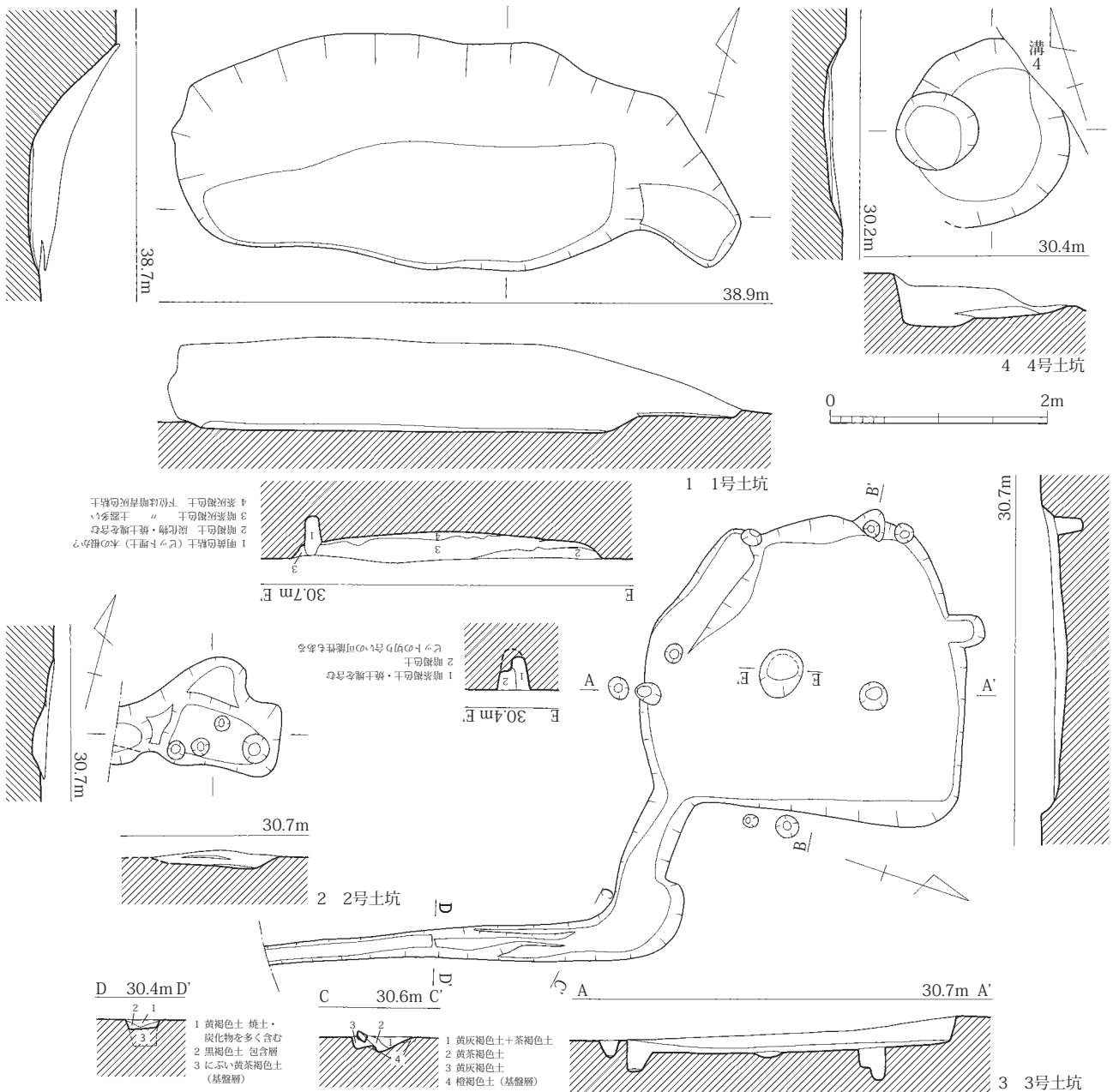
出土遺物から13世紀前半のものである。

出土遺物 (図版19、第49図)

2~7は土師器小皿で、胎土は褐色パミスを含む同じ特徴をもつ。すべて糸切りであろうが、器面摩滅で観察不能なものがある。形態差は個体差と遺存度の差の範疇で、胴部と底部の接合部と中央部がナデ窪む。8は杯で、マーブル状の胎をもつ。小片で、器面摩滅のため詳細不明。

3号土坑 (図版9、第48図)

谷の南側の緩斜面に位置する平面方形プランの土坑で、南東隅に排水用の溝がつく。この溝は明瞭に検出され、L字形を成すのは谷地形に沿わせたためであろう。床面はほぼ平坦で、貼床らしいものはなく、支柱穴の可能性のあるのは中央ピットのみである。周囲の小ピットとともに屋根が葺かれていた可能性はあるが、土坑内に炉跡はない。長軸292cm、短軸284cm、深さ25cmほどで居住する建物としては小さすぎることから、作業小屋のようなものか。出土遺物から13世紀後半~

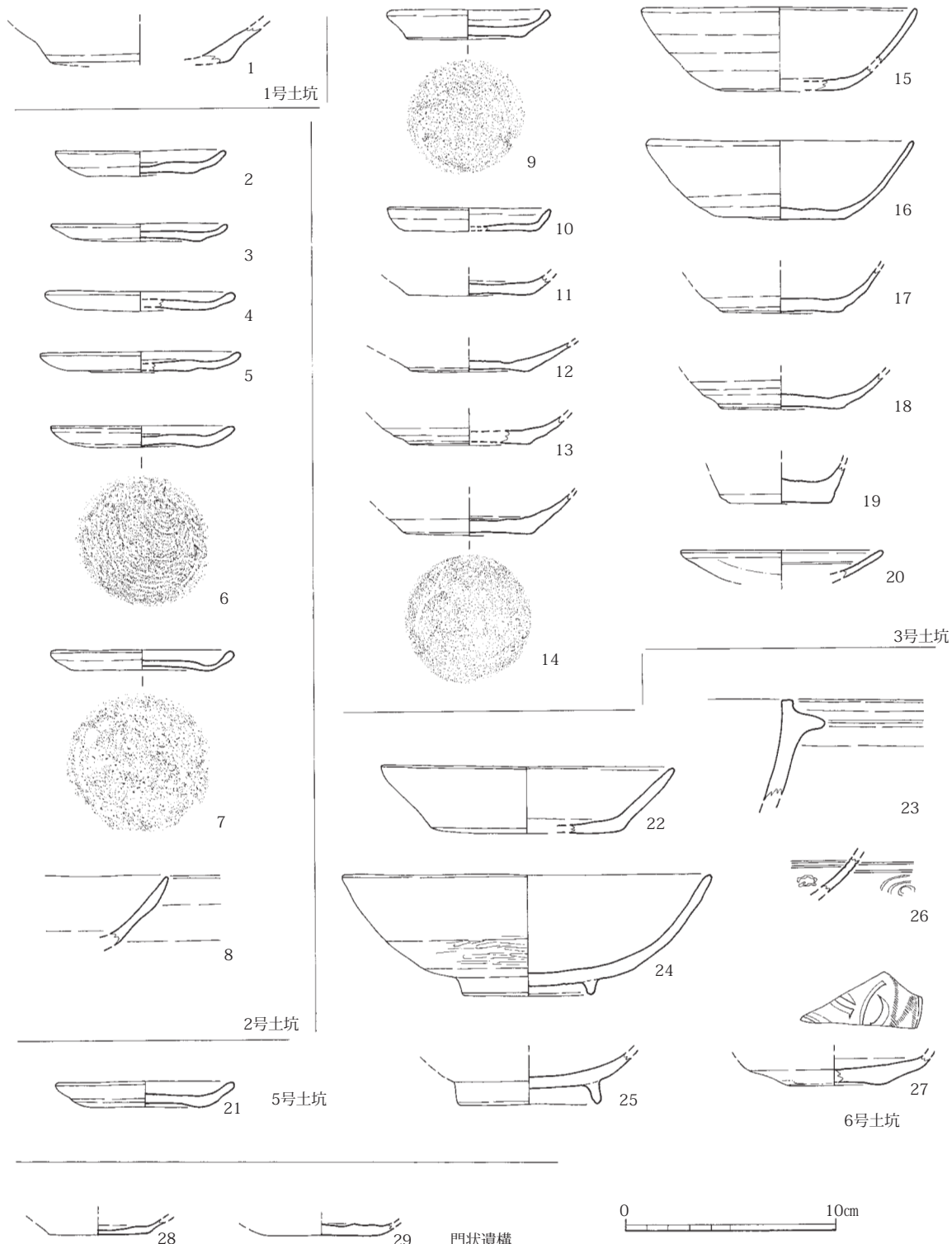


第48図 3区1~4号土坑実測図 (1/60)

14世紀前半代のものと考えられる。

出土遺物 (図版19、第49図)

9～14は土師器小皿で、すべて糸切りであろうが、器面摩滅で観察不能なものがある。9以外の胎土は褐色パミスを含む同じ特徴をもつ。内面は水引き痕が残り、口縁部はやや内湾する。9は白色粒子を多く含む胎土で、口縁部が肥厚するので、他の小皿とは系譜が異なる。15～18も小皿と同じ胎土で、外底は糸切りで、内底に同じように水引き痕が残る。18は焼成不良なだけで、基本的には他と同様に橙褐色である。19はこれらと同じ胎土・色調で壺だろうか。底部は完存して



第49図 3区1～3・5・6号土坑・門状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

おり、外底は回転ヘラ切りである。20は白磁小皿の口縁部で、口径の8分の1が残存している。乳白色に発色する。外面は斜めに露胎部分がある。

4号土坑（第48図）

斜面北側の4号溝状遺構の床面から検出されたもので、切り合い関係はわからない。平面円形プランで、長軸172cm、短軸165cm、深さ20cmほどしかない。遺物がほとんど出土しておらず、性格がわからない。出土遺物はなく、時期を特定できない。

5号土坑（図版10、第50図）

谷の南側の緩斜面に位置する平面長方形プランの土坑で、6号土坑を掘削中に検出されたため、6号土坑との切り合い関係は分からないが、切られている可能性が高い。14号溝状遺構とも切り合うが、先後関係は不明であった。周囲に小ピットが巡り、床面にもピットがあるので、3号土坑のような建物であった可能性もある。もし、同様に排水溝があったとすれば、14号溝状遺構との切り合いで失われているのだろう。15号溝状遺構がこの土坑の北側を囲むように湾曲していることから、周溝の可能性もある。

出土遺物の時期から13世紀前半と考えられる。

出土遺物（図版24、第49・69図）

第49図21は土師器小皿で、糸切りであろうが、器面摩滅で観察不能。褐色パミスを含む胎土。

第69図10は石鍋の鏝の下部の破片で、緻密な石材なため器面が平滑で、加工痕が明瞭に残る。再利用の痕跡はない。36g。

6号土坑（図版10、第50図）

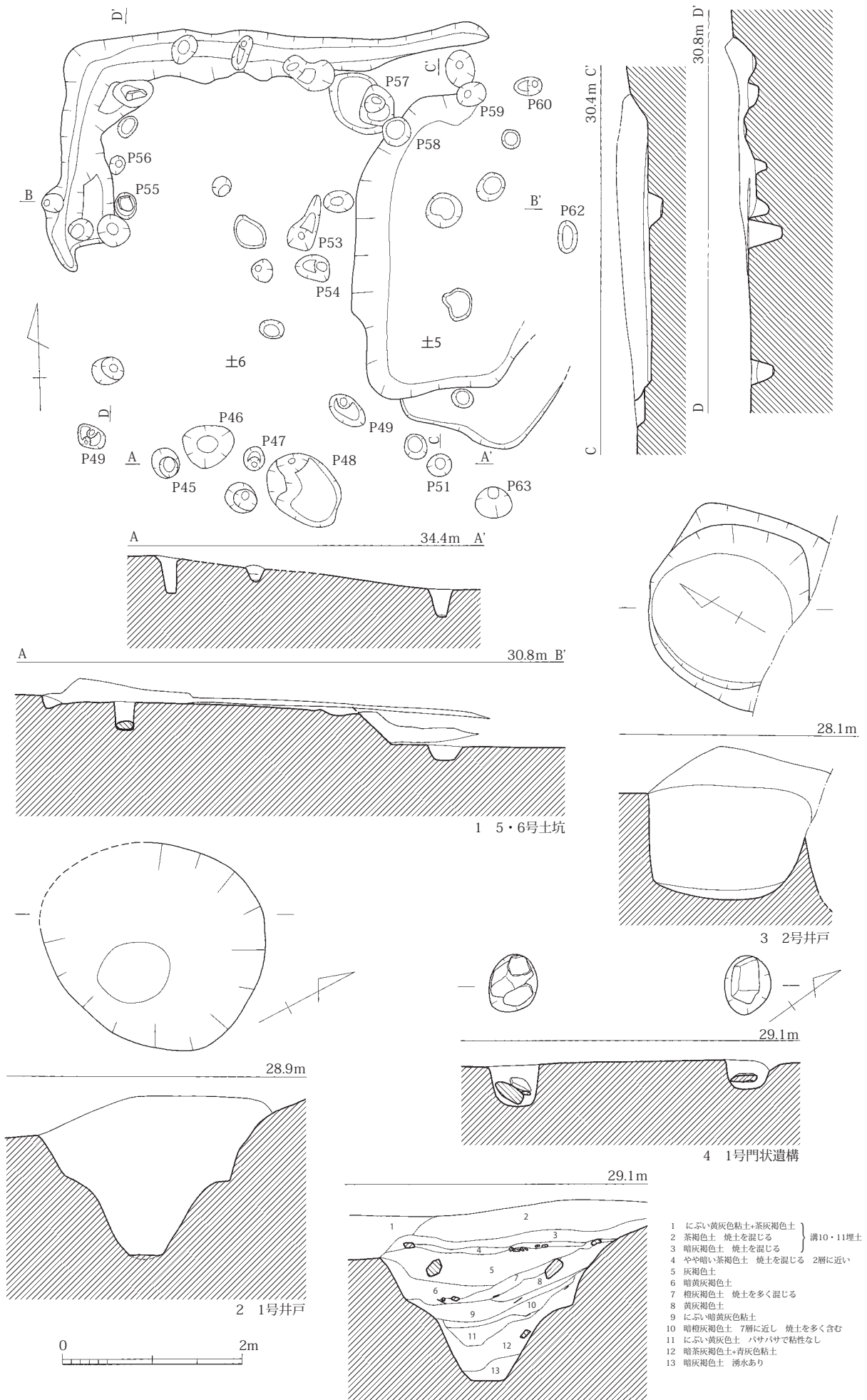
谷の南側の緩斜面に位置する平面方形の土坑の北半分が検出されたもので、東部は5号土坑と切り合う。掘削中に床面から5号土坑が検出されたため、5号土坑を切っている可能性が高いピットが縁を巡っているよう見えるが、周溝とも切り合っている。床面と考えられる範囲にも小ピットがあるが、支柱穴になる規模のものがなく、竪穴建物とする根拠は薄い。15号溝状遺構が周溝らしく周囲を巡っていることから可能性はある。

出土遺物から、時期は12世紀後半である。

出土遺物（図版24、第49・69図）

第49図22は土師器皿で、底部は糸切りであろうが、器面摩滅で観察不能。軟質で黄灰色を呈する。23は土鍋で、内面は器面摩滅、外面は鏝下面以下に煤が付着する。胎土にはカクセン石と雲母を多く含む。24・25は瓦器椀で、24は口縁部と底部の図上接合で、口縁部外面と内面が灰黒色、外面は灰白色を呈する。外面はミガキが見られるが、器面摩滅で観察不能。25は器面摩滅は内外灰白色だが胎土・焼成は瓦器のものである。詳細は観察不能。26は粉青沙器で、内外象嵌が入る。28は龍泉窯青磁の小皿で、オリーブ色の青磁釉が掛かり、外底は釉剥ぎ。内底の片切彫りの花文と櫛歯文は、釉が厚いので鮮明でない。

第69図11は石鍋の底部片を加工したもので、煤が付着している方が外面である。縁部を丁寧に打ち欠いて滑らかにしている。31g。



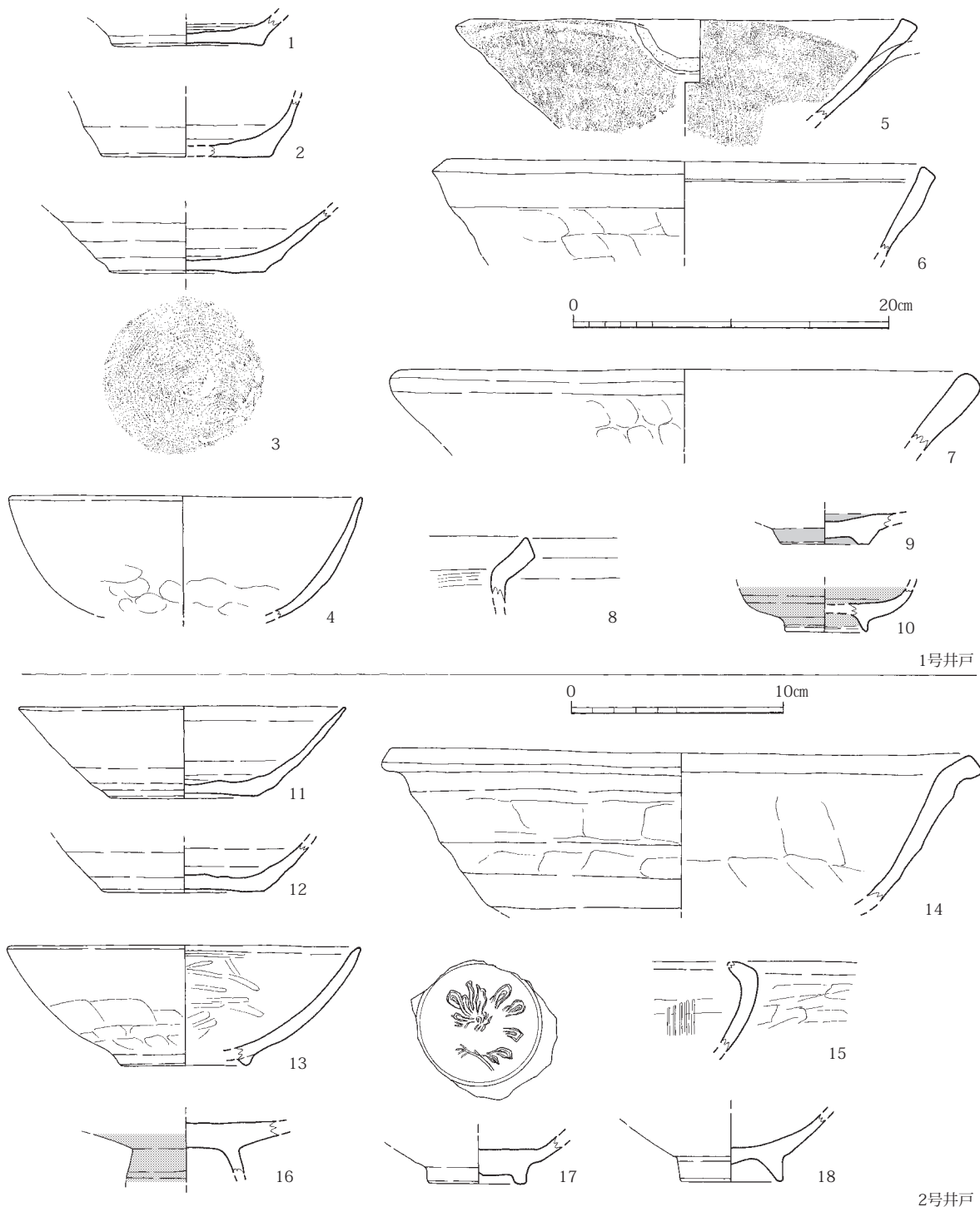
第50図 3区5・6号土坑、1・2号井戸、門状遺構実測図 (1/60)

② 井戸

1号井戸 (図版 10、第 50 図)

調査区中央南端で攪乱穴の下から検出されたもので、1号井戸に近接している。径約 230m、深さ約 180cm で、壁はやや緩やかな立ち上がりであった。床面から 50cm 角ほどの石灰岩 2 個が出土した。周囲に覆屋を構成するピットはない。10・11 号溝状遺構に切られ、出土遺物は 15 世紀前半のものが多く、14 世紀前半の瓦器椀と近世陶器が混入している。

出土遺物 (図版 24、第 51・69 図)



第 51 図 3 区 1・2 号井戸出土土器・陶磁器実測図 (5・6 は 1/4、他は 1/3)

第 51 図 1・2 は土師器の皿で、3 は杯であろう。胎は褐色パミスを含む共通する特徴を持ち、2 は摩滅しているが外底はいずれも糸切りである。内底は水引き痕を残す。4 は瓦器椀で、外面は灰黒色と灰白色と黒色に分かれる重ね焼き痕で、口径 6 分の 1 から反転復元している。5・6 は土師質、7 は瓦質で、6 は外面が瓦質化しているが、焼成不良の内面は土師質である。5 は摺鉢、6 は外面に煤が付着しているため土鍋である。7 は摺目が無いが、摺鉢だろう。8 は内外黒灰色を呈する瓦器で、胎は暗灰色を灰白色が挟む。9・10 は陶器で、9 は黒く発色する鉄釉の茶入底部。10 は高取系の皿底部片である。外面は薄い鉄釉で、藁灰釉を上掛け。内面は藁灰釉がかかる。

第 69 図 8 は 7 層出土の石鍋片で、中位の破片の縁を丁寧磨いており、それ以外の辺は欠損のままである。104 g。

2号井戸（図版 10、第 50 図）

調査区中央南端の攪乱穴の下から検出されたもので、2号井戸に近接している。径約 180cm、深さ約 170cm で、壁はやや内湾していた。周囲に覆屋を構成するピットはない。出土遺物は 13 世紀前半の瓦器椀から近世陶器まであり、時期を特定にしにくいだが、土師器皿から 15 世紀の年代を採用した。床面近くから鶴嘴が出土している。

出土遺物（図版 23、第 51・70 図）

11・12 は土師器の皿で、土師器小皿で、1号井戸出土の第 51 図 3 と同様に内面の水引き痕の幅が広いという同じ特徴をもつ。胎土は褐色パミスが入らずマーブル状の部分がある。どちらも糸切りであろうが、12 は器面摩滅で観察不能。13 は瓦器椀で、内外器面摩滅だが、内面口縁部はミガキが残り、外面は上半がヨコナデ下半にオサエ列があることはわかる。内面が全面灰黒色で、外面口縁部が黒色を呈し、それ以下は灰白色を呈する重ね焼き痕であろう。14 は土師質の土鍋で、外面は煤付着、内面は器面摩滅。15 は瓦質土器の摺鉢で、内外灰黒色、断面は灰白色を呈する。16 は高取系の陶器で、外面は薄い鉄釉、内面は藁灰釉がかかり、脚内は露胎である。17 は龍泉窯系青磁碗で、外面は幅の広い鎬連弁文があり、見込みは花文のスタンプが入る。オリーブ色に発色し、貫入がある。畳付は釉剥ぎで高台内面は露胎である。外底中央に窪みがあるのが特徴的である。18 は呉器手の陶器椀で、内外黄灰白色の灰釉がかかる。胎は黄橙白色で軟質なので、高取で生産されたものかもしれない。

第 70 図 6 は完形の鶴嘴で、臍孔には鉄の芯をもつ楔が入っており、その上に別の部材を被せている。

③ 門状遺構（図版 10、第 50 図）

調査区端から検出されたもので、自然扁平礫をピットの底面に敷いている。径約 50cm、深さ約 40cm の柱穴 2 基で構成されている。東に広がる掘立柱建物跡の一部であった可能性があるが、削平を受けているため確認できないので、ここでは門状遺構とする。西側の複数の小溝は平坦面の縁に掘られているので、この遺構が立地する平坦面の排水施設だろう。

出土遺物から 14 世紀代であろう。

出土遺物（第 49 図）

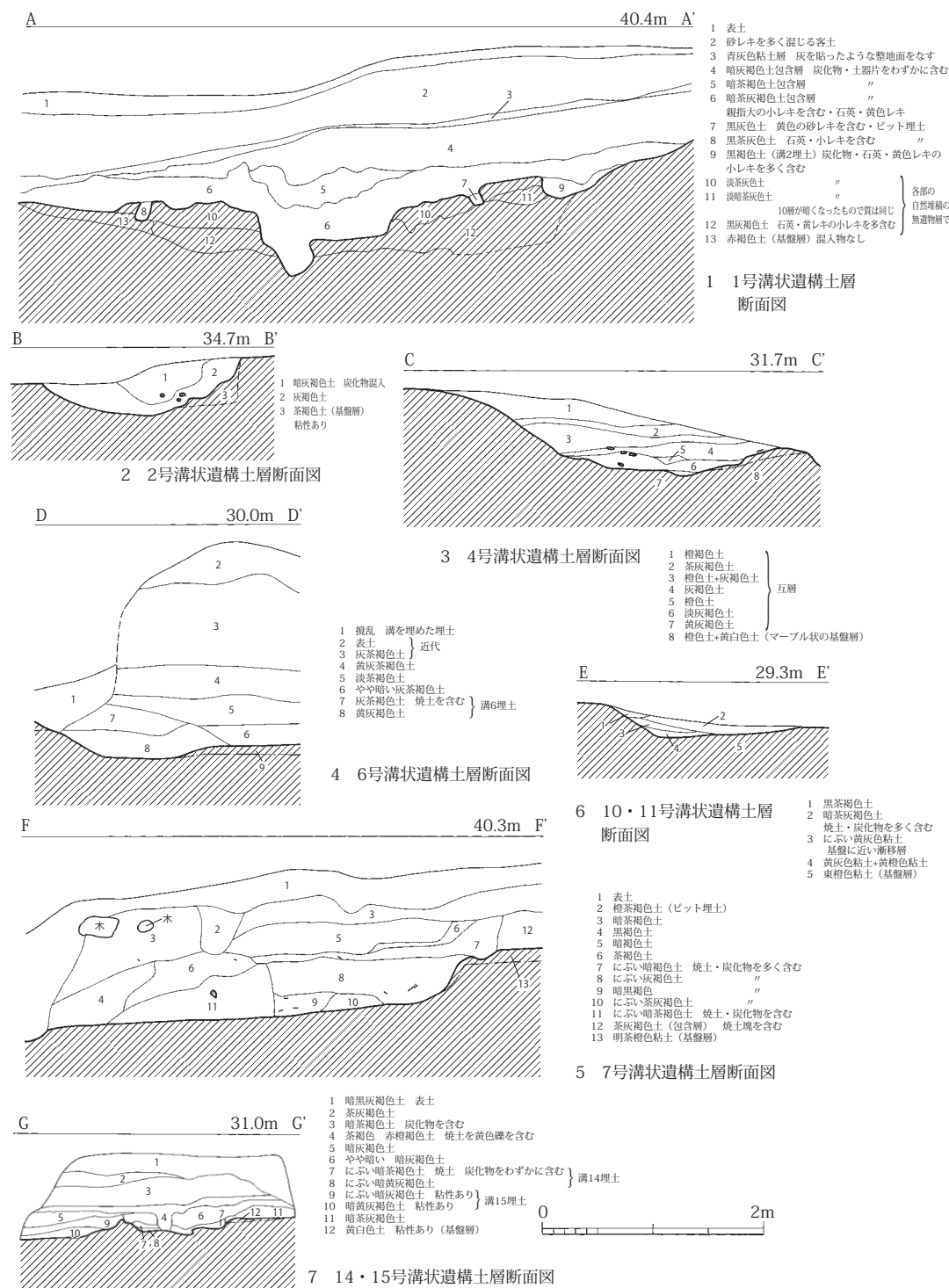
28・29 も褐色パミスを含む胎土だが、器面が残っており、どちらも糸切りで、29 は板状圧痕がつく。14 世紀代。28 は高台と胴下位の境界があいまいで、傾きが大きく、内面の水引き痕をナデ消している。

④ 溝状遺構

15条の溝が検出されており、12号溝状遺構は欠番である。

1号溝状遺構 (図版 11、第 47・52 図)

北西部で確認された溝で、黒褐色土を埋土とする。幅は 160cm、深さは 65cmほどで、南ほど深く



第 52 図 3区 1・2・4・6・7・10・11・14・15号溝状遺構土層断面実測図 (1/60)

なる。谷部にあり、谷地形に沿っているので、水流の痕跡かもしれない。出土遺物がなく時期は不明。

2号溝状遺構（図版7・11、第47・52図）

端部が立ち上がっていたので当初土坑としていたが、長く検出され、深さも均一であったことから、溝状遺構と考えた。幅190cm、深さ60cmほどを測る。立ち上がり部分を陸橋部とする区画溝だろうか。土層から、北側が高かったことがわかる。出土遺物がないため時期を特定できない。

3号溝状遺構（図版7、第47図）

調査区東部で、平坦面縁に沿って南北方向に走り、斜面下の4号溝状遺構に併走する。幅190cm、深さ40cmほどで、床面は複数の小溝が入るので、掘り直しがあったとようだ。出土遺物から14世紀代か。

出土遺物（第53図）

第53図1は土師器小皿の小片で、1は軟質精良で、内底には水引き痕跡が目立つ。

4号溝状遺構（図版7・11、第47・52図）

調査区東部で、平坦面東斜面下に位置し、浅く複数の小溝が入るので、掘り直しが行われていただろう。南北方向に3号溝状遺構に併走し、北端は急激に立ち上がっていたため、調査範囲より北には延びていない。堆積はほぼ水平で、橙褐色土と灰褐色土の互層であることは、人為的に埋められたことを意味する。出土遺物から15世紀前半の所産である。

出土遺物（巻頭図版4、第53図）

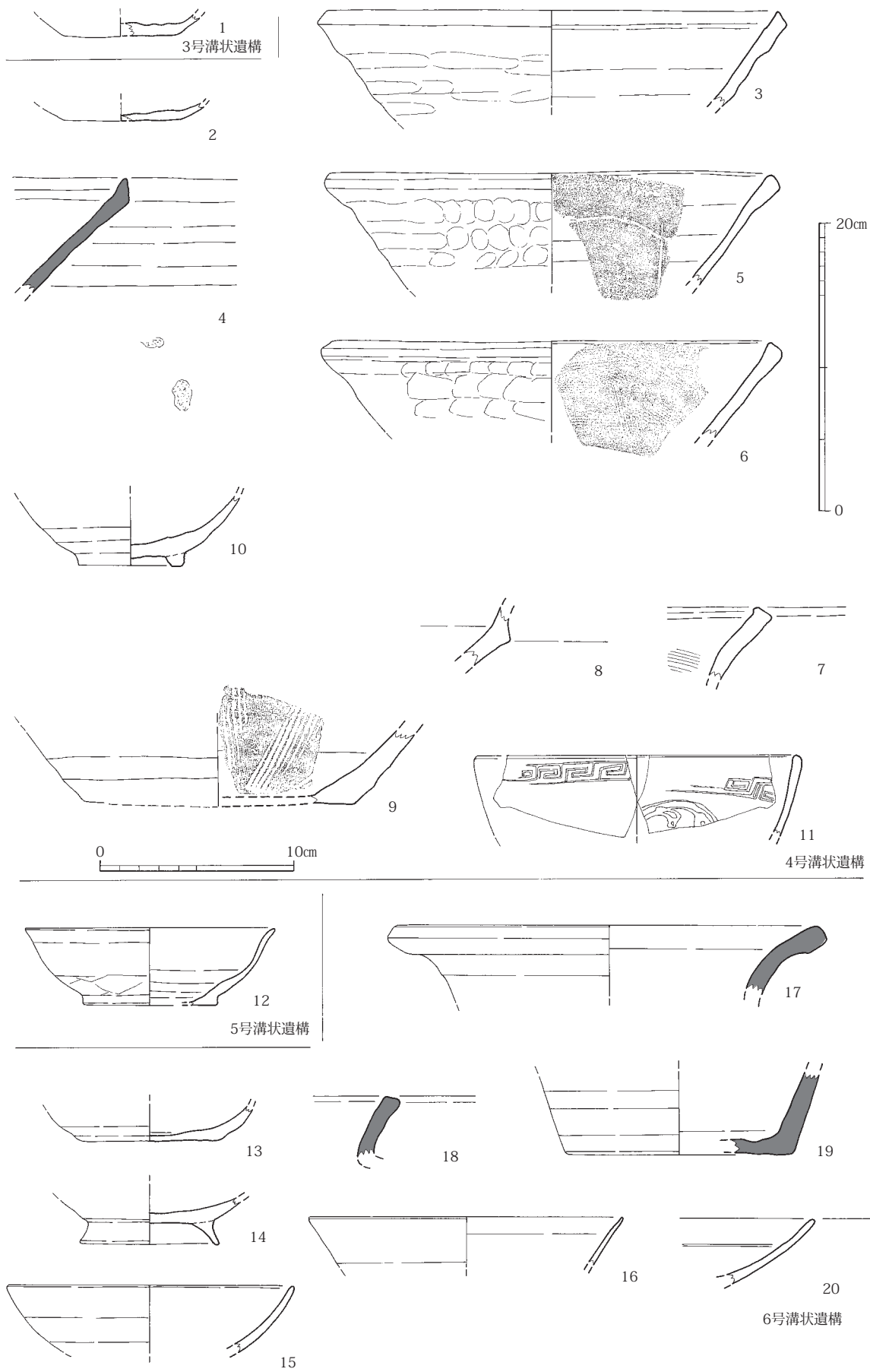
第53図2は土師器小皿の小片で、内外黄灰白色で、外底に板状圧痕のみ見られ、糸切りは摩滅している。3は土師質の土鍋で、外面は煤付着で、内面は器面摩滅。4は東播系須恵器の鉢で、鮮明でないが、外面口縁部のみ暗く変色している。5・6は摺鉢で、5は内外黄灰色で変色なし。外面は外傾部にオサエが集中する。6は瓦質の摺鉢で、内面はハケ目の上に摺目が入る。外面は口縁下までヨコナデ、それより下はオサエ。口径や傾き、外面の調整が5と6が酷似し、内面の調整が異なるのみなので、5は土師質ではなく、瓦質の焼成不良であろう。7は内外灰黒色を呈する瓦質土器で、内面はヨコハケ。8・9は焼き締め陶器の摺鉢で、8の突帯下が変色しているのは重ね焼きのためである。9は外底の端部にオサエが見られるもので、外面は小豆色なのに内面は発色不良なのは重ね焼きのためである。10は白磁だが、内底に胎土目がつく。畳付と高台内部にも釉が掛かり、内外と畳付に胎土目跡がつく。外面胴部は器面が不均一なので、中国産ではない。朝鮮半島産だろうか。11は龍泉窯系青磁碗で、内外口縁の雷文はスタンプで、斜めにずれている。内面胴部には何らかの文様のスタンプがある。

5号溝状遺構（図版7、第47図）

調査区東部中央に位置し、2号溝状遺構に併走する。削平のため部分的にしか残っていない。最大幅で90cm、深さ18cmほどを測る。出土遺物から10世紀前葉のものだろう。

出土遺物（第53図）

12は土師器碗で、内底は水引きで薄くされている。外底は摩滅していて切り離し方法は不明だが、糸切りの可能性が高い。



第53図 3区3～6号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(3・5・6は1/4、他は1/3)

6号溝状遺構 (図版7・11、第47・52図)

北東部隅の斜面裾から検出された溝で、斜面に沿って走っており、4・7号溝状遺構とつながる可能性がある。端部を攪乱に切られており幅160cmほど、深さは50cmほどを測る。埋土には焼土を含む。出土遺物には9世紀前半の混入もあるが、おおむね10世紀前葉あから中葉だろう。

出土遺物 (第53図)

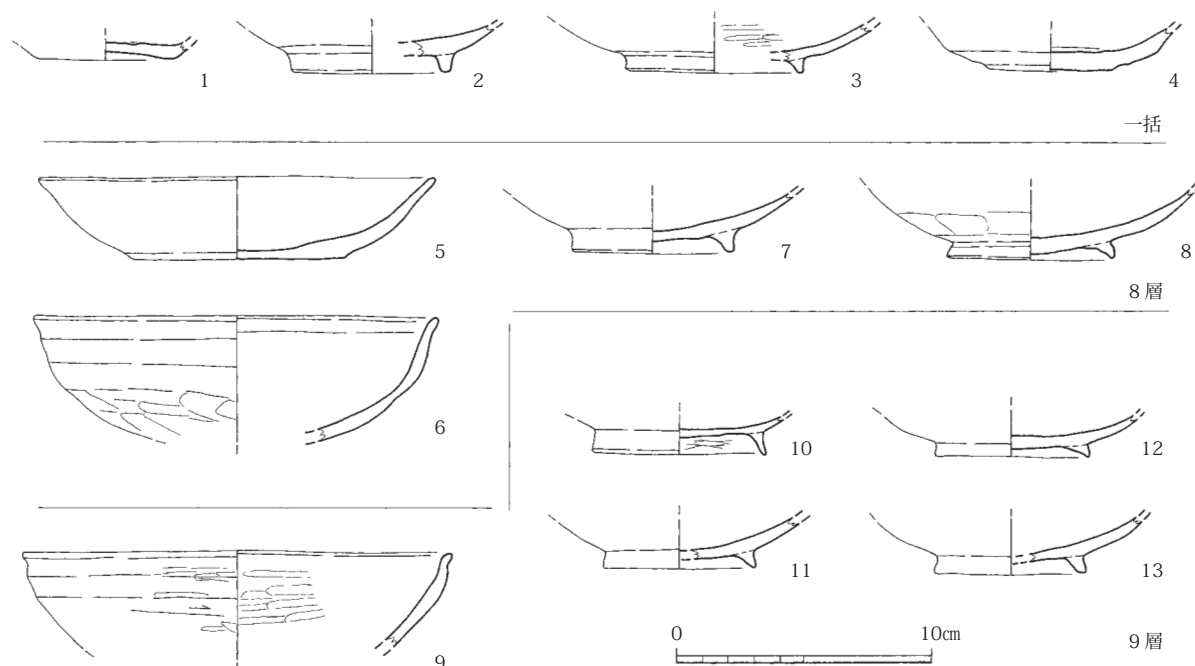
13は外底に高台状にする土師器碗で、内底は水引きで薄くされている。外底は摩滅していて切り離し方法は不明。13～16の土師器の胎は褐色パミスを含む。13は皿で、摩滅しているが外底は糸切りであろう。14は皿か碗でにぶい暗灰褐色に変色している。15・16は碗で、器面摩滅で、調整不明。17・18は須恵器の中型甕で、17は焼成良好。18は口縁部が直立気味の甕であろう。19は壺の底部であろう。外面胴下位は回転ヘラケズリ。外底部には静止ヘラケズリの痕跡がある。20は青磁の皿であろう。黄緑灰色を呈する。

7号溝状遺構 (図版7・11、第47・52図)

調査区南西端に位置し、丘陵斜面に沿って東西方向に走る。東端が南に湾曲している。溝の端部は捉えられず幅は不明だが、深さ75cmに復元できる。比較的土器がまとまって出土しており、遺物から土層の時期を推定すると、8層は10世紀中葉、9層は10世紀後半。11層は11世紀から12世紀後半と考えられ、8・9層は11層を掘り込んでいるのではなく、端部を切って掘り直していることになる。

出土遺物 (図版24、第54・69図)

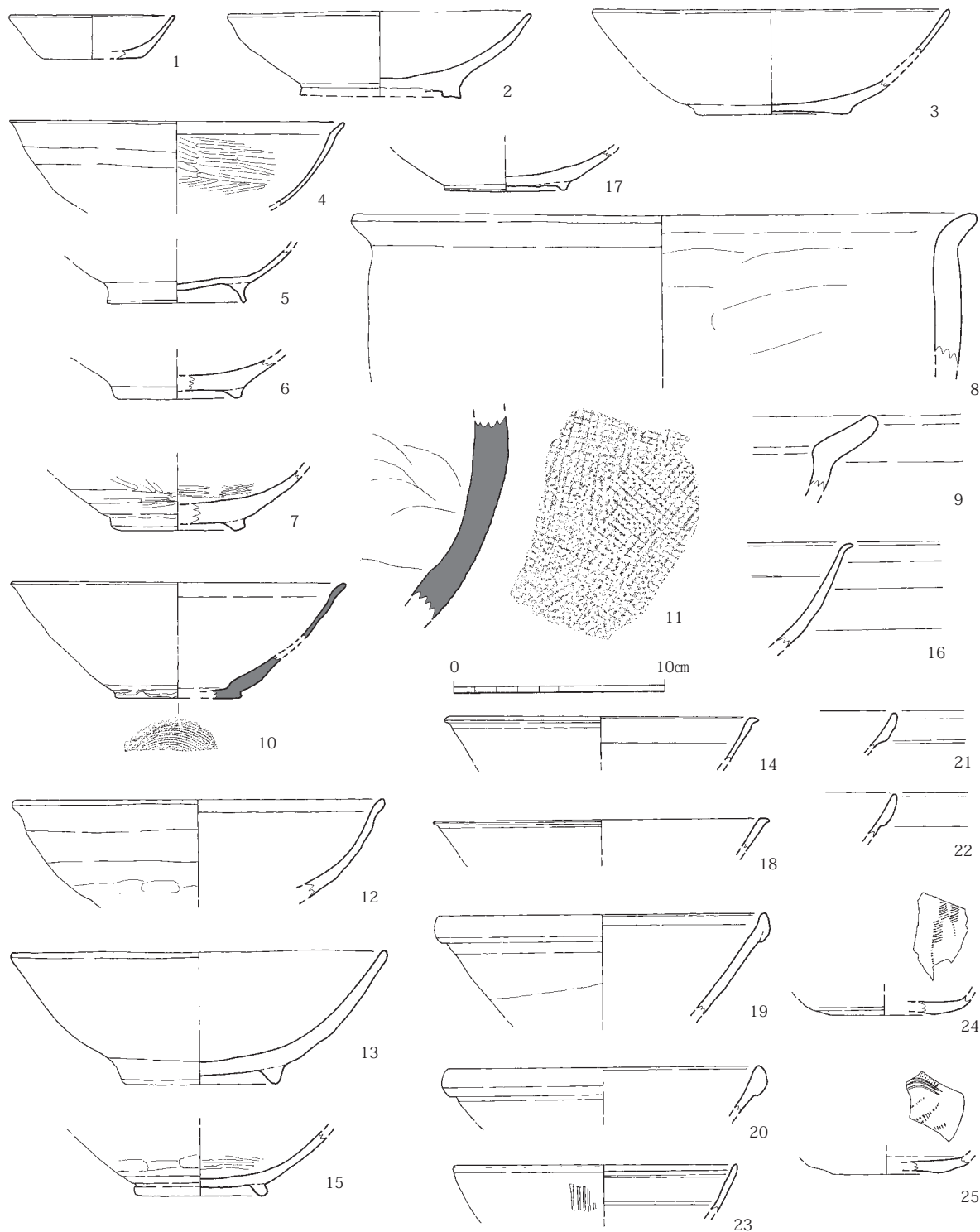
第54図1～4は一括で取り上げたものである。1は橙褐色系の土師器小皿で、外底は糸切りの可能性をもつ。2は灰白色系の碗、3は瓦器碗であろう。断面中央部は黒灰色で、内面は灰白色である。4は黄灰白色系の小皿で、外底は糸切りの可能性がある。5から8は8層出土で、5は皿で、器面が摩滅しており、胎土内の砂粒が露出している。外底は回転ヘラ切りであろう。灰白色系の色調であろう。6は小さな高台がつく高台付碗であろう。内外器面が摩滅しているため不明瞭だが、



第54図 3区7号溝状遺構出土土器実測図(1/3)

9の系譜を引くものと見られる。外面口縁部は2段のヨコナデで、外面胴部はケズリであろう。内面の黒灰褐色は黒色土器ではなく、変色によるものと見られる。7は内外黒灰褐色だが、瓦器の胎土ではなく、黒色土器にして黒色が薄い。土師器の焼成不良としたい。高台と底部の接合部にナデ窪みがある。8は外面の高台と胴下位の間に抉りが入り、高台先端が尖る。外底は回転ヘラ切りであろう。灰白色系の色調なので、外面の灰褐色は2次的な変色であろう。

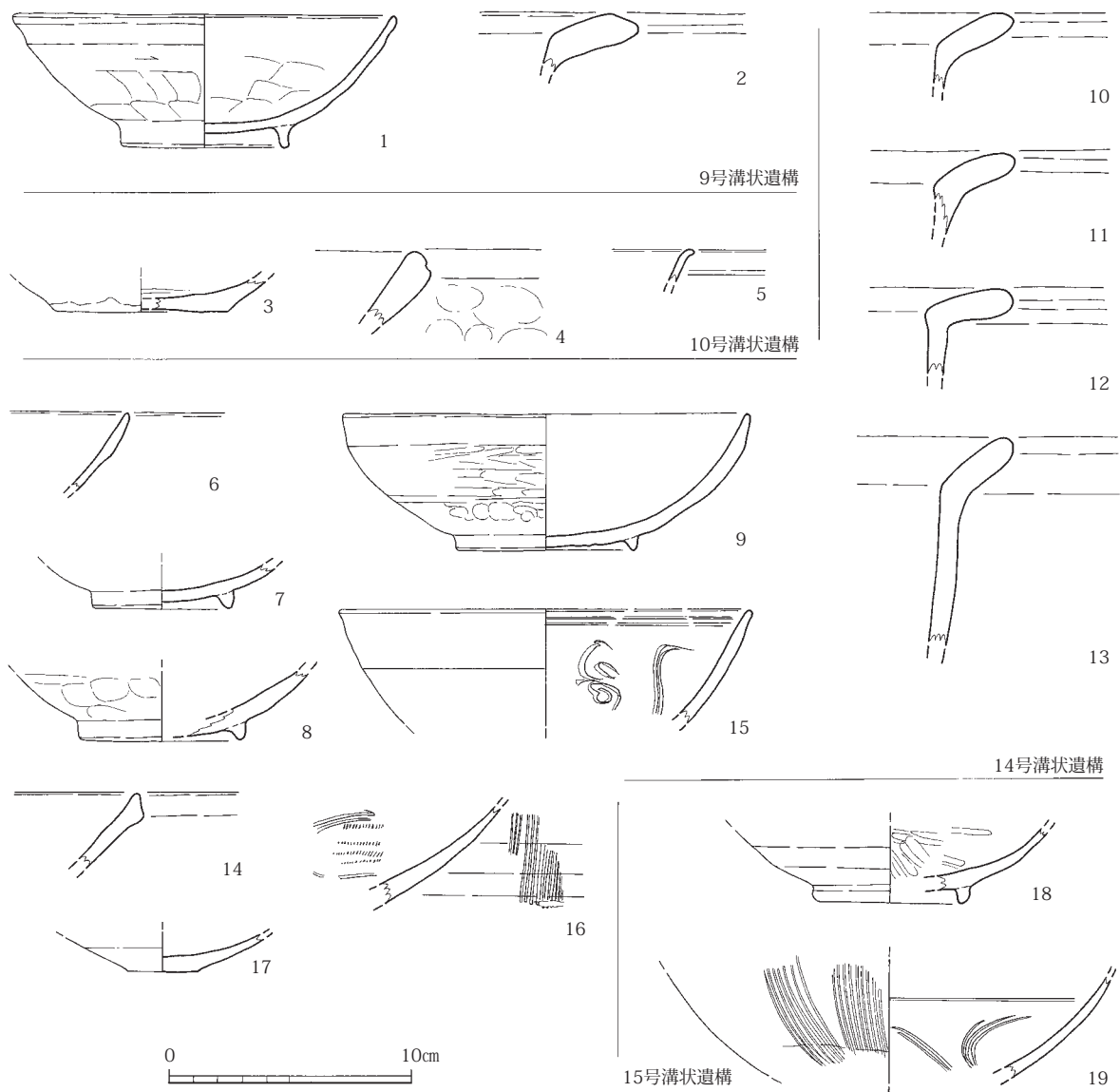
9から13は9層出土で、9は小さな高台がつく土師器高台付椀であろう。器面の残りがよく、



第55図 3区7号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

外面口縁部は2段のヨコナデで、胴部はケズリをナデ消している。本来灰白色の色調である。10～13はいずれも土師器碗の底部片である。10～12は高台の先端が尖るもので、外底は回転ヘラ切りであろう。12の高台端部が尖るのは欠損によるものではなく、器面の摩滅が器壁を薄くさせている。また、外面の高台と胴下位の間に挟りが入る。

第55図は11層出土である。1は金雲母を含む黄灰白色系の小皿である。器面摩滅で調整観察不能。2・3は褐色パミスを含む橙褐色系の皿で、底部が肥厚するもので、高台はない。外底は回転ヘラ切りだろう。4～6は黄灰白色系の土師器碗で、灰白色の間に黒灰色が挟まる胎土である。5は土師器碗の底部で、黄灰白色系で、高台の先端は尖る。内底中央が水引きの最後に押し出されている。口縁部は欠損している可能性がある。6は器面が摩滅しているが、外底は回転ヘラ切りの後、高台との接合部をナデ窪ませている。7は黄灰白色系の土師器碗で、器面が良く残っており、内底に重ね焼きの痕跡がある。外底はナデ仕上げ。8は丸底の甕になるものと思われ、器壁が厚い。内面はわずかに器面が残っているが、外面はまったくのこっておらず、タタキが入るのかは不明。9



第56図 3区9・10・14・15号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

は土鍋で、器面が剥落している。茶褐色で混入物の多い胎土である。体部は内外ともに暗褐色に変色している。10は東播系須恵器碗で、口縁部と底部は図上接合で、底部は糸切りである。11は胴部が球形にふくらむ須恵器の甕で、器壁が厚い。内面は無文のタタキの当て具痕がある。12～15は瓦器碗で、いずれも器面の残りが悪い。12・13は内外面口縁部が灰黒色で、胴部は灰白色を呈し、15は内外暗青灰色を呈する。13は口縁部が8分の1しかないが、底部は完存しており、器壁が厚く大振りの碗である。15は高台と胴下位の外面接合部をナデていない。

16～22は白磁碗で、16～18は口径がほぼ等しい口縁部が外傾する碗である。19・20は玉縁口縁碗で復元口径がほぼ一致する。21・22は細長い玉縁口縁の碗で、貫入がある。

23～25は同安窯系の青磁で、23は外面に櫛歯文の入る碗で、内面は沈線が入る。24・25は小皿で、内底には櫛歯文が入る。

第69図15は11層出土の石鍋転用品で、方形の把手のつく口縁部の転用で、図の上面はケズリ面があり、下部の縁は欠損している。穿孔位置が中心になる可能性が高い。外面は煤付着で灰黒色を呈する。19gを測る

8号溝状遺構（図版8、第47図）

南端部中央にあり、北東から南西に湾曲しながら走る幅60cm、深さ13cmの小規模な溝状遺構で、同一直線状にある13号溝状遺構につながる可能性がある。出土遺物がないので時期はわからない。

9号溝状遺構（図版8、第47図）

8号溝状遺構の南東に位置し、10号溝状遺構に併走する。北東部は調査区外に出るが、谷の現代の堀切人道に掘り崩されている。幅65cm、深さ160cm程を測る。出土遺物から12世紀中葉の所産である。

出土遺物（第56図）

1は瓦器碗で、外面口縁部が灰黒色で、他はにぶい黄灰色を呈する。器面摩滅だが、外面胴下位のオサエが残る。外底の切り離し方法は不明。2は土鍋の口縁部で、カクセン石と雲母を多く含む胎土で、外面のみ煤付きがある。

10号溝状遺構（図版8、第47・52図）

9号溝状遺構の南東に位置し、11号溝状遺構に併走する。北東部は調査区外に出るが、谷の堀切人道に掘り崩されている。土層から11号溝状遺構の掘り直しである。南に行くほど残りがよく、幅180cmほどであった可能性がある。深さは50cmを測る。南西方向への排水溝であろう。1号井戸が完全に埋没した後に切ることから、それ以降ということはわかる。出土遺物は15世紀代である。

出土遺物（第56図）

3は土師器の皿で、橙褐色の褐色パミスを含む胎土で、内面の水引き痕の幅が広い。4は土師質の土鍋で、外面はオサエ列が残る。5は白磁碗の口縁部片で、発色は良好。

11号溝状遺構（図版8、第47・52図）

9号溝状遺構の南東に位置し、10号溝状遺構に切られる。北東部は調査区外に出るが、谷の堀切人道に掘り崩されている。幅170cm、深さ30cmを測るが、南端部ではさらに広がっている。溝の西側が高き、平坦面端部の排水溝であろう。

出土遺物はなく、時期は特定できないが、1号井戸が完全に埋没した後に切ることから、それ以前ということはわかる。10号溝状遺構に切られることから15世紀代だろう。

13号溝状遺構（図版8、第47図）

8号溝状遺構の南西に位置し、北東から南西に走る幅120cm、深さ15cmの小規模な溝状遺構で、8あるいは9号溝状遺構と同一溝状遺構の可能性はある。出土遺物がなく、時期不明。

14号溝状遺構（図版7・11、第47・52図）

調査区中央南端部に位置し、南北に走り5号土坑と切り合うが、先後関係ははっきりしない。幅は160cmほどで比較的均一で、最深部でも25cm程の深さしかなく、床面はほぼ平坦なので、通路の可能性はある。出土遺物から12世紀後半代。

出土遺物（巻頭図版4、第56図）

6は土師器碗で、マーブル状の胎土である。7は土師器碗で、黄橙色を呈する。器面摩滅で調整をを観察できないが、底部は回転ヘラ切りだろう。8・9は瓦器碗で、8は内外灰色を呈する。器面摩滅で調整を観察できない。9は外面口縁部と内面胴部が灰黒色で、他は青灰色を呈する。器面摩滅だが、部分的にミガキが残る。外底は回転ヘラ切りで、板状圧痕も見られる。10から13は土鍋の口縁部で、いずれもカクセン石と雲母を多く含む胎土で、10～12は外面のみ煤付きがあり、13は内外面にある。11は下端が器壁が薄くなっているのは剥離しているためであろう。14は東播系須恵器の鉢で重ね焼きのため外面口縁部は灰黒色を呈する。15は龍泉窯青磁碗で、片切彫りの内面に花文が入る。暗いオリーブ色で発色良好だが、貫入がある。16は同安系青磁碗で、外面は櫛歯文、内面は片切彫りの花文と櫛歯文で、オリーブ色で良好な発色をする良品である。

17は青磁小皿で、焼成不良で発色が悪く灰白色を呈する。内底には重ね焼き痕と胎土目跡があり、外面は胴下位が釉剥ぎ。外底は回転ヘラ切り。

15号溝状遺構（図版7・11、第47・52図）

14号溝状遺構の東に位置して南北方向に走っていたようだが、その部分は失われており、5号土坑の東から検出され、西に湾曲する。南端部は土層から幅170cm、深さは35cmほどを測る。14号溝状遺構の床面から検出されたので、切られている。また、6号土坑の周溝との切り合い関係は明らかだった。5号土坑を巡るような湾曲なので周溝の可能性はある。

出土遺物から12世紀後半代。

出土遺物（第56図）

18は瓦器碗で、器面の残りがよく、内外灰白色を呈し、灰黒色部分は残っていない。19は同安系青磁碗で、外面は櫛歯文、内面は片切彫りの花文と櫛歯文で、淡いオリーブ色で良好な発色をする良品である。

⑤ その他の遺構と遺物

谷部出土遺物（巻頭図版4・図版21・24、第57・60・69図）

12世紀中葉を上限とし、13世紀後半を下限とする。

第 57 図 1～13 は土師器の皿である。1・2 は小皿で、1 は底部が摩滅しているが糸切りだろう。2 は内面水引きの幅が広いものである。3 は底部の器壁の厚さから、本来器高がまだ高いと考えられるので、欠損部を滑らかに加工して再利用したのではないだろうか。4 は内面に幅の狭い水引き痕があり、中央は丸く窪む。底部糸切りで、器面の残り良い。5 は器面摩滅で、調整観察不能だが、外底は糸切りだろう。内面の幅の狭い水引き痕があるが、中央は窪まず平坦である。6 は図上接合で、内面の幅の狭い水引き痕があるが、中央は窪まず平坦である。7 は土師器碗で、底部が摩滅しているが糸切りであろう。内底は大きくナデ窪ませている。8 は黄灰白色を呈する土師器碗で、内外器面摩滅で調整は観察不能。胴中位の欠損部を滑らかにして、皿として再利用している可能性が高い。9 は底部回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、高台は器壁が狭い。10 は底部回転ヘラ切り後ナデ仕上げしており、高台が欠損したもので、内外明橙色を呈する。11 は高台端が尖るもので、焼成不良。外底は回転ヘラ切りだろう。12 は径からみて土師器の高台付皿ではないだろうか。底部は回転ヘラケズリで仕上げられている。黄橙色で、内外煤付着。13 は土師器の皿の底部片を加工したもので、底部の欠損した縁を滑らかにしている。中央に穿孔があるが、円盤形土製品に加工して穿孔したのか、皿の底部に穿孔していたのかわからない。

第 57 図 14 は高杯の脚部で面取りしている。中空で、橙褐色を呈する。15 は土師器甕で、器面剥落しているが、外面は内外に煤が付着していたようだ。調整不明。

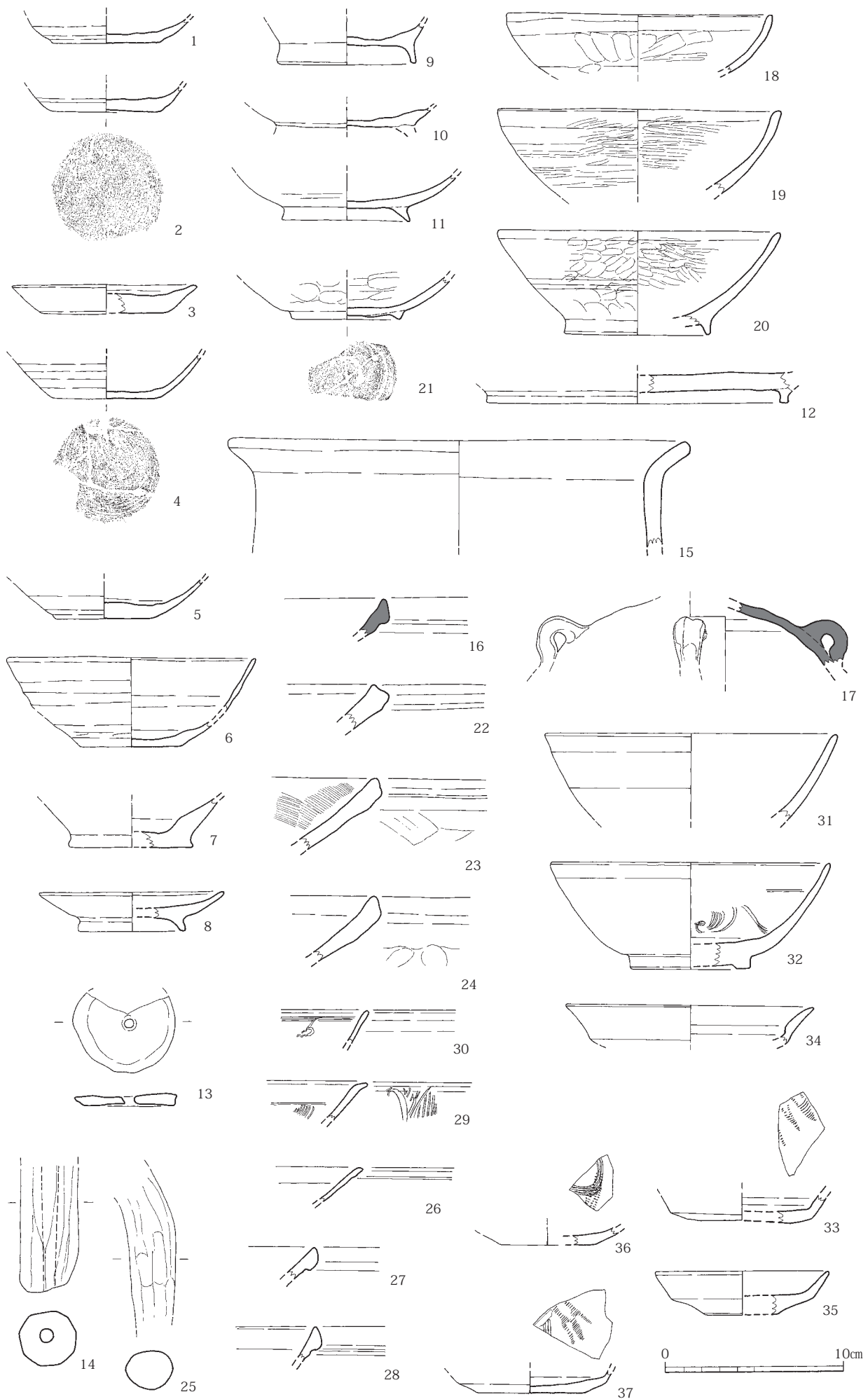
16 は東播系須恵器の鉢で重ね焼きのため外面口縁部は灰黒色を呈する。17 は須恵器の壺の肩部で、耳が付くが、環状ではなく、M 字形の下半分が欠損している。内外ナデ。18 は黒色土器の小型碗で、内面は黒色で光沢がある。外面は口縁部がヨコナデ、胴部はケズリ。19～21 は瓦器碗で、19 は内外口縁部が灰黒色。外面は帯状にミガキが入る。20 は口縁部がやや歪みがあり、底部がわずかしか残っていないので、傾きが不明確である。内外底部以外は灰黒色で、底部は灰白色。内面の傷は箸痕だろうか。21 は小片で器面が摩滅しており、調整の観察ができない。内外底部は暗青灰色で、胴部は灰白色か。外底に「×」字のヘラ記号が入る。

22～24 は瓦質土器の鉢で、小片で摺目が残っていない摺鉢である可能性もある。22 は内外暗青灰色、23・24 は黄灰白色を呈するが、24 は黒灰色を挟む胎土である。使用変色は見られない。25 は土師質脚付鍋の脚部で、手捏ね成型で火を受けて赤化している。

26～28 は白磁碗で、26 は小片で傾きが不明瞭である。内面に沈線が入る。27・28 は玉縁口縁。29 は青白磁の碗で、外面は片切彫りの連弁に櫛書文が入る。30～32 は龍泉窯青磁碗で 30・32 は貫入が入る。31 は非接合の同一個体で口縁の 8 分の 1 が残っているので、鎚連弁はない。淡緑灰色に発色した良品である。32 は黄緑灰色に発色したもので、内面に片切彫りの花文が入り、底部は釉剥ぎ。33 は龍泉窯の小皿で、外底は釉剥ぎで、濃緑灰色に発色する。34～37 は同安窯小皿で、34・35 は同一個体ではないが、発色が近く、緑灰白色を呈する。33・36・37 は見込みに櫛歯文が入り、底部は釉剥ぎ。37 は貫入が入り黄緑灰色に発色する。

第 60 図 10・29・31・34 は土錘で、10 はやや長い球形土錘、29・31 は管状土錘、34 は太い管状土錘である。

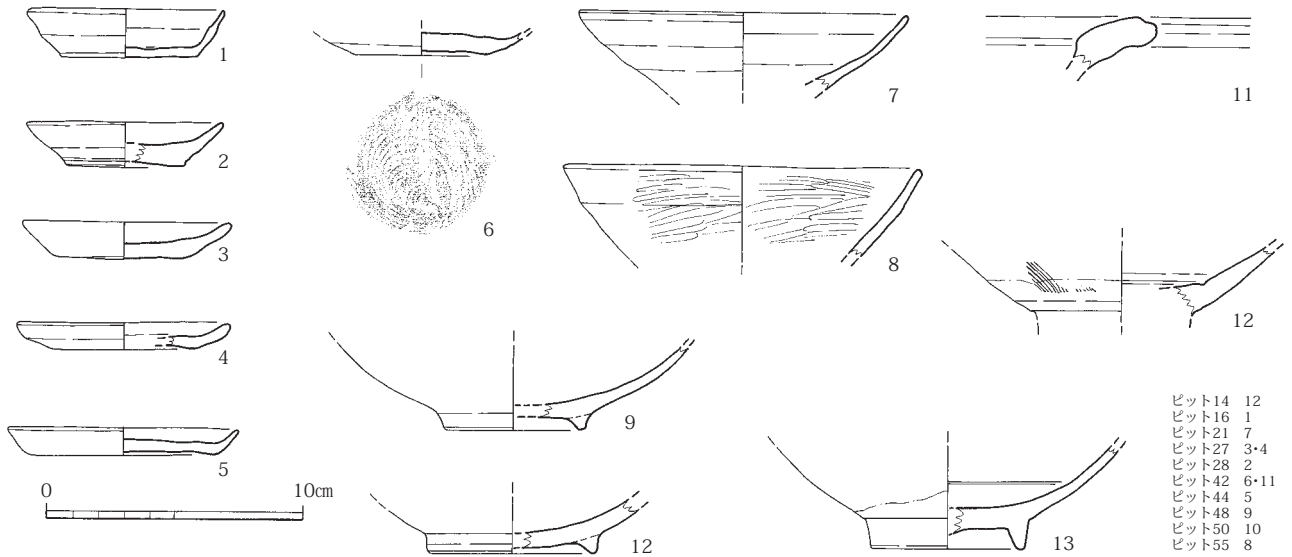
第 69 図 9・13・14 は石鍋片で、9 は緻密な石材なため器面が平滑で、加工痕が明瞭に残る。鏝と平行に打ち欠いており、欠損部を整形して再利用している。26 g 13 は再利用されていない破片である。内面にはノミ痕も残る。231 g。14 は滑石だが表面がざらつき異質である。外面は剥落し、縁部がわずかしかないことから、転用品の形態がわからず、打ち込また鉄釘を中央にして縁部を均等になるように置くと、菱形になる。39 g。



第 57 图 3 区谷部出土土器·陶磁器实测图 (1/3)

ピット・遺構検出面出土遺物 (図版 19、第 58 図)

第 58 図 1～7 は土師器の小皿で、1 はピット 16 出土で器面摩滅で白色粒子が露出している。半分が黒いのは焼成不良のためだろう。外底は糸切りの痕跡が残っている。13 世紀後半。2・3 は明橙色の器面が残っている。外底は摩滅のため切り離し方法不明。13 世紀前半で、ピット 28、3 はピット 27 出土。4 はピット 27 出土で、褐色パミスを含む胎土で、器面が摩滅している。底部には



第 58 図 3 区ピット出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

第 2 表 馬場長町遺跡出土土鍾計測表

No	長さ (mm)	最大径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	欠損状況	No	長さ (mm)	最大径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	欠損状況
1	22.8	18.8	4.1	6.3	完形	28	40.1	18.3	3.2	9.8	完形
2	23.2	20.0	4.1	7.2	完形	29	43.8	15.0	6.1	7.9	完形
3	22.3	22.3	4.6	11.1	完形	30	47.9	10.8	3.1	4.2	完形
4	22.5	23.4	4.5	11.0	完形	31	45.7	11.2	4.9	4.6	完形
5	25.8	25.7	5.7	14.8	完形	32	25.3	16.0	3.6	7.7	完形
6	25.0	24.5	4.9	12.7	完形	33	25.2	17.0	4.5	5.6	完形
7	26.7	24.1	4.6	11.0	完形	34	27.0	14.1	6.0	4.9	欠損
8	26.3	23.3	4.7	10.8	完形	35	30.1	15.2	4.8	7.2	完形
9	27.5	21.9	6.6	10.9	完形	36	31.4	15.1	5.0	6.3	完形
10	30.6	26.4	5.9	15.7	完形	37	31.9	18.5	5.8	10.0	完形
11	55.0	28.2	10.2	19.2	完形	38	35.0	17.5	5.5	9.9	欠損
12	19.1	20.0	4.0	7.2	完形	39	37.7	19.2	5.3	12.4	完形
13	24.1	20.8	4.1	7.6	完形	40	36.6	16.9	6.2	8.6	完形
14	23.2	23.1	5.1	11.9	完形	41	46.8	25.1	5.6	35.5	欠損
15	25.3	22.9	5.6	12.9	完形	42	31.4	10.0	3.1	4.0	欠損
16	24.0	23.7	3.7	11.6	完形	43	27.3	8.2	4.6	2.6	欠損
17	22.2	24.7	5.0	12.0	完形	44	33.2	11.0	4.9	5.0	欠損
18	27.9	48.2	10.4	127.0	完形	45	32.2	10.0	4.0	4.4	欠損
19	28.5	20.0	4.1	9.8	完形	46	32.0	13.6	5.7	5.0	欠損
20	30.1	23.8	5.2	12.7	完形	47	38.2	11.6	5.2	5.3	欠損
21	28.1	19.6	5.2	11.0	完形	48	41.4	9.9	4.9	4.7	欠損
22	29.0	18.6	4.6	5.3	完形	49	34.6	10.3	4.6	3.3	欠損
23	24.6	18.7	4.4	8.6	完形	50	45.5	11.0	3.2	7.4	欠損
24	30.9	18.1	5.0	8.7	完形	51	44.9	12.0	6.1	8.9	欠損
25	30.8	18.1	4.1	9.4	完形	52	48.3	11.1	3.4	7.2	欠損
26	32.9	17.1	4.1	9.3	完形	53	65.0	15.6	4.4	14.8	完形
27	32.0	16.9	5.2	7.8	完形	54	68.8	14.3	4.1	9.7	完形

板状圧痕が残る。13世紀前半。5はピット44出土で、糸切り痕が残る。13世紀前半。6はピット42出土で、外底は回転糸切りの可能性を残す。14世紀代。7は器壁が薄く、内湾する口縁に見えるが、口縁の内側が摩滅したためであろう。12世紀中葉。

8から10は瓦器碗で、8はピット55出土で、外面は口縁下まで、内面は口唇部のみ灰黒色で、外面の口縁下と内面胴中位に稜が入る。黒雲母の入る胎土で、器形も胎土も異質。12世紀後半。9はピット48出土で、器面摩滅で土師質に近い胎土で、高台は幅が均一でない。12世紀後半。10はピット50出土で器面の残りがよく、外底は糸切りであろう。内面はミガキが見られずナデのみ。12世紀後半。

11は土師質の土鍋で、外面のみ煤付着。カクセン石と雲母を多く含む胎土である。12世紀後半。12はピット14出土で白磁碗で胴部下半は露胎で、高台削り出し。内面胴下位に沈線が入る。13世紀前半。13は遺構検出面出土の同安窯系青磁碗で、胴部下半は露胎で、内面胴下位が窪んで屈曲する。外面に櫛書文が入る。13世紀前半。

第60図12はピット42出土の有溝球形土鍾である。

石灰岩焼成窯（巻頭図版2・図版12、第47図）

谷の西部に位置し、急斜面を利用して窯を造っている。窯の前面と窯を掘り込んだ面と側面の斜面を削平して窯上面での作業場を造っている。窯の壁体の石灰岩が崩壊する可能性があったので、内部での作業を最小限に留めるため、100分の1平板図のみ作成した。

窯は平面Ω形で、斜面からやや奥まった位置に竪穴を掘り、斜面からはトンネルを掘って竪穴下部と連結している。トンネルの側壁面から連続して石灰岩の石垣を貼っており、足壁面の石垣から斜面側まで続けて貼られており、斜面部は丸みをもつ袖状に石垣を貼り付けている。さらに、東側の平坦面と窯を掘り込んだ平坦面の間の段にも低い石垣が作られていた。西側には窯を掘り込んだ面の縁に石垣を貼っている。また、谷部にも一列だけだが、階段状の石列があり、谷部が窯の掘り込み面との通路になっていたことがわかる。

トンネル部と窯の境界の天井には崩落防止のためのレンガ塀が鉄網で固定されていた。窯本体とトンネル部の床面はほぼ平坦で、床面には施設がなかったが、検出時にはトンネル部から断面H字状の鉄骨が露出していた。

窯の掘り込み面では窯上位まで石積があり、最上部から測ると床面まで約300cmを測る。上面で径約500cmあり、内壁には50cm角の石灰岩が積み上げられており、耐火レンガはなかった。内面の中位からやや下がったところに、壁面から張り出す部分が左右対称にあった。火床をつくるために鋼材をかける架台であろう。

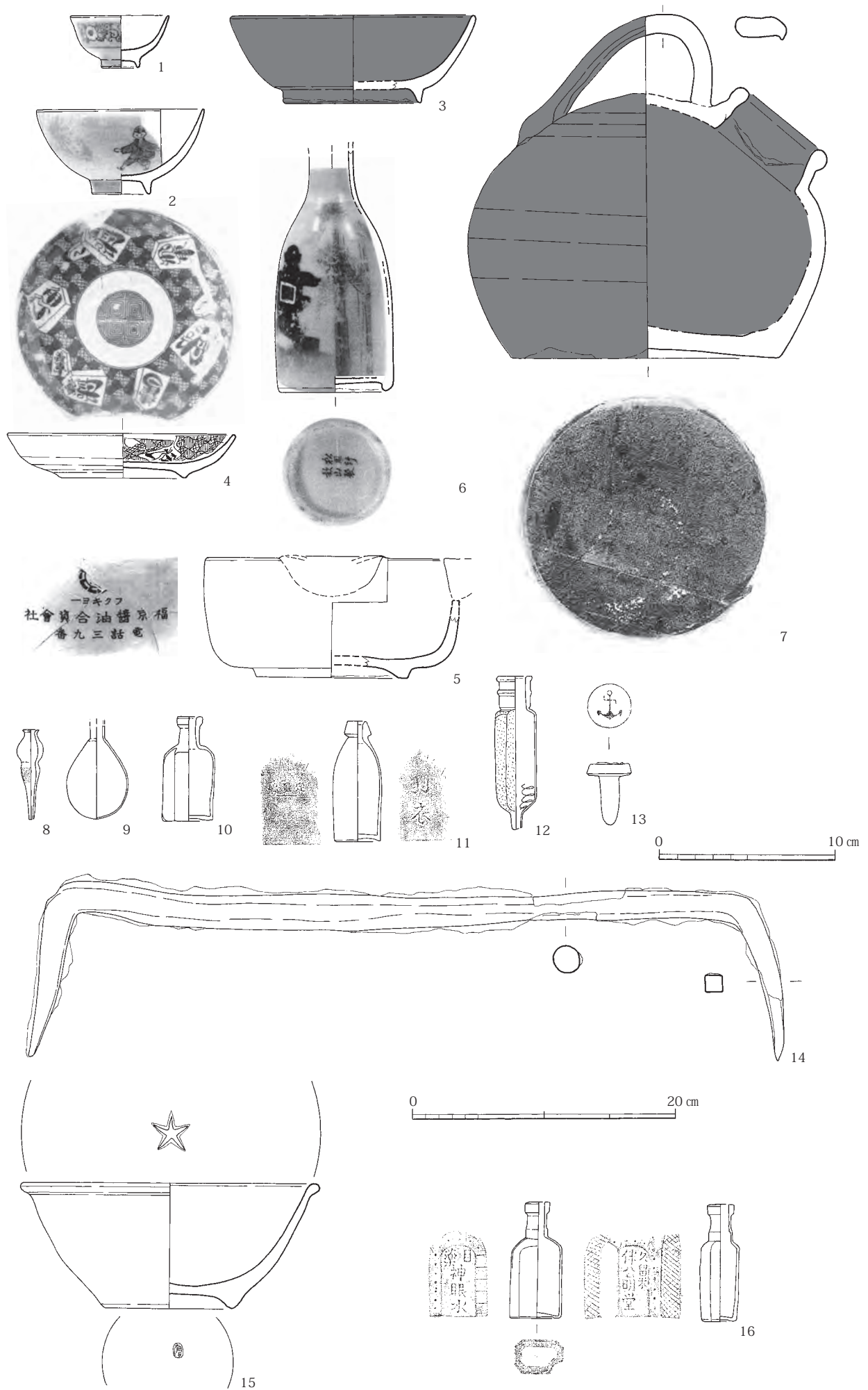
窯内部は石灰岩が集積状態で検出されたが、これは大きさから壁体の石が崩落したもので、焼成の残りではなかった。この石灰岩を除去すると、床面に焼成された石灰が30cmほどの厚さで堆積していた。トンネル前面は石灰によるタタキができており、そこが作業空間とわかる。

窯の掘り込み面の平坦面は、急斜面を削平したものだが、切土だけでなく、基盤層の上に碎石を敷き、その上に客土し、その上にまた碎石を敷くという整地作業を行っていた。

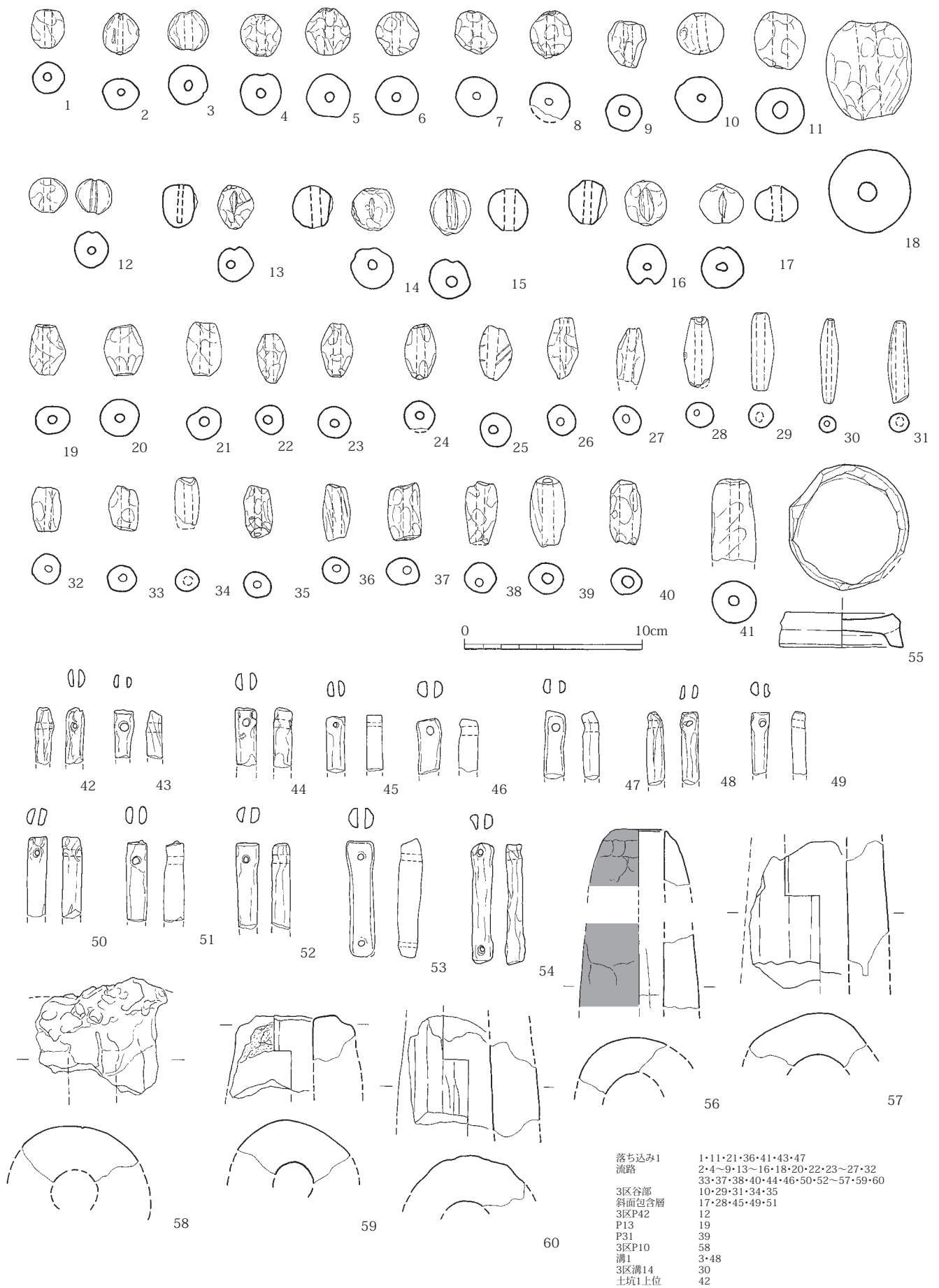
鎌の内部では、崩落した石を除去する際に、若干の陶磁器やガラス製品と、獣骨が大量に出土した。出土遺物から大正から昭和初期であろう。

出土遺物（図版20・25・26、第59図）

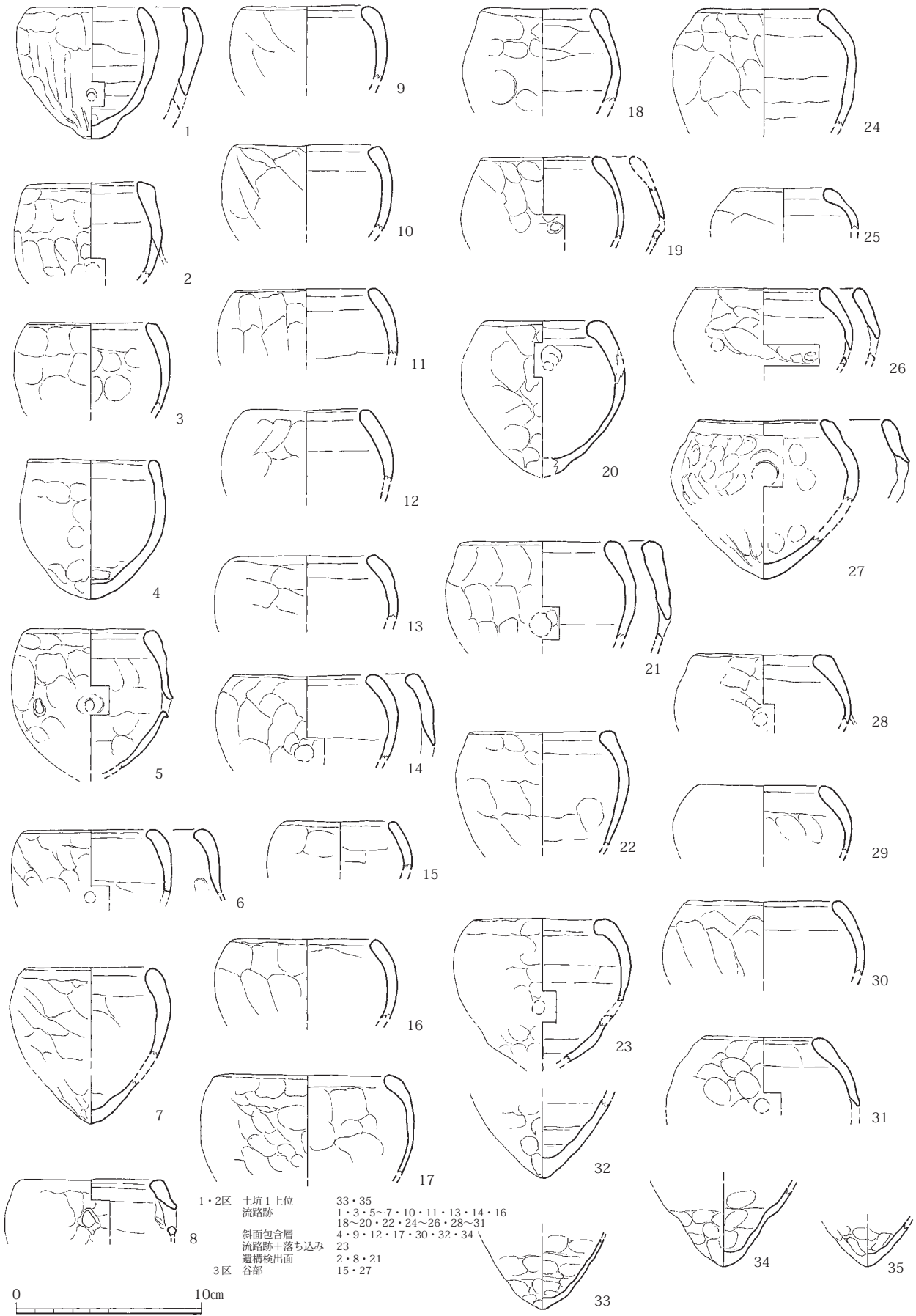
1はほぼ完形の小杯で外面にはコバルトで唐草花文帯が銅版刷りされている。暈付は釉剥ぎ。2



第 59 図 石灰焼成窯出土・表採遺物実測図 (15・16 は 1/4、他は 1/3)



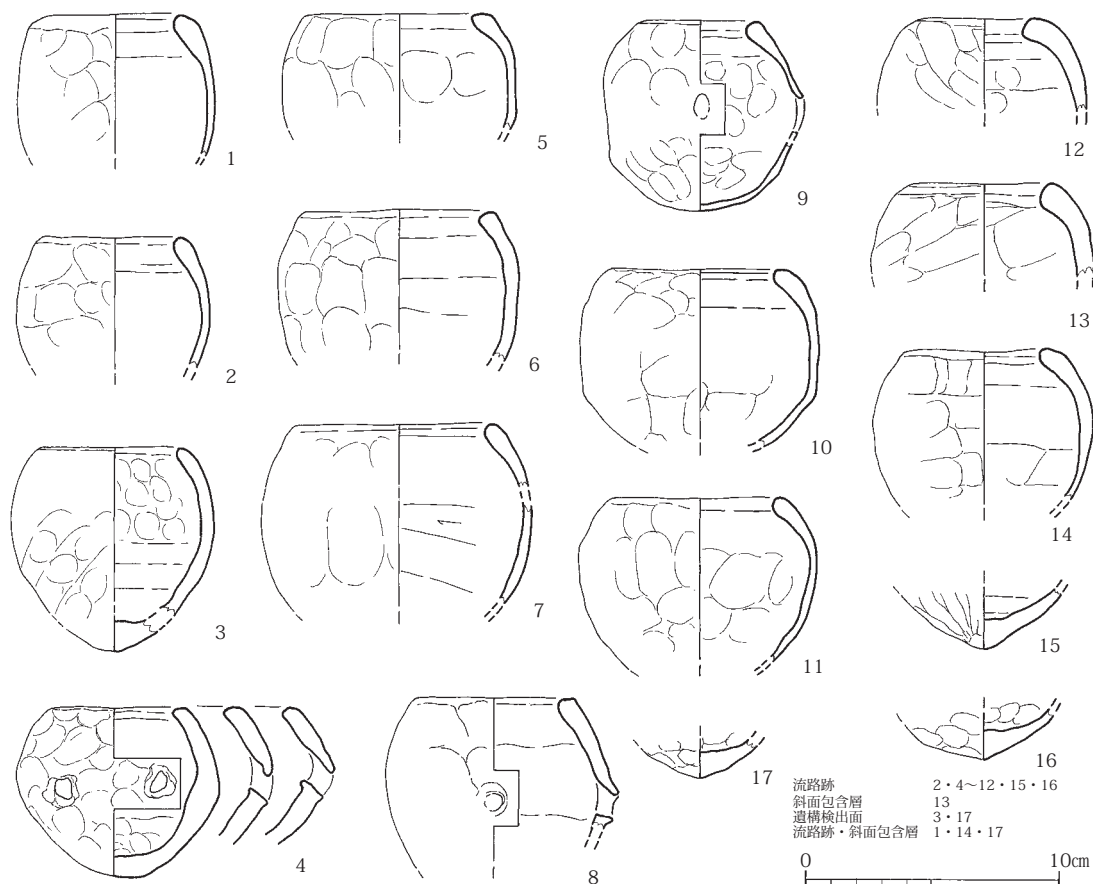
第60図 馬場長町遺跡出土土製品実測図 (1/3)



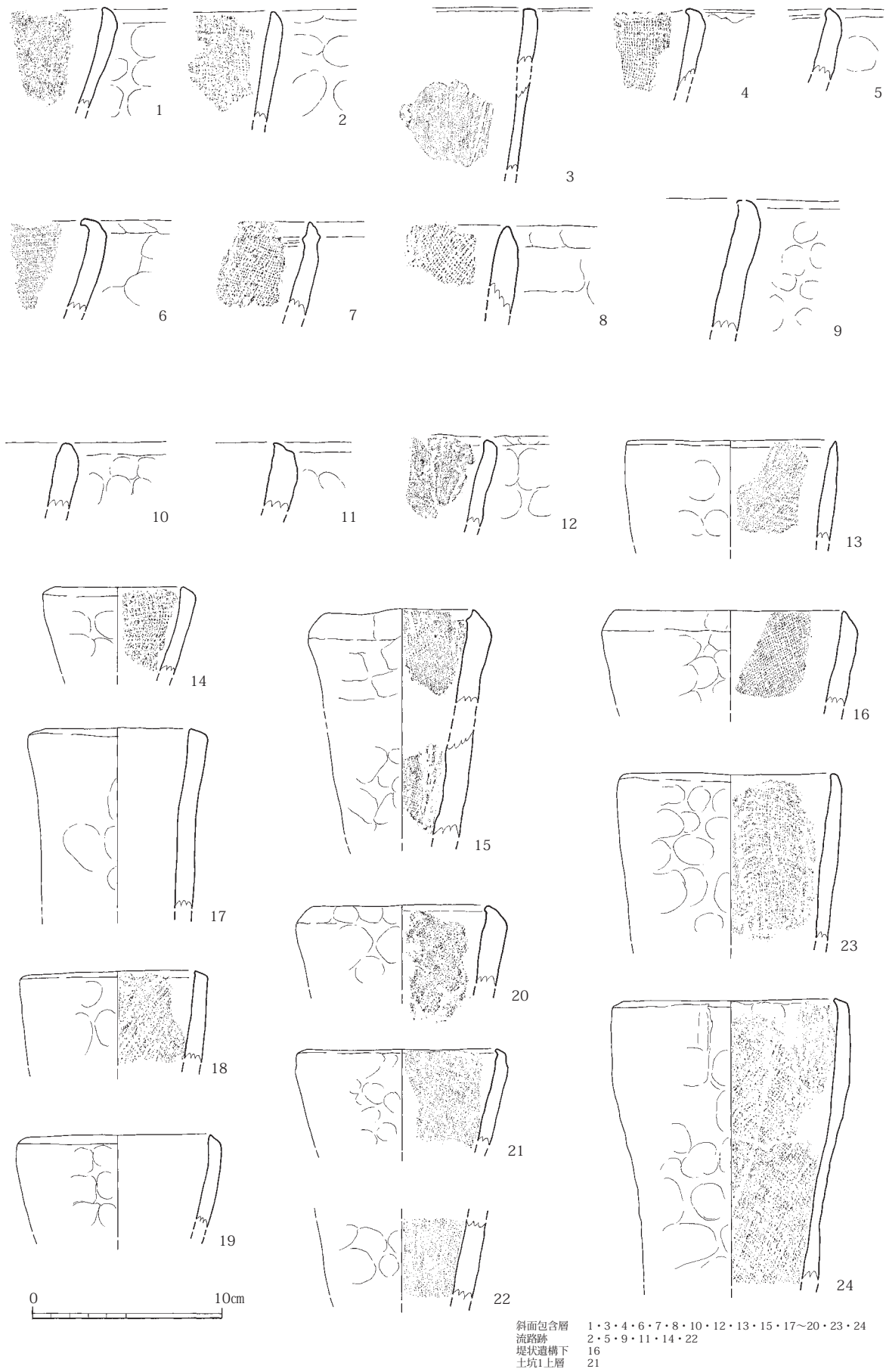
第61図 馬場長町遺跡出土イイダコ壺実測図1 (1/3)

は子供茶碗で、旭日旗と男女の児童が赤・黒・青で上絵付けされている。同一個体の裏面か、あるいは別個体の同じ文様の破片が出土しており、欠損した部分に、青字で「オテテツナイデ」とカタカナ書きされていたことがわかる。3は光沢のある黒釉が全面に掛かり、畳付は釉剥ぎ。4は口唇部に口鑄がある。内面中央に重圏方形文を充填し、空間を空けて分銅文地に将棋文を配するシールを貼ったもので、濃い銅緑釉である。瀬戸製か。5は陶器の鉢で、透明釉を掛けた上に銅緑釉を掛け分けしている。外面には半欠した社章のしたに「フクキョー」、その下に「福京醤油合資會社」「電話三九番」と右から書かれており、景品か記念品として福京醤油合資會社が配った可能性が高い。口縁部には受け部がないので、段重ではない。畳付は釉剥ぎで、見込みに針目跡が5つ入る。6は徳利で、外底に「松風軒歎山製」とコバルトで書かれている。側面の片側に松と灯籠が上絵付けされており、灯籠の窓には金箔が貼られている。瀬戸製。7は尿瓶で内面は鉄釉で、外面は黄茶灰色の灰釉の上薬灰釉が上掛けされている。外底は釉剥ぎで、中央部に焼き台の痕跡がある。外底に墨書で「千八」と2箇所書かれている。筆跡は同じであろう。内面にはカルキが付着している。肥前産。

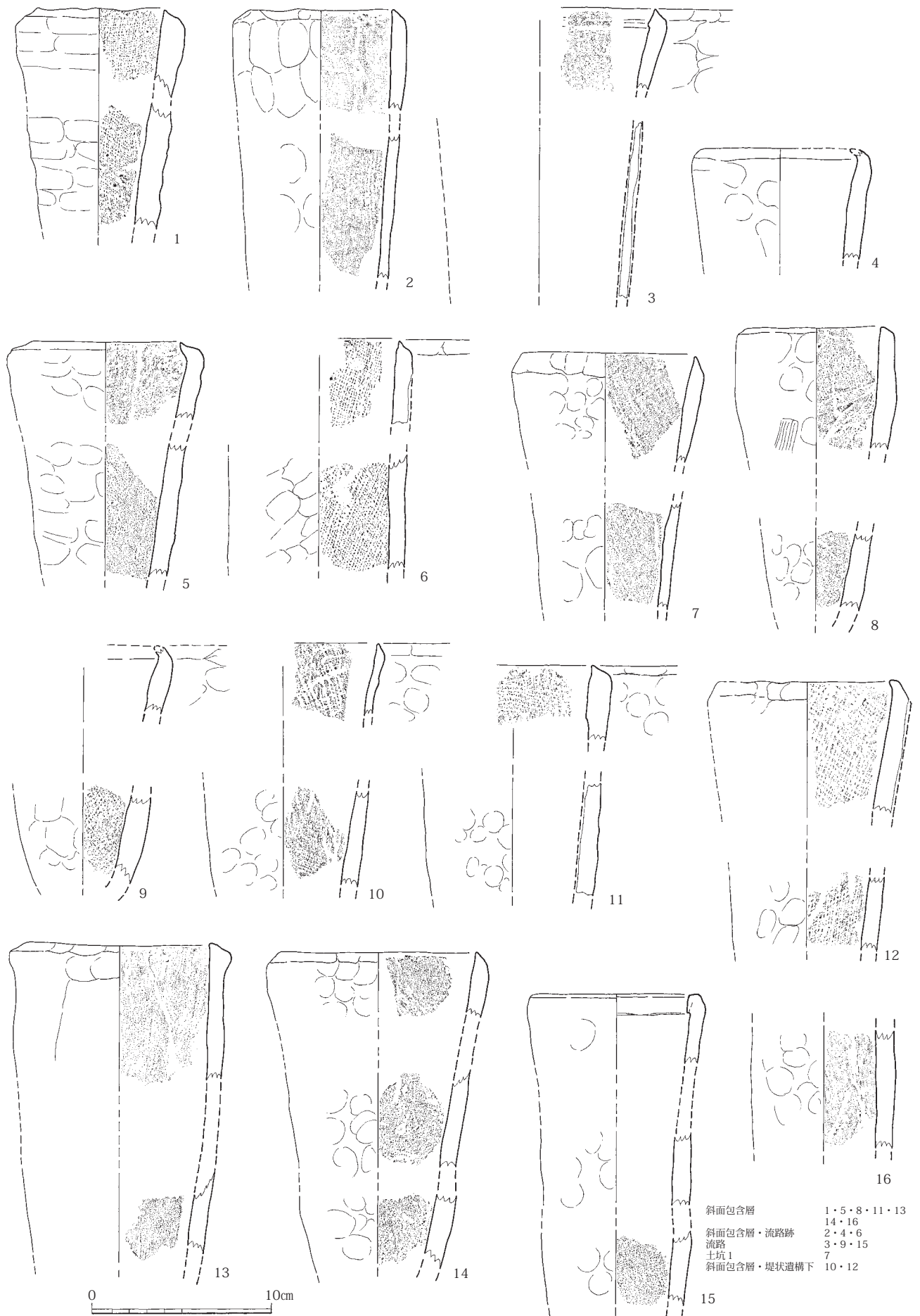
8は透明ガラスのスポイトで吹き成型の完形品で、先端はカットし、上端は切り離し。9は透明ガラスの仁丹瓶で吹き成型の完形品で、口縁部は切り離し。10は透明ガラスの目薬瓶で型合わせ成型の完形品。11は透明ガラスの白髪染め瓶で型合わせ成型の完形品。片面に「定量」と下線付きで、対面には縦書きで「羽衣」と陽刻されている。12は紺ラスの目薬瓶で型合わせ成型の完形品。両口点眼式で、螺旋状に曲げられバネになっている針金が内部に落ち込んでいる。13は緑ガラスのイカリソースの瓶蓋で、天井部にイカリマークノエンボスが入る。型合わせで気泡あり。



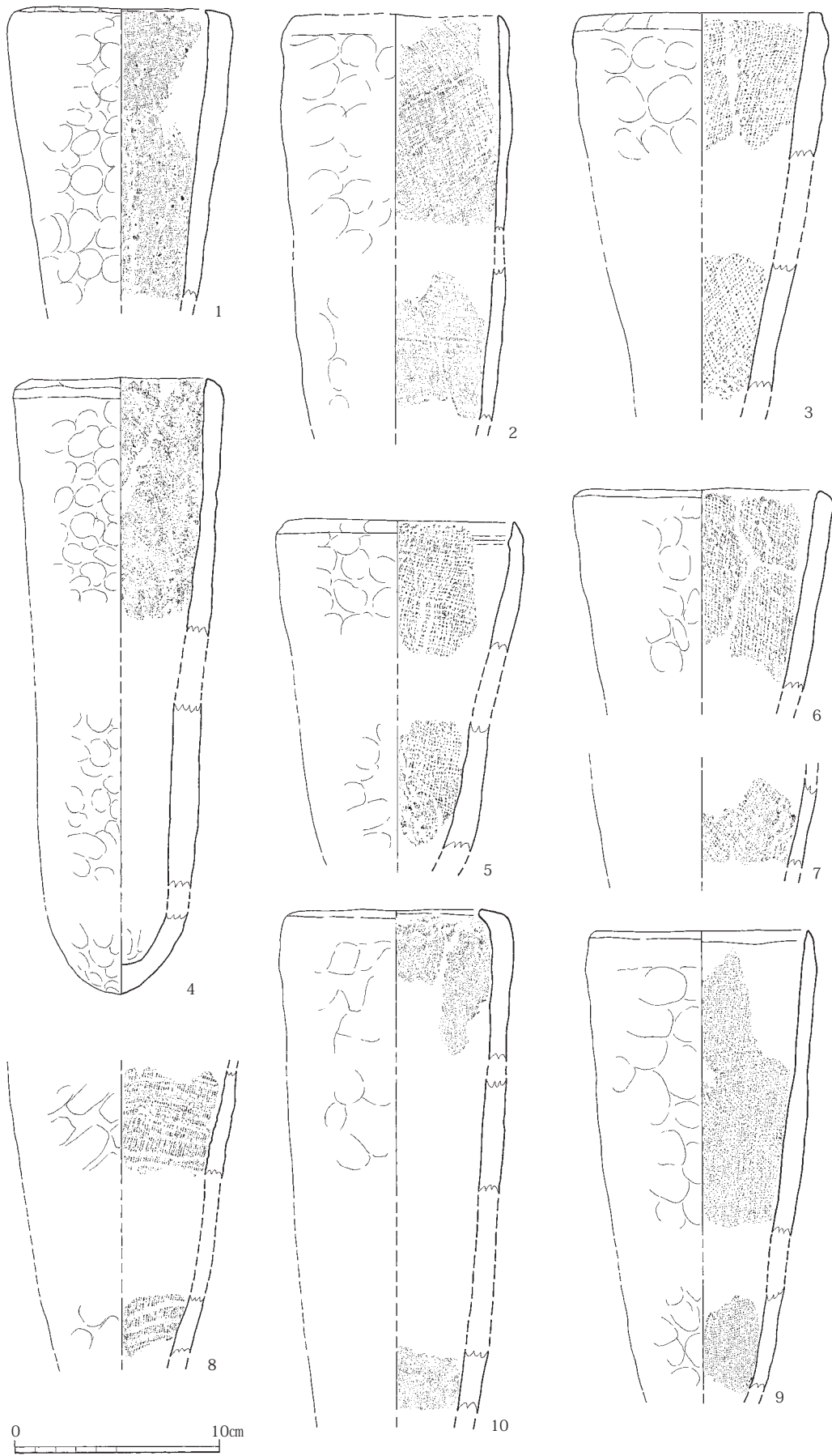
第62図 馬場長町遺跡出土イイダコ壺実測図2 (1/3)



第 63 図 馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 1 (1/3)

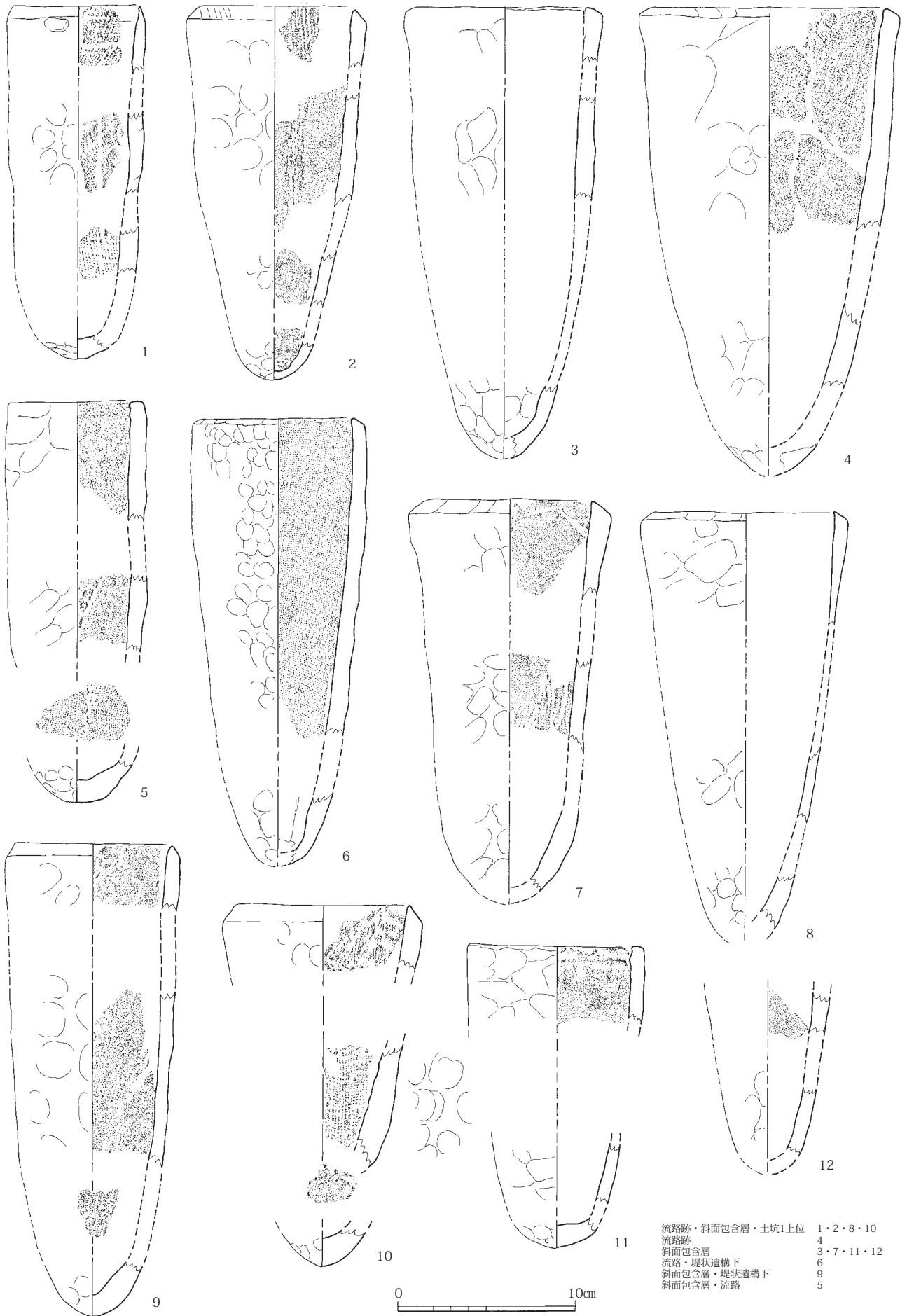


第64図 馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図2 (1/3)



- 斜面包含層・流路跡 1・4・5・10
- 堤状遺構下 2・8
- 斜面包含層・土坑1上位 3
- 流路跡 6
- 斜面包含層 7
- 堤状遺構下・流路跡 9

第 65 図 馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図 3 (1/3)



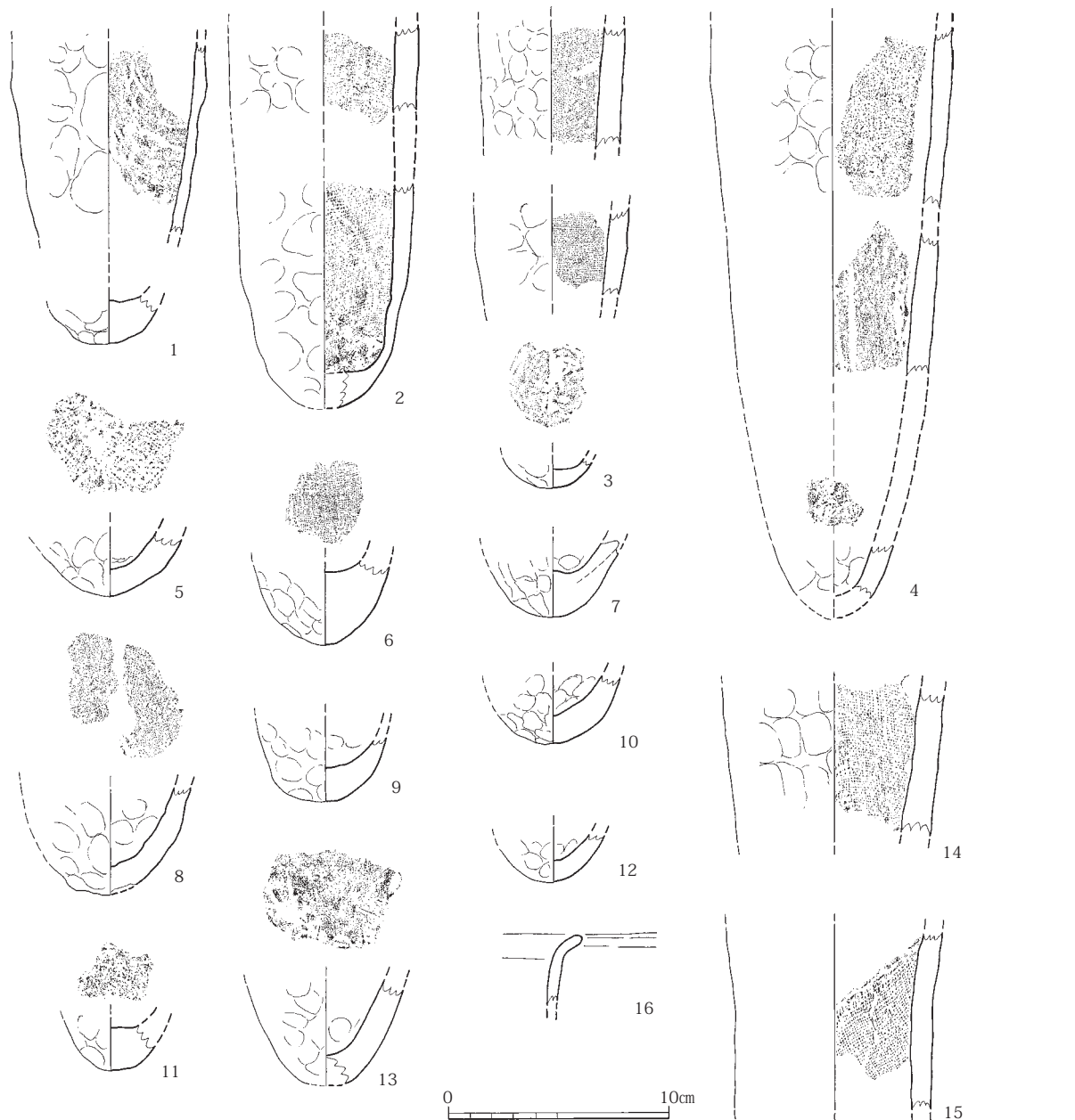
第66図 馬場長町遺跡出土焼塩壺実測図4 (1/3)

14は鉄鏝で、断面は中央部が円だが、端部は方形である。トンネル天井か、窯の火床を構成する金網を固定したものか。

獣骨は、化学分析を委託していないが、近代のもので残りがよいことから、ウマとウシとわかった。図版25の1・2はウシの肩甲骨で、大きさがほぼ同じだが、一対をなすものではない。

3～6はウマの肩甲骨で、やはり形態差があり対をなさない。

7～14はウシの上腕骨で、8・9のような小型サイズと10・11のような大型サイズがある。10には臑を切ったものと思われる刃傷が同じ場所に集中的に残っていた。12は10よりも太い刃傷が残っていた。15・16はウマの上腕骨で、左右の大きさはほぼ同じだが、別個体である。17～25はウシの尺骨で、刃傷がつくものがある。26～28は頸骨、29は仙骨、30～33は腰骨で、これらについては同定できていない。また、頸骨から仙骨までわずかしがなく、尾骨・胸骨は見られなかった。



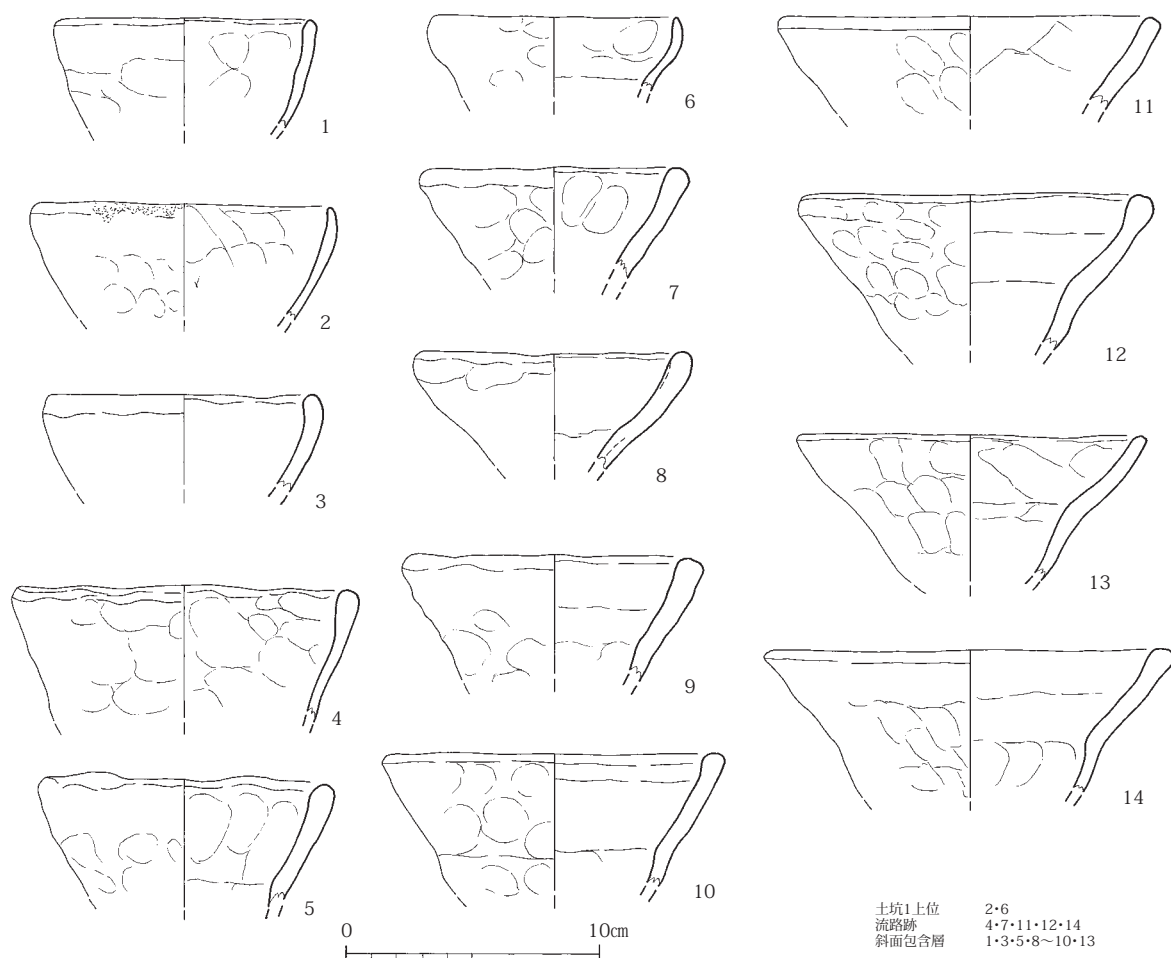
土坑1上位
 斜面包含層
 斜面包含層・堤状遺構下
 斜面包含層
 堤状遺構下
 遺構検出面
 流路跡
 遺構検出面

1
 2・5・9・14・15・16
 3
 4
 6・7・10・11・12・13
 8

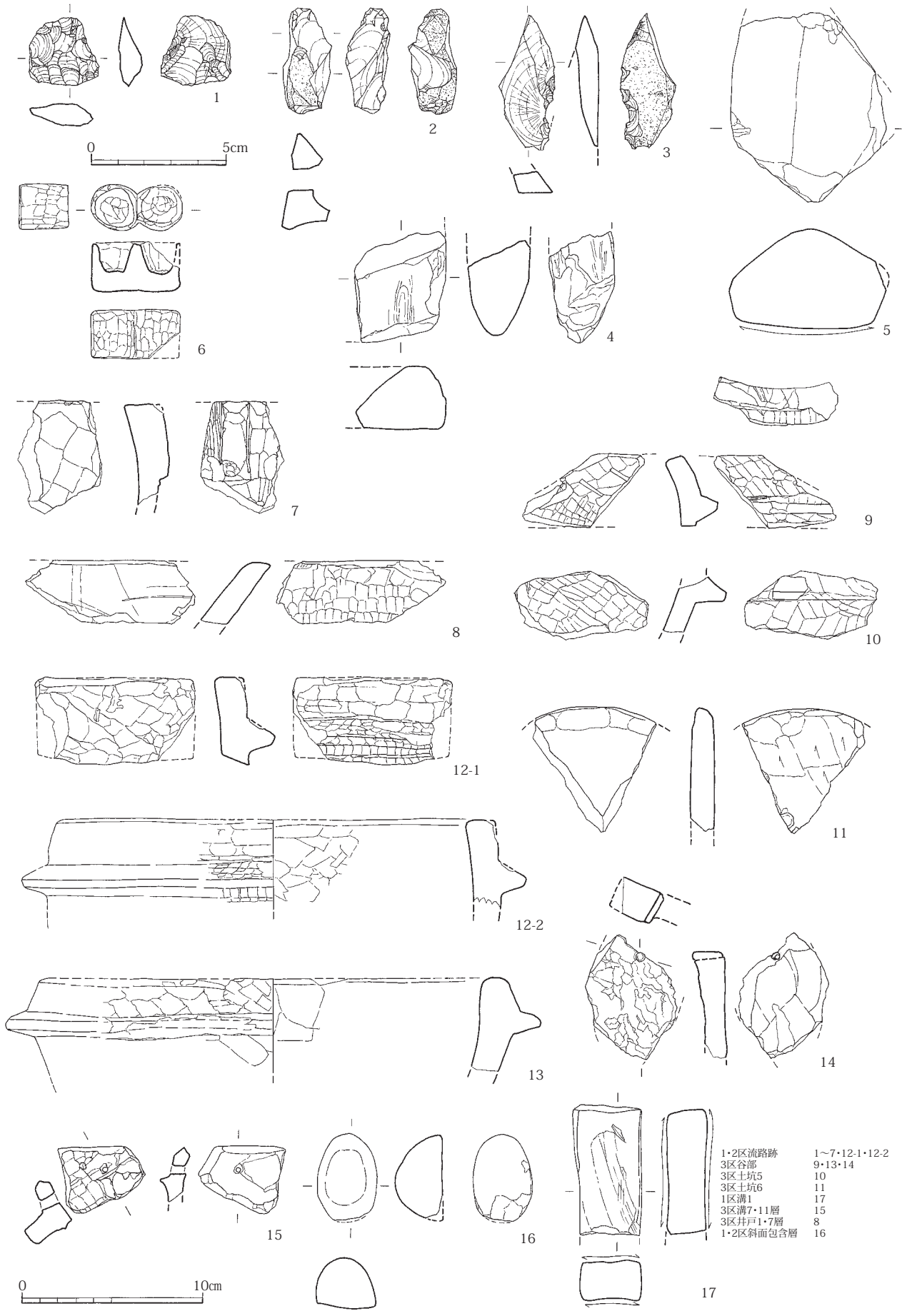
第 67 図 馬場長町遺跡出土焼塩壺・製塩土器実測図 (1/3)

36～40はウマ、41～43はウシの寛骨で、39・40は幼体だろう。いずれも別個体である。36には太い刃傷がある。

図版26の1～9はウシの大腿骨で、2・4は刃傷が中央につく。7は最も大きいもので、腱にあたる部分に小さい刃傷が残る。8は腱にあたる部分に斜めに刃傷が残る。10～19は橈骨で、いずれもウシである。15・19については他のものとの形質差が大きく、種類の異なるウシの可能性が高い。刃傷のあるものはなかった。20～28はウシの脛骨で、刃傷のあるものはなかった。29～36はウシの踵骨で、33は完形で、最も小さく、若干形態が異なる。年齢差の可能性もあるが、大きさにそれほどの違いがないので、種類の違いの可能性が高い。刃傷のあるものはなかった。37～39はウシの中心足根骨で、いずれも破損していない。37・39は対になる可能性があり、どちらも側面に刃傷がある。40～47はウシの距骨で、いずれもほとんど破損していない。40は最も小さく、形質が若干異なる。刃傷が著しい。43は40と同じ位置に刃傷があった。それ以外には刃傷はなかった。48～77は手根骨で、同定できていないがウシの可能性が高い。48～54は中間手根骨で、52は他のものより小型で形質が異なるので、種類が異なるようだ。55～59は尺側手根骨で、57は他のものより小型で形質が異なるので、種類が異なるようだ。60～67は橈側手根骨で、年齢差と見られる差異が半数ほどに認められるが、形質差は見られなかった。68～71は第4手根骨で、71は他の3つより長く、側面に刃傷がある。72～75は第3手根骨で、72には明らかに形質が異なっている。75には側面に刃傷がある。76・77は第2手根骨で、対にはならない。78・79は副手根骨で、



第68図 馬場長町遺跡出土鉢形焼塩壺実測図 (1/3)



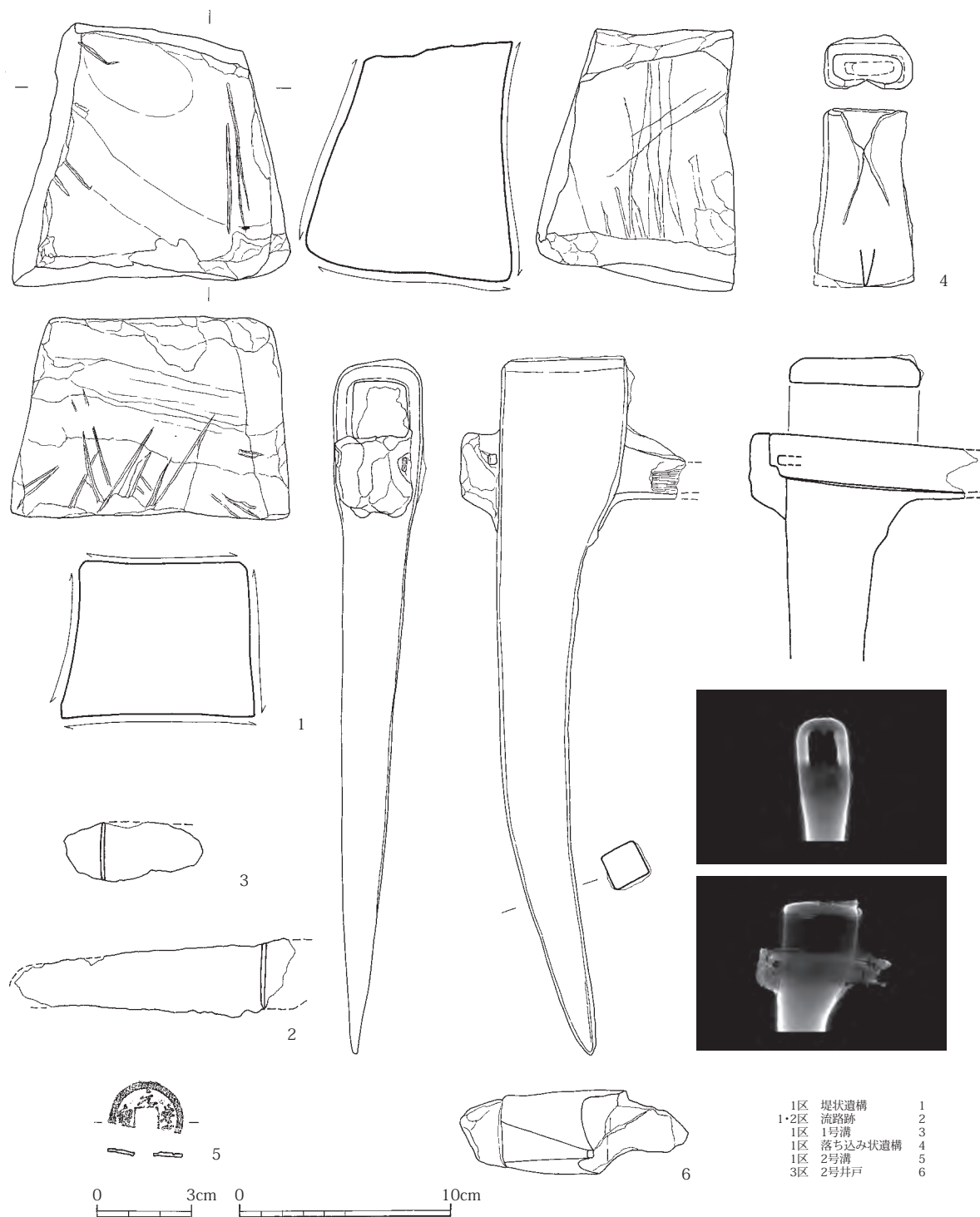
- 1・2区流路跡
- 3区谷部
- 3区土坑5
- 3区土坑6
- 1区溝1
- 3区溝7・11層
- 3区井戸1・7層
- 1・2区斜面包含層
- 1~7・12-1・12-2
- 9・13・14
- 10
- 11
- 17
- 15
- 8
- 16

第 69 図 馬場長町遺跡出土石製品実測図 (1~3は 1/2、他は 1/3)

対にならない。

攪乱出土遺物 (図版 20)

銃剣は、1・2号井戸の上面にあった攪乱穴から戦後のものに伴って出土した。明治30(1897)年に日本陸軍に採用された30年式銃剣で、終戦まで使われ続けられたものである。本来は全長

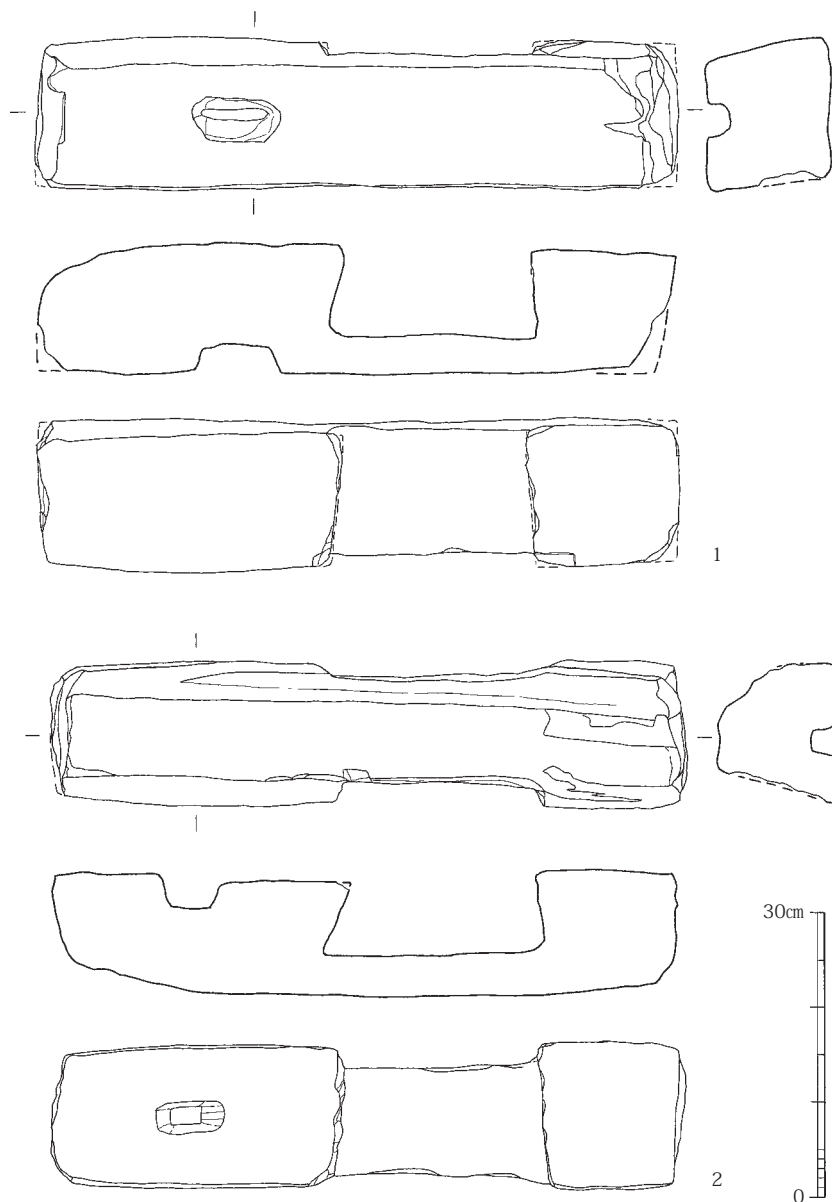


第70図 馬場長町遺跡出土石・金属製品実測図 (5は1/2、他は1/3)

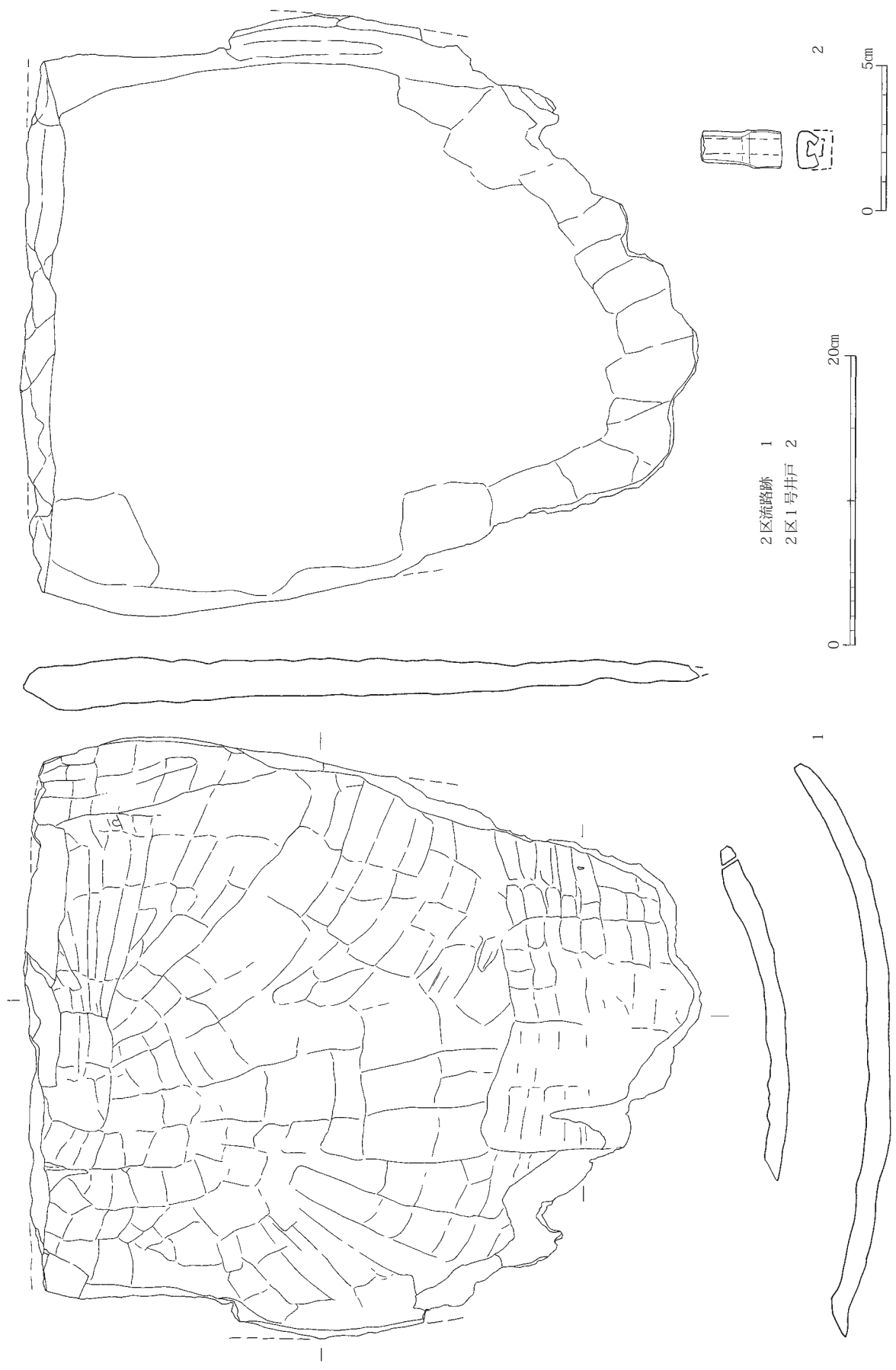
40cm 程だが先端が欠損している。

表採遺物 (図版 20、第 59 図)

第 59 図 15 は白磁の軍用食器の碗で、見込みにエンボスで星章が入る。碁笥底上の畳付は釉剥ぎで、高台内には統制番号の「有 8」がスタンプされており、昭和 16 (1941) 年から昭和 20 年代



第 71 図 馬場長町遺跡出土木製品実測図 1 (1/8)



第72図 馬場長町遺跡出土木製品実測図2 (1は1/4、2は1/2)

の有田産とわかる。16は透明ガラスの目薬瓶で型合わせ成型の完形品。片面に「目薬神眼水」、対面には「久留米伴公明堂」と陽刻されている。「久留米伴公明堂」の目薬は筑後地域で出土することから、久留米市内の製品であろう。

(4) 小結

本遺跡は削平が著しく、遺構の残りが悪かったため、遺構の全体像はつかめなかった。反対に、遺物は流路跡と斜面から大量に出土しており、遺物から遺跡の性格を推定することにしたい。

遺構

1・2区の丘陵緩斜面からは、掘立柱建物跡1棟と畑の畝と見られる溝状遺構7条とそれに直交する溝状遺構1条、土坑1基が、斜面下位の流路跡からは堤状遺構と井戸3基が検出された。斜面の平坦面は狭く、すでに削られて遺構が存在しなかった上の段を含めても、大規模な遺跡は展開していないであろう。

1・2区では大きく2つの異なる土地利用がなされている。1つは8世紀代のゴミ捨て場で、もう1つが9世紀以降の開墾地である。

1号土坑・流路跡・斜面包含層からは残りのよい状態で多量の須恵器と土師器が出土している。祭祀遺物がないので、川辺で行われた祭祀行為ではなく、日用品のイタコ壺が多く伴うことから純粋に廃棄行為によるものといえる。

本調査と併行して行った確認調査の結果、流路跡の南岸部や調査区東端には遺物がなく、調査区内に集中していた。ここだけに遺物が残っていたのは、廃棄する場所が決まっていたというよりも、埋め立て土が被った部分だったので流出しなかったと考えられる。埋め立てがあった根拠として3基の井戸と堤状遺構がある。

流路跡を横断するように斜面から突き出した堤状遺構は盛土で設けられている。堤状遺構の下流側は水の流れが弱くなるので、これを利用して埋め立てを行ったと考えられる。埋め立て範囲からは井戸3基が検出されており、井戸枠はこの時期の通常の井戸と同じなので、本来は緩斜面地と同じ高さがあっただろうし、流路跡の土層からもそれは立証できる。

堤状遺構の下から出土した遺物から、堤状遺構の構築は9世紀以降と考えられ、埋立地に作られた井戸もそれ以降と考えられる。

1号掘立柱建物跡は、1号溝状遺構と畑の畝らしい小溝群に伴うものと思われ、11世紀後半代のものだろう。掘立柱建物跡は柱穴が小さく、柱筋の通りも悪い粗雑な建物跡で、開墾地の簡易的な作業小屋であろう。

3区は、多くの攪乱と削平により断片的にしか遺構が残っておらず全体像がつかめない。北側は急斜面で遺構はなく、西側は斜面の下に溝が巡っている。上の段にピットがあるが建物を構成せず、区画溝らしいものだけが存在する。下の段には平坦面の裾部に溝が巡っており、その内部に門状遺構と竪穴遺構と井戸が存在する。斜面裾の集落が後背丘陵を開発したものと考えられるが、具体的な利用方法はわからない。ただ、15世紀代の2号井戸から鶴嘴が、1号井戸から石灰岩が出土しているので、後背の露頭から採掘してきた石灰岩を加工する作業場だったのかもしれない。

遺物

本遺跡からは、多くの遺物が出土している。土師器では特徴的な杯や多様な甕形土器のほか、多量の焼塩壺と飯蛸壺が出土している。このほか、鉄滓と銅滓、ふいごの羽口などからは生業活動を推定できる。それらの廃棄物のなかに、墨書土器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯青磁など希少な遺物も混ざっており、多量の獣骨や稀少木製品とともに遺跡の性格を複雑にしている。

以下、特徴的な遺物を個々に検討して、遺跡の様相を復元したい。

土師器

馬場長町遺跡と馬場仁王免遺跡からは8世紀から11世紀の多くの土師器が出土した。特に9から10世紀の資料は京都郡では報告例が非常に少なく、その空白を埋めることになった。しかし、流路跡や谷部・包含層出土なので、器種間の併行関係はわからない。

現在、九州歴史資料館で整理作業を行っている東九州自動車道関係遺跡からは遺構に伴って良好な資料が得られており、編年の検討はその報告を待つべきなので、ここでは個々の器種について言及するものとする。

丸底杯

本遺跡では、外面口縁部がヨコナデ、体部は板状工具によるオサエを主体とする丸底杯の出土が目立つ。木太久守の研究により、8世紀後半から9世紀前半のものであることと、同じ系統の皿が存在することと、企救郡を中心に出土していることが指摘されている。(注1) 木太久は同時に豊前一円に広がっていた可能性も想定しており、実際に今回の出土例も含め、みやこ町菩提3遺跡(注2) やみやこ町矢山遺跡(注3) など京都郡内でも見ることができる。(注4)

本遺跡では、破片資料を極力反転復元したところ、古墳時代後期のミガキをもつ杯からの変化を辿ることができた。技法の変遷だけでなく、胎土が同じであることから同一技術系統に属することは明らかである。

8世紀前半から9世紀前半段階の杯は、器高と径の法量から、大きく3種類ほどに分けられる。(第18図) 法量ごとに見ると、外面胴下半ヘラケズリ、内外ミガキの杯が、次の段階では外面の口縁部と胴部の境界の稜が明瞭となり、内面は口縁部のみミガキで、内面下半は板状工具のオサエが見られる。(注5) 次の段階ではミガキがほとんど失われて外面下半は指オサエと内面の板状工具のオサエとなる。さらに口縁部は外反するようになり、内面に押し出し技法による屈曲がつく。この段階の外反の角度は法量によって異なっている。この口縁が外反する段階のものは木太久が指摘したように9世紀前半とみてよい。一方、第19図19～21のように同じ技法を用いた皿とするべき器種も存在し、第19図1～9のように器高の低い杯から派生したことがわかる。

甕

本遺跡出土の甕は大きく6類に分類できた。最も多いのはいわゆる企救型甕である。佐藤浩司は「口縁部が内湾気味にくの字に屈曲して肥厚し、口唇部に平坦面をもつ。頸部内面は稜をなす。最大径は口縁部に、最小径は頸部にあり、体部下半は下膨れ気味にふくらみ、底部は丸底となる。口縁部内面はヨコナデだが、ヨコハケもある。体部内面は例外なくナデ調整。外面は粗いハケメがわ

ずかに弧を描くように左上から右下に施される。」と規定しており、「8世紀後半に成立し、9世紀後半には口縁部が丸みをもって外反し、体部外面にハケが見られ、この時点で粗いハケ調整は消滅する」としている。(注7)

本遺跡では、佐藤が企救型甕を分類したすべての口縁形態が存在しており、胎土は混入物の多い黄橙色の胎土で一貫している。

次に多いのはタタキ成型の甕で、これは2種類ある。1つは器壁が厚く、外面は横位の目幅の広い平行タタキを基本とし、内面は無文か同心円文の円形当て具痕が残るもので、頸部から肩部が直線的で、胴部が膨らむ下膨れの器形で、北九州市域を中心に見られる9世紀後半から10世紀のもので、企救型甕の系譜を引いている。(注8)

もう1つは、外面が縦位で目が細い平行タタキを基本とし、内面に同心円の当て具痕跡が残る茶褐色の胎土のものである。口縁が長くほぼ水平に外反し、胴部はほぼ直線的な特徴をもつ。8世紀後半の築上郡北部に多く見られるもので、前者のように10世紀に広く見られるタタキ成型の甕より早く出現し、小田和利により北陸系工人との関係が指摘されている。(注9)

その次に多いのは、外面に幅の広いヨコナデの窪みがあるナデ調整のみの甕で、荊田町山口地区の黒添赤木遺跡(注10)に代表される。口縁部が長く大きく外反し、口唇部には面をもつものもある。底部は平底の中央を押し出したレンズ底状であり、黒添赤木遺跡例が完全に平底で異なるものの、押し出す前は平底であることから、これに相当するといっていよう。(注11) 同じような底部は築城千代遺跡(注12)に完形に復元できるものがある。

本遺跡のこのタイプの甕は、褐色パミスを含むにぶい暗黄灰色の胎土をもっており、後述するイダコ壺の胎土と同じものなので、近隣地域で生産されたものである。山口地区以外での出土がないことから山口地区から搬入されたものだろう。築上郡で同じ底部をもつ例としては、赤幡森ヶ坪遺跡1号住居出土例の胴部外面にカキ目があるので、築上郡では外面カキ目の甕の底部と考えられ、前述のタタキ甕との関連が想定される。(注13)

以上のような特徴的な甕とは別に、京都郡と築上郡では古墳時代からの系譜を引く目の細かいハケ目調整の甕が存在し、本遺跡でもわずかながら出土している。また、外面ナデ調整だが、タテナデやケズリ、ケズリ状のナデのものであり、これについては広汎に存在するので現段階では類例を特定できない。

製作地を想定しうる甕から、本遺跡には企救郡・築上郡北部・京都郡の山口地区からの甕の搬入があったことになり、特に企救郡との物流が活発だったことがわかる。

金雲母を多く混入する土師器

混和材として金雲母を使用することは珍しいことではないが、以下に示したものについては金雲母が顕著に見られることから、意図的に多量に混入させたものと考えられる。こうした顕著な入れ方は、土器製作の上で必要なものというより視覚効果を期待したものではないだろうか。他地域の資料を検討してみなければわからないが、嗜好品に位置づけられるものかもしれない。(写真2)

注

- 1 木太久守「豊前国企救郡における平安時代初頭の丸底杯」『研究紀要 - 第15号 - 』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 2 引用文献6

	外面 ハケ目・ナデ調整の裏	外面 横ナデ・カキ目裏	外面 縦平行タタキの裏	企取型裏	外面に横平行 タタキ裏	その他
企取郡				1	2, 3, 4, 5	6
京都郡西部	7, 8	9, 10		11		
馬場長町遺跡	12, 13, 14, 15, 16	17, 18, 19, 20, 21, 22, 23	24, 25	26, 27, 28	29, 30, 31, 32, 33	34
築上郡北部	35, 38	36, 39, 40, 41, 42, 43	44, 45	37, 46		

1~2 北九州市横代堂ノ前遺跡 (引用文献4)
3~6 北九州志御座遺跡 (引用文献5)
7 みやこ町菩提遺跡 (引用文献6)
8~11 みやこ町黒添赤木遺跡 (引用文献3)
12~34 苅田町馬場長町遺跡 (本書)
35~37 築上町築城千代遺跡 (引用文献2)
38~46 赤幡森ヶ坪遺跡 (引用文献1)

0 30 cm

第73図 京都郡・築上郡における8・9世紀の甕形土器比較図 (1/12)

- 3 みやこ町教育委員会 2009『みやこ町内遺跡群Ⅲ』みやこ町文化財調査報告書第4集
- 4 図と写真からは判断が困難だが、苅田町谷遺跡Ⅰ - B地区（苅田町教育委員会 1990『谷遺跡調査報告書』苅田町文化財調査報告書第11集）にも相当するものがあると思われる。京都郡の当該期の同一器種では外面ヨコナデのものが多く見られることから、企救郡を中心とする成型技法であることは間違いない。
- 5 木太久は、底部の成型を指オサエによるとしているが、本遺跡出土資料の筆者の観察では外面は指オサエだが、内面の調整単位は刃をもち、指には広すぎる窪みが連続していることから板状工具によるオサエ と考えた。土師器の丸底の成型技法であるいわゆる「コテ当て」技法（注6）に似るが、より細かい単位で施されているので、ここでは「コテ当て」の用語は使用しない。
- 6 森田勉 1977「大宰府出土の土師器に関する覚書（2）」『九州歴史資料館研究論集』3集 九州歴史資料館
 中島恒次郎 2001「「コテ当て技法」再論」『中世土器研究論集 - 中世土器研究会 20周年記念論集 - 』中世土器研究会
- 7 佐藤浩司 1992「ケズリのない甕 - 豊前企救型煮沸具の語るもの - 」『研究紀要 - 第6号 - 』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
 なお、分布については佐藤 2001「豊前企救型甕考」『大分・大友土器研究会』大分・大友土器研究会で再考しており、豊後地域での出土（注14）も報告されている。
- 8 北九州市横代堂ノ前遺跡1区（引用文献4）と御座遺跡第1地点（引用文献5）では9世紀後半から10世紀の資料が蓄積されたことで、企救型甕から連続する煮沸具の様相が明らかになった。焼塩壺の項で後述するが、タタキ成型の甕は玄界灘式製塩土器にあたるものはなく、煎熬した痕跡もないので、通常の煮沸具である。
- 9 小田和利 1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』 同じようなタタキ成型の甕は豊後地域にも見られ、須恵器工人との関係が想定されている。（注14）
- 10 引用文献2
- 11 小田和利（前掲注9）はこれらの平底甕を東北系と考えており、強制移住させられた俘囚の集落と想定している。
- 12 福岡県教育委員会 2012『築城千代遺跡』福岡県文化財調査報告書第234集
- 13 北陸地方では丸底の甕と平底の鉢が共存しており、赤幡森ヶ坪遺跡16号住居跡（引用文献1）の様相と一致する。
- 14 稗田智美 2010「第三章第5節（5）豊後における古代前期の煮沸具について」『下郡遺跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集

第73図引用文献

- 1 福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 8 - 中巻 赤幡森ヶ坪遺跡の調査』
- 2 福岡県教育委員会 2012『築城千代遺跡』福岡県文化財調査報告書第234集
- 3 苅田町教育委員会 1987「Ⅲ. 黒添・赤木遺跡」『黒添・法正寺地区遺跡群』福岡県苅田町文化財調査報告書第6集
- 4 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003『横代堂ノ前遺跡1区』北九州市埋蔵文化財調査報告書第302集

5 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 1999『御座遺跡群』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 236 集

6 福岡県教育委員会 2003『菩提遺跡 I』一般国道 201 号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告 1

須恵器の製作地

馬場長町遺跡の北 1,700 mには豊前国の一大須恵器生産地である「水晶山系窯跡群」があり、遺跡が立地する南の殿川を遡った西 1,200 mには殿山窯跡（注 1）がある。残念ながら殿山窯跡については消滅しており、窯跡出土資料が残っていないため、比較することができない。

豊前北部地域で現在までに発見されている奈良時代に操業する須恵器窯は豊前市四郎丸窯跡（注 2）と水晶山系窯跡群のみなので、水晶山系窯跡群は築上郡より北の豊前地域に須恵器を供給したと考えられる。

それを裏付けるように、北九州市側にはトギバ窯跡（注 3）・御祖神社裏窯跡（注 4）・洗子窯跡（注 5）・山方窯跡（注 6）と、近年発見された朽網原池窯跡（注 7）が群集し、この窯跡群の所在する丘陵地帯から沿岸部に降りたところにも、狸山窯跡群・天観寺山窯跡群（注 8）・向野山窯跡群（注 9）がある。また、京都郡側ではこれらの群から離れて荘原池窯跡（注 10）と殿川窯が点在している。発掘調査が行われたのは天観寺山窯跡群、トギバ窯跡、洗子窯のみで、洗子窯では窯本体は残っておらず、灰原のみが残っていた。本遺跡も水晶山系窯跡群から供給を受けていたことが予想されるので、これらの調査成果から得られた水晶山系窯跡群の製品との比較してみよう。

馬場長町遺跡出土の須恵器の上限は、第 40 図 14 が低く中央が窪む扁平なつまみと裾の広がり小さく、裾の内傾がほとんどないことから、大宰府の SD2340 併行の 8 世紀前葉である。この時期の資料は数量的に少ないだけでなく後代のものと比べると器壁の厚さやつまみの径などが異なる。高台付杯の最も古いものは第 28 図 1・2 で、高台が底部外縁より内側に付いて外傾し、口縁部が外傾するので、この時期に相当する。皿については、第 14 図 1・10～13 は底部が丸底で、1・11 は特に屈曲が弱いことから、7 世紀後半の杯の様相に近い。径が小さいことから杯から派生した皿といえ、この時期に属するだろう。

トギバ窯跡と洗子窯はまだ操業が始まっておらず、その前段階の朽網原池窯跡の採集資料とも異なる。天観寺山窯跡ではちょうどこの時期の資料がないことから比較できないが、特徴的には前段階の天観寺山窯跡 VI 様式と一致するので、天観寺山窯跡のものだろうか。これに対し、第 40 図 22 から 24 と第 11 図 18・19・25 は重ね焼きの痕跡のない精製品で、つまみ上半が丸みをもちつつ尖るのは 7 世紀後半の様相だが、平坦な天井部をもち、裾には返りがなくなり、内面側をナデ窪ませているのは 8 世紀前葉まで降る特徴なので、これらも同時期に属するものだろう。類例を知らないが、少なくとも水晶山系窯跡群のものとは異なる精良さをもっている。

この次の 8 世紀中葉段階には水晶山系窯跡と同一系統のものが大量に出土する。ヘラ記号もトギバ窯跡で見られるものとはほぼ同じで、2 条の平行線の一端がわずかに開くものや、浅く細く線描きされた十字が、蓋の内面や皿の底部、高台付杯の外底に入る。これと異なるのが、蓋の外表面天井部や杯の底部に短く太く 1 条の沈線が入るもので、偶発的についた工具の傷にも見える。量が少ないので、形態差まで捉えられない。

重ね焼きのため焼成不良になったものや焼成時のヒビが入ったものや灰被りの著しいものなど不良品も多く見られた。この傾向は 8 世紀後半にも存続する。この段階のもので、注目されるのが第 11 図 23 の蓋で、天井部につまみを巡るように 3 箇所凹線状のヘラ記号が入る。装飾にしては粗く、

偶発的な傷にしては等間隔に入っており、類例がない。

下限は、蓋では第 27 図 10 のように天井部から裾部まで段や湾曲がなく、端部は断面三角形であるものや、第 27 図 7 のように円柱状のつまみがつくものが最も新しい。高台付杯では、第 8 図 26 が底部端まで達する高台が外に開いている。第 28 図 8 の高台が底部外縁に達し、体部と一体化しており、第 13 図 14 は高台が体部と一体化していないが、直線的に開く体部で、最も新しい様相である。これらは、太宰府 SX2999 段階と SE400 段階の中間で、牛頸窯跡群井出 24 号窯出土資料に近い 8 世紀末から 9 世紀初頭段階であろう。トギバ窯跡と洗子窯跡は操業の最終段階であり、水晶山系窯跡群全体の操業が縮小する段階ではないだろうか。

円筒状土製品

流路跡からほぼ完形で出土した第 29 図 18 の円筒形土製品は、円筒形の上部に断面方形の鏝が付くもので、器壁が厚く、頑丈なつくりで、内面に変色や付着物はない。北九州市御座遺跡第 2 地点（注 11）では、やや小型品で下端部が内傾したものが出土しており、下端の形状や透かしや文様の装飾がないことから器台の可能性はないだろう。

ほかの福岡県内の類例としては破片資料だが、舟山良一が「円筒状土製品」として牛頸窯跡群出土資料を集成している。これによると、土師質のものがほとんどだが、須恵質のものも見られ、土師質のものも窯で焼成した可能性が強いとしている。（注 12）

これらについては、当初器台と考えられていたが（注 13）、滋賀県野洲町小堤遺跡からは、置きカマドの上端が鏝付きの筒形になる（第 74 図 11）ものがあり、京都府八幡市内里八丁遺跡では鏝の上に煙突の先端部分がつくもの（第 74 図 6）があることから煙突と考えられる。本遺跡の資料はこうした類例より短いことから、下段と組み合わせて使用したものかもしれない。（注 14）。また、崔榮柱は韓半島と日本列島の資料の形式分類と編年で行っており、朝鮮半島に系譜を求められることを明らかにしている。（注 15）

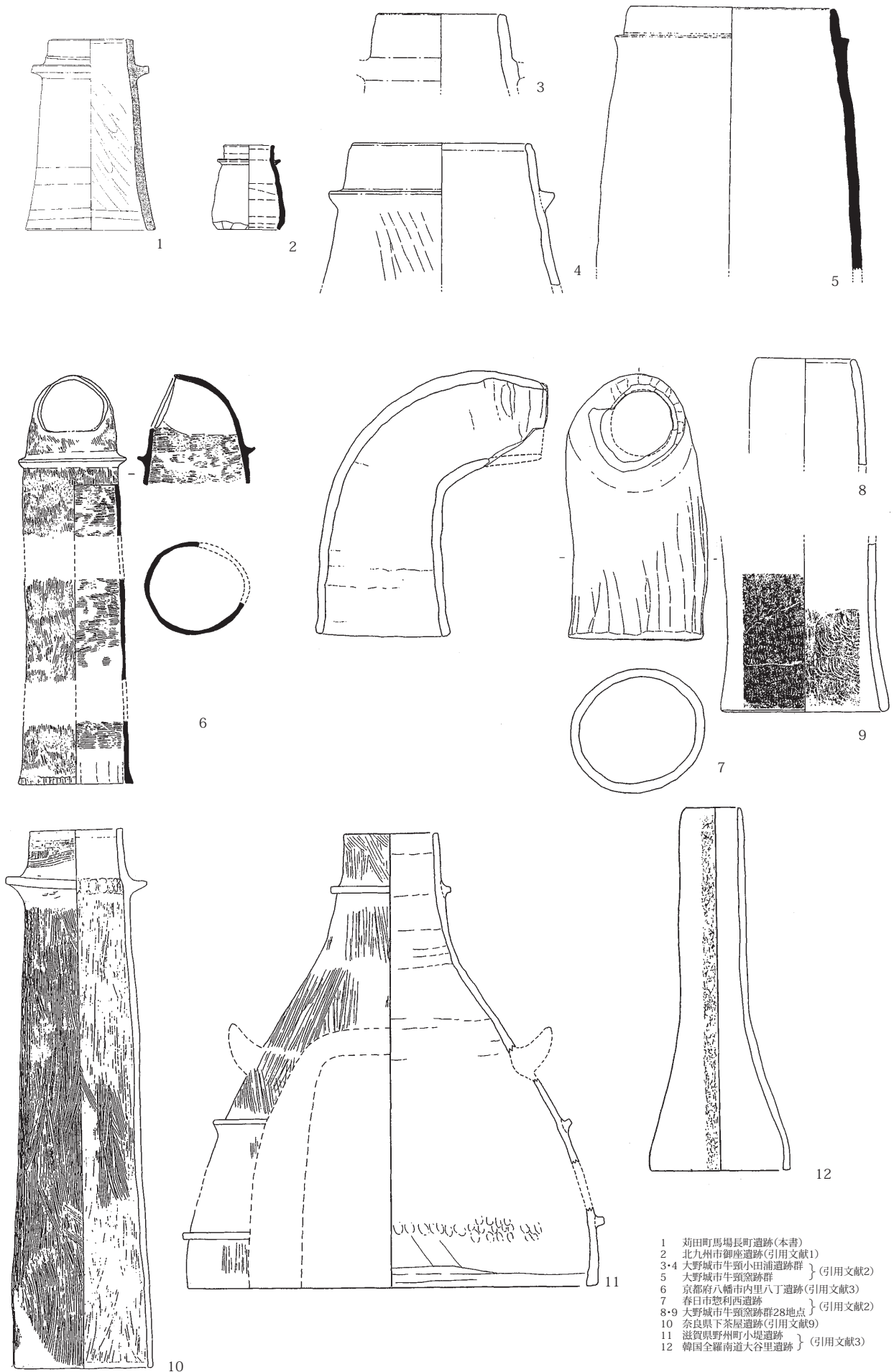
煙突は朝鮮半島に類例に系譜が見られ、奈良県下茶屋遺跡では半島系遺物が出土していることから、渡来系氏族との関係の深い地域で出土する傾向がある。本遺跡においては渡来系氏族との関係を示唆する遺物はないものの、北九州市御座遺跡では面皿・転用皿を伴っており、同遺跡の別の地点では火葬墓や蔵骨器が発見されており、有力者の存在を示している。

このようにカマドの煙突と見られる円筒状土製品の出土は、官衛的な施設というよりも有力者居宅の存在を示しているといえよう。

墨書土器

本遺跡の墨書土器は 9 世紀以前の須恵器にしか見られない。墨書のうち、文字として判読できるのは第 28 図 22 の「吉徭」と第 43 図 28 の「水」である。記号としては第 41 図 6 の○が三角形に配置されたものがある。「吉徭」の徭は「備」の異体字で「吉備」となる。「吉備」の墨書は北九州市長野 A 遺跡（注 16）にあり、「吉」のみの墨書があるので、第 42 図 18 も「吉」であろう。また、○が三角形に配置されたものも長野 A 遺跡に類例を求められる。「水」は小型壺の底部に書かれているので、内容物を示す可能性もある。また、第 27 図 24 は判読できないが、「寺」の可能性もある。

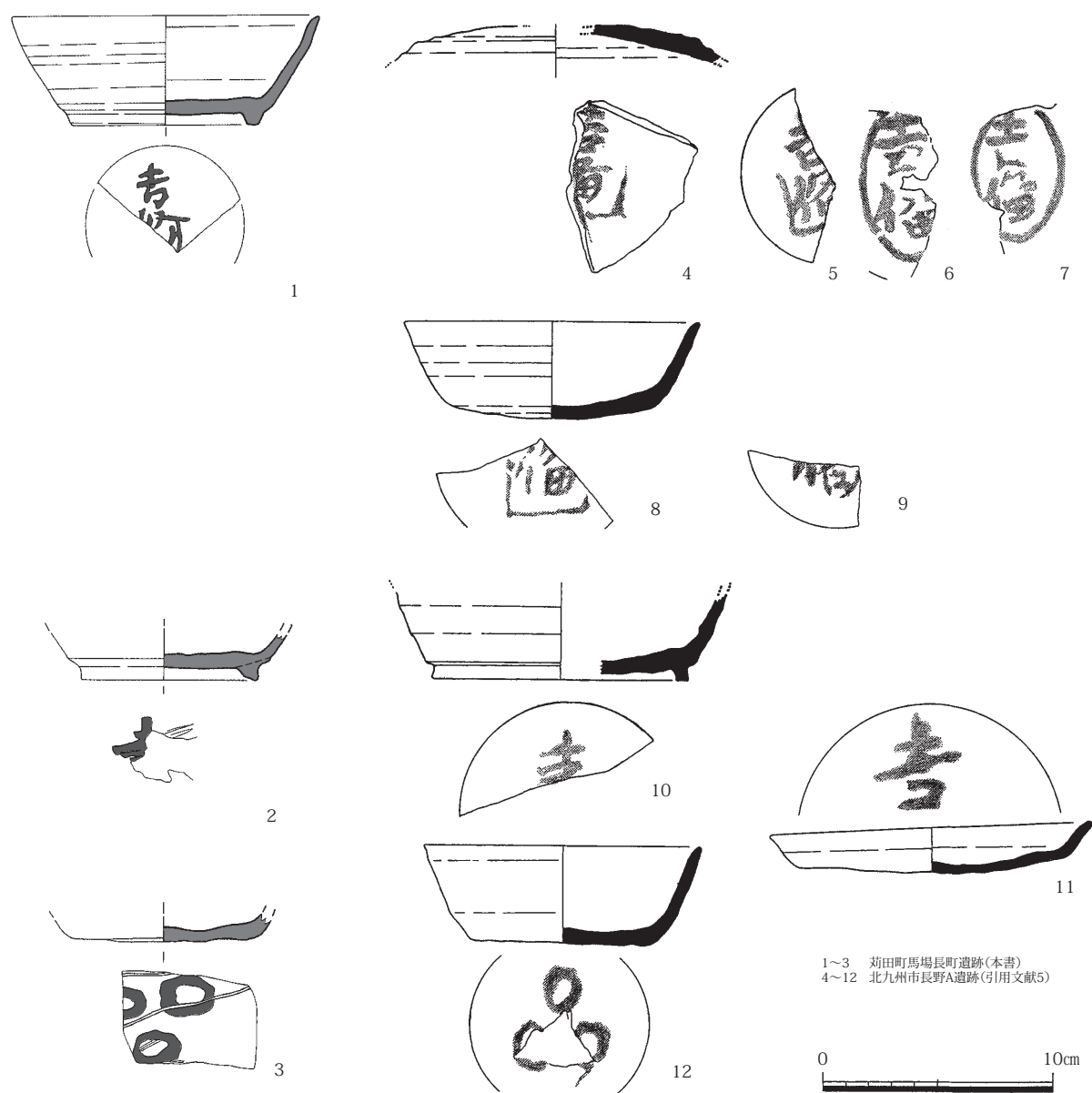
本遺跡では皿は出土しておらず、転用皿も見られない。北九州市長野 A 遺跡に類例があることから搬入品の可能性もあるが、墨と見られる光沢のある液体が厚く付着する土師器があることから、識字層が存在したと見てよいだろう。



- 1 菊田町馬場長町遺跡(本書)
- 2 北九州市御座遺跡(引用文献1)
- 3-4 大野城市牛頸小田浦遺跡群 } (引用文献2)
- 5 大野城市牛頸窯跡群 } (引用文献3)
- 6 京都府八幡市内里八丁遺跡(引用文献3)
- 7 春日市惣利西遺跡 } (引用文献2)
- 8-9 大野城市牛頸窯跡群28地点 } (引用文献2)
- 10 奈良県下茶屋遺跡(引用文献9)
- 11 滋賀県野州町小堤遺跡 } (引用文献3)
- 12 韓国全羅南道大谷里遺跡 } (引用文献3)

第74図 円筒状土器・煙突の類例(1/8)

ここまでの土器の考察結果をまとめてみると、土師器の丸底杯は企救郡内に分布の中心があるので、甕の主体を成す企救型甕とその後継のタタキ成型甕も企救郡内のものである。須恵器は水晶山系窯跡群から供給を受けており、土師器・須恵器ともに企救郡の土器圏に属していたことがわかる。墨書土器も、郡境を越えて長野 A 遺跡と同じものが出土しており、これらを考え合わせると、馬場長町遺跡の所在する苧田町沿岸部は、京都郡の中心地とは小波瀬川や京都峠に遮られており、地勢的には企救郡との連続性の方が強いことから、文化圏や経済圏は企救郡に含まれていたといえる。



第 75 図 長野 A 遺跡出土墨書土器との比較図 (1/3)

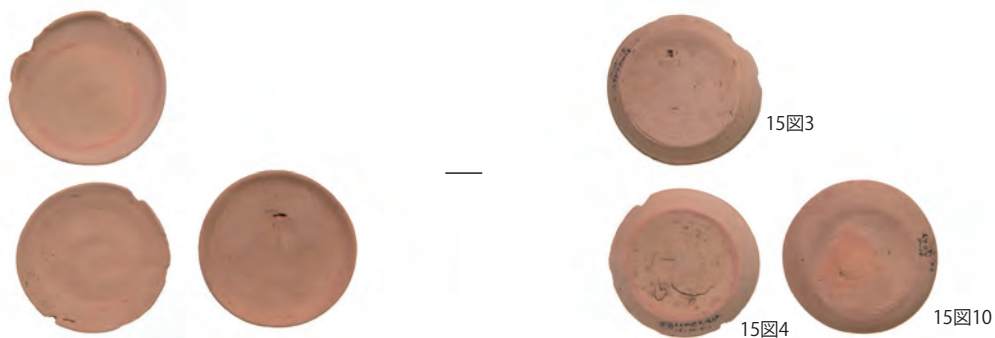


写真1 土師器の重ね焼き痕跡



写真2 視覚効果のため金雲母を入れた土師器

写真4 型作りイイダコ壺底部内面の成形痕



写真5 焼塩壺の塩の付着する例(1)と2次加熱のない例(2・3)



写真3 焼け歪んだイイダコ壺と外器表面の特徴



第26図16

写真6 墨が付着している土師器杯

須恵器の重ね焼き痕 (写真7)

重ね焼き痕は、杯・高台付杯・皿のほとんどに見られたが、融着資料を根拠として重ね焼き痕から重ね方が推定できる。

杯と皿はほとんどが、同一器種の重ね焼きである。(第76図2～4) この場合重ならない内外面の口縁部が火を強く受け、底部など重なるため火を受けない部分は焼成が弱くなる。斜めに傾いて重なっている場合は、個体間が近接している側の色調境界が明瞭だが、反対側は不明瞭かあるいはグラデーションになる。

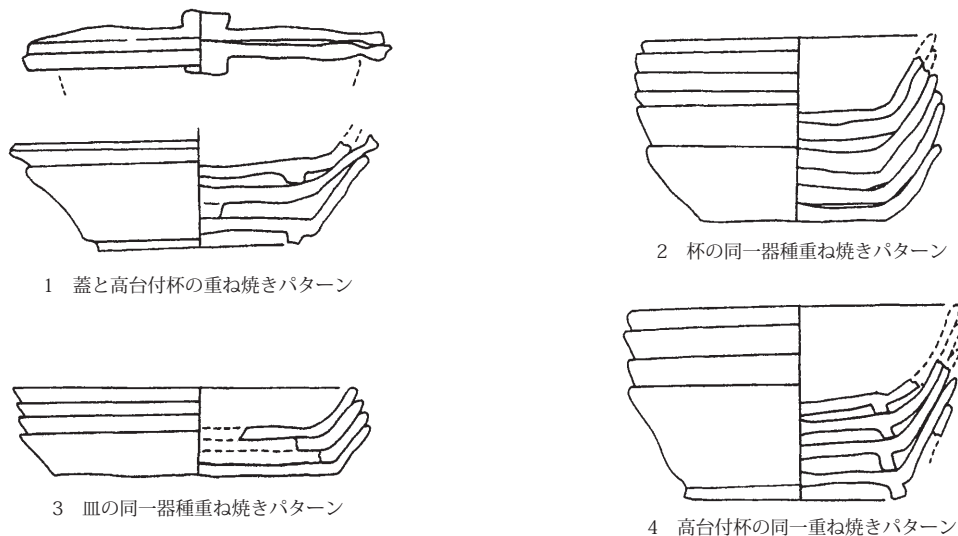
数量的には少ないが、杯と皿にのみ内外面に火襷として残るものがある。これは同一器種を重ねるために隙間が小さくなるため藁など植物質を個体間に挟んだものである。試行的に行われたのか搬入品だろう。

高台付杯と蓋については、蓋を倒置して高台付杯の上に被せ、その上にさらに同じ重ね方をした蓋と高台付杯のセットを重ねていくものが、トギバ3号窯第一次床面に見られた。(注17) この焼成パターン(第76図1)では、蓋は倒置しているので、覆っている高台付杯から出る裾端部の外面が火を強く受け、内面は上に重なる高台付杯の高台の径の部分だけ焼成不良となる。

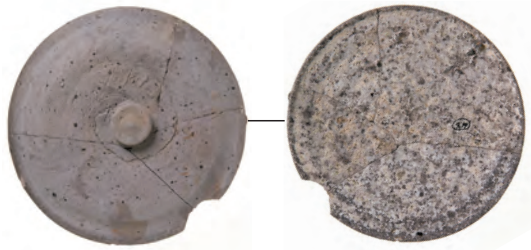
ほとんどがこの焼成パターンだが、蓋の外面が火を強く受けるものもある。これについてはトギバ3号窯の出土状況と洗子窯跡の融着資料(注18)に見られるように重ね焼きの最上部に蓋を正置したことによるものが考えられる。また、蓋の内面の重ね焼き痕跡の境界が不鮮明なものがあり、これは重ねた個体と接していなかったことを示すので、蓋だけの重ね焼きも想定される。(注19)

蓋を倒置して高台付杯の上に被せるパターンの場合、蓋外面端部で重ね焼きの荷重を受けることになるので、天井部が下がるため口径は小さく、器高が高くなる。蓋を正置する場合は逆に自重で器高が低くなる。つまみや裾端部の形状は同じなのに、器高や体部形状が異なったり歪みが大きいのはこのためであろう。また、高台付杯も重ね焼きの下位のものは、上位のものに比べて、上の個体の重さで口縁部が外反することから、器形の形状は重ね焼きパターンを考慮する必要がある。本書の遺物の説明中にはあえて重ね焼き痕の記述を盛り込んだ。

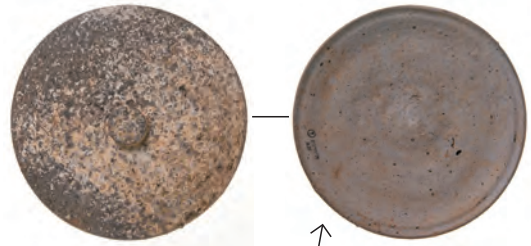
さらに、蓋の外面の3分の1ほどが不整形に焼成不良になっているものもあったが、これもトギバ3号窯で壁に立て掛けた例にあたる。トギバ3号窯ではこれらの焼成パターンが一括で出土しており、これは本遺跡でも焼成パターンによる時期差やヘラ記号の差異がないことと一致する。



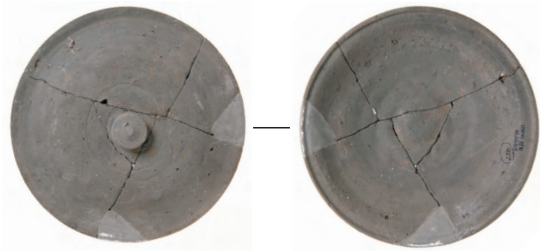
第76図 須恵器重ね焼き模式図 (引用文献2から改変)



内面を上にして置き、その上に何も重ねないパターン（内面灰かぶり）



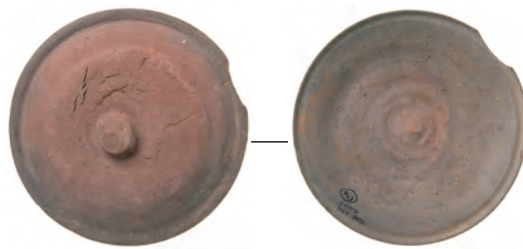
外面を上にして被せたパターン（外面灰かぶり）



高台付杯の上に倒置して、内面側に蓋を被せるパターン（外面裾部のみ強く火を受ける）



蓋と重なる高台付杯の焼成パターン（外面体部のみ強く火を受ける）



高台付杯との重ね焼きの中間に位置するパターン（外面裾部と内面中央以外に強く火を受ける）



窯の壁に立て掛けるパターン（外面の偏った範囲灰かぶり）

写真7 重ね焼き痕から復元した須恵器杯蓋と高台付杯の焼成パターン

注

- 1 未調査消滅 苅田町教育委員会 2000『苅田町の文化遺産』苅田町文化財調査報告書第 34 集
- 2 小田富士夫編 1977『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会
- 3 福岡大学人文学部考古学研究室 2007『豊前・トギバ窯跡の調査』福岡大学考古学研究室調査報告第 5 冊
- 4 前掲 2
- 5 引用文献 6
- 6 前掲 4
- 7 木太久守 2006「朽網原池窯跡出土の須恵器について」『研究紀要 - 第 20 号 - 』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 8 前掲 4
- 9 前掲 4
- 10 前掲 1
- 11 引用文献 1
- 12 引用文献 2
- 13 引用文献 4
- 14 引用文献 3
- 15 崔榮柱 2010「三国・古墳時代における土製煙筒研究」『立命館大學考古学論集 V』立命館大学考古学論集刊行会
- 16 引用文献 5
- 17 前掲 3 出土状況図版
- 18 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003『洗子窯跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 299 集
- 19 天井部が強く火を受けるものについては、いずれも天井部に重ね焼き痕跡や融着資料がないことから、高台付杯を蓋を正置したものの上に重ねるパターンはなかったようだ。重ね焼きの最上部だけ蓋と杯を合わせた可能性はあるが、第 76 図 1 のように扁平な蓋の内面同士を重ねれば、高台付杯に正置したのと同じように端部のみが火を強く受ける状況になる。

第 74 ～ 76 図引用文献

- 1 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 1999『御座遺跡群』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 236 集
- 2 舟山良一 2008「V. 出土遺物の検討 4 その他の遺物」『牛頸窯跡群 - 総括報告書 I - 』大野城市文化財調査報告書第 77 集
- 3 徳網克己 2001「付章 2 カマドに伴う煙突について」『平成 11 年度中主町内遺跡発掘調査年報 光相寺遺跡第 26 次発掘調査報告』中主町文化財調査報告書第 60 集
- 4 太田博之 1996「韓国出土の円筒形土器と埴輪形土器」『韓国の前方後円形墳』雄山閣出版株式会社
- 5 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『長野 A 遺跡 2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 54 集

イイダコ壺

本遺跡からは465点58個体以上のイイダコ壺が出土している。器形別に分けると、最大径が口縁の下にあるもので、口縁部の内湾が小さいもの（第61図1～8）と大きいもの（第61図9～17）がある。口縁が大きく内傾し、最大径が肩から胴上位にあるものでは、口縁部の内湾が小さいもの（第61図18～23）と大きいもの（第61図24～31）がある。これらは最大径が高い位置にあるため、底部はすぼまる尖り底になる。穿孔はいずれも内から外に穿たれており、器壁が外に膨らんでいる。第62図は最大径が胴中位にあるもので、これらは底部に向けて急激にすぼまる。このうち4だけが胴部のふくらみが大きい、器壁が厚く、指オサエが顕著である。

色調は焼成と2次的影響の有無により異なるが、基本的には褐色パミスを含む黄橙色の胎土で、内外面は口縁部ナデで、内面はナデのみだが、底部は強くオサエながらヨコナデされている。外面は表面が小タタキ状に見えるがこれは器面が荒れているためではない。海水の影響であれば、内面にも同じ荒れができるはずだが、内面は器面が残っている。海砂に接するためであるとすれば、全面均一に摩滅することも考えにくい。また、第38図2は焼成が強すぎ須恵器のように硬化しているのに同じような器面の荒れがあるので、砂の影響でもない。また、このような調整は他の土器には見られない。

口縁部外面には縦に微隆起が一定幅で見られるものがある。また、ほかの地域のイイダコ壺よりも格段に器壁が薄いにもかかわらず、強いヨコナデが見られる。このことから、木を深鉢型を彫り込み、抉った表面を平滑にしないまま、粘土を押し当てた型押し技法が考えられる。口縁部は肥厚させたのではなく、型から出る部分なので押し当てられずに、器壁が厚いまま残ったのである。

本遺跡では流路跡から焼土が出土するものの、明確な焼成遺構は認められなかったが、形態と胎土がほぼ単一であるとともに焼成不良で大きく変形して使用に耐えないものが存在するので、生産遺跡だった可能性が高い。出土するもののほとんどは使用可能なものなので、焼成するだけでなくイイダコ壺漁も行っていただろう。

こうした成型技法を豊前北部地域の他の資料と比較してみよう。豊前地域はイイダコ壺が多く出土する地域で、古墳時代後期から奈良時代の沿岸部の集落には必ずといってよいほど出土する。京都平野で内陸部から出土するのは内海が埋め立てられているためだが、築上町広幡遺跡（注1）のように海岸線から約2.4キロ内陸からの出土するような場合は川を利用していただろうと考えられる。

平尾和久が明らかにしたように、東瀬戸内地域で弥生時代に盛行していたものが古墳時代初頭に九州の博多湾沿岸と周防灘沿岸に伝播したもので、周防灘沿岸では苅田町石塚山古墳出土品が最古例となる。（注2）豊前地域でイイダコ壺が多量に出土した例としては、古墳時代前期の豊前市赤熊花ノ木遺跡（注3）があるほか、323点が出土した北九州市宇土遺跡9号土坑（注4）と53点が出土した中津市定留遺跡（注5）と中津市野田遺跡（注6）がある。赤熊花ノ木遺跡を除いてイイダコ壺焼成土坑が検出された生産遺跡である。

形態を比較してみよう。北九州市でも竹間川流域の葛原遺跡（注7）や長野A遺跡（注8）では、最大径を口縁部にもち底部がすぼまる鉢形で底部と側面に穿孔があるタイプである。胴部が膨らみ、穿孔が口縁部下にあるものは、玄界灘沿岸部か中国地方の影響を受けた形態である。

北九州市宇土遺跡のものは、本遺跡のものと同じ形態で器壁の薄いものに限定される。苅田町雨

窪遺跡（注9）は完形に復元できるものがほとんどないが、ほとんどが同一タイプで、一部に尖る底部に穿孔がある竹馬川流域タイプの底部と、平底気味の底部に穿孔がある。

行橋市中央部今川流域の福富小畑遺跡（注10）では本遺跡と同じタイプと竹馬川流域タイプが存在する。行橋市でも南部の稲堂豊後塚遺跡（注11）とみやこ町豊前国府徳政地区（注12）のものは器壁が厚い手捏ね成型で、築上郡北部のものに近い。

築上郡では器壁が厚い点で共通するが、底部穿孔有無の差異がある。安武深田遺跡（注13）は穿孔がない点で行橋市域と近く、赤幡森ヶ坪遺跡（注14）と広幡遺跡（注15）は穿孔がある点で豊前市側に近い。同じ城井川流域の海側に近い築城千代遺跡（注16）では最大径が胴下位にある洋ナシ形で上底状という特異な器形で、築上町東八田上穴間遺跡（注17）に類例がある。城井川下流域の宇留津吹其遺跡（注18）は築上町北部のものに近く、器壁が厚い。

城井川下流域の東高塚弘法田遺跡（注19）は器壁が薄く、豊前市域のものに近くなる。

岩丸川流域内陸部の越路地区では、越路竹ノ下遺跡（注20）で、器壁が厚い築上郡北部のものに近いものが見られる。

このように、小地域で形態差があり、それぞれの小地域で生産されたことがわかるとともに、多くの遺跡で他地域から搬入されたものが若干混在することから、イイダコ壺は生産地のものと近隣地域のものを併用していたことがわかる。

本遺跡のように器壁の薄いイイダコ壺は苅田町沿岸部から企救郡南部以外には中津市野田遺跡・定留遺跡で見られ、その間の築上郡では見られない。一方、口縁部が直立する第61図4は北九州市の周防灘沿岸北部に見られるもので、そこからの搬入品だろう。また、器壁が厚く穿孔が2つある第62図4は、行橋市南部から築上郡の特徴と苅田町域の特徴を併せ持つことから、行橋市北部の沿岸部に未発見の類例があるのではないだろうか。

焼塩壺

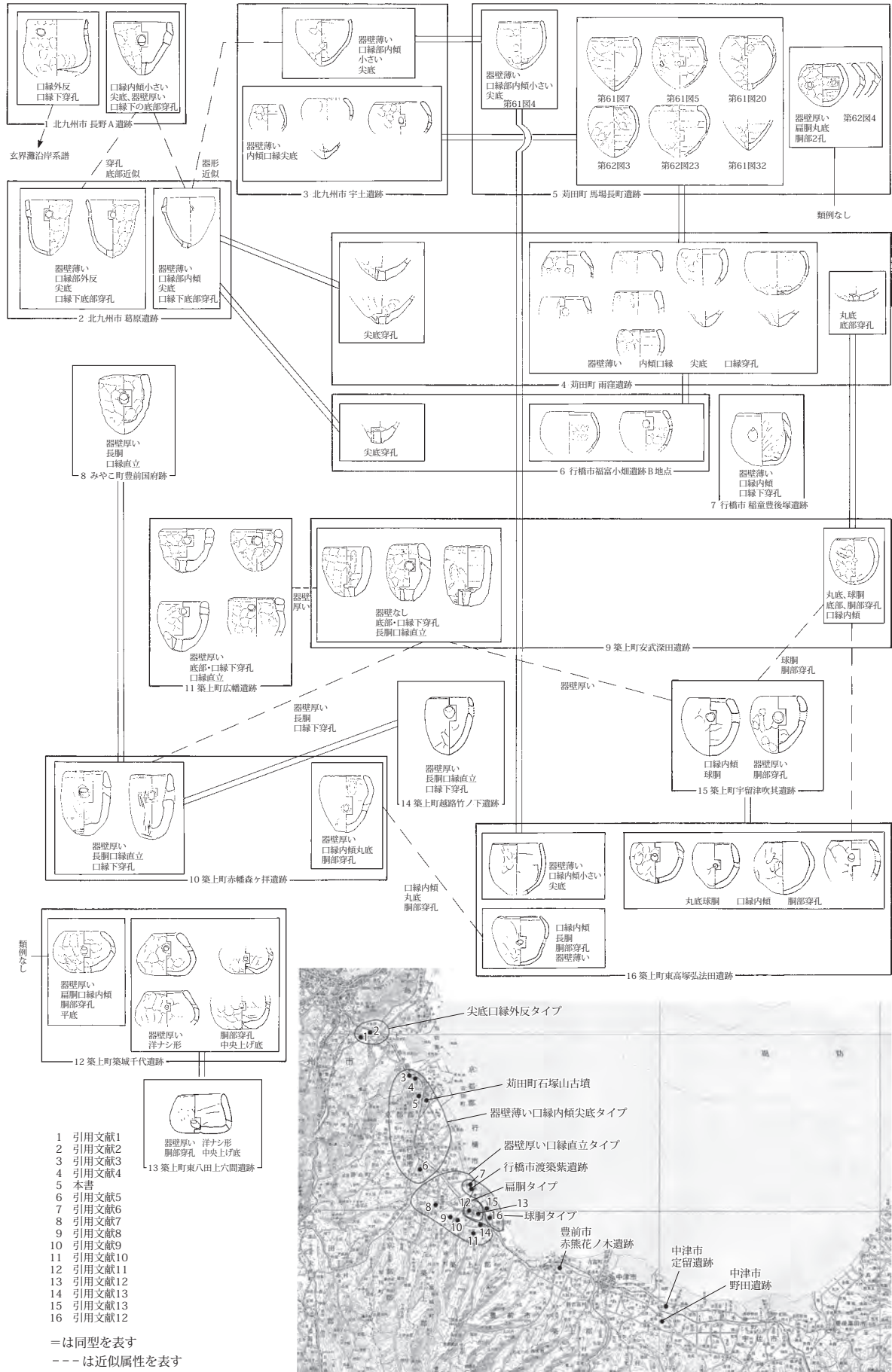
焼塩壺は流路跡から多量に出土しているが、層を成したものではない。ほとんどが砲弾形の六連島式で1506点出土しているが、このうち同一個体と認定できたものから少なくとも234個体分はあったといえる。鉢形はわずかで61点20個体以上の鉢形がある。煎熬作業に使った製塩土器と見られるものはわずかに1点の小型甕のみである。タタキを持つ土師器の甕は多く出土しているが、タタキや器壁の厚さから玄界灘式製塩土器ではないといえる。

豊前地方の製塩遺跡では、玄界灘式製塩土器がほとんど出土せず、煎熬作業には小型の鉢・椀土器や手捏ねの小型甕が使われている。（注22）本遺跡は煎熬作業をしていないのでいわゆる製塩遺跡ではない。

では、本遺跡のように1集落で使いきれないほどの量が出土するのはなぜだろうか。祭祀遺跡ではないので、残された可能性の1つは焼塩の生産地という考え方である。

焼塩壺は壺に塩を詰め、焼成して、そのまま消費地に運び、消費する際に壊されて塩が取り出されて廃棄されるので、大量に出土するからといって生産地とは限らず、大量消費地であった可能性もある。（注23）しかし、作業中に破損したものは生産地に残る。

遺跡の後背には燃料となる山林が広がっていることから、山林を所有する寺院や官衙関連施設が焼塩を作っていたと考えることができる。実際に北九州市乙丸宮ノ下遺跡（注24）は洞海湾最奥部と遠賀川の間位置する内陸部で焼塩作業を行っている。これは大宰府の観世音寺領の山林があるため、沿岸部の製塩遺跡で作られた粗塩を搬入して焼き塩を作り、観世音寺に納入したものである。



第77図 イイダコ壺比較図 (1/9・1/600,000)

この場合、焼塩作業を行うには煎熬作業後の粗塩が必要なので、煎熬土器が搬入されていると考えるべきだが、洞海湾以外では煎熬土器がほとんど見られない。六連島式焼塩壺には煎熬作業を行った痕跡はないので、律令期の豊前地域では煎熬作業を鉄鍋など別の方法をとっていたと考えたい。

その前提に立てば、煎熬土器が持ち込まれていなくても不自然ではなく、同じ範型の特徴をもつものが確認できることや2次焼成を受けていない焼塩壺片があることから、焼塩作業を行っていたと考えることができる。焼塩壺の胎土にバリエーションがあるのは、容器のみを搬入していたとも考えられる。

なお、本遺跡出土の焼塩壺は砲弾形と鉢形があるが、前述したように砲弾形が圧倒的に多い。北九州市内では鉢形が比較的多く見られ、福岡平野ではさらに割合が高くなり、筑後地域では鉢形の方が多くなる。逆に、豊前地域では南下するにつれ鉢形が少なくなる傾向にある。胎土を見ると、鉢形は精良軟質で、黄橙白色を呈するものに限定されている。砲弾形の中にも少量ながら同じタイプの胎土が見られることから、砲弾形と鉢形を併用する地域と砲弾形のみを作る地域があるようだ。砲弾形は完形に復元されるものが少ないため統計的な分析が困難だが、小型品と大型品が明らかに見受けられる。砲弾形は型作りなので、同じ容量のものを作ることができることから、意図的に小型品を作ったことになる。焼塩壺は容器入りで搬送されることから、取り扱い数量は容器単位となる。そのため必要に応じて容器の大きさを分ける必要があったのではないだろうか。その最小単位として鉢形を用いる地域と、小型の砲弾形を用いる地域があったと想定したい。

注

- 1 引用文献 10
- 2 平尾和久 2003「福岡県における飯蛸壺形土器の受容と展開」『古文化談叢第 50 集発刊記念論集（上）』
- 3 豊前市教育委員会で整理中
- 4 引用文献 3
- 5 中津市教育委員会 2006『定留遺跡 八反ガソウ地区発掘調査報告書』中津市文化財調査報告書第 38 集
- 6 また、平尾は西新町遺跡の報告書（注 21）において、中津市教育委員会花崎徹氏の教示として、中津市野田遺跡でも住居跡から 55 個のイダコ壺が出土したことを記載している。
大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007『北小枇杷遺跡・野田遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集
- 7 引用文献 2
- 8 引用文献 1
- 9 引用文献 4
- 10 引用文献 5
- 11 引用文献 6 隣接する行橋市渡築紫遺跡出土例は器壁の厚いもので、底部穿孔のあるものは築上町赤幡森ヶ坪に近く、底部穿孔のないものは築上郡椎田町宇留津吹其遺跡に近い。
- 12 引用文献 7
- 13 引用文献 8
- 14 引用文献 9

- 15 前掲注1 引用文献10
- 16 引用文献11
- 17 引用文献12
- 18 引用文献13
- 19 引用文献14
- 20 引用文献15
- 21 平尾和久 2009「第4章小結 第6節西新町遺跡の飯蛸壺と製塩土器」『西新町遺跡Ⅸ』
- 22 宇野慎敏 2006「洞海湾沿岸部の製塩遺跡について」『研究紀要第20号』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 1994『浜田遺跡・脇ノ浦遺跡 こうしんのう2号墳』北九州市埋蔵文化財調査報告書第142集
- 23 みやこ町菩提廃寺では772点が出土している。
福岡県教育委員会 2003『菩提遺跡Ⅰ』一般国道201号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告1
- 24 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室 1998『乙丸宮ノ下遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第219集

第77図引用文献

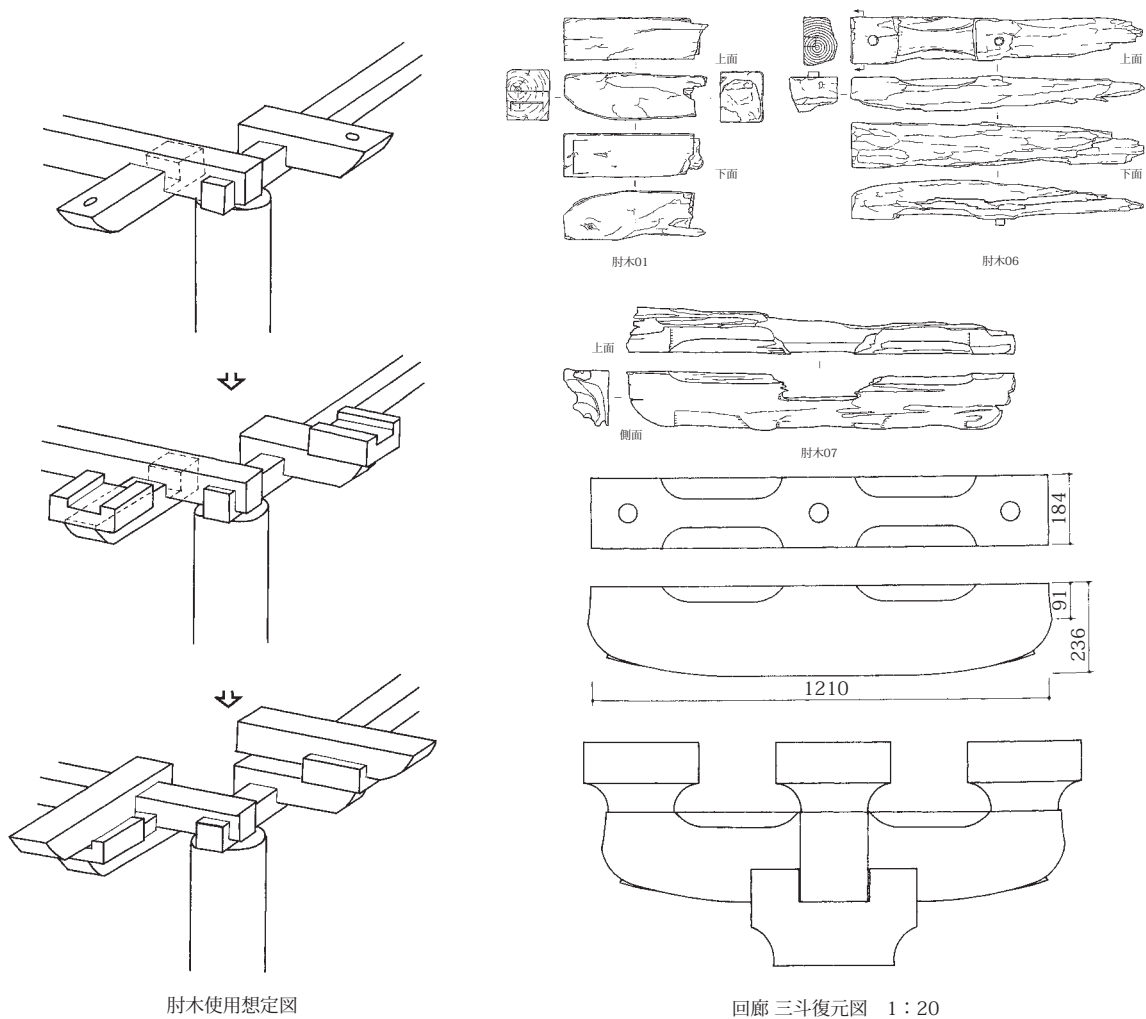
- 1 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『長野A遺跡2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 2 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1984『葛原(A)・(B)遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 3 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2005『宇土遺跡・朽網城跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第332集
- 4 福岡県教育委員会 2004『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(1)雨窪遺跡群』
- 5 福岡県教育委員会 2004『福富小畑遺跡B地点』福岡県文化財調査報告書第194集
- 6 行橋市教育委員会 2007『稻堂豊後塚遺跡』行橋市文化財調査報告書第34集
- 7 豊津町教育委員会 1986『豊前国府 昭和60年度発掘調査概報』豊津町文化財調査報告書第4集
- 8 福岡県教育委員会 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-4-安武・深田遺跡 安武・土井の内遺跡』
- 9 福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-8-中巻 赤幡森ヶ坪遺跡の調査』
- 10 福岡県教育委員会 1992「Ⅳ 広幡遺跡の調査」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-9-広幡城跡』
- 11 福岡県教育委員会 2012『築城千代遺跡』福岡県文化財調査報告書第234集
- 12 椎田町教育委員会 2004『東高塚・東八田地区と越路地区の遺跡』椎田町文化財調査報告書第14集
- 13 椎田町教育委員会 2001『日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福岡の遺跡』椎田町文化財調査報告書第11集
- 14 前掲12
- 15 椎田町教育委員会 2002『葛城地域と椎田南地区の遺跡』椎田町文化財調査報告書第12集

肘木

流路跡床面から2点並んで出土しており、方柱の端部の一面を曲面にしたもので、台形に彫られた柄穴と略方形の窪みがあることから、肘木と考えられる。(第71図) 肘木は大斗の上に乗る腕状の部材で、略方形の窪みに方柱形の太柄を挿入して大斗と組み合わせたものであるが、2点の曲面と柄穴と太柄穴との位置関係が逆になっているので、柄穴と太柄穴が曲面のある面にある方が垂木を受ける部材で、曲面の対面にある方が柱上で組物を構成する部材ではないだろうか。

本遺跡出土品は山田寺跡の肘木例の半分にあたるが、欠損品ではない。柱頭を貫通しないで、柱の中央で突付するものか、あるいは壁付きの肘木かもしれない。山田寺跡の報告書によると、肘木を二段に組むものは中世の禅宗寺院建築様式に見られるもので、飛鳥・奈良時代の現存建築には用いられないが、現代に残る建築物から類推しやすいように想定図を掲載した(第78図)。なお、中国の壁画に類例があるので、壁付きの二の肘木が存在した可能性を指摘している。

木口は垂直に切られているのは、奈良時代後半以降の特徴らしく、年代的にも符合する。この肘



第78図 肘木比較図と復元図 (引用文献16より)

木が用いられた建物は寺院の可能性が高いが、瓦はまったく出土していないので、官衙的な建築物があったのではないだろうか。しかしながら、流路内からこの肘木が並んで出土したことについては理由がわからない。

引用文献

16 独立行政法人奈良文化財研究所 2002 『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第 63 冊

自然遺物

流路跡からは多くの獣骨が出土したが、厳密には年代の特定ができない。しかし、全体の遺物量の割合から見て律令期のものが多いであろう。上述のように、焼塩壺は近隣の官衙的施設で大量消費されたものと想定したが、そう考えると多くの獣骨が出土することも理解できる。出土した獣骨のほとんどがシカ・イノシシで、残りの悪い細い骨を除けばほとんどの部位が出土している。8世紀段階では寺院が建立されるようになったとはいえ、肉食の禁忌が浸透したわけでもないので、依然としてシカ・イノシシなど食用に供されたであろう。少なくとも年に1体消費したとすると一般集落で消費した可能性もあるだろうが、類似する地質条件の遺跡でもこれほど多量に出土しないことから考えれば、やはり大量消費する施設の廃棄場所であったと考えられる。ウシの骨が出土するのも運搬に利用していたためであろう。ヒトの上腕骨が出土したことについては、本遺跡には墓がないので、墓から流入したとは考えにくい。隣接する馬場仁王免遺跡には墓があるものの、流路の対岸である。埋葬されなかった遺体が遺棄された可能性もあるが、上腕骨だけが出土するのも不自然である。むしろ、病気や事故、刑罰などなんらかの理由で失われた腕が廃棄されたのではないだろうか。

ウミガメは多くの破片があったが、1体分であったものと思われる。イイダコ壺が多く出土することから、漁撈も行っていたので、捕獲したか甲羅を入手したのだろう。

種子類はモモのみで、堅果類はなかった。モモは栽培種であり、やはり食用に供されたものだろう。

以上、8世紀から9世紀の特徴的な遺物を見てきたが、そこから見出せる遺跡の性格は一様ではない。イイダコ壺を焼成して漁を行い、焼塩作業を行うのは漁村集落の様相だが、獣骨の出土は狩猟を行っていたことを示す。さらに、肘木は大型施設が、墨書土器は識字層が、円筒状土製品は渡来系氏族が存在していたことを示す。

これらを総合すると、識字階層の渡来系氏族を官人とする大型施設が丘陵裾の中心地にあり、その周辺に漁民集落があり、大型施設に焼塩を納め、イイダコやイノシシ・シカを捕っていた。そこで消費された大量の供献土器や獣骨が、平坦地が最もせばまる斜面に捨てていたということになる。

前面に流路が流れる丘陵裾に立地し、官道からも外れているので、大型施設は官衙ではないだろう。したがって、ここでは有力者の居宅跡と考えたい。

10世紀の土師器

10世紀の土師器に見られるとおり、本遺跡では丸みをもちミガキの入る胴部の椀と、口縁が開いてナデのみの椀の2者が共伴している。口縁が開く椀は宇佐地方に多いものとされており、共伴傾向は築上郡で見られ、北九州市域での出土量は少ないようだ。

当時の馬場地区は宇佐宮弥勒寺領の宇原庄に含まれ、宇原庄は宇原神社を鎮守社としている。「本

朝世紀」長保元（998）年三月七日条によると、弥勒寺講師が往来していた記事があるので、京都郡における弥勒寺領の中核的位置を占めていたことがうかがわれる。

そのため、それまでの企救郡側の影響が弱まり、宇佐側の土器が多く入ってくるようになったと考えられる。宇佐宮は大宰府の保護をうけて発展し、北九州地域にも進出して企救郡に到津荘、長野荘、横代別府、貫荘をはじめ、弥勒寺領の篠崎荘、大野荘などが成立しており、これを反映して北九州側でも宇佐系の椀が出土するのであろう。

したがって、11世紀の1・2区は宇原庄内の開墾地と考えられる。

竪穴遺構

丘陵斜面の3区では略方形の竪穴遺構が発見された。柱は小さく壁沿いに巡っているので上屋があったことがわかる。炉やカマドはないが、排水溝がついているので、簡易的な作業小屋か、掘立柱建物跡では行えない何らかの作業場であろうか。

石灰岩焼成窯

3区から検出された窯跡は石灰岩焼成窯である。苅田町内の平尾台から延びる水晶山系の丘陵には石灰岩を豊富に含有しており、現在では石灰岩を原料とするセメント産業が盛んである。石灰は古くから主に漆喰として利用されているが、石灰岩を産しない地域では貝殻を原料としていたようだ。漆喰は石灰に、のり・砂・粘土などを混ぜ合わせたもので、白壁塗りのほか屋根の瓦の継ぎ目にも使われる。本遺跡では15世紀の井戸から鶴嘴が出土しており、石灰を採取していたことがわかる。時期的には中世後期の町屋の発展により、漆喰の需要が高まったことが予測できる。

江戸時代には肥料用に生石灰や消石灰が使われるようになる。生石灰は石灰岩を1200度で加熱してできるもので、消石灰は生石灰に水を加えた化合物である。石灰の含有量に差があるが、両者とも畑作における土壌の酸性の中和、有機物の分解促進、稲作における水田の潜在地力の活性化などの効果が得られる。明治期から戦争直後まで利用されていたが、安価な化学肥料が普及するとほとんどの窯が廃業している。

『庄内町誌』に石灰窯で石灰を製造した方の聞き取り調査がある。その構造は以下のようなものである。

山の斜面を利用してレンガと石を積み上げて立て窯を作り、窯の床より高い所の内側にレールを数本渡し、その上に丸鋼を並べて、火床を作る。火床の下に石灰の取り出し口を作り、そこにトンネル穴を繋ぐ。窯の上部には雨水が入らないように屋根を設ける。

作業は次のように行われた。人が命綱で上部から窯の中に入り、火床の上に燃料を敷き並べる。その上に小割りした煽石（石炭層の間に混入する燃焼材）と20cmの厚さに積み、その上に石灰岩を40から50cmの厚さに積んで、さらに煽石と石灰岩を交互に窯の半分くらいまで積み重ねる。

火を入れて、上部の石灰岩まで焼けて赤くなったら、さらに上から煽石と石灰岩を交互に投げ入れ、最上部まで積み上げる。粉になった生石灰をふるい落としトンネルから運び出す。

本遺跡で検出された窯では、床面には30cmほどの厚さで粉末になった石灰が堆積しており、その上に窯の4分の1ほどの高さまで1辺50cmほどの石灰岩が入っていた。煽石らしいものが見られなかったのは燃焼材であるため燃え尽きたためだろう。床面には火床にしたらしい鋼材はなかったが、トンネル部にH鋼が埋没しており、火床を構成していた部材であった可能性がある。そのことと内部に入っていた石灰岩が壁材と同規模であったことから、内部に残っていた石灰岩は焼成した残りではなく、火床の鋼材が撤去された後に壁石が崩落したものと考えられる。

作業員として調査に参加していた守利昭氏のご好意により、石灰の売買に関する記録と見られる文書を撮影することができた。同じような内容の帳簿が3～4冊あるらしく、いずれにも年号の記載はなかった。窯内部から出土した陶磁器類は大正から昭和初期のもので、苧田町では1916（大正5）年に、浅野セメント(株)（門司工場）の苧田採掘場が、1918（大正7）年には豊国セメント(株)の工場が操業を始めたことから、そのころに廃絶したものだろう。

また、窯上位からは多数のウシとウマの骨が出土した。当初は、食料残渣と考えていたが、骨自体には調理した痕跡がない。肉を丁寧に外したものと考えられ、腱の部分に刃傷が残るものもあった。しかし、骨を部位別に分けてみると、ほぼ脚部に限定されており、ウマの脚を一般家庭で食用にするとも考えにくい。解体して不必要な部位だけ廃棄したにしても、頭部がなく大腿骨があるのは不自然である。この骨が出土したのが肥料の原料となる石灰岩を焼成する窯であることから、これは肉骨粉を作るために骨だけを回収して集積していたものと考えられる。脚部でも中手骨や指骨など屠畜場で落とされる部位がないことから、食肉業者から大きい骨を回収して、動物にとられないように窯跡の深い穴に集積していたのだろう。ネコの骨が1体分混じっていたのは、窯に落ちて出られなかったものと考えられるので、窯としての操業が終わっていたことを示している。

引用文献

17 1998 庄内町・庄内町教育委員会『庄内町誌』下巻

以上のように、今回の調査では多量に出土したイイダコ壺と焼塩壺、獣骨や、円筒状土製品や肘木、鶴嘴という希少な遺物や近代の石灰岩焼成窯について考察し、遺跡の性格を明らかにするよう努めたが、遺跡の縁辺部であるため推測の域を出ない内容が多いのは否めない。遺跡の中心部はすでに宅地化されているが、今後の調査に期待したい。

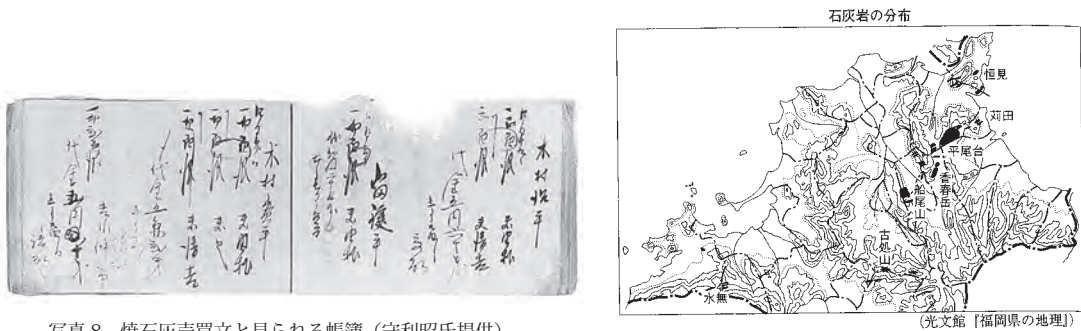
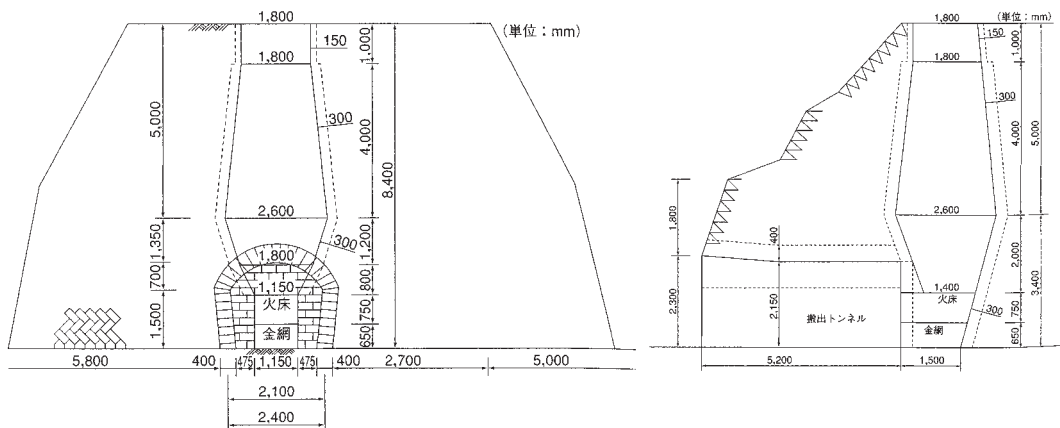


写真8 焼石灰売買文と見られる帳簿（守利昭氏提供）

（光文館『福岡県の地理』）



第79図 石灰岩分布図・入水石灰窯実測図（引用文献17から引用改変）

(5) 馬場長町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の自然科学分析では、馬場長町遺跡で出土した骨や種実遺体について、その種類を明らかにし、動植物利用に関する情報を得ることとした。

I. 種子同定

1. 試料

試料は全て乾燥した状態にあり、8世紀後半～11世紀とされる2区流路一括より出土した種実遺体8個(試料番号2～8,10)と、1・2区流路一括より出土した種実遺体1個(試料番号9)、盛土下より出土した種実遺体1個(試料番号1)の計10個である(表3)。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑類を参考に実施し、結果を一覧表で示す。また、種実遺体の重量と、デジタルノギスで長さ、幅、厚さを計測した結果を一覧表に併記し、欠損部は残存値と「+」で示す。分析後は、種実遺体を容器に入れて保管する。

3. 結果

10個全てが栽培種のももの核に同定された(表3)。写真を9に示し、以下に形態的特徴を記す。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は淡～暗灰褐色、やや偏平な楕円体を呈す。4個(試料番号2,3,9,10)は、状態が比較的良好で、長さ1.8～2.4cm、幅1.6～1.9cm、厚さ1.2～1.5cmの大型でやや偏平、頂部が尖る。残りの6個(試料番号1,4～8)は、乾燥によりやや収縮している(とくに試料番号4,7)。長さ1.4～1.8cm、幅1.3～1.7cm、厚さ0.8～1.4cmのやや小型で丸みを帯び、頂部も丸い。試料番号7のみ頂部がやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部の縫合線がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。縫合線に沿って半割した個体(試料番号6,9,10)の内面は平滑で、1個の種子が入る長さ1.1～1.6cm、幅1.0～1.1cmの楕円状の窪みがある。

第3表 馬場長町遺跡の種実同定結果

試料番号	出土遺構・地点	時期	種名	部位	状態	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	頂部の状態	備考
1	盛土下	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.81	16.2 +	15.9 +	14.0	丸	下部縫合線・基部欠損
2	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	1.34	23.2 +	19.1	15.4	やや欠損(尖る)	
3	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	1.4	24.1	18.0	14.3	尖る	
4	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.36	15.4 +	16.3	8.1	欠損	乾燥により収縮
5	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.4	17.8	16.5	11.0	やや丸い	
6	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	破片	0.26	13.5 +	14.8 +	5.6 +	欠損	内面の種子が入る窪み:長さ10.8mm、幅10.2mm
7	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.31 +	18.0	13.2	9.9	尖る	表面に泥付着、乾燥により収縮
8	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.27	16.8 +	13.6 +	7.6	やや欠損	接着剤による接合の痕跡あり
9	1・2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	半分	0.6 +	24.0	17.7	6.8 +	尖る	表面に泥付着、内面の窪み:長さ15.6mm、幅10.0mm
10	2区流路一括	8世紀後半～11世紀	モモ	核	完形	0.19 +	17.6	16.3	6.0 +	やや欠損(尖る)	表面に泥付着、内面の窪み:長さ15.3mm、幅11.0mm

注)計測値はデジタルノギスによる。欠損部は残存値と「+」で示す。

4. 考察

8世紀後半～11世紀とされる1・2区流路や盛土下より出土した種実遺体は、栽培種のモモであった。モモは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、果実や種子が食用、薬用、祭祀等に、花が観賞用に利用される。モモが周辺で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄または埋納などの人為的行為に由来する可能性がある。

II. 骨類同定

1. 試料

試料は、8世紀後半～11世紀とされる流路から121試料(試料番号1～34,36～95,97～100,116～138)、同時期とされる斜面包含層から15試料(試料番号35,102～115)、8世紀後半とされる土坑1から1試料(試料番号96)、11世紀とされる1区溝1から1試料(試料番号101)、19世紀後半～20世紀前半とされる窯体埋土から1試料(試料番号139)、合計139試料ある。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

2. 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

なお、骨格各部位の名称については、ニホンジカを例にして第80図に示す。



第80図 ニホンジカ骨格各部位の名称
(八谷・大森司,1994を改変)

3. 結果

確認された種類は、カニ類、ウミガメ類、ヒト、ネコ、イノシシ属、ニホンジカ、ウシである(表2)。同定結果を表3に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

<試料番号1;流路 No.2-1>

イノシシ属の左上腕骨遠位端である。遠位端幅41mm前後を測る。

<試料番号2;流路 No.6>

ニホンジカの中手骨遠位端である。遠位端幅38mm前後を測る。

<試料番号3;流路 No.15-1>

大型獣類の椎体である。椎体板が外れる。

<試料番号4;流路 No.15-2>

獣類の頭蓋骨の破片である。

<試料番号5;流路 No.16>

獣類の椎体である。

<試料番号6;流路 No.17>

イノシシ属の左上顎骨片である。第4前臼歯、第1後臼歯が植立する。

<試料番号7;流路 No.27>

ニホンジカの右橈骨である。近位端が欠損する。遠位端幅32.8mmを測る。

<試料番号8;流路一括>

イノシシ属の左寛骨である。

<試料番号9;流路 No.24>

ニホンジカの左下顎骨である。土塊状である。第1後臼歯が植立する。

第4表 馬場長町遺跡の検出動物分類群一覧

節足動物門 Arthropods
甲殻綱 Crustacea
エビ亜綱(軟甲亜綱) Malacostraca
エビ目(十脚目) Decapoda
エビ亜目 Pleocyemata
カニ下目(短尾下目) Brachyura
カニ類 Fam. et gen. indet.
脊椎動物門 Vertebrata
爬虫綱 Reptilia
カメ目 Testudines
潜頸亜目 Cryptodira
ウミガメ科 Cheloniidae
ウミガメ類 Gen. et sp. indet.
哺乳綱 Mammalia
サル目(霊長目) Primates
ヒト科 Hominidae
ヒト <i>Homo sapiens</i>
ネコ目(食肉目) Carnivora
ネコ亜目 Fissipedia
ネコ科 Felidae
ネコ <i>Felis catus</i>
ウシ目(偶蹄目) Artiodactyla
イノシシ科 Suidae
イノシシ属 <i>Sus</i> sp.
シカ科 Cervidae
ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ウシ科 Bovidae
ウシ <i>Bos taurus</i>

第5表 馬場長町遺跡の骨同定結果(1)

試料番号	採取位置等	時期	種類	部位	左右	部分	数量	被熱	備考
1	流路 No.2-1	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上腕骨	左	遠位端	1		Bd41±
2	流路 No.6	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	中手骨		遠位端	1+		Bd38±
3	流路 No.15-1	8世紀後半~11世紀	大型獣類	椎骨		椎体	1		椎体板外れ
4	流路 No.15-2	8世紀後半~11世紀	獣類	頭蓋骨		破片	1		
5	流路 No.16	8世紀後半~11世紀	獣類	椎骨		椎体	1+		
6	流路 No.17	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上顎骨	左	破片	1		P ⁴ ・M ¹ 植立
7	流路 No.27	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	橈骨	右	近位端欠	1+		Bd32.8
8	流路一括	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	寛骨	左	破片	1		
9	流路 No.24	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨	左	破片	1		土塊状M ₁ 植立
10	流路 No.25	8世紀後半~11世紀	ウシ	下顎第3後臼歯		破片	1		
11	流路 No.26	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	中手骨/中足骨		破片	5		土塊状含む
12	流路一括	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	中手骨/中足骨		遠位端片	1		成獣
13	流路 No.30-2	8世紀後半~11世紀	大型獣類	脛骨		遠位端片	1		
14	流路 No.32	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
15	流路 No.34	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
16	流路 No.35	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
17	流路 No.41	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨	右	破片	1+		
17	流路 No.41	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	破片	1		
18	流路 No.45	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	2		土塊状含む
19	流路 No.41-1	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	中手骨/中足骨		遠位端	1		
20	流路 No.19	8世紀後半~11世紀	獣類	頭蓋骨		破片	1+		土塊状
21	流路 No.42-1	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	中手骨/中足骨		遠位端	1		
22	流路 No.43	8世紀後半~11世紀	ウミガメ科	不明		破片	1		
23	流路一括	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	橈骨	左	近位端	1		Bp33.9
24	流路 No.46	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	大腿骨	右	近位端片	1		
25	流路 No.48	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎第3後臼歯	左	破損	1		
26	流路 No.49	8世紀後半~11世紀	イノシシ属?	距骨?	左	破片	1		○
27	流路 No.50-1	8世紀後半~11世紀	大型獣類	肋骨		破片	1		
28	流路 No.50-2	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1+		
29	流路 No.51	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1+		
30	流路 No.52	8世紀後半~11世紀	ヒト	上腕骨	右	両端欠	1		成人
31	流路 No.54	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
32	流路 No.55	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	中手骨/中足骨		遠位端片	1		
33	流路 No.56	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上腕骨	右	遠位端片	1+		Bd41±
34	流路 No.48	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎第3後臼歯	右	破片	1		齒根未形成
35	斜面包含層	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	寛骨	右	破片	1		
36	流路一括	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上腕骨	左	遠位端	1		Bd35.1
37	流路 No.61	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	3		
38	流路 No.59・62	8世紀後半~11世紀	ウミガメ科	肋骨板		破片	9+		
39	流路一括	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎第1門歯	右	破片	1		
40	流路 No.67	8世紀後半~11世紀	ウシ	肩甲骨	右	破片	1		
41	流路 No.67	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	第3/4中手骨/中足骨		遠位端片	1		成獣
42	流路 No.68	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	肩甲骨	右	破片	1		
43	流路 No.68-1	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
44	流路 No.70	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨	左	破片	1+		P ₂ -M ₃ 植立
44	流路 No.70	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨	右	破片	1		P ₂ M ₂₋₃ 植立
44	流路 No.70	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨		破片	15+		
44	流路 No.70	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	臼歯		破片	5		
45	流路 No.73	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	下顎骨	右	破片	1		P ₂ -M ₃ 植立
46	流路 No.74	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	肩甲骨		破片	1+		
47	流路 No.75	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	頭蓋骨		基底後頭骨	1		
48	流路 No.76	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎骨	左	破片	1		M ₃ 植立
49	流路 No.78	8世紀後半~11世紀	獣類	肋骨		破片	1		○
50	流路 No.79	8世紀後半~11世紀	獣類	肋骨		破片	1+		
51	流路 No.80	8世紀後半~11世紀	ウシ	肩甲骨	左	破片	1		
52	流路 No.81	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎骨	左	破片	1+		M ₃ 植立
53	流路 No.83	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上腕骨	右	遠位端片	1+		幼獣
54	流路 No.84	8世紀後半~11世紀	獣類	下顎骨		破片	1		
55	流路 No.86	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎骨	左	破片	1		M _{1,3} 植立
55	流路 No.86	8世紀後半~11世紀	イノシシ属?	下顎骨?		破片	13		
55	流路 No.86	8世紀後半~11世紀	イノシシ属?	頭蓋骨?		破片	1		
56	流路 No.87-1	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	寛骨	右	破片	1		
57	流路 No.87-2	8世紀後半~11世紀	大型獣類	腰椎		破損	1		椎体板外れ
58	流路 No.87-3	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
59	流路 No.88	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1		
60	流路 No.90	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	腰椎		破損	1		
61	流路 No.91	8世紀後半~11世紀	大型獣類	寛骨	右	破片	1		
62	流路 No.92	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	脛骨	左	遠位端片	1+		土塊状
63	流路 No.95-1	8世紀後半~11世紀	大型獣類	肋骨		破片	1		
64	流路 No.95-2	8世紀後半~11世紀	獣類	不明		破片	1+		
65	流路 No.95-2	8世紀後半~11世紀	獣類	頭蓋骨		破片	1+		土塊状
66	流路 No.95-3	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	中足骨		近位端片	1		Bp20.2.幼獣
67	流路 No.95-4	8世紀後半~11世紀	獣類	肋骨		破片	4		
68	流路 No.96	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	上顎第2前臼歯 -第2後臼歯	右	破片	1+		
69	流路 No.98	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	下顎骨	右	破片	1		M ₃ 植立
69	流路 No.98	8世紀後半~11世紀	イノシシ属?	下顎骨?		破片	2		
70	流路 No.100	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	頭蓋骨		破片	1+		土塊状
71	流路 No.101	8世紀後半~11世紀	イノシシ属	上腕骨	右	近位端	1		骨端未化石外れ
72	流路 No.102	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	角		分岐部	1		
73	流路 No.104	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	頭蓋骨		基底後頭骨	1+		
74	流路 No.105	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	脛骨	左	近位端	1		
75	流路 No.106	8世紀後半~11世紀	ニホンジカ	橈骨	左	近位端	1		Bp37.5

第6表 馬場長町遺跡の骨同定結果(1)

試料番号	採取位置等	時期	種類	部位	左	右	部分	数量	被熱	備考
55	流路 No.86	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨		右	破片	1		M ₂₋₃ 植立
55	流路 No.86	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨	左	右	連合部	1		
76	流路 No.107	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨	左		破片	1+		M ₂₋₃ 植立M ₃ 萌出途中
76	流路 No.107	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨		右	破片	1		P ₁₋₃ 植立 P ₂₋₃ M ₃ 長94.7
76	流路 No.107	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨			連合部	1		
76	流路 No.107	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨			下顎枝	1		
76	流路 No.107	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨			破片	47+		
77	流路 No.108	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	第1頰椎			破損	1		
78	流路 No.110	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎第1後臼齒	左		破損	1		
79	流路 No.111-1	8世紀後半～11世紀	大型獸類	大腿骨			遠位端片	1		
80	流路 No.111-2	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
81	流路 No.114	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
82	流路 No.114-1	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	肩甲骨		右	破片	1		
83	流路 No.114-2	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	角			角座部	1		
84	流路 No.115	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	上顎骨		右	破片	1		
85	流路 No.116	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎骨	左		破片	1		P ₃₋₄ 植立
86	流路 No.117	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	上腕骨	左		面端欠	1+		
87	流路 No.118	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨		右	破片	1+		P ₂₋₃ 植立
88	流路 No.118-2	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎骨	左		破片	1+		I ₁₋₂ 植立
89	流路 No.120-1	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎第1門齒		右	破片	1		
90	流路 No.121	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	下顎第1門齒	左		破損	1		
91	流路 No.122	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	犬齒			破片	1		
92	流路 No.123	8世紀後半～11世紀	獸類	腰椎			破損	1		
93	流路 No.124	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	中手骨/中足骨			遠位端	1		Bd26±,幼獸
94	流路 No.126	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎骨		右	破片	3		
94	流路 No.126	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎第1後臼齒		右	破損	1		
94	流路 No.126	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎第2後臼齒		右	破損	1		
95	流路 No.127	8世紀後半～11世紀	ウシ	角			破片	1+		
96	土坑1	8世紀後半	ニホンジカ	下顎第2後臼齒	左		破損	1		未出歯牙
97	流路 No.128	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	第1頰椎			破損	1		
98	流路 No.33	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	肩甲骨	左		破片	1		
99	流路 No.97	8世紀後半～11世紀	獸類	頭蓋骨			破片	45+		
99	流路 No.97	8世紀後半～11世紀	獸類	頭蓋骨			破片	6+		土塊状
100	-	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	角?			破片	2		土塊状
100	-	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎骨	左		破損	1+		P ₄₋₃ M ₃ 植立
100	-	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎骨		右	破片	1		P ₂₋₃ M ₃ 植立
100	-	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	下顎骨			破片	10+		土塊状含む
101	1区溝1	11世紀	ニホンジカ	下顎第1後臼齒	左		ほぼ完存	1		未出歯牙
102	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	橈骨	左		近位端	1		Bp36.2
103	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	中心+第4足根骨	左		破損	1		幼獸
104	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
105	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	距骨	左		破損	1		幼獸
106	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
107	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
108	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
109	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
110	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
111	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
112	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	中節骨			遠位端	1		
113	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
114	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
115	斜面包含層	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	肩甲骨	左		破片	1		
116	流路一括	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
117	流路一括	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	橈骨		右	近位端片	1		
118	流路一括 080616	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	中手骨/中足骨			遠位端片	1		
119	流路一括 080716	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	肩甲骨		右	破片	1		
120	流路一括	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	寛骨	左		破片	1		
121	流路一括	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
122	流路一括	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	中節骨			破損	1		GL29±
123	流路一括	8世紀後半～11世紀	獸類	腰椎			椎体	1		
124	流路一括	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	橈骨		右	近位端	1		Bp39.4
125	流路一括 080616	8世紀後半～11世紀	カニ類	脚			破片	1		
126	流路一括 080526	8世紀後半～11世紀	ウシ	下顎第2後臼齒		右	ほぼ完存	1		未出歯牙
127	流路一括	8世紀後半～11世紀	イノシシ属	距骨			破片	1		
128	流路一括 080724	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	上腕骨		右	遠位端	1		
129	流路一括 080616	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	距骨		右	破片	1		
130	流路一括 080616	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	基節骨			近位端片	1		
131	流路一括	8世紀後半～11世紀	獸類	寛骨			破片	1		
132	流路一括 080724	8世紀後半～11世紀	ニホンジカ	上顎第3前臼齒		右	破損	1		
133	流路一括 080725	8世紀後半～11世紀	獸類	寛骨?			破片	1		
134	流路一括 080725	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
135	流路一括 080725	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
136	流路一括 080725	8世紀後半～11世紀	獸類	不明			破片	1		
137	流路一括 080725	8世紀後半～11世紀	獸類	頭蓋骨?			破片	1		
138	流路一括	8世紀後半～11世紀	獸類	胸椎			椎体	2		
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	上顎骨	左		破片	1		
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	下顎骨	左		破損	1		
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	頭蓋骨	左		破片	1		
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	大腿骨	左		ほぼ完存	1		両端未化石外れ
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	脛骨	左		ほぼ完存	1		両端未化石外れ
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	脛骨		右	近位端欠	1		遠位端未化石外れ
139	窠体埋土	19世紀後半～20世紀前半	ネコ	四肢骨			破片	1		

- <試料番号 10; 流路 No.25 >
ウシの右下顎第 3 後臼歯片である。
- <試料番号 11; 流路 No.26 >
ニホンジカの中手骨 / 中足骨片である。土塊状を含む。
- <試料番号 12; 流路一括 >
ニホンジカの中手骨 / 中足骨遠位端片である。成獣である。
- <試料番号 13; 流路 No.30-2 >
大型獣類の脛骨遠位端片である。
- <試料番号 14; 流路 No.32 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 15; 流路 No.34 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 16; 流路 No.35 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 17; 流路 No.41 >
ニホンジカの右下顎骨および右下顎第 3 後臼歯である。
- <試料番号 18; 流路 No.45 >
獣類の部位不明破片である。土塊状を含む。
- <試料番号 19; 流路 No.41-1 >
イノシシ属の中手骨 / 中足骨遠位端片である。
- <試料番号 20; 流路 No.19 >
獣類の頭蓋骨である。土塊状であり、破片が散在する。
- <試料番号 21; 流路 No.42-1 >
イノシシ属の中手骨 / 中足骨遠位端である。
- <試料番号 22; 流路 No.43 >
ウミガメ科の部位不明破片である。
- <試料番号 23; 流路一括 >
ニホンジカの左橈骨近位端片である。近位端幅 33.9mm を測る。
- <試料番号 24; 流路 No.46 >
ニホンジカの右大腿骨近位端片である。
- <試料番号 25; 流路 No.48 >
イノシシ属の破損した左下顎第 3 後臼歯である。
- <試料番号 26; 流路 No.49 >
イノシシ属の左距骨の可能性のある破片である。焼骨である。
- <試料番号 27; 流路 No.50-1 >
大型獣類の肋骨片である。
- <試料番号 28; 流路 No.50-2 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 29; 流路 No.51 >
獣類の部位不明破片である。

<試料番号 30; 流路 No.52 >

ヒトの右上腕骨である。両端が欠損する。成人である。

<試料番号 31; 流路 No.54 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 32; 流路 No.55 >

イノシシ属の中手骨 / 中足骨遠位端片である。

<試料番号 33; 流路 No.56 >

イノシシ属の右上腕骨遠位端である。遠位端幅 41mm 前後を測る。

<試料番号 34; 流路 No.48 >

イノシシ属の右下顎第 3 後臼歯破片である。歯根が未形成である。

<試料番号 35; 斜面包含層 >

イノシシ属の右寛骨片である。

<試料番号 36; 流路一括 >

イノシシ属の左上腕骨遠位端である。遠位端幅 35.1mm を測る。

<試料番号 37; 流路 No.61 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 38; 流路 No.59・62 >

ウミガメ科の肋骨板である。

<試料番号 39; 流路一括 >

イノシシ属の右下顎第 1 門歯片である。

<試料番号 40; 流路 No.67 >

ウシの右肩甲骨片である。

<試料番号 41; 流路 No.67 >

イノシシ属の第 3/4 中手骨 / 中足骨遠位端である。成獣である。

<試料番号 42; 流路 No.68 >

ニホンジカの右肩甲骨片である。

<試料番号 43; 流路 No.68-1 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 44; 流路 No.70 >

ニホンジカの左下顎骨、右下顎骨、下顎骨および臼歯の破片である。左下顎骨は第 4 前臼歯～第 3 後臼歯が、右下顎骨は第 4 前臼歯・第 2～3 後臼歯が植立する。

<試料番号 45; 流路 No.73 >

ニホンジカの右下顎骨片である。第 2 前臼歯～第 3 後臼歯が植立する。

<試料番号 46; 流路 No.74 >

イノシシ属の肩甲骨片である。

<試料番号 47; 流路 No.75 >

ニホンジカの頭蓋骨である。基底後頭骨の破片である。

<試料番号 48; 流路 No.76 >

イノシシ属の左下顎骨片である。第 3 後臼歯が植立する。

- <試料番号 49; 流路 No.78 >
獣類の肋骨片である。焼骨である。
- <試料番号 50; 流路 No.79 >
獣類の肋骨片である。
- <試料番号 51; 流路 No.80 >
ウシの左肩甲骨片である。
- <試料番号 52; 流路 No.81 >
イノシシ属の左下顎骨片である。第3後臼歯が植立する。
- <試料番号 53; 流路 No.83 >
イノシシ属の右上腕骨遠位端片である。幼獣である。
- <試料番号 54; 流路 No.84 >
獣類の下顎骨片である。
- <試料番号 55; 流路 No.86 >
イノシシ属の左右下顎骨片、下顎骨および頭蓋骨の可能性のある破片である。
- <試料番号 56; 流路 No.87-1 >
ニホンジカの右寛骨片である。
- <試料番号 57; 流路 No.87-2 >
大型獣類の破損した腰椎である。椎体板が外れる。
- <試料番号 58; 流路 No.87-3 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 59; 流路 No.88 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 60; 流路 No.90 >
イノシシ属の破損した腰椎である。
- <試料番号 61; 流路 No.91 >
大型獣類の右寛骨片である。
- <試料番号 62; 流路 No.92 >
ニホンジカの左脛骨遠位端片である。土塊状である。
- <試料番号 63; 流路 No.95-1 >
大型獣類の肋骨片である。
- <試料番号 64; 流路 No.95-2 >
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 65; 流路 No.95-2 >
獣類の頭蓋骨破片である。土塊状である。
- <試料番号 66; 流路 No.95-3 >
ニホンジカの中足骨近位端片である。近位端幅 20.2mm を測る。幼獣である。
- <試料番号 67; 流路 No.95-4 >
獣類の肋骨破片である。
- <試料番号 68; 流路 No.96 >
ニホンジカの右上顎第2前臼歯～第2後臼歯破片である。

<試料番号 69; 流路 No.98 >

イノシシ属の右下顎骨片および下顎骨体の可能性がある破片である。右下顎骨では第3後臼歯が植立する。

<試料番号 70; 流路 No.100 >

イノシシ属の頭蓋骨破片である。土塊状である。

<試料番号 71; 流路 No.101 >

イノシシ属の右上腕骨である。近位端である。骨端は未化骨外れる。

<試料番号 72; 流路 No.102 >

ニホンジカの角である。分岐部である。

<試料番号 73; 流路 No.104 >

ニホンジカの頭蓋骨である。基底後頭骨の破片である。

<試料番号 74; 流路 No.105 >

ニホンジカの左脛骨近位端片である。

<試料番号 75; 流路 No.106 >

ニホンジカの左橈骨近位端片である。近位端幅 37.5mm を測る。

<試料番号 76; 流路 No.107 >

イノシシ属の左右下顎骨片、下顎骨連合部、下顎枝部、破片である。左下顎骨では第2～3後臼歯が植立する。第3後臼歯は萌出途中である。右下顎骨破片では、第1前臼歯～第3後臼歯植立する。第2前臼歯～第3後臼歯の歯列長は 94.7mm を測る。

<試料番号 77; 流路 No.108 >

イノシシ属の破損した第1頸椎である。

<試料番号 78; 流路 No.110 >

イノシシ属の破損した左下顎第1後臼歯である。

<試料番号 79; 流路 No.111-1 >

大型獣類の大腿骨遠位端片である。

<試料番号 80; 流路 No.111-2 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 81; 流路 No.114 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 82; 流路 No.114-1 >

ニホンジカの右肩甲骨破片である。

<試料番号 83; 流路 No.114-2 >

ニホンジカの角である。角座部である。

<試料番号 84; 流路 No.115 >

イノシシ属の右上顎骨片である。

<試料番号 85; 流路 No.116 >

ニホンジカの左下顎骨片である。第3・4前臼歯が植立する。

<試料番号 86; 流路 No.117 >

イノシシ属の左上腕骨である。両端が欠損する。

<試料番号 87; 流路 No.118 >

イノシシ属の右下顎骨破片である。第2・3前臼歯が植立する。

<試料番号 88; 流路 No.118-2 >

イノシシ属の左下顎骨破片である。第1・2門歯が植立する。

<試料番号 89; 流路 No.120-1 >

イノシシ属の右下顎第1門歯片である。

<試料番号 90; 流路 No.121 >

イノシシ属の破損した左下顎第1門歯である。

<試料番号 91; 流路 No.122 >

イノシシ属の犬歯破片である。

<試料番号 92; 流路 No.123 >

獣類の破損した腰椎である。

<試料番号 93; 流路 No.124 >

ニホンジカの中手骨 / 中足骨遠位端である。遠位端幅 26mm 前後を測る。幼獣である。

<試料番号 94; 流路 No.126 >

ニホンジカの右下顎骨片である。

<試料番号 94; 流路 No.126 >

ニホンジカの破損した右下顎第1後臼歯である。

<試料番号 94; 流路 No.126 >

ニホンジカの破損した右下顎第2後臼歯である。

<試料番号 95; 流路 No.127 >

ウシの角の破片である。

<試料番号 96; 土坑 1 >

ニホンジカの左下顎第2後臼歯破損である。未出歯牙である。

<試料番号 97; 流路 No.128 >

ニホンジカの破損した第1頸椎である。

<試料番号 98; 流路 No.33 >

ニホンジカの左肩甲骨片である。

<試料番号 99; 流路 No.97 >

獣類の頭蓋骨片である。

<試料番号 99; 流路 No.97 >

獣類の頭蓋骨片である。土塊状である。

<試料番号 100 >

ニホンジカの左右下顎骨、下顎骨片、および角の可能性のある破片である。下顎骨片および角の可能性のある破片は土塊状を含む。また、左下顎骨は破損した状態で、第4前臼歯～第3後臼歯が植立する。右下顎骨は、第2前臼歯～第3後臼歯が植立する。

<試料番号 101;1 区溝 1 >

ニホンジカの左下顎第1後臼歯である。ほぼ完存する。未出歯牙である。

<試料番号 102; 斜面包含層 >

ニホンジカの左橈骨近位端である。近位端幅 36.2mm を測る。

- <試料番号 103; 斜面包含層>
ニホンジカの破損した左中心 + 第 4 足根骨である。幼獣である。
- <試料番号 104; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 105; 斜面包含層>
ニホンジカの破損した左距骨である。幼獣である。
- <試料番号 106; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 107; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 108; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 109; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 110; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 111; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 112; 斜面包含層>
ニホンジカの中節骨遠位端
- <試料番号 113; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 114; 斜面包含層>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 115; 斜面包含層>
ニホンジカの左肩甲骨片である。
- <試料番号 116; 流路一括>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 117; 流路一括>
ニホンジカの右橈骨近位端片である。
- <試料番号 118; 流路一括 080616 >
ニホンジカの中手骨 / 中足骨遠位端片である。
- <試料番号 119; 流路一括 080716 >
ニホンジカの右肩甲骨片である。
- <試料番号 120; 流路一括>
ニホンジカの左寛骨片である。
- <試料番号 121; 流路一括>
獣類の部位不明破片である。
- <試料番号 122; 流路一括>
ニホンジカの破損した中節骨である。全長 29mm 前後を測る。

<試料番号 123; 流路一括>

獣類の腰椎の椎体である。

<試料番号 124; 流路一括>

ニホンジカの右橈骨近位端である。近位端幅 39.4mm を測る。

<試料番号 125; 流路一括 080616 >

カニ類の脚片である。

<試料番号 126; 流路一括 080526 >

ウシの右下顎第 2 後臼歯である。ほぼ完存する。未出歯牙である。

<試料番号 127; 流路一括>

イノシシ属の距骨片である。

<試料番号 128; 流路一括 080724 >

ニホンジカの右上腕骨遠位端である。

<試料番号 129; 流路一括 080616 >

ニホンジカの右距骨片である。

<試料番号 130; 流路一括 080616 >

ニホンジカの基節骨近位端片である。

<試料番号 131; 流路一括>

獣類の寛骨片である。

<試料番号 132; 流路一括 080724 >

ニホンジカの破損した右上顎第 3 前臼歯である。

<試料番号 133; 流路一括 080725 >

獣類の寛骨の可能性のある破片である。

<試料番号 134; 流路一括 080725 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 135; 流路一括 080725 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 136; 流路一括 080725 >

獣類の部位不明破片である。

<試料番号 137; 流路一括 080725 >

獣類の頭蓋骨の可能性のある破片である。

<試料番号 138; 流路一括>

獣類の胸椎の椎体である。

<試料番号 139; 窯体埋土>

ネコの左上顎骨、左下顎骨、左頭蓋骨破片、左大腿骨、左脛骨、右脛骨、四肢骨などである。左大腿骨、左脛骨は、ほぼ完存する状態である。右脛骨は近位端が欠損する。なお、大腿骨、脛骨とも骨端が未化骨で外れる。

4. 考察

今回、時期別にみると、大きく8世紀後半～11世紀、19世紀後半～20世紀前半に分けられ、前者が土坑1・流路および斜面包含層・1区溝1にあたり、後者が窯体埋土にあたる。本報告では、2期に分けて種類別に検討を行う。

8世紀後半～11世紀では、カニ類、ウミガメ類、ヒト、イノシシ属、ニホンジカ、ウシがみられる。カニ類は流路一括から検出されている。破片であるが、現長28mm、最大幅13.5mm、厚さ5mm前後を測ることから、比較的大型であったとみられる。淡水生か、海水生か不明である。

ウミガメ類は、流路No.59・62で検出され、肋骨板である。破片となっており、完全な復原は不可能であった。そのため大きさについては明らかにできないが厚さがあることから、比較的大型のウミガメ科であった可能性がある。また、流路No.43は多孔質であることからウミガメ科の可能性のある破片とした。海浜等で捕獲され、遺跡内に持ち込まれたものであろう。他部位がみられないことから、甲羅部のみ持ち込んだ可能性もあるが、その利用状況について詳細不明である。

ヒトは、流路No.52で右上腕骨が検出されている。両端が欠損するが、大きさからみて成人に達していたとみられる。保存が悪く変形しているため全体像をつかめないが、三角筋粗面がやや発達することから男性の可能性もある。流路内に埋葬されたとみるより、流路付近に墓域があり、何らかの要因を受けてそこから流れ込んできたと考えられる。

イノシシ属は、イノシシ、ブタの区別が不可能であったためイノシシ属でとどめている。破片数でみるとニホンジカに匹敵する数量であり、全体の約半数を占める。左右上顎骨、頭蓋片、左右下顎骨、左右下顎第1門歯、犬歯、左下顎第1後臼歯、左右下顎第3後臼歯、第1頸椎、腰椎、肩甲骨、左右上腕骨、左右寛骨、距骨、第3/4中手骨/中足骨、中手骨/中足骨が確認される。歯根が未形成な右下顎第3後臼歯(No.31)、小型あるいは骨端が外れる上腕骨(No.53・71)が検出されることから、幼獣も含まれていると判断される。下顎第3後臼歯より少なくとも5体は存在している。なお、右下顎第3後臼歯の歯根が未形成な個体は1.5歳以下、上腕骨の骨端が外れる個体は、3.5歳以下とみられる。家畜として飼育されていた、あるいは周辺の後背山地で狩猟されたなどが考えられ、食糧資源等として活用されていたと考えられる。

ニホンジカは、今回明らかにされた種類の中で、破片数でみると最も多い。確認される部位も多岐にわたり、角、右上顎第2前臼歯-第2後臼歯、右上顎第3前臼歯、左右下顎骨、左右下顎第1後臼歯、左右下顎第2後臼歯、右下顎第3後臼歯、頭蓋骨、第1頸椎、左右肩甲骨、右上腕骨、左右橈骨、中手骨、左右寛骨、右大腿骨、左脛骨、左右距骨、左中心+第4足根骨、中足骨、中手骨/中足骨、基節骨、中節骨が確認される。未出状態である左下顎第2後臼歯(No.96)、小型な中足骨(No.66)・中手骨/中足骨(No.93)・左中心+第4足根骨(No.103)・左距骨(No.105)が検出されることから、幼獣も含まれていると判断される。下顎第3前臼歯および第2後臼歯より少なくとも5体は存在している。食料資源等として後背山地などで狩猟されたと考えられ、幼獣も含まれることから生殖集団が形成されていたとみられる。また角は、装飾品等としての利用もあったと推定される。

ウシは、角、右下顎第2後臼歯、右下顎第3後臼歯、左右肩甲骨が確認される。この内、右下顎第2後臼歯はほぼ完存するが、未出歯牙であることから1歳未満とみられる。農耕・運搬等の労働、食糧資源など、家畜としての存在していたものであるとみられる。幼獣も存在する点から、調査地の近傍で飼育されていたと思われる。

19世紀後半～20世紀前半とされる窯体埋土からは、ネコの頭蓋骨、下顎骨、左大腿骨、左右脛

骨がみられる。検出された部位が一部にとどまるものの、本来は全身骨格が存在したと推測される。四肢骨は骨端が未化骨で外れていることから幼獣とみられる。埋葬された遺体かは不明であるが、遺構が埋積するに伴って周辺から流れ込んだと思われる。

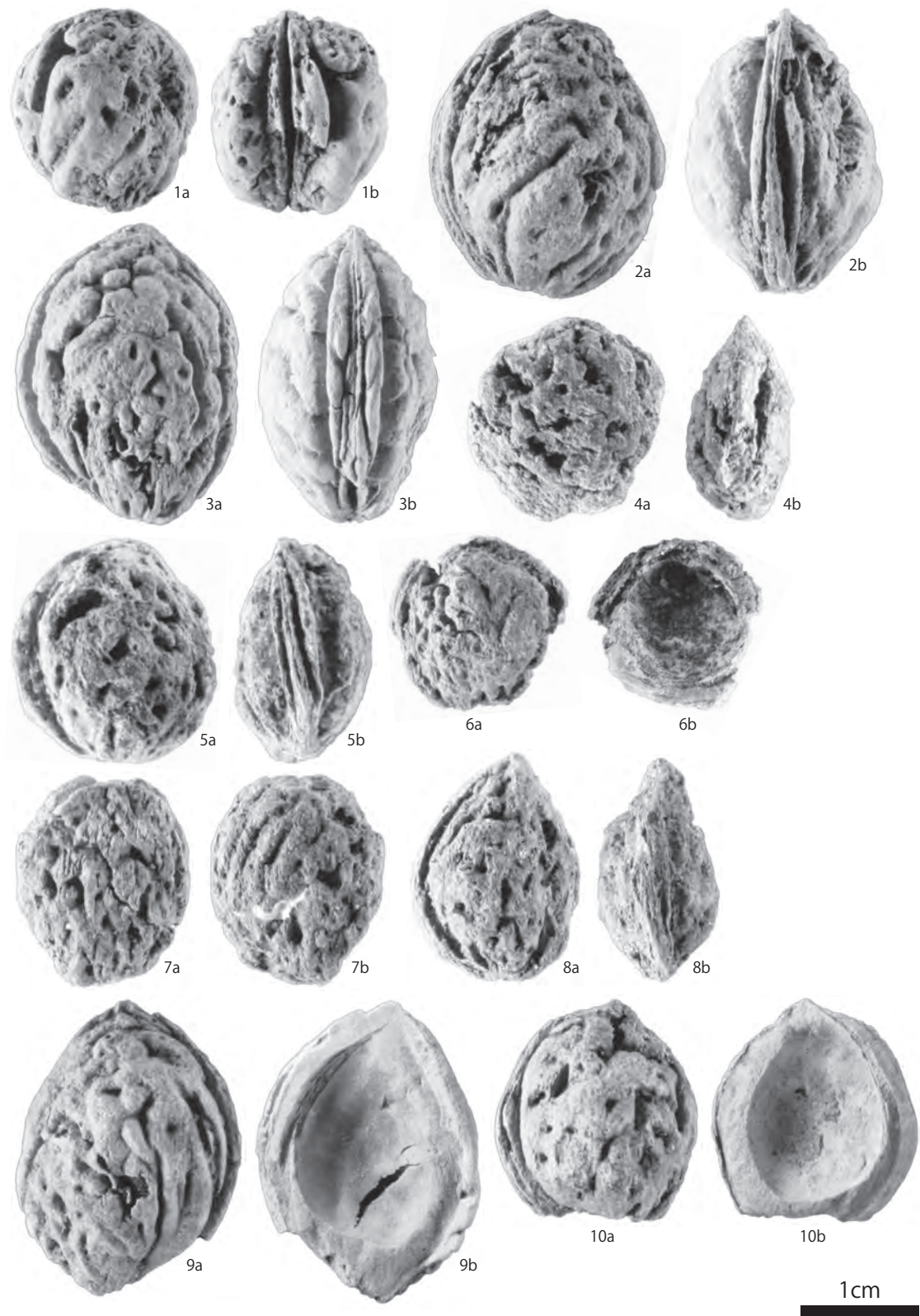
引用文献

石川 茂雄,1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会,642p.

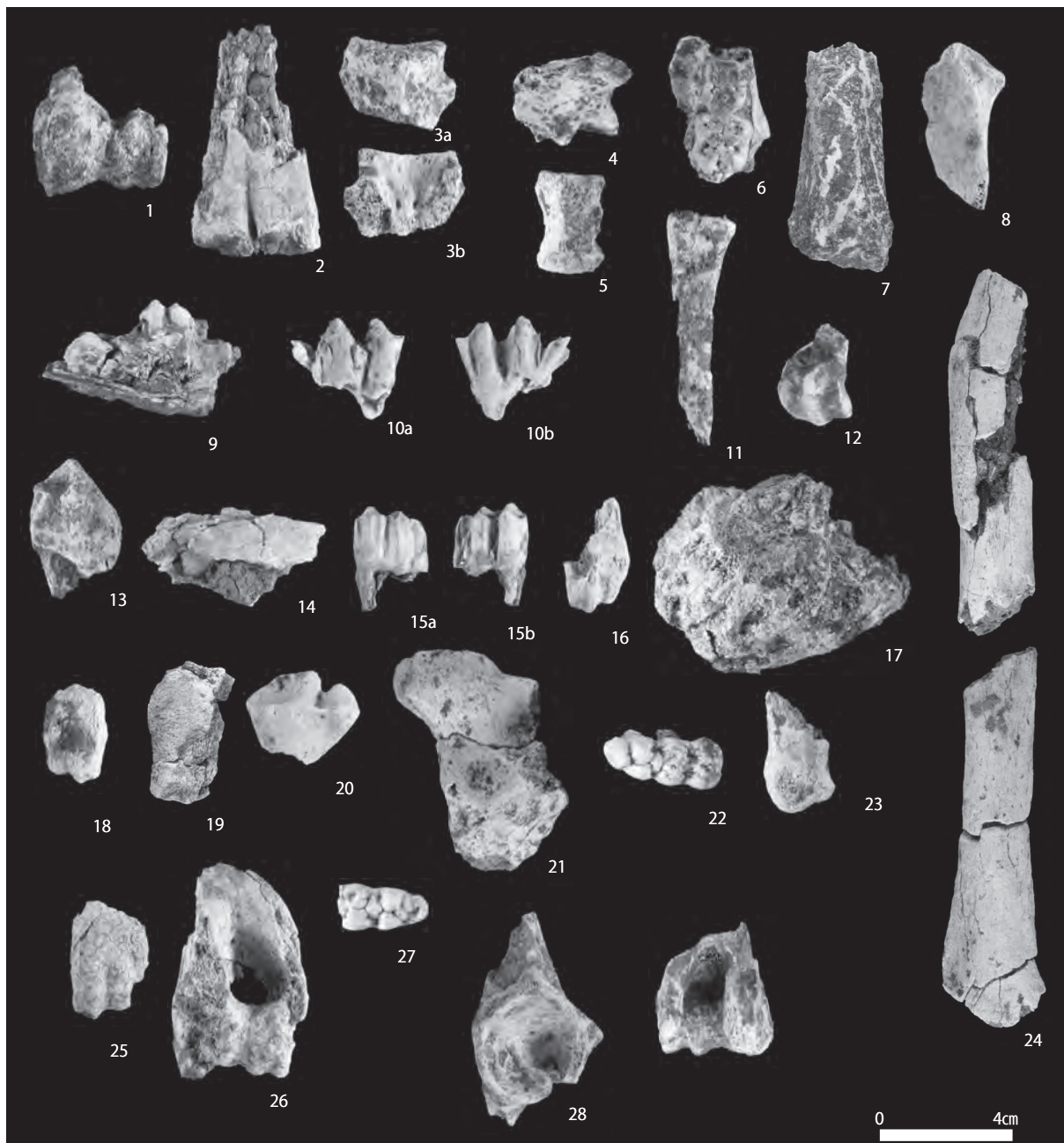
八谷 昇・大秦司 紀之,1994, 骨格標本作製法. 北海道大学図書刊行会,129p.

写真9 馬場長町遺跡の種実遺体



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 毛毛 核(試料番号1;盛土下) | 2 . 毛毛 核(試料番号2;2区流路一括) |
| 3 毛毛 核(試料番号3;2区流路一括) | 4 . 毛毛 核(試料番号4;2区流路一括) |
| 5 毛毛 核(試料番号5;2区流路一括) | 6 . 毛毛 核(試料番号6;2区流路一括) |
| 7 毛毛 核(試料番号8;2区流路一括) | 8 . 毛毛 核(試料番号7;2区流路一括) |
| 9 毛毛 核(試料番号9;1・2区流路一括) | 10 . 毛毛 核(試料番号10;2区流路一括) |

写真10 馬場長町遺跡の出土骨1



- | | |
|---|--|
| 1. イノシシ属左上腕骨 (試料番号 1; 流路 No.2-1) | 2. ニホンジカ中手骨 (試料番号 2; 流路 No.6) |
| 3. 大型獣類椎骨 (試料番号 3; 流路 No.15-1) | 4. 獣類頭蓋骨 (試料番号 4; 流路 No.15-2) |
| 5. 獣類椎骨 (試料番号 5; 流路 No.16) | 6. イノシシ属左上顎骨 (試料番号 6; 流路 No.17) |
| 7. ニホンジカ右橈骨 (試料番号 7; 流路 No.27) | 8. イノシシ属左寛骨 (試料番号 8; 流路一括) |
| 9. ニホンジカ左下顎骨 (試料番号 9; 流路 No.24) | 10. ウシ右下顎第 3 後臼歯 (試料番号 10; 流路 No.25) |
| 11. ニホンジカ中手骨 / 中足骨 (試料番号 11; 流路 No.26) | 12. ニホンジカ中手骨 / 中足骨 (試料番号 12; 流路一括) |
| 13. 大型獣類脛骨 (試料番号 13; 流路 No.30-2) | 14. ニホンジカ右下顎骨 (試料番号 17; 流路 No.41) |
| 15. ニホンジカ右下顎第 3 後臼歯 (試料番号 17; 流路 No.41) | 16. イノシシ属中手骨 / 中足骨 (試料番号 19; 流路 No.41-1) |
| 17. 獣類頭蓋骨 (試料番号 20; 流路 No.19) | 18. イノシシ属中手骨 / 中足骨 (試料番号 21; 流路 No.42-1) |
| 19. ウミガメ科? 不明 (試料番号 22; 流路 No.43) | 20. ニホンジカ左橈骨 (試料番号 23; 流路一括) |
| 21. ニホンジカ右大腿骨 (試料番号 24; 流路 No.46) | 22. イノシシ属左下顎第 3 後臼歯 (試料番号 25; 流路 No.48) |
| 23. 大型獣類肋骨 (試料番号 27; 流路 No.50-1) | 24. ヒト右上腕骨 (試料番号 30; 流路 No.52) |
| 25. イノシシ属中手骨 / 中足骨 (試料番号 32; 流路 No.55) | 26. イノシシ属右上腕骨 (試料番号 33; 流路 No.56) |
| 27. イノシシ属右下顎第 3 後臼歯 (試料番号 34; 流路 No.48) | 28. イノシシ属右寛骨 (試料番号 35; 斜面包含層) |
| 29. イノシシ属左上腕骨 (試料番号 36; 流路一括) | |

写真 11 馬場長町遺跡の出土骨 2

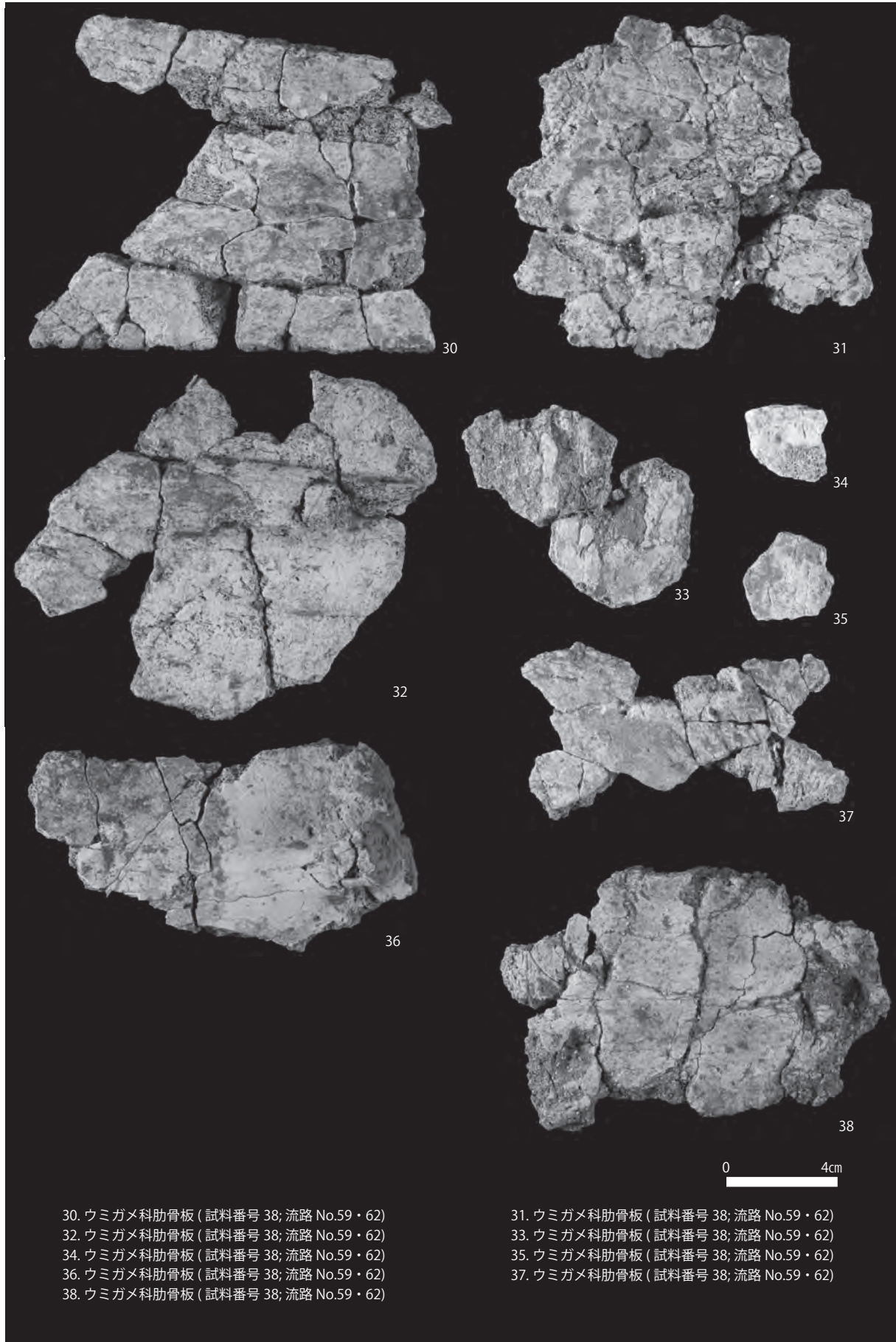


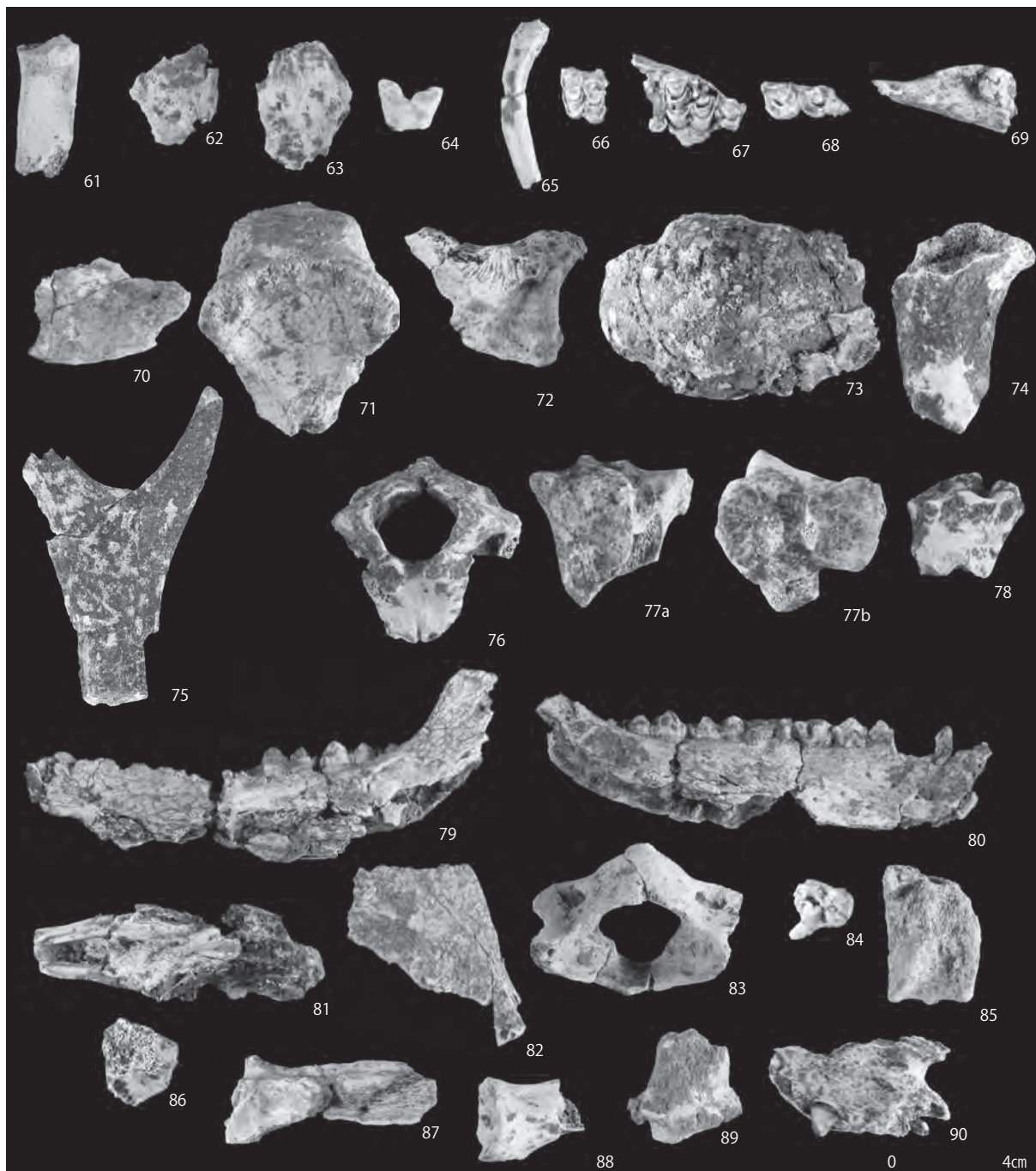
写真12 馬場長町遺跡の出土骨3



- 39. イノシシ属右下顎第1門歯 (試料番号 39; 流路一括)
- 41. ニホンジカ右肩甲骨 (試料番号 42; 流路 No.68)
- 43. ニホンジカ右下顎骨 (試料番号 44; 流路 No.70)
- 45. イノシシ属肩甲骨 (試料番号 46; 流路 No.74)
- 47. イノシシ属左下顎骨 (試料番号 48; 流路 No.76)
- 49. 獣類肋骨 (試料番号 50; 流路 No.79)
- 51. イノシシ属右上腕骨 (試料番号 53; 流路 No.83)
- 53. イノシシ属左右下顎骨 (試料番号 55; 流路 No.86)
- 55. ニホンジカ右寛骨 (試料番号 56; 流路 No.87-1)
- 57. イノシシ属腰椎 (試料番号 60; 流路 No.90)
- 59. ニホンジカ左脛骨 (試料番号 62; 流路 No.92)

- 40. ウシ右肩甲骨 (試料番号 40; 流路 No.67)
- 42. ニホンジカ左下顎骨 (試料番号 44; 流路 No.70)
- 44. ニホンジカ右下顎骨 (試料番号 45; 流路 No.73)
- 46. ニホンジカ頭蓋骨 (試料番号 47; 流路 No.75)
- 48. 獣類肋骨 (試料番号 49; 流路 No.78)
- 50. イノシシ属左下顎骨 (試料番号 52; 流路 No.81)
- 52. 獣類下顎骨 (試料番号 54; 流路 No.84)
- 54. イノシシ属?頭蓋骨?(試料番号 55; 流路 No.86)
- 56. 大型獣類腰椎 (試料番号 57; 流路 No.87-2)
- 58. 大型獣類右寛骨 (試料番号 61; 流路 No.91)
- 60. ニホンジカ左脛骨 (試料番号 62; 流路 No.92)

写真13 馬場長町遺跡の出土骨4



- | | |
|--|--|
| 61. 大型獣類肋骨 (試料番号 63; 流路 No.95-1) | 62. 獣類頭蓋骨 (試料番号 65; 流路 No.95-2) |
| 63. 獣類頭蓋骨 (試料番号 65; 流路 No.95-2) | 64. ニホンジカ中足骨 (試料番号 66; 流路 No.95-3) |
| 65. 獣類肋骨 (試料番号 67; 流路 No.95-4) | |
| 66-68. ニホンジカ右上顎第2前臼歯 - 第2後臼歯 (試料番号 68; 流路 No.96) | |
| 69. イノシシ属右下顎骨 (試料番号 69; 流路 No.98) | 70. イノシシ属?下顎骨?(試料番号 69; 流路 No.98) |
| 71. イノシシ属頭蓋骨 (試料番号 70; 流路 No.100) | 72. イノシシ属頭蓋骨 (試料番号 70; 流路 No.100) |
| 73. イノシシ属頭蓋骨 (試料番号 70; 流路 No.100) | 74. イノシシ属右上腕骨 (試料番号 71; 流路 No.101) |
| 75. ニホンジカ角 (試料番号 72; 流路 No.102) | 76. ニホンジカ頭蓋骨 (試料番号 73; 流路 No.104) |
| 77. ニホンジカ左脛骨 (試料番号 74; 流路 No.105) | 78. ニホンジカ左橈骨 (試料番号 75; 流路 No.106) |
| 79. イノシシ属左下顎骨 (試料番号 76; 流路 No.107) | 80. イノシシ属右下顎骨 (試料番号 76; 流路 No.107) |
| 81. イノシシ属下顎骨 (試料番号 76; 流路 No.107) | 82. イノシシ属下顎骨 (試料番号 76; 流路 No.107) |
| 83. イノシシ属第1頸椎 (試料番号 77; 流路 No.108) | 84. イノシシ属左下顎第1後臼歯 (試料番号 78; 流路 No.110) |
| 85. 大型獣類大腿骨 (試料番号 79; 流路 No.111-1) | 86. 獣類不明 (試料番号 80; 流路 No.111-2) |
| 87. 獣類不明 (試料番号 81; 流路 No.114) | 88. ニホンジカ右肩甲骨 (試料番号 82; 流路 No.114-1) |
| 89. ニホンジカ角 (試料番号 83; 流路 No.114-2) | 90. イノシシ属右上顎骨 (試料番号 84; 流路 No.115) |

写真 14 馬場長町遺跡の出土骨 5



写真 15 馬場長町遺跡の出土骨 6



- | | |
|--|---------------------------------------|
| 120. ニホンジカ中節骨 (試料番号 122; 流路一括) | 121. 獣類腰椎 (試料番号 123; 流路一括) |
| 122. ニホンジカ右橈骨 (試料番号 124; 流路一括) | 123. カニ類脚 (試料番号 125; 流路一括 080616) |
| 124. ウシ右下顎第 2 後臼歯 (試料番号 126; 流路一括 080526) | 125. イノシシ属距骨 (試料番号 127; 流路一括) |
| 126. ニホンジカ右上腕骨 (試料番号 128; 流路一括 080724) | 127. ニホンジカ右距骨 (試料番号 129; 流路一括 080616) |
| 128. ニホンジカ基節骨 (試料番号 130; 流路一括 080616) | 129. 獣類寛骨 (試料番号 131; 流路一括) |
| 130. ニホンジカ右上顎第 3 前臼歯 (試料番号 132; 流路一括 080724) | 132. 獣類不明 (試料番号 134; 流路一括 080725) |
| 131. 獣類寛骨 ? (試料番号 133; 流路一括 080725) | 133. 獣類不明 (試料番号 135; 流路一括 080725) |
| 133. 獣類不明 (試料番号 135; 流路一括 080725) | 134. 獣類不明 (試料番号 136; 流路一括 080725) |
| 135. 獣類頭蓋骨 ? (試料番号 137; 流路一括 080725) | 136. 獣類胸椎 (試料番号 138; 流路一括) |
| 137. 獣類胸椎 (試料番号 138; 流路一括) | 138. ネコ左上顎骨 (試料番号 139; 窠体埋土) |
| 139. ネコ左下顎骨 (試料番号 139; 窠体埋土) | 140. ネコ左頭蓋骨 (試料番号 139; 窠体埋土) |
| 141. ネコ左大腿骨 (試料番号 139; 窠体埋土) | 142. ネコ左脛骨 (試料番号 139; 窠体埋土) |
| 143. ネコ右脛骨 (試料番号 139; 窠体埋土) | |

1 馬場長町遺跡 1区全景
(南から)

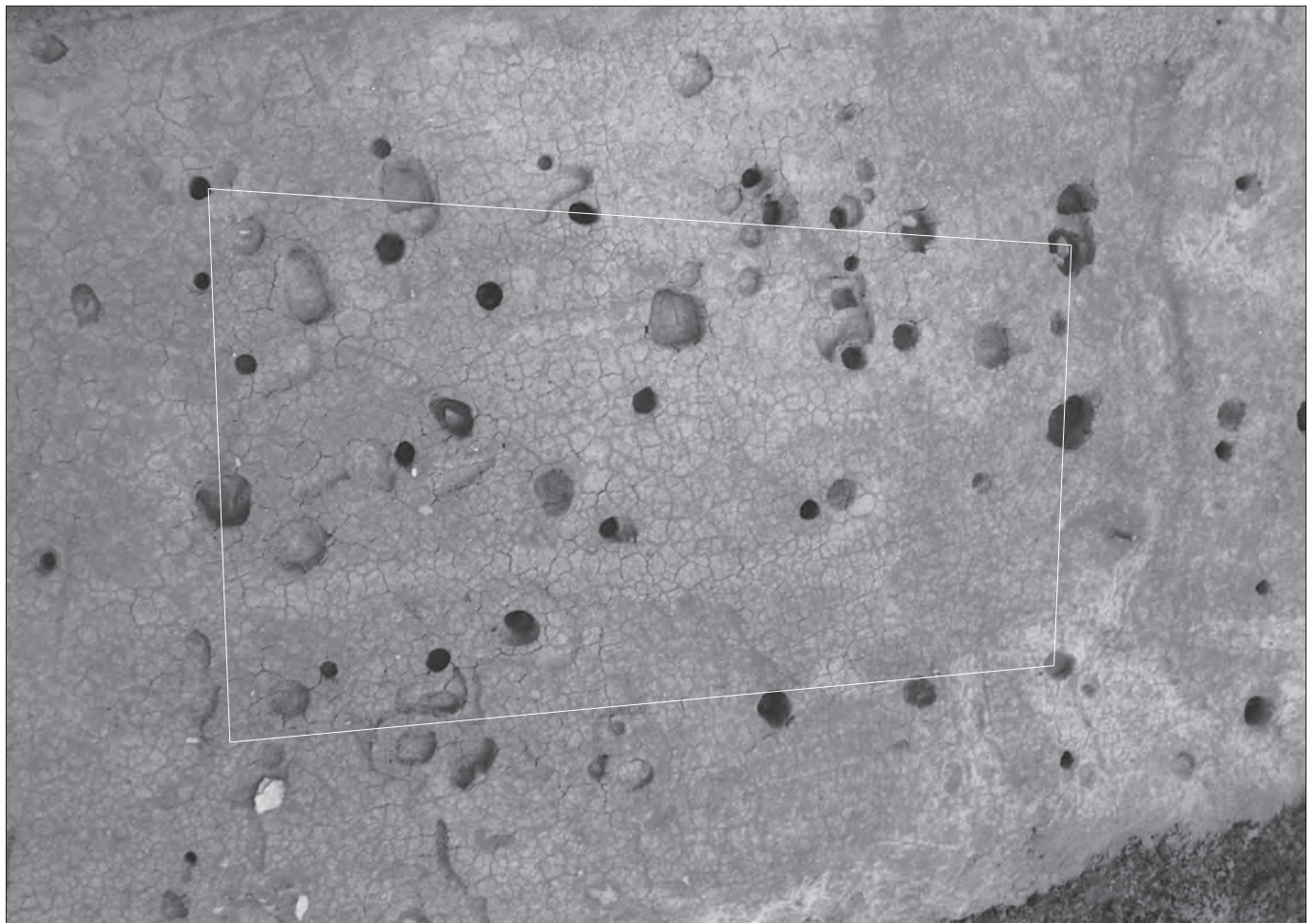


2 同上1区全景 (西から)



3 同上2区全景
(上空から)





1 2区1号堀立柱建物跡（上空から）



2 2区1号土坑掘り上り状況（西から）



3 同左遺物出土状況（北から）



4 同上遺物出土状況（南から）



5 同上土層断面（南から）



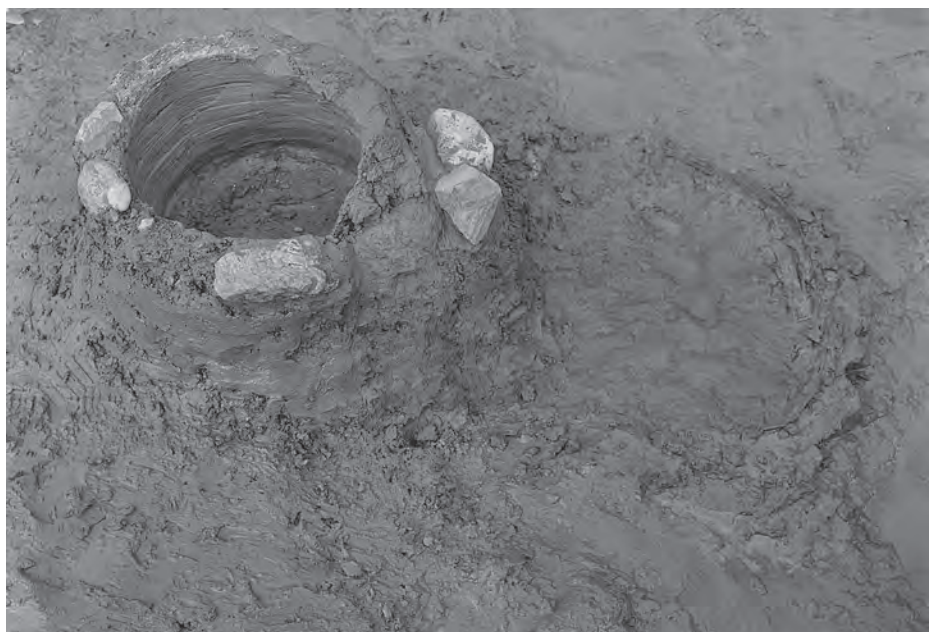
1 1・3号井戸検出状況
(南から)



2 1号井戸 (南西から)



3 2号井戸 (南から)



4 3号井戸 (南東から)



1 1区1号溝状遺構 (南から)



2 同左遺物出土状況 (南から)



3 同上土層断面 (南から)



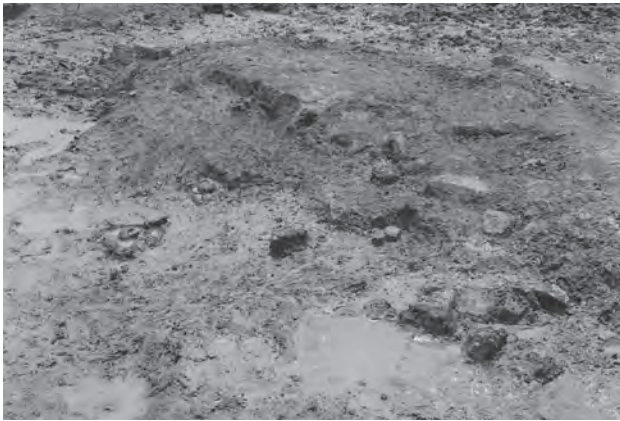
4 1区落ち込み状遺構 (南から)



1 堤状遺構 (北東から)



2 同左東西断ち割りトレンチ東側土層 (南から)



3 同上除去状況 (北西から)



4 同上南北断ち割りトレンチ土層 (南東から)



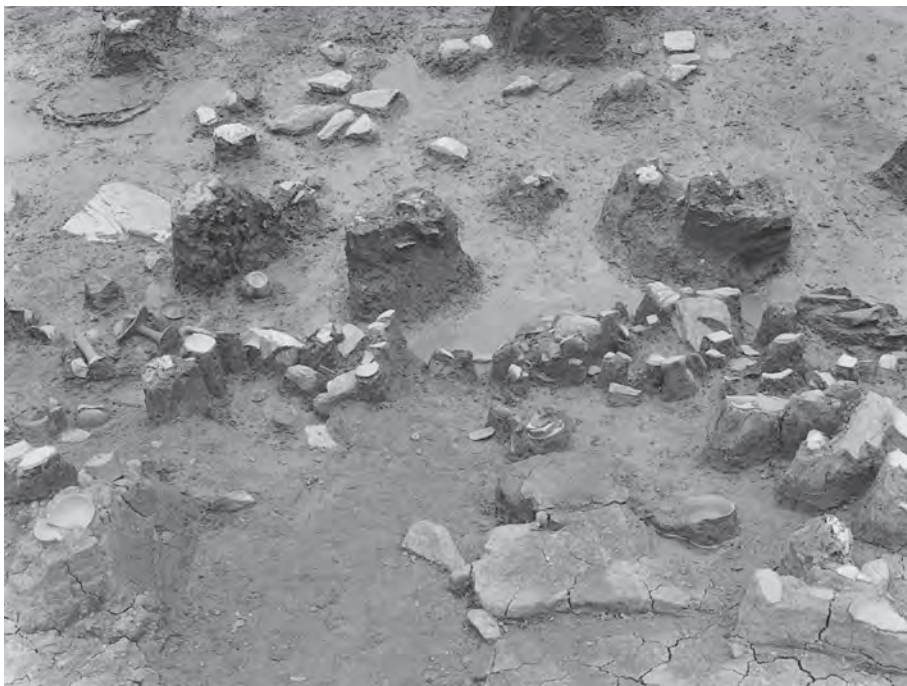
5 1区流路跡遺物出土状況 (南から)



6 斜面包含層土層断面 (東から)



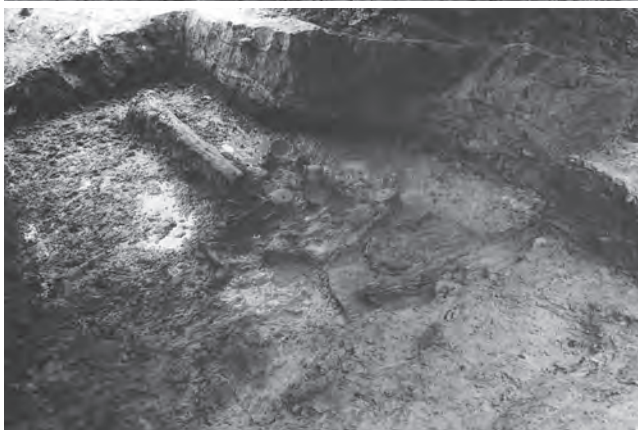
7 1区西壁土流路跡土層断面 (東から)



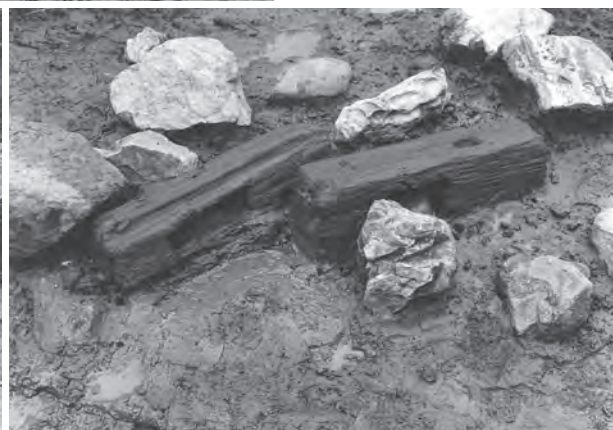
1 流路跡遺物出土状況
(北から)



2 同上ウミガメ骨出土状況
(南西から)



3 堤状遺構下遺物出土状況 (南東から)



4 流路跡肘木出土状況 (南から)



1 3区北東部（南から）



2 3区南東部全景（北から）



1 3区南東部全景（北から）

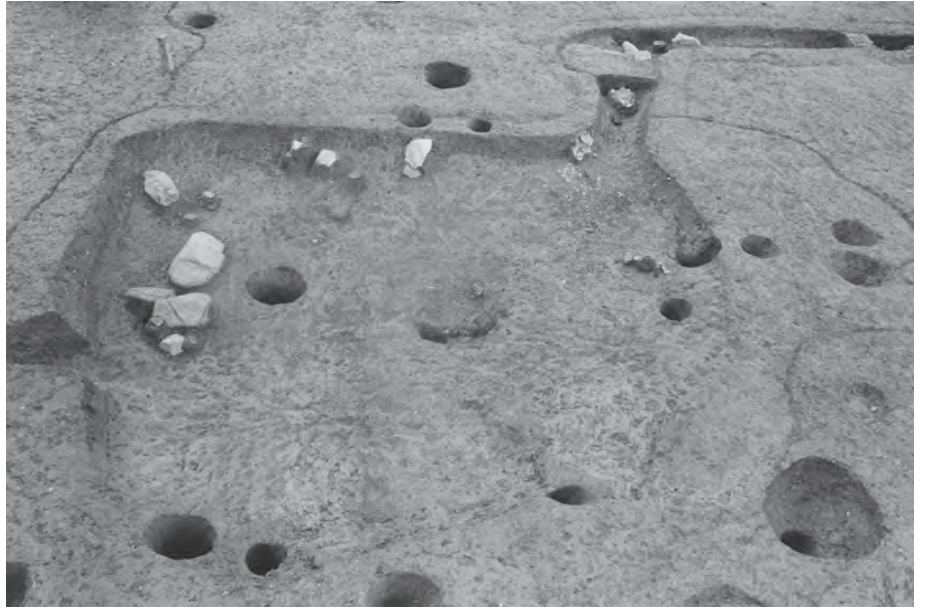


2 1号土坑（東から）



3 2号土坑（北から）

1 3号土坑
(西から)



2 同上検出状況
(南から)



3 同上土層断面
(北から)

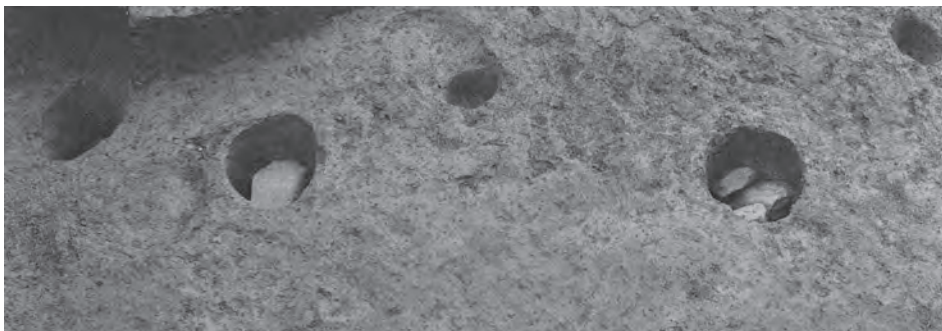


3 同上溝土層断面
(東から)





1 5・6号土坑
(南から)



2 門状遺構
(北西から)



3 1・2号井戸
(北西から)



4 1号井戸遺物出土状況 (東から)



5 同左土層断面 (東から)



1 1号溝状遺構土層断面（東から）



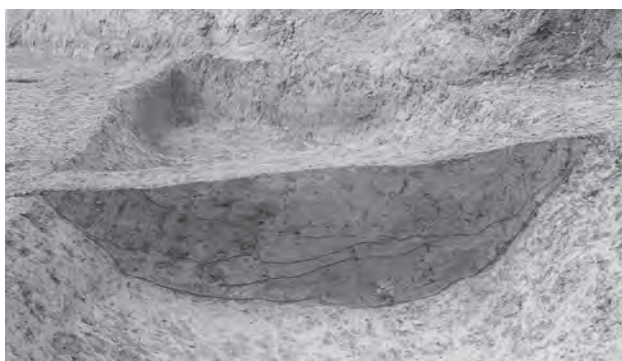
4 4号溝状遺構土層断面（南から）



2 2号溝状遺構（北東から）



5 6号溝状遺構土層断面（東から）



3 同上土層断面（東から）



6 7号溝状遺構土層断面・遺物出土状況（東から）



7 14・15号溝状遺構土層断面（北から）



1. 1石灰岩焼成窯掘削前状況（南から）



2. 同左（東から）



3. 同上掘り上がり状況（南東から）



4. 左から（東から）



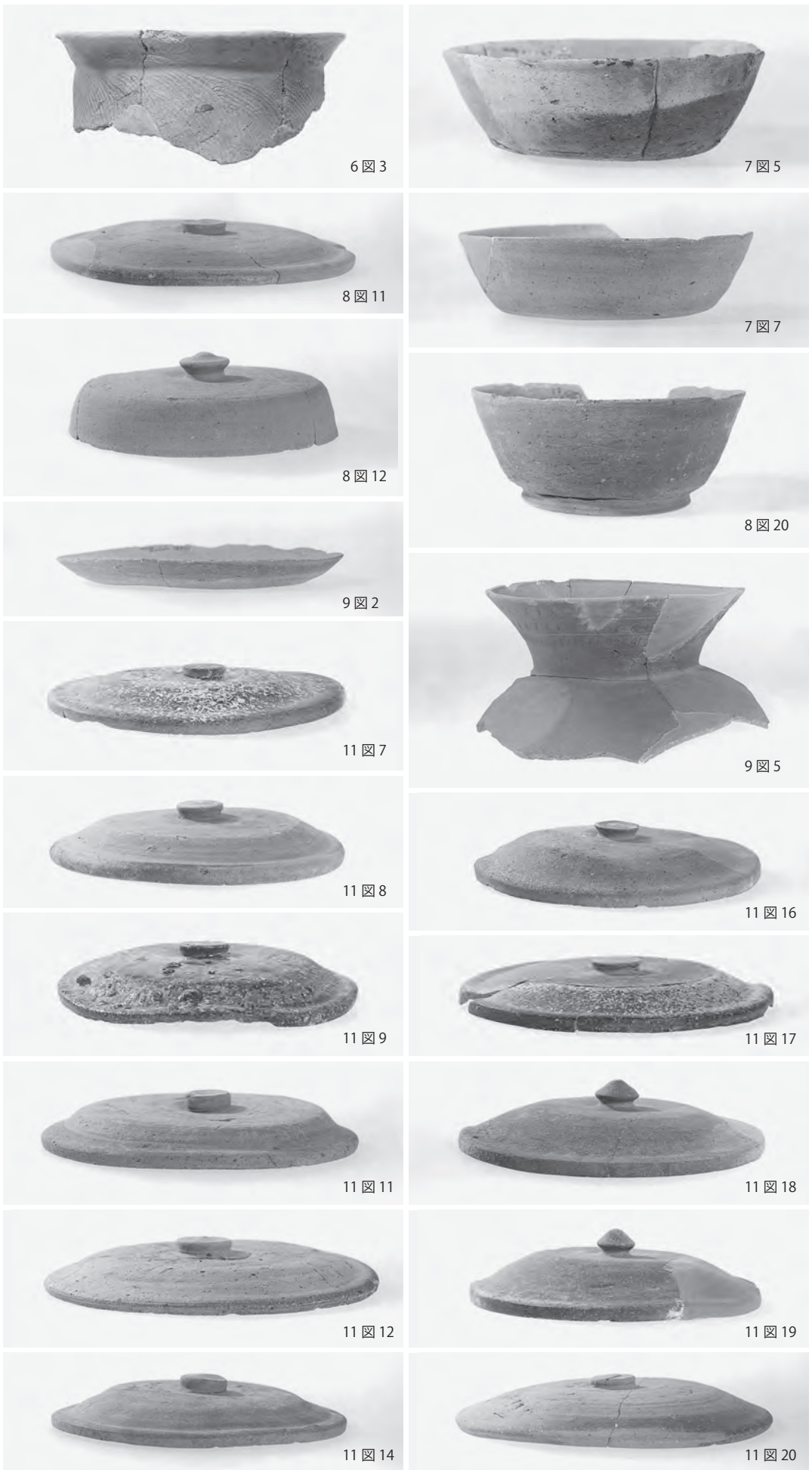
5. 同上トンネル部土層断面（南から）



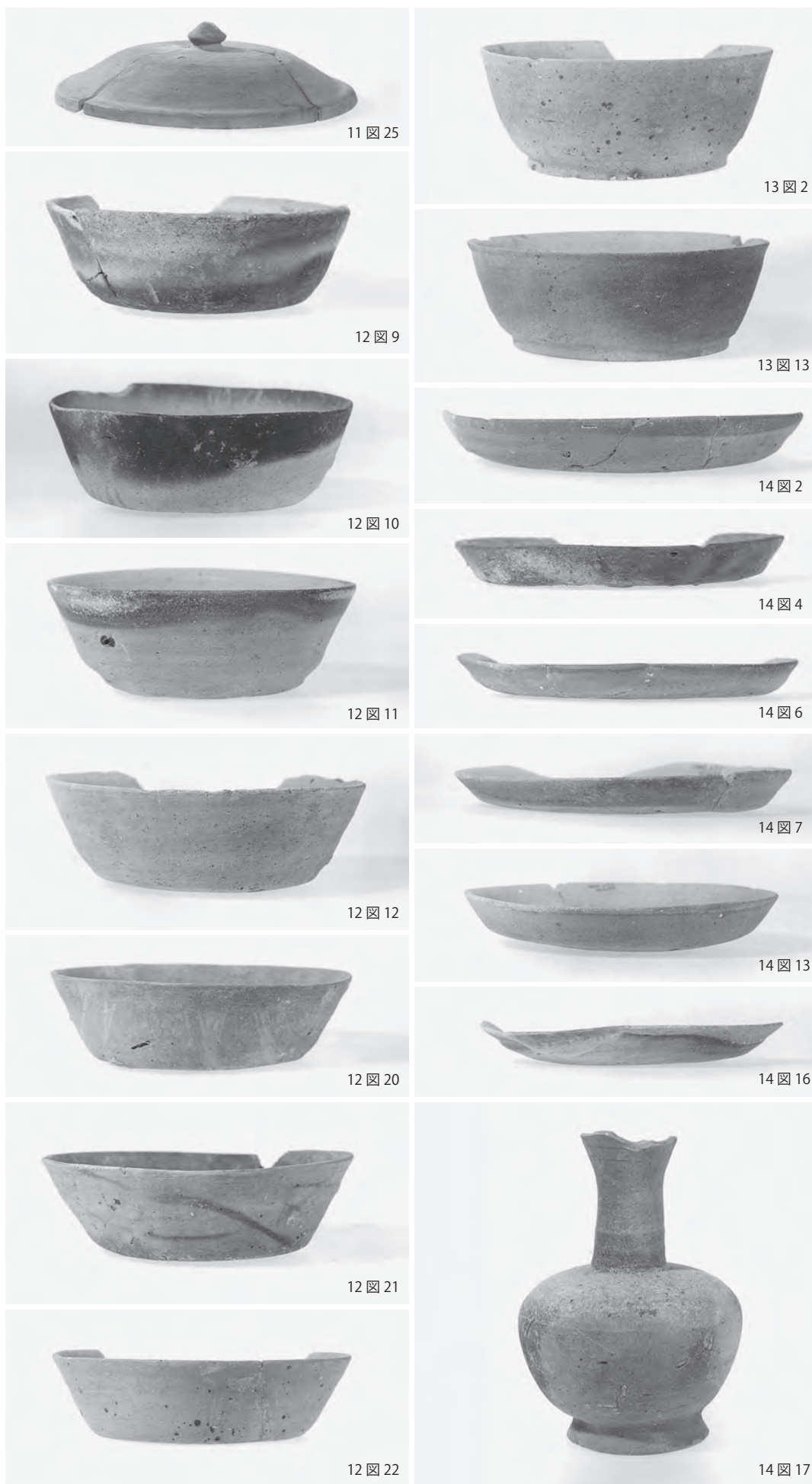
6. 同左掘り上がり状況（南から）



7. 同上天井部（西から）



1·2区出土土器



1·2区出土土器 2



15 图 7



15 图 13



19 图 23



15 图 15



16 图 10



18 图 22



20 图 13



20 图 14



20 图 8



21 图 3



21 图 9



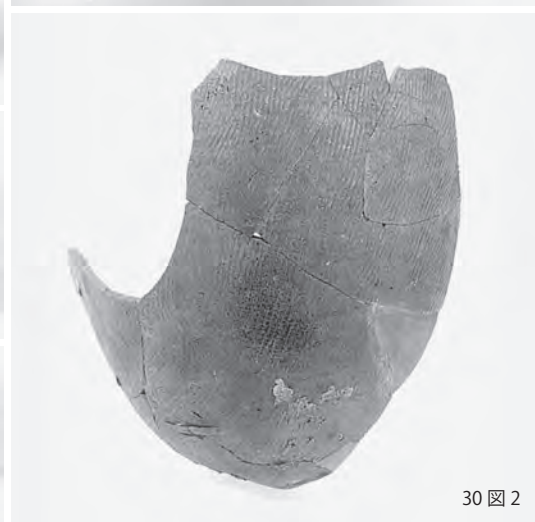
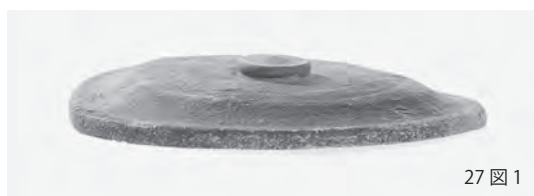
22 图 4



22 图 22



22 图 13





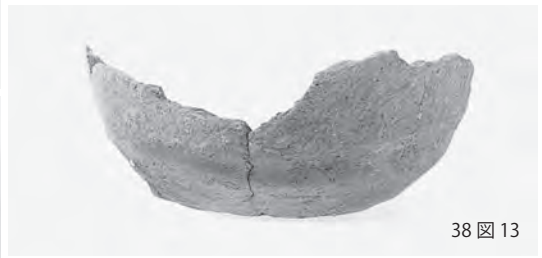
31 图 1



36 图 10



33 图 1



38 图 13



33 图 22



39 图 4



33 图 25



40 图 5



33 图 26



40 图 6



33 图 30



40 图 8



40 图 12



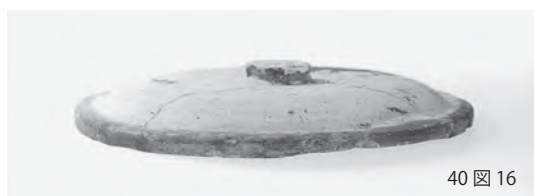
40 图 9



40 图 14



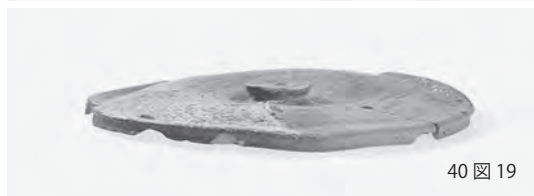
40 图 15



40图 16



40图 18



40图 19



40图 21



40图 22



40图 23



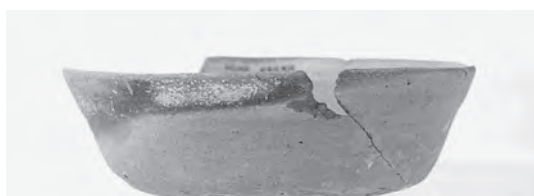
40图 27



40图 29



43图 15



41图 5



41图 12



41图 21



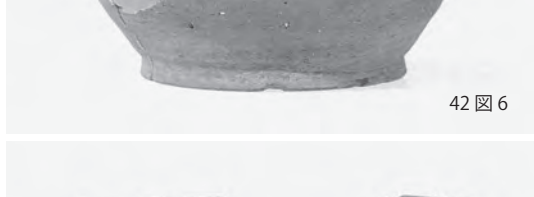
42图 1



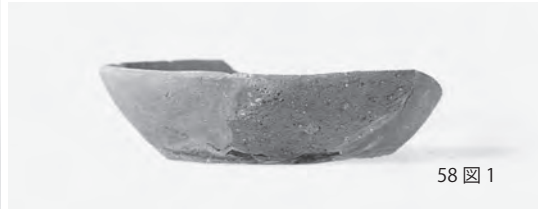
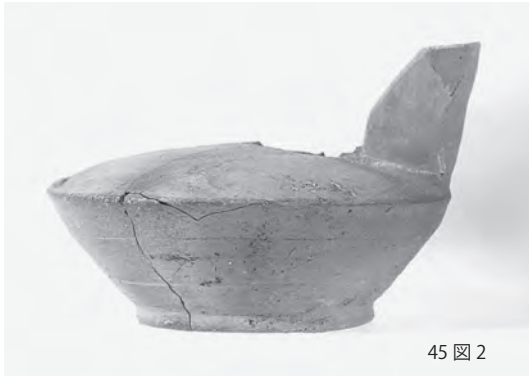
42图 6



42图 14



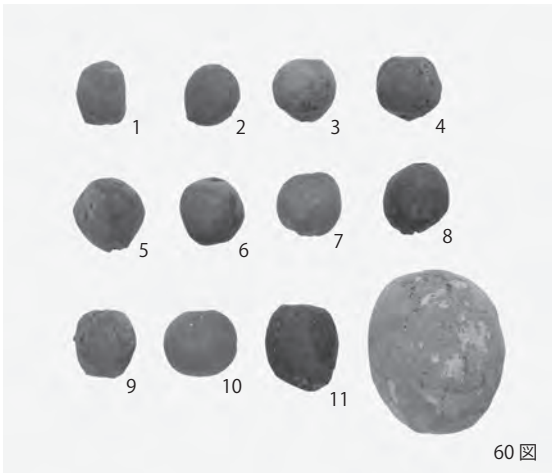
43图 5



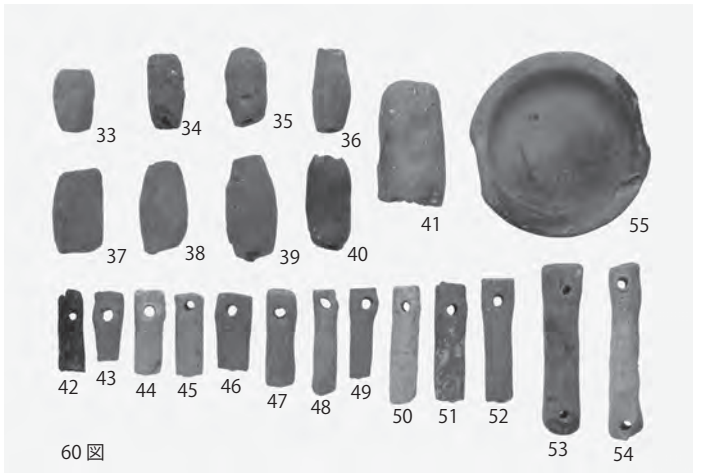
1 ~ 3 区出土土器



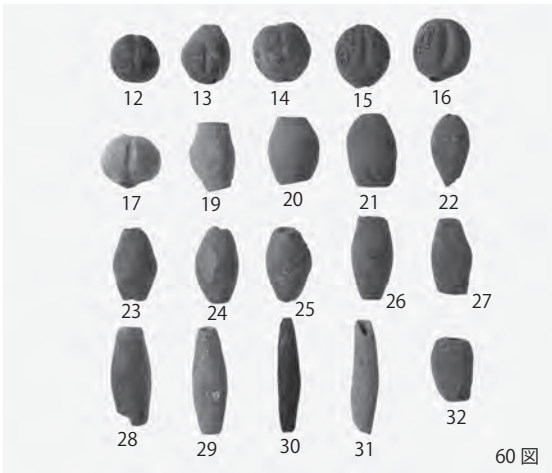
3 区出土遺物



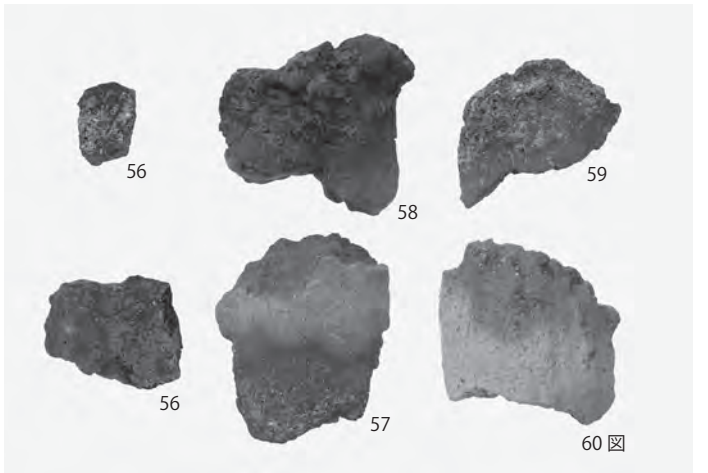
60 図



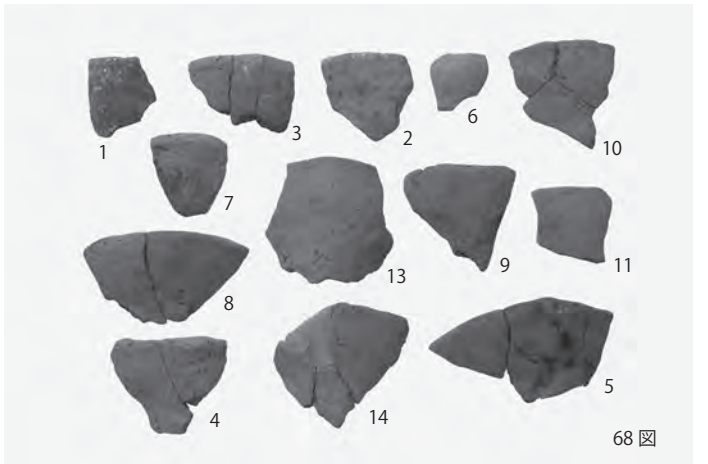
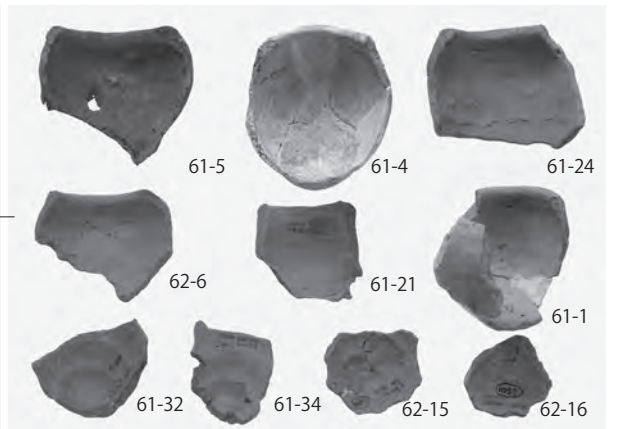
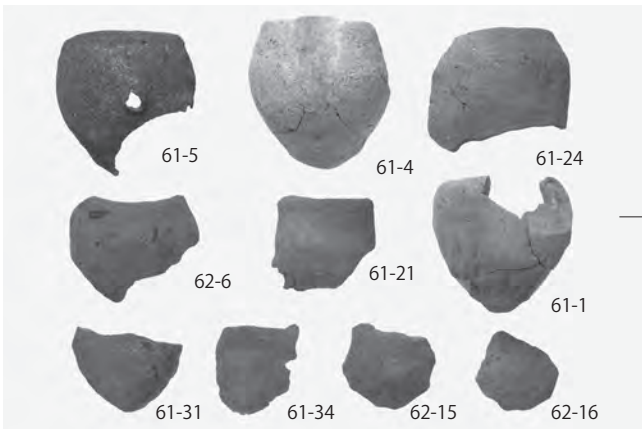
60 図



60 図

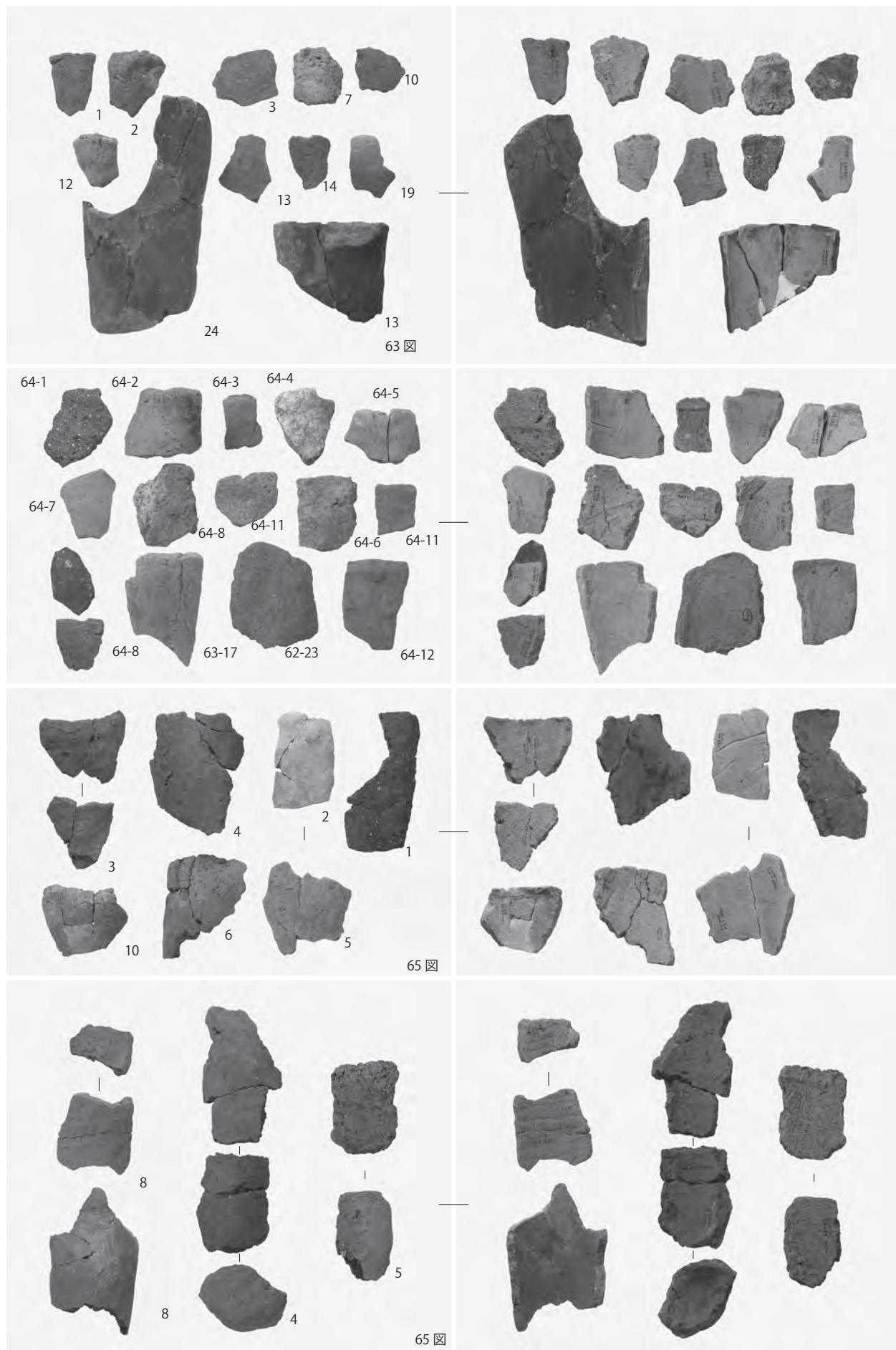


60 図



68 図

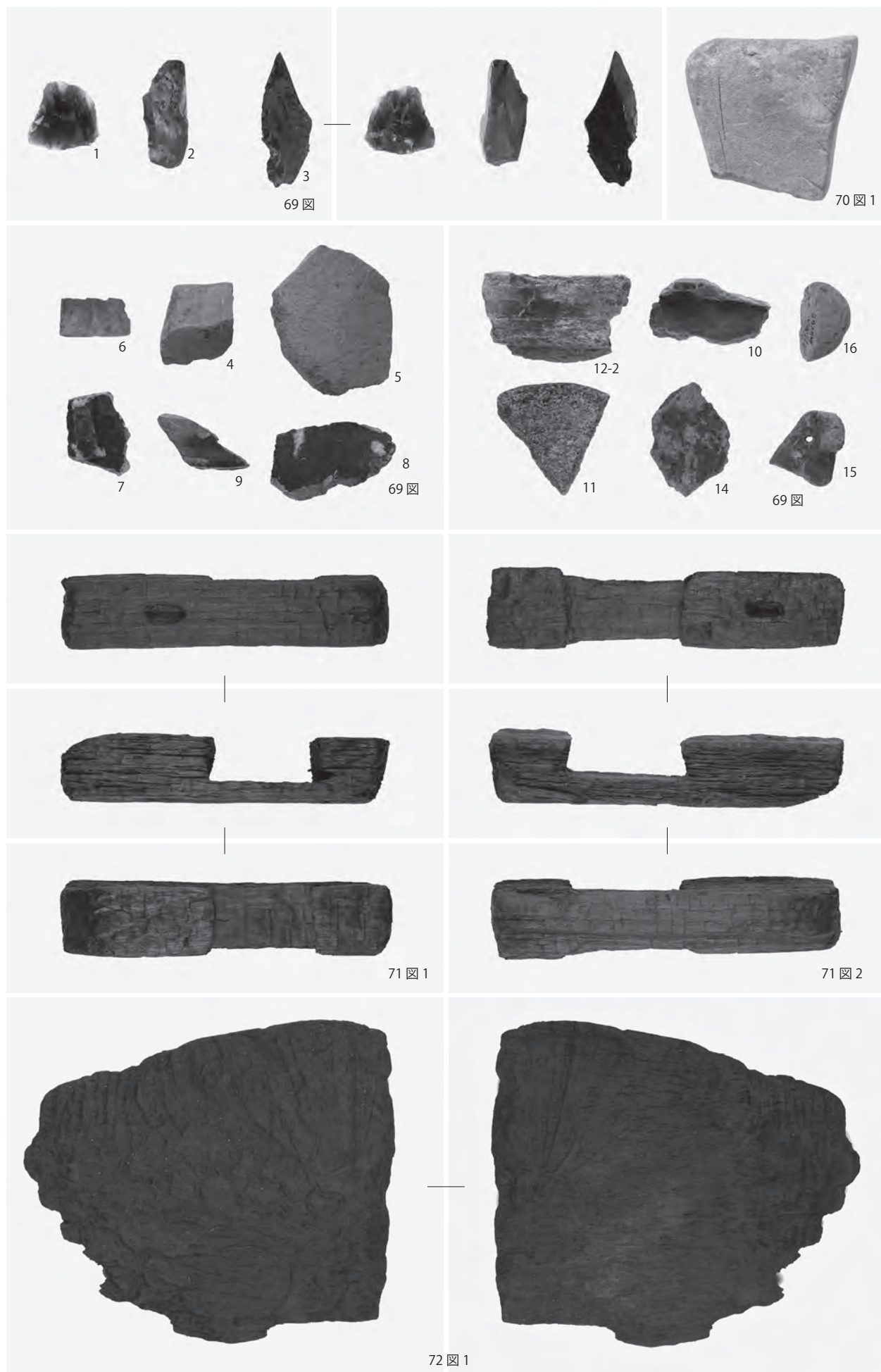
馬場長町遺跡出土土製品 1



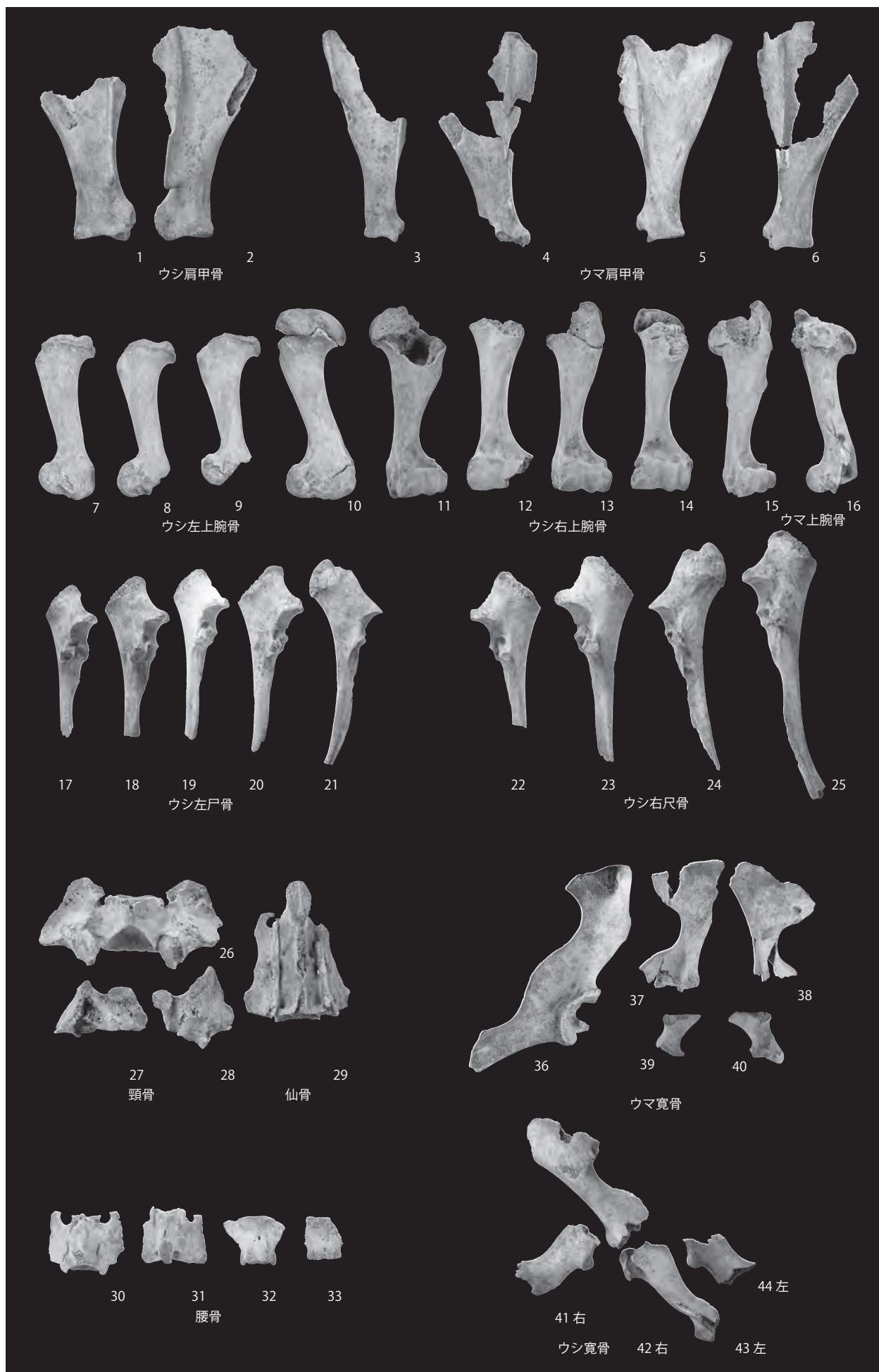
馬場長町遺跡出土土製品 2



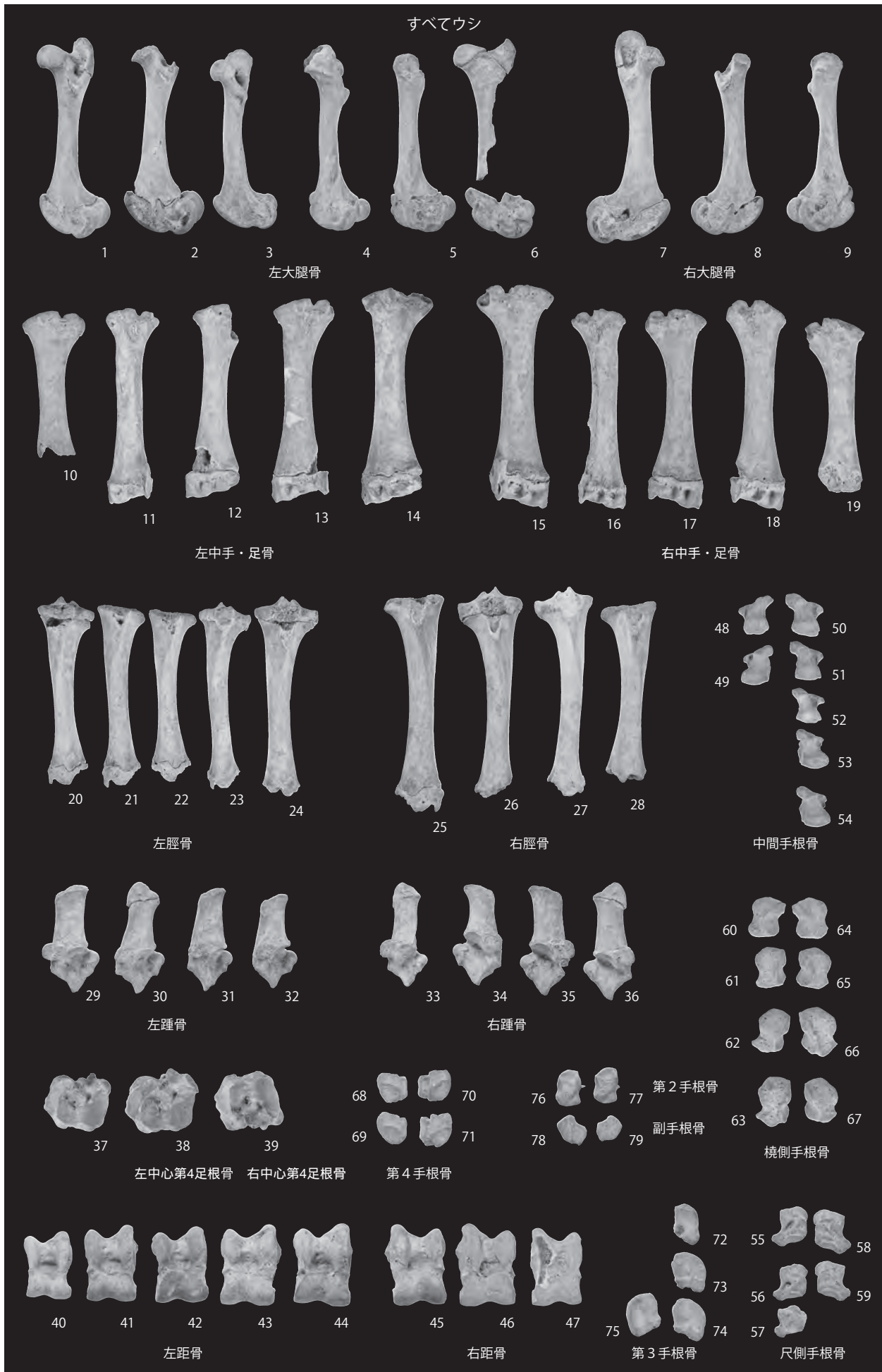
馬場長町遺跡出土 土・金属製品



馬場長町遺跡出土 石・木製品



馬場長町遺跡3区出土獣骨1



馬場長町遺跡3区出土獣骨2

馬場仁王免遺跡

2 馬場仁王免遺跡

(1) 調査の概要

本調査地点は、苅田町の中央部よりやや北東方向の殿川ダムのやや東側の位置で、水晶山山系から東側へと延びる丘陵の先端部にあたる。南側の高城山から延びる丘陵との間の谷部は、京都峠の東側の出入口に相当する。

調査区は丘陵上の南に面した緩斜面上と直下の谷部からなり、調査面積は約 2850㎡を測る。標高は最高所で 30 m 程度、最低所で 25 m 程度である。主体は奈良時代から平安時代にかけての遺構で、土坑 13 基、溝 2 条が主なもので、他に多数のピットや谷部に堆積した包含層を切る流路状の痕跡も検出された。なお、丘陵上では畑地としての利用のためか大きく削平を受けており、北西隅付近が最も高く、東・南側に向かって低くなっていくという本来の地形の傾向は残りつつも、テラス状の平坦部や段差が多々見られる。したがって、実際は調査で把握したよりも非常に多くの遺構が存在したと想定される。なお、バックホー等では除去が困難であった大きな樹木を 2 本調査区内に残したまま調査を実施した。

土坑とした中で、落とし穴と土壇墓と目される遺構がある。計 3 基の落とし穴（2～4 号土坑）は平面隅丸長方形で床面中央にピットがあり、内部から礫が検出されている。縄文時代に特徴的なものであるが、遺構の内外問わず該当する時期の遺物は出土していない。計 3 基の土壇墓の内 2 基（6・13 号土坑）からは明瞭な遺物が伴わず、また特筆する特徴に欠けているが、残る 1 基（5 号土坑）から青銅鏡、鉄製刀子、青磁碗、土師器小皿が出土したため、類似するこれら 3 基をまとめて土壇墓と判断した。なお、土層の観察からは判断できなかったが、木棺を伴っていた可能性もある。他には、内部に多量の礫が流入したもの（11 号土坑）、著しく焼土を含む大型のもの（12 号土坑）があり、丘陵上のみならず谷部に所在するもの（9・10 号土坑）もある。

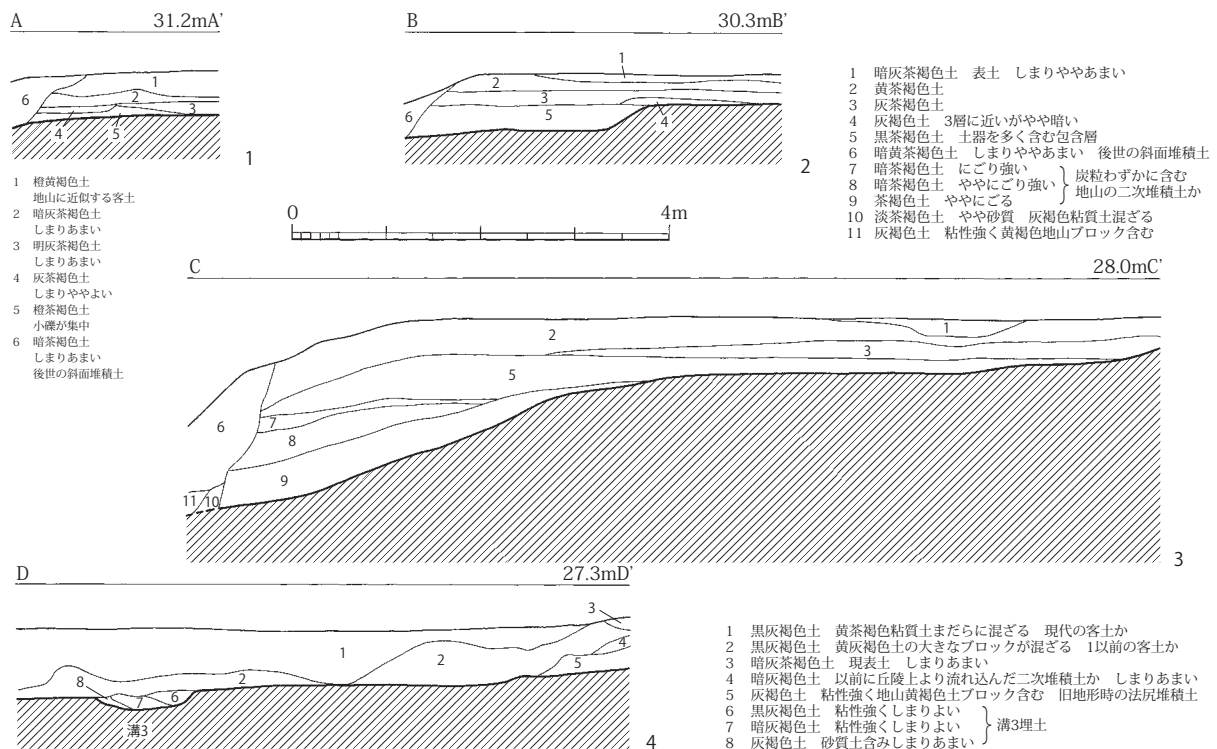
溝は部分的にしか見られず、広範に削平されている可能性があり、全体的な様相を推し量ることはできないが、丘陵上から低位部への排水の機能を担っていた可能性が高いとみられる。2 条の残存する部分の方向軸は、等高線に対して平行に近い傾向がある。また、谷部の包含層を切って東西に延びる流路状の痕跡があり、西側は調査区壁まで続いているが、東側は途切れている。

調査区南側のやや急となる斜面の周辺や谷部では、部分的な多寡の差はあるが包含層の堆積が目立っている。特に 10 号土坑付近を中心とした斜面の法尻部分では包含層の堆積が厚く、多量の土器とともに投棄されたような礫がまとまって検出された。また、この位置にはわずかではあるが、杭が打ち込まれていた痕跡が見られた。

出土遺物は、8 世紀から 12 世紀にかけての須恵器、土師器が主体的で、白磁、青磁、灰釉陶器等も含めた多彩な遺物がパンケース 12 箱分出土した。また、先述の青銅鏡、鉄製刀子という特殊遺物に加え、わずかであるが越州窯系青磁や緑釉陶器等の希少な遺物も含まれている。極わずかであるが、弥生土器や旧石器も出土した。

(2) 基本土層（第 81 図）

基本土層は調査区西壁の数ヶ所で記録した（第 81 図）。ただ、土層を確認・記録した方向軸は等高線と直行しておらず、そのため斜面部分での傾斜は、図面上で見る様相よりも実際には急峻と

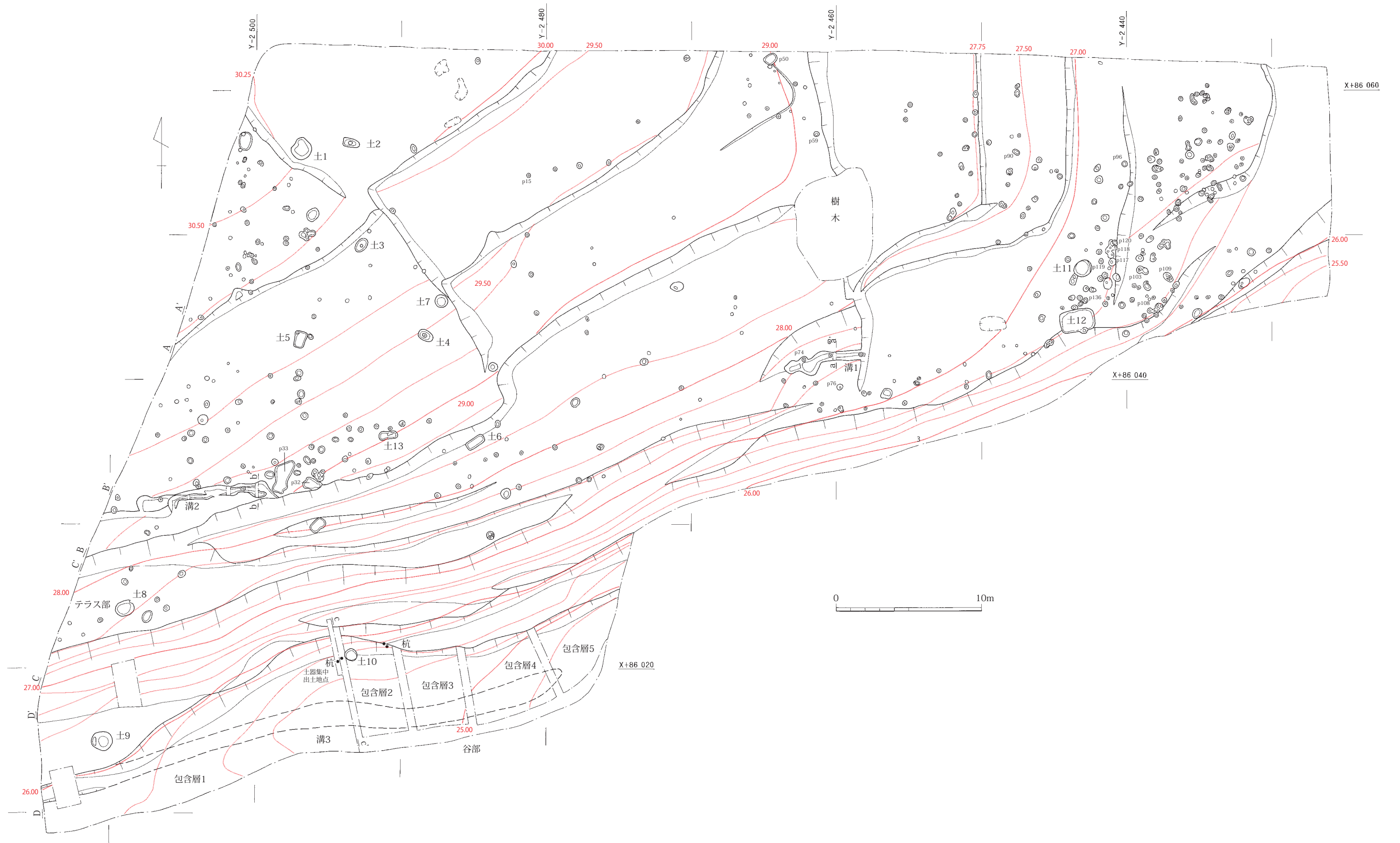


第 81 図 調査区西壁基本土層図 (1/80)

言える。

丘陵上では、以前畑地として利用されていた際の表土（暗灰茶褐色）をはじめ、人間活動が途絶えて、その後遺跡が埋没していく過程での自然堆積土や客土からなる上層が、主に 30～40cm 前後の厚さとなっている。その下位で黒茶褐色主体の包含層が堆積する部分があり、厚さ 50cm 程度となることもある。この包含層は、削平の少ないとみられる斜面の落ち際付近を中心に残存して堆積している。更に下位では、暗茶褐色土主体の基盤層（いわゆる赤土）が現れる部分と、より下位層にあたる礫混じりの黄茶褐色土がいきなり現れる部分とがある。黄茶褐色土層は強固であり、主に丘陵上の大きく削平された部分や谷の底部において表出している場合が多いようである。なお、調査区西壁で記録した土層③では、基盤層と思しき暗茶褐色土層でも炭粒を含んでにごり、その度合い等で分層（7～9層）した。これは、斜面部分では丘陵上部からの流れ込みによる 2 次堆積での形成と考えられる。これらの層は、遺跡の主体時期の遺物を包含せず、また包含層の堆積からも、遺跡が示す主体となる生活面はその上面とみることができる。ただ、③を記録した西壁からすぐ東側の斜面下部で、旧石器とみられる遺物が出土しており、その帰属は③の 9 層もしくはより下位の層と考えられる。

谷部では、第 86 図中の土層図で見られるように丘陵上から流れ込んだ幾層かの包含層が堆積する。その包含層の上部では黒茶～灰茶褐色系が主体であるが、最下層付近では灰褐色の粘質土が広がっている。なお、谷部の西壁でも土層④を記録しているが、西側へ急激に高くなる段差部分の直下にあたり、現代の盛土と思しき層が大半を占める。この段差が、人為的な盛土によって整えられたとうかがわれる。



第 82 図 馬場仁王免遺跡遺構配置図 (1/250)

(3) 遺構と遺物

①土坑

1号土坑 (図版 29、第 83 図)

調査区西北隅付近で、調査区中最も高所部分より東側の段下地点に位置する。隅丸方形に近い傾向のある円形の一隅が突出したような平面形で、壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜であるが、突出部の壁の傾斜は他よりやや急である。主として平面は径約 130cm 前後で、突出部はそれよりもやや広がっている。深さは 30cm 前後で、埋土は灰褐色土 1 層のみと判断した。青磁碗の小片や小形の管状土錘が出土したが、土錘は整理段階で遺失してしまった。青磁が混入品でないとするれば、時期は 13 世紀とみられる。

出土遺物 (第 85 図 1)

1 は龍泉窯系青磁碗の小片で、外面に鏝をもった蓮弁の文様の一部が見られる。

2号土坑 (図版 29、第 83 図)

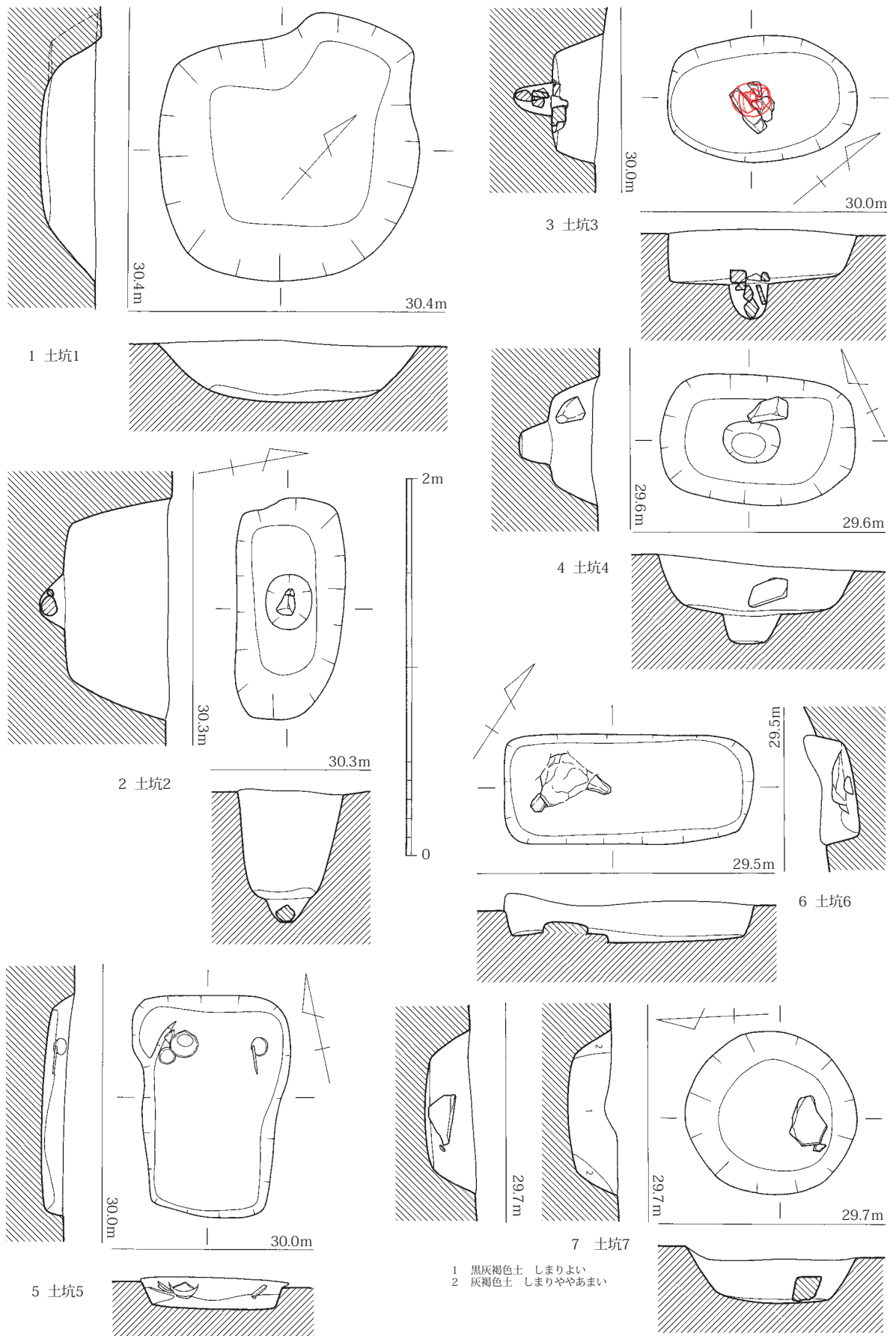
調査区丘陵上の標高の高い地点で西北隅付近に位置し、1号土坑の東側に隣接する。平面形は隅丸長方形に近く、長軸 116cm、短軸 55cm を測る。埋土は明茶褐色土の 1 層のみからなり、検出時に地山とさほど明瞭には区分できなかった。壁の立ち上がりは急な傾斜で、底面までの深さは 60cm 弱である。底面の中央付近に径 30cm 弱の円形ピットがあり、その深さは、13cm 程度と深くなく、内部からは小礫が検出された。遺物は出土していないが、堀方の形状から縄文時代の落とし穴跡と考えられる。

3号土坑 (図版 29、第 83 図)

調査区西北部で丘陵上の標高の高い地点に位置する。隅丸長方形もしくは長楕円形に近い平面形で、長軸 100cm 弱、短軸 70cm 弱を測る。埋土は淡茶褐色土の 1 層からなり、検出時に地山とさほど明瞭には区分できなかった。壁の立ち上がりは急な傾斜で、底面までの深さは 25cm 前後であるが、すぐ北側に削平による大きな段差が生じているため、遺構上部は大幅に失われていると考えられる。底面の中央付近に径 15cm 程度の小ピットがあり、その深さは 20cm 程度である。ピット内部およびその直上の遺構底面付近より小礫が複数検出されている。遺物は出土していないが、堀方の形状から縄文時代の落とし穴跡と考えられる。

4号土坑 (図版 30、第 83 図)

丘陵上の調査区西北部に位置し、7号土坑の南西側に隣接する。平面形は隅丸長方形に近く、長軸 100cm 強、短軸 70cm 程度である。壁の立ち上がりは、全体的にさほど急な傾斜ではなく、底面まで 30cm 程度の深さである。埋土は淡黄茶褐色土の 1 層のみからなり、検出時に地山とさほど明瞭には区分できなかった。底面の中央付近に径 22 ~ 30cm 程度のピットがあり、その深さは底面から 15cm 程度である。2・3号土坑のようにピット内で小礫は検出されていないが、やや大きめの礫が床面からやや浮いた状態で出土している。遺物は出土していないが、堀方の形状から縄文時代の落とし穴跡と考えられる。



第 83 図 1 ~ 7 号土坑実測図 (1/30)

5号土坑（図版30、第83図）

丘陵上の調査区西北部に位置する。平面形は隅丸長方形に近いが、北側の短辺が南側に比べてやや広がった形状となっている。長軸120cm程度、短軸70～80cm程度である。壁の立ち上がりはさほど急な傾斜ではなく、底面までの深さは10～15cm程度と非常に浅い。北西隅のやや南側で青磁碗、土師器小皿2点を検出し、北東隅のやや南側で青銅鏡とその上に一部重なった状態の鉄製刀子を検出した点は特筆すべきものがある。青銅鏡は鏡面を上側にして埋置されていた。遺構の性格として、これら出土遺物を副葬品とした中世墓とみられる。深さがわずかなため大幅に削平されていると考えられ、確認できた土層の厚さも相応のものに限られていた。底面全体に2～3cm程度の灰褐色土が広がり、その上位は黄褐色土と明灰褐色土が斑に混ざった層で、土層からは木棺墓の可能性を把握することはできなかった。青磁碗および青銅鏡は12世紀後半と判断でき、埋葬時期もほぼ同様と想定される。

出土遺物（図版37、第85図2～5）

2～4はいずれも底部に糸切り痕が見られる土師器小皿である。2は完形で糸切り後の底部に板状圧痕が施される。2・3の出土時の位置は確認できているが、4は掘削土中から取り上げたもので、接合しないものの3と同一個体である可能性がある。5は龍泉窯系青磁碗で口縁部は1/3程度欠失している。内面に蓮花劃花文、見込には櫛目をもつ。高台内部は露胎し、外面および畳付にわずかに焼成時付着物がある。なお、青銅鏡および鉄製刀子は別記する（第96図）。

6号土坑（図版31、第83図）

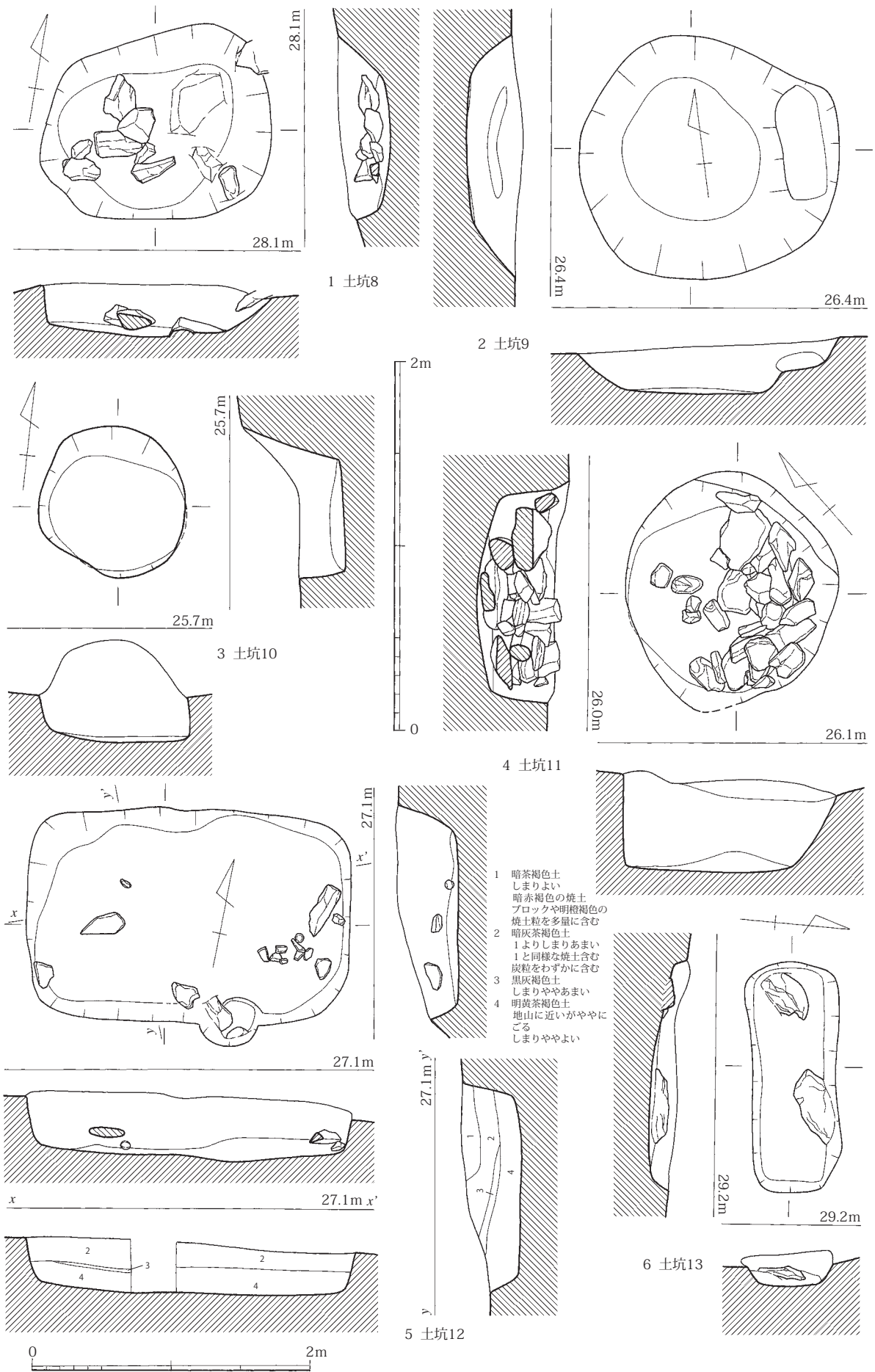
丘陵上の調査区西側で、谷部へ落ち込む斜面の落ち際付近に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸約130cm、短軸57cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急な傾斜で深さ20cm程度と浅いが、すぐ北側に削平による段差が生じているため、遺構上部は大幅に失われていると考えられる。また、底面は東側より西側が高くなっているが、西側底面では地山に含まれる岩盤が表出していることから、それ以上掘削できなかったためとみられる。埋土は、地山に近似する黄褐色土ブロックと暗灰褐色土が斑に混ざった1層のみである。出土遺物はないが、平面形や埋土が5号土坑と類似することから、中世墓の可能性があると考えられる。遺物は出土していない。

7号土坑（図版31、第83図）

丘陵上の調査区西北部に位置し、4号土坑の北東側に隣接する。平面形は径85～90cmのほぼ円形である。壁の立ち上がりはさほど急な傾斜ではなく、埋土は壁際に薄く灰褐色土が堆積し、それ以外に見られる黒灰褐色土が主体である。深さは20～25cm程度である。やや大きな礫がほぼ底面直上から検出され、遺物は出土していない。

8号土坑（図版31、第84図）

丘陵上西南部の調査区西壁付近で、谷部へ落ち込む斜面の中腹にあるテラス状の部分に位置する。平面形は不整な隅丸方形にやや近似した形状で、長軸120cm程度、短軸105cm程度である。壁の立ち上がりは、部分によって傾斜が異なるが、概ね緩やかな部分が多い。上端の高い部分から底面まで、25cm程度の深さである。内部の西半で、多くがほぼ床面上に近い位置から複数の礫が出土しているが、意図的に埋置したような状況とは言えない。東半の内部でも礫が複数見られるが、これらは基本的に地山中に含まれるものが露出しているだけである。埋土は暗黒灰褐色主体で、明



第 84 図 8 ~ 13 号土坑実測図 (5 は 1/40、他は 1/30)

瞭な分層はできなかった。土師質の土器細片のみがわずかに出土している。

9号土坑（図版 32、第 84 図）

調査区西南部隅付近の谷部に位置する。平面は不整楕円形で、長軸 140cm、短軸 120cm 程度である。上端の高い部分から底面まで 25cm 程度の深さで、壁の立ち上がりは、全体的に緩やかな傾斜である。内部東側に深さ 10～20cm 程度の位置でテラス状の部分がある。このテラス直下の土坑内東南部の位置で、3 点の礫がまとまった状態で検出されたが（図版参照）、底面からやや浮いた状態で有意性は認められなかった。谷部に位置していることもあり、埋土は青灰色粘質土のほぼ 1 層のみであった。土師器、須恵器、瓦質土器といった出土遺物があるが、いずれも小片で時期の判断は難しい。他に図示していないが、鏝部とみられる土師質の土器小片がある。

出土遺物（第 85 図 6～8）

6 は土師器碗の高台付付近である。高台は貼付で、低く断面三角形状である。7 は須恵器瓶子形壺の口縁部小片で、端部は非常に短く上方へ立ち上がる。8 は瓦質土器甕の胴部小片で外面に格子状のタタキ痕、内面には同心円状の当て具痕が見られる。

10号土坑（図版 32、第 84 図）

調査区西南部の谷部内に所在し、丘陵上から落ち込んできた斜面の法尻の位置にあたる。そのため北側の上端は斜面上にあるため、南半の上端に比べ極端に高くなっている。この土坑の周辺は、投棄されたような土器類や礫が集中して出土しており、そこでの斜面上から谷部にかけての包含層の堆積状況を確認するために残したベルトが隣接している。平面は径 80～90cm 程度のわずかに不整な円形で、谷底からの深さは 25cm 程度である。壁の立ち上がりは、急な傾斜である。内部からは複数の礫が検出されているが（図版参照）、意図的な埋置ではなく、周辺に多量に投棄された礫と一連のものであるとみられる。埋土については、谷部底に堆積しているような（第 86 図土層）灰褐色粘質土が主体である。図示した土師器以外にも多数の土師器・須恵器の小片が出土し、糸切り痕から 10 世紀以降の埋没と考えられる。

出土遺物（第 85 図 9～11）

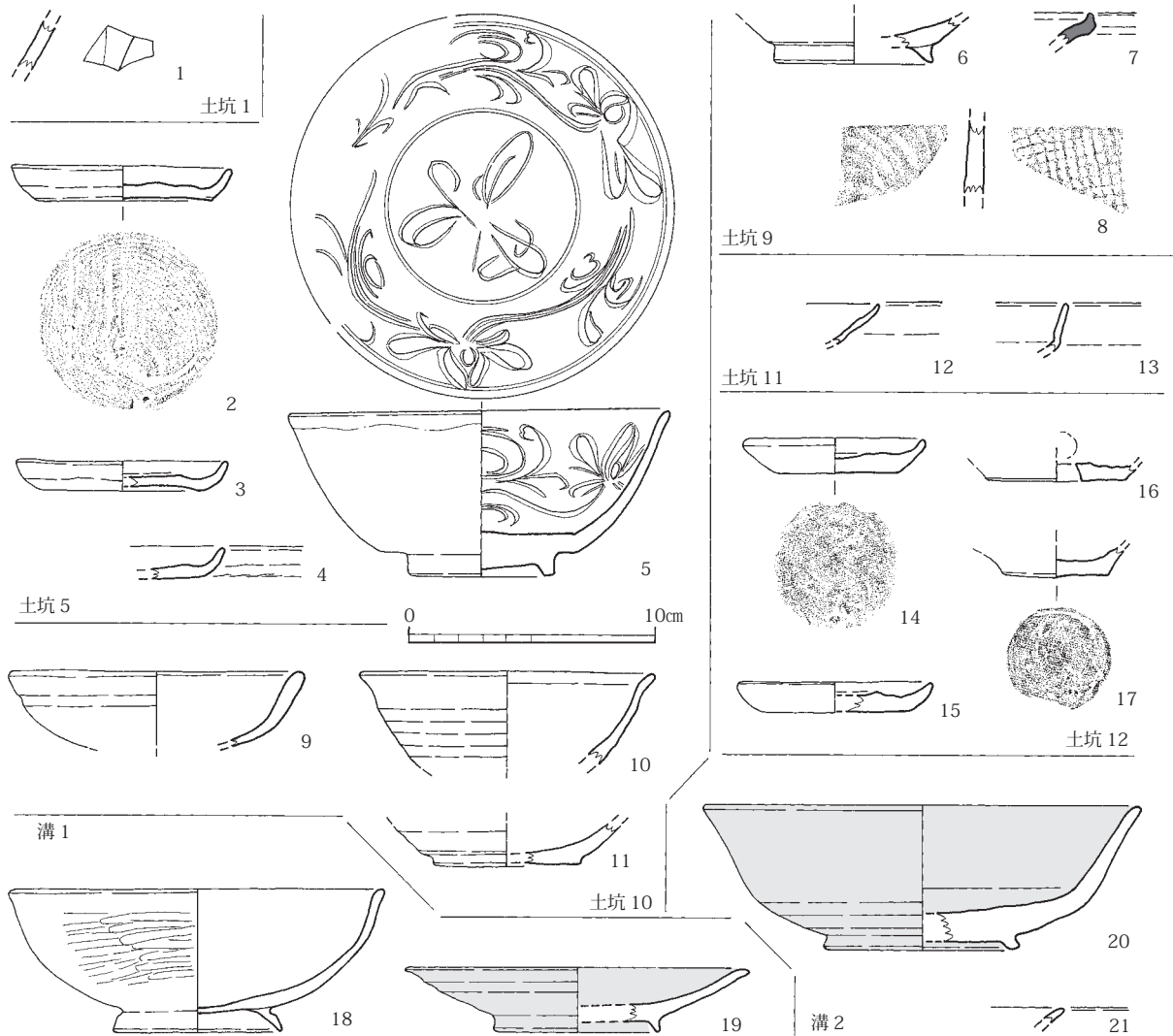
9 は土師器杯で丸底杯可能性がある。口縁部はやや厚手で下位になるにつれ薄くなる。外面の口縁下方にはわずかな窪みが廻る。10 は土師器で杯か碗か不明で、口縁端部はわずかに外反して開く。11 は杯底部で、糸切り痕が見られる。

11号土坑（図版 32、第 84 図）

調査区東側の丘陵上で、12号土坑の北側に位置する。平面 115～125cm 程度の円形で、底面までの深さは 40～50cm 程度である。壁の立ち上がりは東半側が緩やかなのに対し、西半側は急な傾斜で、一部ではほぼ直立もしくはオーバーハングした状態である。また、内部の東半側で多量の礫が検出されたが、個々に配置して組んだのではなく、東側からまとめて投棄されて流れ込んだような状態と言える。埋土は上層 20cm 程度で薄く焼土粒・炭を少量含む暗茶褐色土層が広がり、その下位では暗灰茶褐色土が主体で、焼土粒・炭はこの層でもわずかに含まれる。遺物は図示した土師器、青磁の小片をはじめ、他にも多数の土師質の小片や瓦質土器の破片が出土した。

出土遺物（第 85 図 12・13）

12 は土師器杯の口縁部小片で、器壁は非常に薄い。13 は青磁壺の口縁部小片である。



第 85 図 土坑および溝出土土器実測図 (1/3)

12 号土坑 (図版 33、第 84 図)

調査区東側の丘陵上で、11 号土坑の南側に位置する。平面は隅丸長形状で、長軸 230cm 以上、短軸でも 150cm 以上に及ぶ大型の土坑である。南側はバックホーによる上層の掘削を強めにしてしまったために、北側よりも上端が 20cm 程度低い。北側の高い上端から底面までの深さは 40cm 以上になる。壁の立ち上がりは部分によって緩急の差が大きいだが、極端に緩やかな部分はない。内部からは少数の碟や土器片が検出された。埋土については、上層の暗茶褐色土、暗灰茶褐色土の 2 層は、著しく焼土のブロック・粒を含んで特徴的である。また、その下位には炭粒が集中する薄い層があり、更に下層は地山に近似したものとなっている。ただ、壁面や底面に著しく被熱したような痕跡は見られなかった。土師器の小皿が出土し、14～15 世紀。図示していない細片を含め、土師質の土器のみの出土である。

出土遺物 (図版 37、第 85 図 14～17)

14～17 はいずれも土師器小皿である。14 は完形に復元され、底部にはヘラ切りが見られる。15 の底部は不明瞭であるが、ケズリを施した可能性がある。16 の残存部はわずかなため確実ではな

いが、底部に穿孔した可能性のある部分があり、糸切り痕が見られる。17は底部のみが残存し、糸切り痕が見られる。また、胎土は精良で赤色顔料を塗布した可能性があり、小皿とは異なる器種であるかもしれない。

13号土坑（図版33、第84図）

調査区西側の丘陵上で、南側の谷部へと落ち込む傾斜が強くなる斜面部分への転換部分よりもやや北側に位置する。平面は隅丸長形状で、長軸120cm以上、短軸45～50cm程度を測る。底面までの深さは15～20cm程度と浅く、壁の立ち上がりはさほど急な傾斜ではない。埋土は、黒灰褐色土と黄茶褐色土が斑に混ざった1層のみである。底に礫面が露出する部分があるが、この礫は地山に含まれるものが、土坑が掘削された際に表出したものと言える。出土遺物はないが、平面形や埋土が5号土坑と類似することから、中世墓の可能性があると考えられる。

②溝状遺構

1号溝（図版34、第82・86図）

調査区東側で、丘陵上から谷部へと落ち込んでいく斜面上に位置し、その斜面でも傾斜の急な下位よりも緩やかな上位部分にあたる。ただ、この溝の北側で部分的に傾斜がやや急になり、溝の位置から南側へ再度緩やかになる。これは、当初不明瞭な染み状の広がりであったのをバックホーでの検出時にやや強めに掘削した影響でもあり、上位部分を掘り過ぎてしまった可能性もある。東西に近い軸で3.5m程度の長さで検出されているが、西側では、平面の上端ラインとともに下端のラインも不整形で、底はテラス状の部分を持って西側へ高くなって途切れている。東側は幅60～70cmの整ったプランとなるが、後世の削平による大きな段差部分で途切れているものの、そのまま延長していたと想定される。底の標高は、西側テラス部分で27.3～27.4m程度、ベルトの西側で27.2～27.25m程度、ベルトの東側で27.1～27.2m程度と東側へ低くなる傾向が明瞭である。埋土については、暗灰褐色土の上層と地山に近似した黄茶褐色土の下層が見られる。わずかな土器類や鉄釘が1点出土している。また、遺構内のピット74からは土師器および黒色土器の椀が出土しており、この遺構に伴う可能性が高い。

出土遺物（図版37、第85図18・19）

18は土師器椀で、貼付される高台は薄く、低いながら下方へと開く。体部外面には横位のミガキが残存する。また、口縁端部はわずかに外反して開く。19は緑釉陶器皿で、低く小さな高台が貼付される。胎土は淡黄褐色で、釉は濃い黄緑色で厚く、高台内を含め全体に施される。口縁端部はわずかに外反して開く。

遺構内にあるピット74出土の土師器および黒色土器椀は第94図8・11に掲載している。

2号溝（図版34、第82・86図）

調査区西側の丘陵上において、南側の谷部へと落ち込む傾斜が強くなる斜面への転換部分付近にあたり、また調査区西壁からやや東側に位置する。この付近では、斜面の落ち際が段状に下がり、そこに東西10m以上にわたり黒茶～暗茶褐色主体の包含層の堆積していた。その包含層の厚さは、第81図②の土層にあるように、20cm主体で30cm以上の部分もあった。この包含層を徐々に掘り下げる際に、段差部分の一部で小形の溝状に検出されたのが本遺構である。東西6～7m程度に延びるが、西端では南向きに屈曲して掘方が途切れ、東側では掘方が明瞭でなくなり途切れる。途切

れた部分は、包含層として一括して掘削した部分を切り込んで更に続いていた可能性もあるが、土層で確認する限り包含層の下位から掘り込まれている。埋土は、地山黄茶褐色土を斑に含む暗茶褐色土である。深さは、北側の高い上端から最大で25cm程度、南側の低い上端からで5cm程度と浅く、下端もやや不整なところがあって、全体に端整な堀方とは言えない。底の標高は西端で30.2m程度、東端で30.0m程度と極端な差異ではないものの、東側へと徐々に低くなる傾向が表れている。ただ、等高線と平行に近い主軸であり、流路状に形成されたとは考えにくく、小型ながら丘陵上から谷部への排水のための導水をするために設けられた可能性があり、関連する同様の遺構が削平前には周囲にもあった可能性がある。図示した遺物以外にも糸切り痕のある土師器小片、つまみのある杯蓋や皿の須恵器小片を含む多数の破片が出土した。

出土土器（図版 37、第 85 図 20・21）

20 は緑釉陶器碗で、胎土は灰白色で全体的に厚手で、釉は淡黄緑色で薄く、剥落が目立つものの高台内を含め全体的に施されるのが確認できる。低く小さな高台が貼付され、体部は屈曲気味に立ち上がり、口縁端部はごくわずかに開く。21 は緑釉陶器碗の口縁部小片で、胎土は淡黄褐色、釉は淡緑色である。

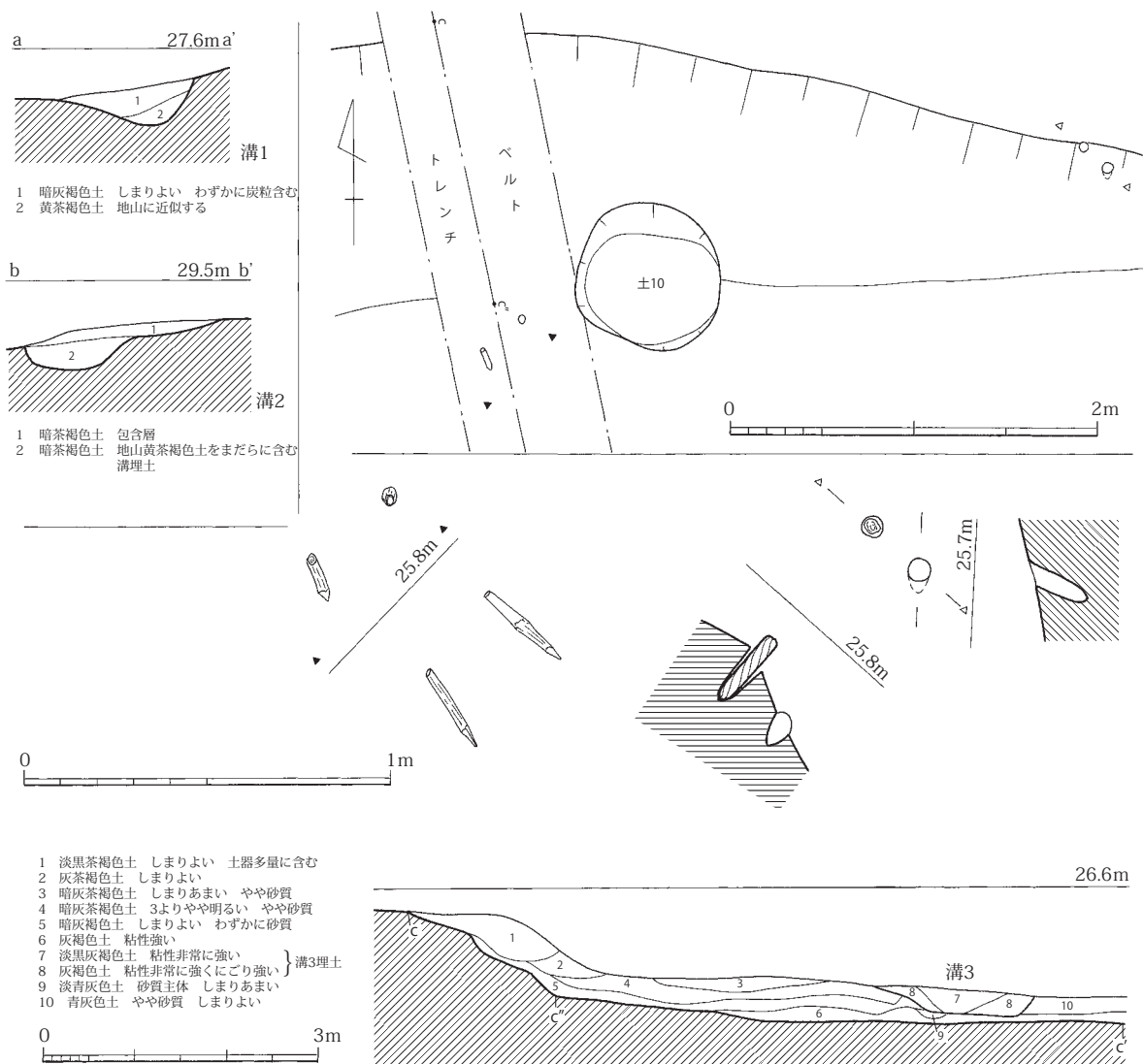
3号溝（図版 35、第 82・86 図）

谷部の調査区西壁とその付近で堀方が確認できた溝状遺構ができた。そのすぐ東側の包含層中では、遺構の連続部分を把握していないものの、谷部東半の4ヶ所のベルトで、包含層中を切り込む溝の断面を確認できた。両者は、その間で検出範囲の空隙はあるものの、方向軸や埋土の近似性から一連の遺構とみて支障ないと考える。なお、調査区西壁（第 81 図④）と東側のベルト中（第 86 図 C - C'）での層の堆積状況がやや異なるが、調査区西壁のすぐ西隣は大きな段差を伴って急激に高くなっており、その地形の差異が起因している可能性がある。溝断面は、最も東側の谷部ベルトで確認できるが、谷部東壁では確認できず、この両地点間で途切れているとみられる。谷部の底は全体に西から東側へと低くなる傾向があり、溝の底についても調査区西壁で標高 26m 程度、東側のベルト部分で標高 25.2m という高低差がある。この溝の性格としては、壁の傾斜が緩やかで浅い堀方から、低位の谷部へ導水するために簡易的に掘削されたか、自然的に谷部へ流れ込んだ流路状の痕跡と想定される。特に谷部東側のベルト付近では、この遺構の推定範囲と小礫がまとめて検出された範囲とほぼ対応し（図版 35）、多数の礫を伴って谷部へ流入した埋没時の痕跡が表れている。出土遺物では、この遺構に明瞭に伴うものとして取り上げられたものはなく、包含層出土とした遺物の中に時期の想定に有意とみられるものは認識できなかった。

③谷部土器集中出土地点（図版 35、第 86 図）

谷部の法尻付近の斜面から谷底にかけて包含層が一定の範囲・厚さで広がる中で、特に 10 号土坑周辺では、集中して土器や礫が検出されており、まとめて投棄したような状況とみられる。この位置を「谷部土器集中出土地点」と呼称することとする。出土土器の中には完形のものも多数含まれ、用途不明の整形された軽石製品 2 点が出土している。また、複数の杭やその打ち込まれた痕跡等も検出され、何らかの行為を実施するため空間であったとみられ、上記のような様相から、その内容は祭祀的な性格が色濃いと想定される。わずかであるが、動物遺体（196 頁参照）、鉄板片や鉄滓も出土している。

杭・杭痕については、10 号土坑のすぐ西側および 2m 程度東側の 2 ヶ所で検出された。西側の



第 86 図 1・2号溝土層、谷部土器集中出土地点実測図(1/40、杭拡大図：1/20、谷土層 1/80)

杭は立った状態で2本並んで検出され、下端部は基盤層まで達しておらず、包含層中に打ち込まれたとみられる。残存する杭の長さは25cm強である。東側では基盤層に打ち込まれ直立した杭1本と、杭が腐朽もしくは抜けた痕跡とみられる小穴1基が並んで検出された。残存する杭の長さは20cm強である。

この谷部土器集中出土地点から、谷底部にかけて連続した土層を記録した。最上層(1層)の淡黒茶褐色土が最も多くの土器を包含しており、続いて谷部で上層となっている灰茶褐色土主体の層(2~4層)から出土する遺物も少なくない。基盤層直上の底部には灰褐色土主体の層(5・6層)が広がり、遺物の出土はわずかである。また、南端では遺物をほとんど含まないグライ化した層が見られる。

出土土器(図版37・38、第87~100図1~99)

1~3は土師器小皿である。いずれも底部には糸切り痕が見られる。

4~35は土師器杯である。

4~8には、ヘラ切りもしくは後の調整によって底部に糸切りが見られないものである。4の底部はヘラ切りとみられる。5の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。6は口縁・体部の開きが大きい器形である。底部は回転ヘラ切りで、底部・体部の境付近は回転ケズリが施される。7の底

部は回転ケズリが施される。8の底部には回転ケズリが施され、中央は調整が及ばずわずかに突出している。茶褐色のやや特徴のある色調である。9は底部に糸切り痕が見られ、口縁端部が遺存せず完形には復元できない。

10～28の土師器杯は完形もしくはそれに復元できるだけの残存部があり、底径が小さく丸みを持つ器形で、ロクロの使用による外面の起伏が目立っている。全て外面の体部と底部の境に段があって、わずかに突出気味の底部には糸切りの痕跡が残る。また、口縁部がわずかに肥厚するものが多く、端部は外反気味にわずかに開くものがほとんどである。28の底部は突出気味ではなく、糸切り痕が見られる。ほとんどの他の杯に比べ、外面の起伏は少なく口径は大きい。

29～35は土師器杯で、口縁部付近は残存しておらず、外面の体部と底部の境に段があって、わずかに突出気味の底部には糸切りの痕跡が残る。30のみ底部に板状圧痕が見られる。35は底部が薄く体部が非常に開く特徴ある器形で、蓋となる可能性も考えられる。

36～39については底部が残存しておらず、土師器杯か碗かは明瞭ではない。36は他に比べ器表の起伏は少なく厚い。浅い器形とみられ丸底杯になる可能性がある。37～39は器表の起伏が目立ち、口縁端部はわずかに外反気味である。

40～57は貼付による高台を有する土師器碗である。

40～44は口縁部から高台まで遺存して完形に復元される。いずれもロクロの使用による外面の起伏が目立ち、口縁端部は外反気味にわずかに開く。

40の見込中央部に焼成前の穿孔の痕跡があるが、ごくわずかしかな遺存していないため、その径は不明である。高台内では42でヘラ切りの痕跡が見られるが、他は全体的に丁寧にナデ調整されている。

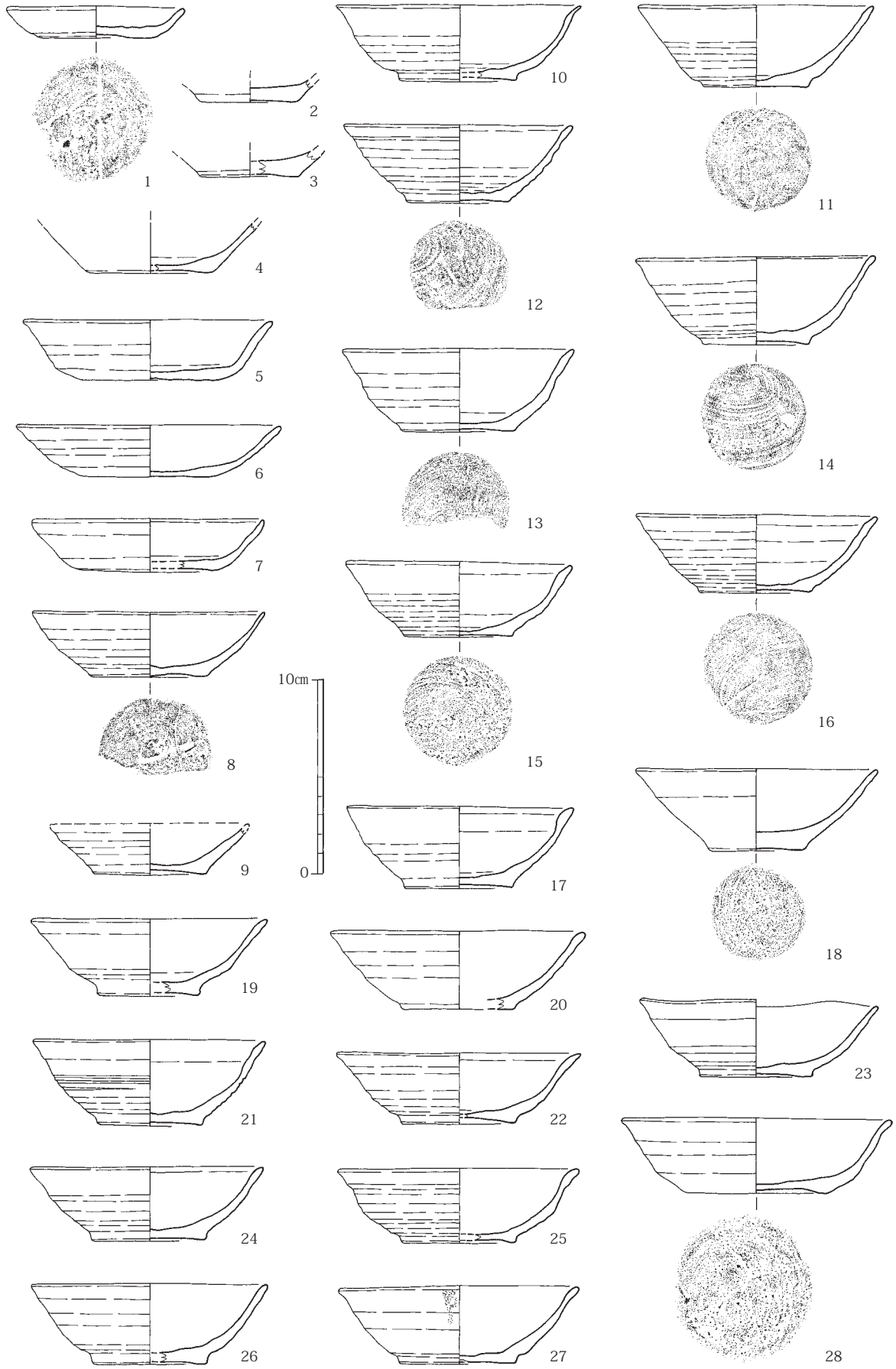
45～58の土師器碗は口縁部が欠失しており、ほとんどが底部付近のみ残存である。45は橙茶褐色の特徴ある色調で高台は接合面から剥落して欠失している。46・47・58の高台は非常に低く、断面三角形の小さなものである。50には接合の際に生じたと考えられる絞り痕が高台に見られる。53の胎土には角閃石が目立つ。56の胎土は精良で、橙褐色の特徴的なものである。

59～65は煮沸用土師器で、59～63は甕、64・65は羽釜である。59～61の甕は口縁部の屈曲が弱く、体部があまり張らない器形とみられる。62の口縁部はやや強く屈曲して開き、外面の上位には強い回転ナデが施される。63はある程度肩部が張る。61のみ外面にハケ調整が見られる。64・65の羽釜は口径が大きく、外面の上端部付近には大きな鋸部が廻る。

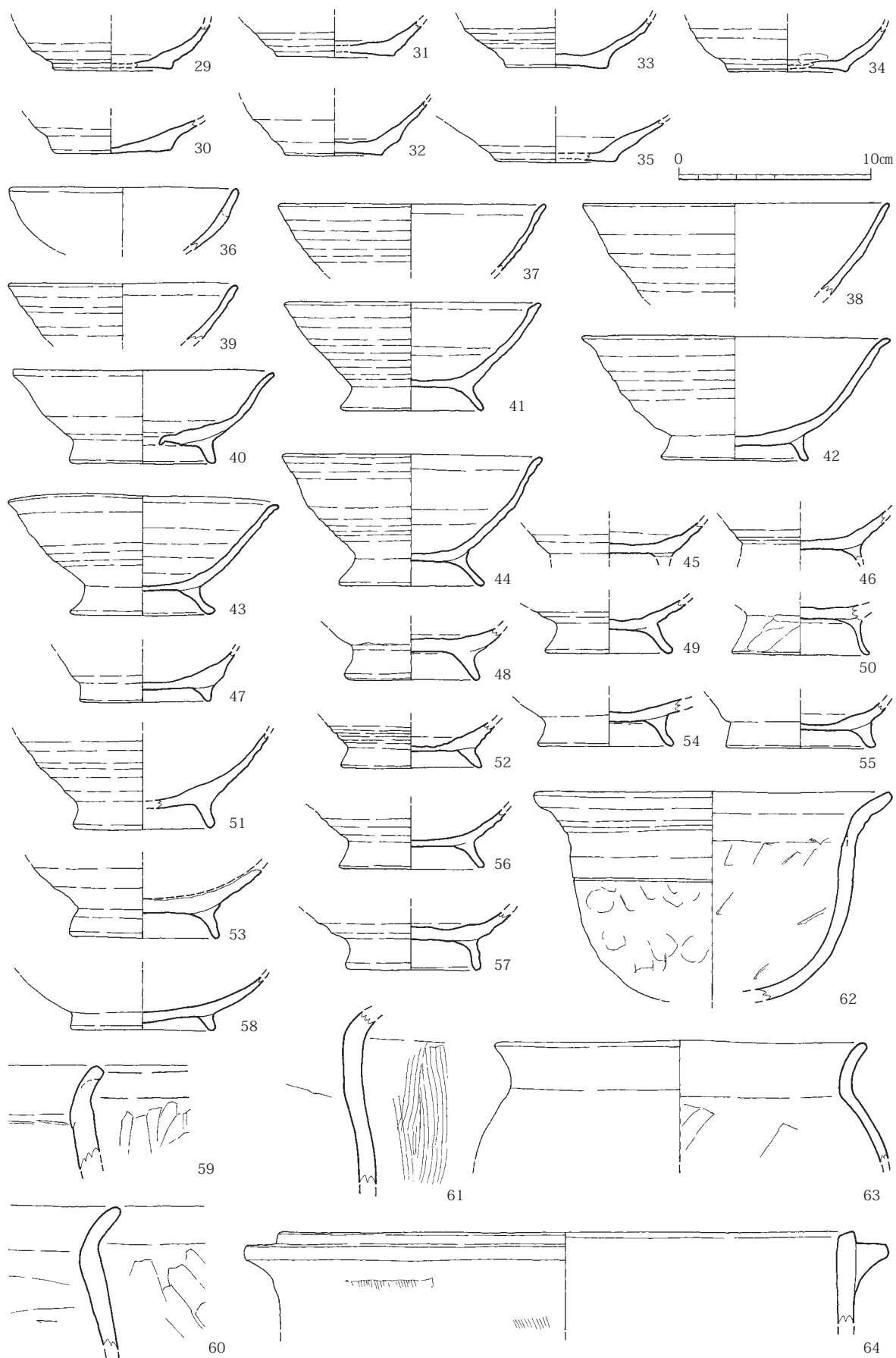
66～74は黒色土器碗で全て内面のみが黒色である。磨滅が目立つがわずかながらミガキの残るものが多い。69の高台は非常に低く、径も小さい。残存する見込部分は比較的平坦である。70の高台は接合部から剥落して欠失している。74は高台の裾の径がやや小さくあまり開かない。見込が広く、体部との境は比較的明瞭である。

75は移動式竈の庇の側方部分の可能性がある。わずかに残る内面部分にはケズリが見られ、他の器表部分より暗く変色し、煤の影響とみられる。76の器種は判然としないが、土師器の把手もしくは脚と考えられる。器表が非常に磨滅している。77は弥生土器甕の底部で混入品とみられる。厚底で中期前半とみられる。

78～86は須恵器である。78は杯身の底部付近で、狭い貼付の高台が残る。79は皿の小片で、体部から口縁部にかけて、屈曲してから直線的に立ち上がる。80は短頸壺で、外面に円形の融着痕が残っており、焼成時に蓋等の口が横向きに接した状態であったと想定される。81は壺の底部で、大きな高台が貼付され、その下端は外方へ張り出す。82は鉢の底部付近で、底面は回転ケズ



第 87 图 谷部土器集中出土地点出土土器实测图①(1/3)



第 88 图 谷部土器集中出土地点出土土器实测图② (1/3)

りにより、非常に平坦な平底となる一方、体部内面の起伏は激しい。83～86は甕である。83は口縁部から肩部にかけて残り、体部には外面に平行タタキ、内面に同心円文の当て具痕が見られる。84は肩部付近で、屈曲した上方にわずかに頸部も残る。外面には平行タタキ、内面にナデが施され、残存部の外面は全体的に灰被りしている。85は非常に大型の甕になるとみられ、外面にカキ目が廻り、内面には3本単位の放射状の当て具痕が見られる。86は大型の甕で器壁も厚い。外面には全体的に平行タタキが施される。内面は下位でナデ調整されるが、上半部に弧状の当て具痕が見られ、円形の当て具の一部が強く押圧されたためと考えられる。87は瓶もしくは壺の肩部付近とみられ、上端には頸部が剥落した後の接合部が残る。

88～95は緑釉陶器で、そのうち88～92は碗である。88の口縁部端部は外反して開き、2ヶ所に外面から上方へ押圧した輪花が見られ、全周で4ヶ所に復元される。非常に薄い釉は淡緑色でほとんどが剥落している。胎土は非常に精良で灰褐色のやや軟質で、淡黄褐色の斑文が目立つ。内面の1ヶ所に細長い粘土の残滓が付着する。89は口縁部の小片で、濃い黄緑色の釉よく遺存しているが剥落部分も目立つ。胎土は非常に軟質の淡黄白色である。口縁端部は直線的に延びる。90～92は底部付近のみ残存しており、いずれも高台は削り出しである。90の釉は非常に薄く透明度の高い淡黄緑色で、高台内を含め全体的に施される。胎土は非常に精良および軟質で、色調は淡灰褐色主体であるが器表には淡黄褐色の斑文が目立つ。高台内には回転ケズリの痕跡が見られる。91の釉は非常に薄く淡緑色で、高台内を含め全体的に施される。胎土は非常に精良および軟質で、色調は淡灰褐色主体である。92の釉は大半が剥落している。そのため施釉範囲は明瞭ではないが、高台とその内側には釉の痕跡を見出し難い。胎土は精良、軟質で、色調は淡灰褐色主体でだが、高台とその内側では淡黄茶褐色である。93～95の器種は皿である。93の釉は淡緑色で高台内にも施される。薄いものの全体的に良好に残存しており、畳付以外の剥落は少ない。高台は貼付されており、小さく断面三角形状である。胎土は軟質で断面は淡黒褐色、表面は灰白である。94は2片あり、いずれも口縁部付近のみが残存する。口縁端部は外反して開き、1片には外面から上方へ押圧した輪花が残る。釉は濃緑色で、薄く磨滅による剥落も見られる。胎土は須恵質に近い硬質で淡灰褐色である。95は完形に復元でき、口縁端部は外反して開き、高台は削り出しで成形される。釉は淡黄緑色で非常に薄いながらよく遺存しており、高台内には施されていない。胎土は概ね精良な軟質で、淡灰褐色であるが、器表には淡黄褐色の斑文が目立つ

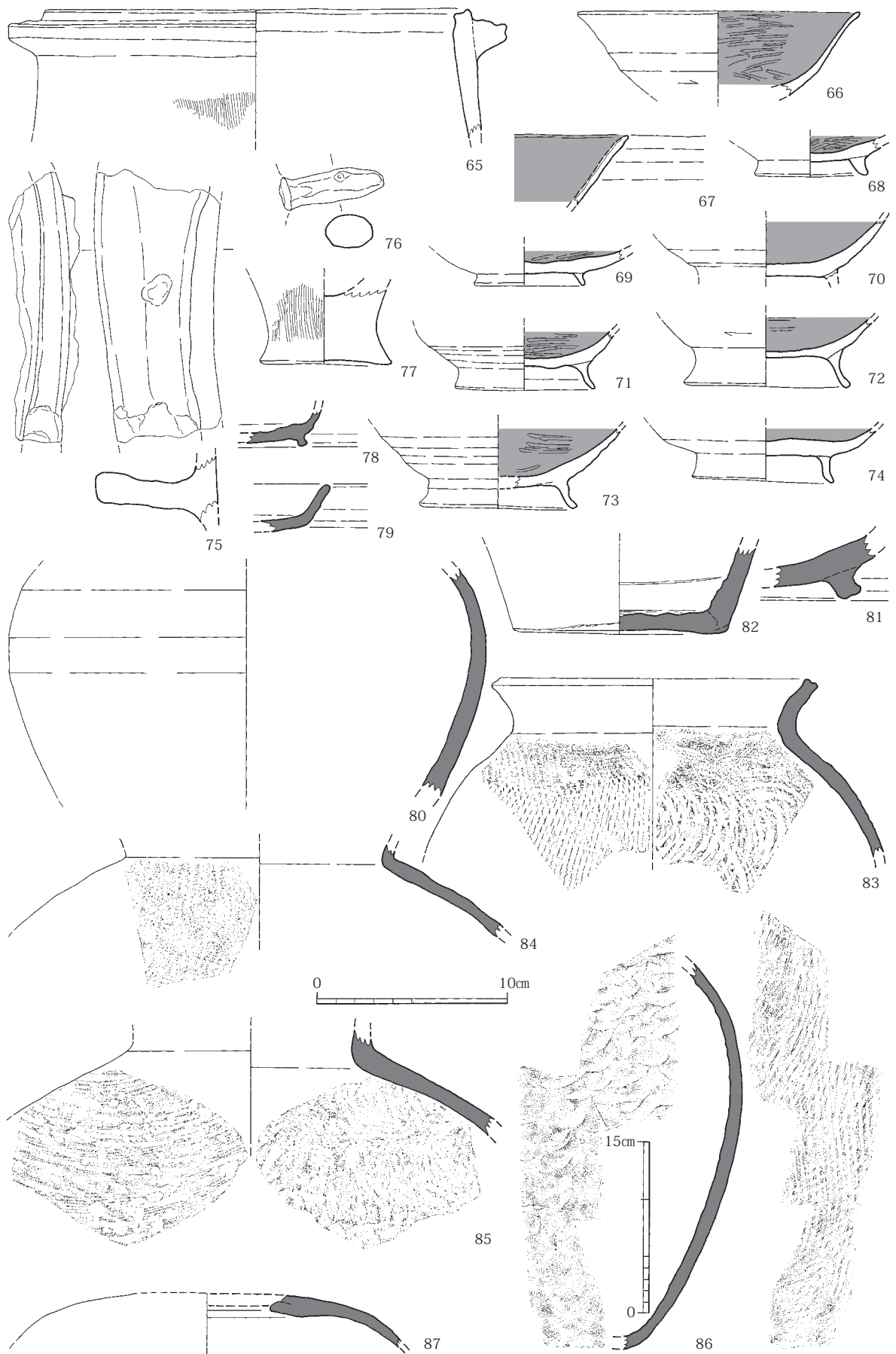
96・97は灰釉陶器碗である。緑色の釉は、口縁部付近でやや濃いものの全体的に非常に薄く、施釉範囲の境界は明瞭ではない。胎土は灰褐色の須恵質である。口縁端部はわずかに外反して開き、その度合は97の方がやや強い。97の外面下位には回転ケズリの痕跡が明瞭である。

98～100は青磁である。98は越州窯系青磁碗で、釉は非常に薄い。口縁端部の1ヶ所に残る輪花は外面から上方へ押圧して施しており、該当部の内外面には整形の痕跡が残る。99は口縁部の小片で、端部は外反して開き、碗と考えられる。100は外反しながら開く口縁部小片で、先端に向かって徐々に薄くなるシャープな端部から壺と考えられる。

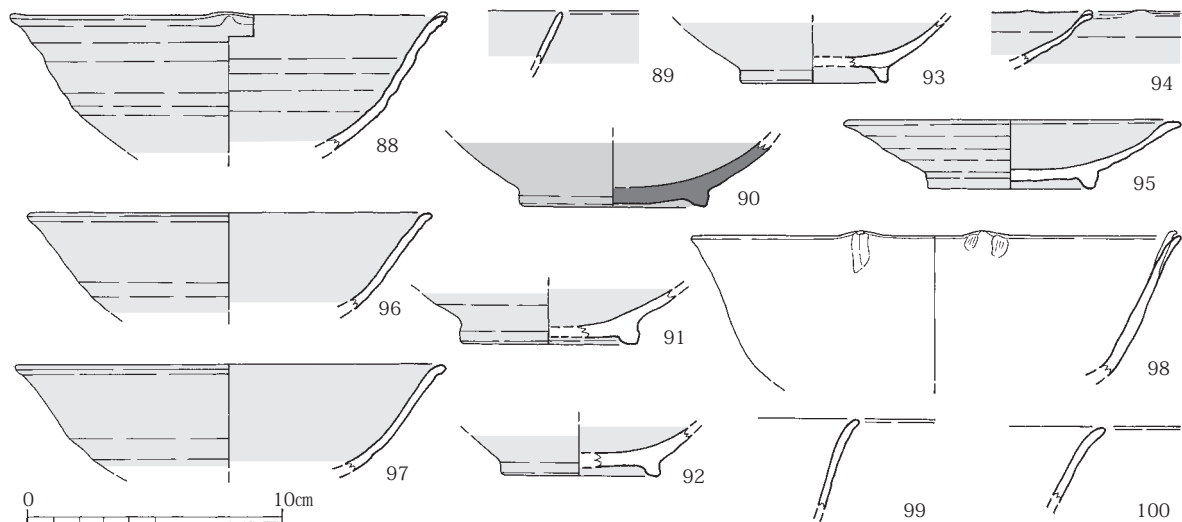
④谷包含層出土の土器（図版38、第91～93図1～100）

1～46は土師器である。

1・2は土師器の高台付皿で、ともに体部は非常に浅く、口縁端部まで直線的に延びる。1の高台は裾に向かってやや広がって開く。2の高台は接合部から全周剥落して遺存していない。高台内の器壁は厚く、中央部には回転ケズリの際に工具が当たって生じたとみられる窪みがある。



第 89 図 谷部土器集中出土地点出土土器実測図③ (86 は 1/5、他は 1/3)



第90図 谷部土器集中出土地点出土土器実測図④(1/3)

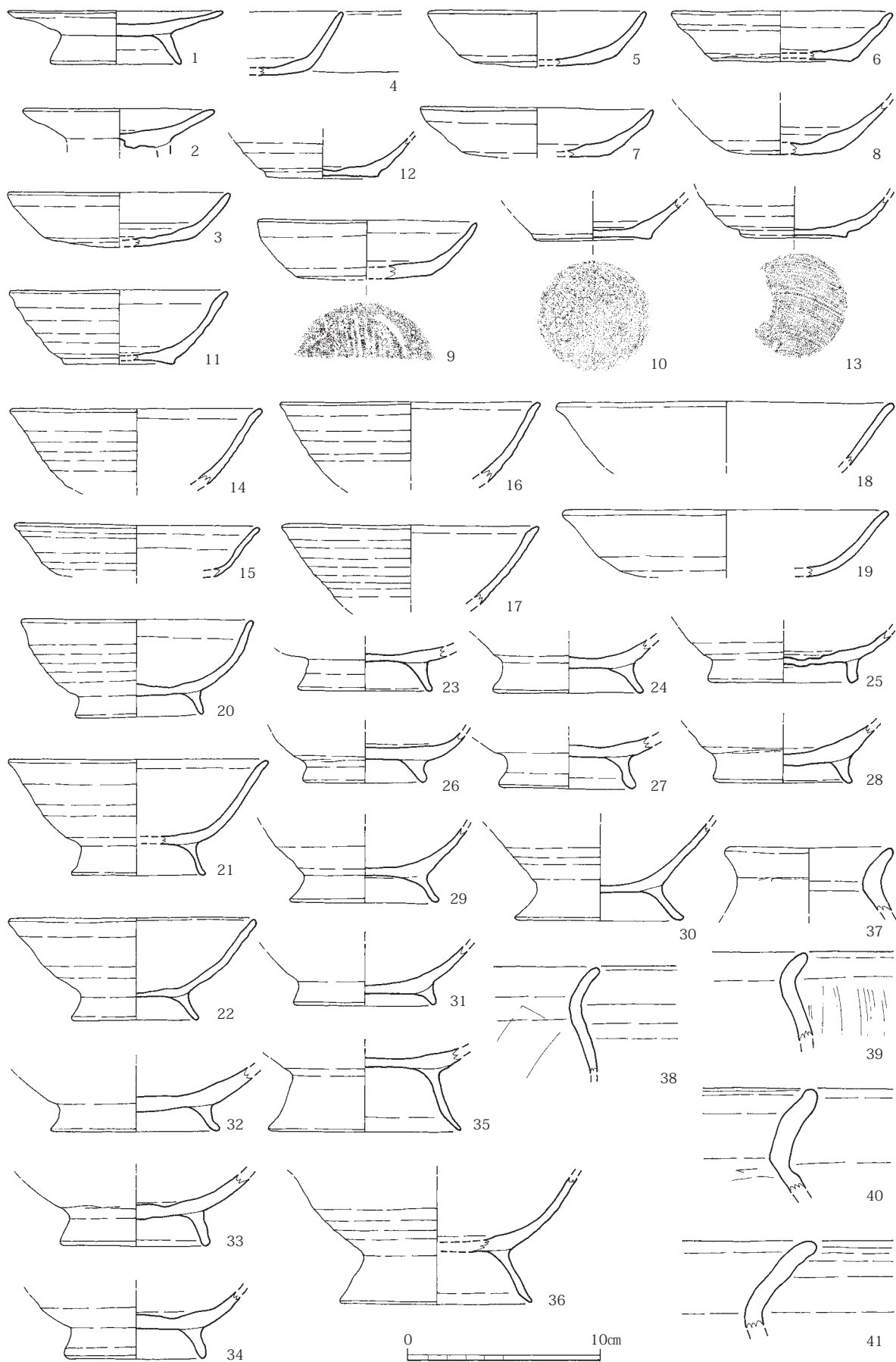
3～13は土師器杯である。その内3～9はロクロ調整による体部外面の起伏が目立たないもので、外底部には糸切りではなくヘラ切りもしくは回転ケズリが施される。6のように中央側へと高くなって窪む外底部もあるが、ほとんどが丸みを帯びた外縁で中央部へと低くなる器形である。更に9の外底部には板状圧痕が見られる。5は橙茶褐色の特徴的な色調で、2次的に被熱したとみられる。また、8の底部は特に厚手である。11～13はいずれも体部外面の起伏が目立ち、外面の体部と底部の境に段があって、わずかに突出気味の底部には糸切りの痕跡が残る。

14～19については底部が残存しておらず、土師器杯か椀かは明瞭ではない。14～17は器表の起伏が目立ち、口縁端部はわずかに外反気味である。18・19は他に比べ器表の起伏は少なく厚い。浅い器形とみられ丸底杯になる可能性がある。

20～36は高台を伴う土師器椀で、いずれも高台は貼付される。20～22は完形に復元でき、いずれもロクロの使用による外面の起伏が目立ち、口縁端部は外反気味にわずかに開く。23～36では口縁部が欠失しており、底部付近のみが残存するものも少なくない。25の高台の裾部外端はわずかに外側へつまみ出され、高台内にはヘラ切りの痕跡が残る。また、器表の磨滅は非常に少ない。26の高台は断面三角形の低く、見込は平坦である。27の高台は厚手である。31の高台は非常に低く断面三角形である。33の高台は厚手で、高台内には板状圧痕が残る。34の高台は厚手で、体部外面には回転ケズリの痕跡が見られる。35・36の高台は薄手で高く、裾部はわずかに外反して開く。また、36の色調は高台で淡黄灰褐色、体部で淡橙茶褐色と接合部を境に変わっており、異なる胎土を用いた可能性がある。

37は、口縁部がわずかに開く土師器短頸壺である。頸部には板状工具による調整痕の端部が残る。体部内面にはケズリが見られる。

38～45は土師器煮沸具で、38～45は甕、46は羽釜である。38の口縁部はやや短く、わずかに外反して開く。口縁部外面には強い横ナデが施され、胴部内面には丁寧な縦位の板状工具によるナデが施される。39の口縁部は非常に短く、屈曲してわずかに開く。胴部外面にハケ調整が施され、煤の影響か、内面に比べやや黒色化している。40の口縁部はやや長く、わずかに外反して開きつつ上方へ延びる。胴部内面にはケズリが施され、口縁部との境は明瞭な稜をなしている。41の口縁部は長く、やや大きく開く。42は包含層の最下層の灰褐色土（第86図）中で細片に分かれて谷底部に貼りついた状態で出土しており、谷部の埋没初期のものと考えられる。接合である程度



第91図 谷部包含層出土土器実測図①(1/3)

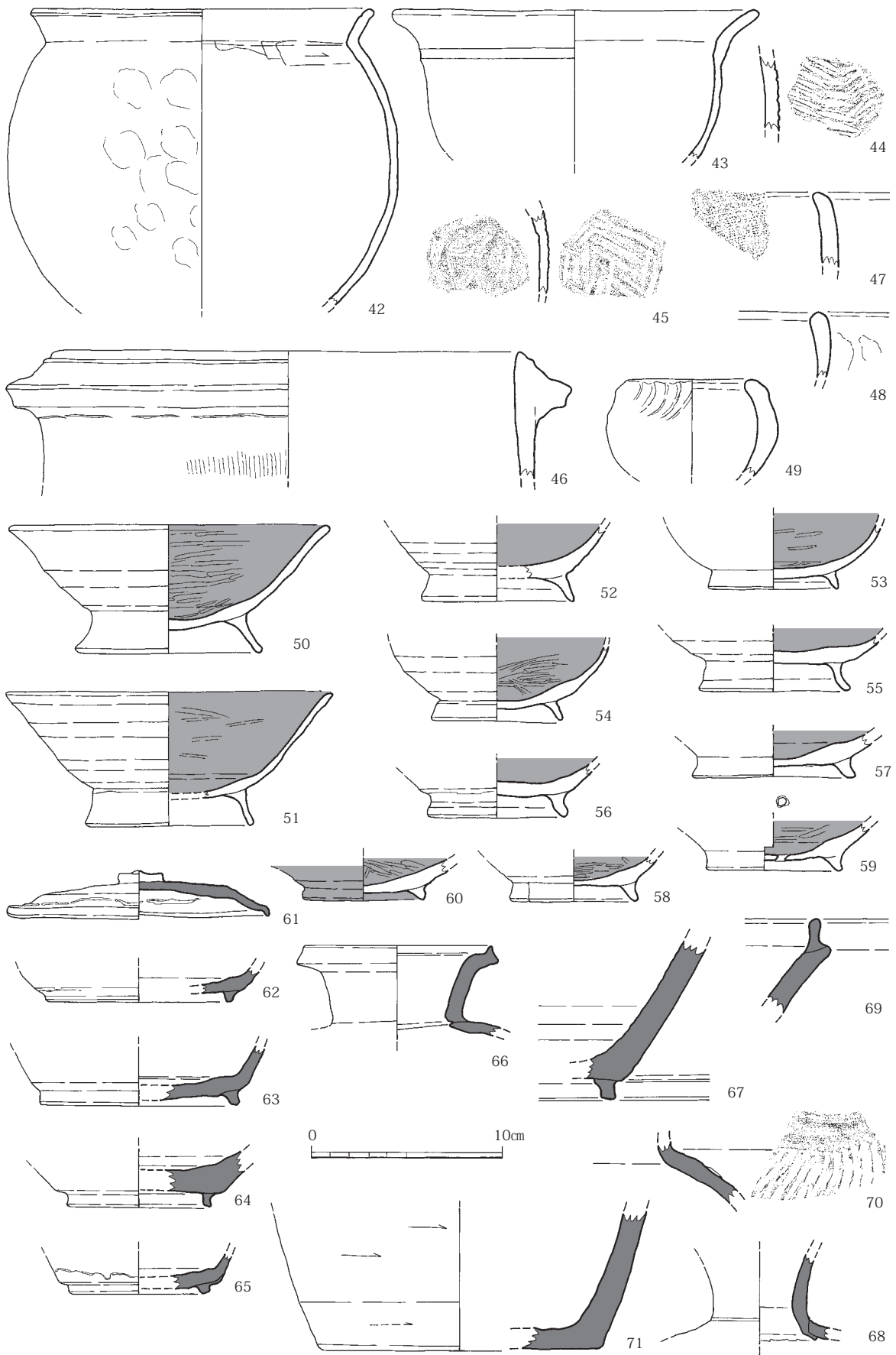
の大きさとなったいくつかの部位を復元して図化している。口縁部は非常に短く、わずかに開く。底部となる部位を把握できなかったが、胴部は球状になると想定され、胴径が口径を上回り最大径となる。内面にはケズリの痕跡が見られるが、その後全体的に丁寧にナデを施している。基本的には煤の付着が非常に目立つ中で、屈曲部の上下の残存部では一定の範囲で付着が見られない。ただ、上端の口縁端部外面にも煤が付着する。43の口縁部は外反しながらやや大きく開き、胴部はあまりくびれずに移行するとともに、あまり張らずに底部に至るとみられる。器高に比して径が大きく、鍋に近い器形である。44・45は胴部の小片で、ともに外面には1単位の小さい平行タタキが施される。45の内面には円形の当て具の一部の圧痕とみられる弧状の窪みが残る。46の羽釜は口径が大きく、外面の上端部付近には大きな鏝部が廻る。外面にはハケ調整が見られる。

47～49は土師質の土器の小片である。47はほぼ直上に延びてわずかに内へすぼまる口縁端部に至る器形である。口唇部は外傾する面をなす。砂粒の少ない淡白黄褐色の胎土で、内面には布圧痕が残り、製塩土器とみられる。48・49は口縁端部がわずかに内湾してすぼまる小形の無頸壺状の器形とみられる。口唇部は丸く面をなさない。48は精良で橙褐色の胎土が特徴的で、2次的に被熱した可能性がある。

50～60は黒色土器碗で、いずれも高台が貼付される。60のみ両黒で、他は全て内面のみが黒色である。体部外面にロクロ整形による起伏が目立つものが多い。50・51はともに完形に復元でき、体部は深く、やや高い高台である。口縁部へと大きく開き、端部はわずかに外反する器形である。内面にはミガキが施される。52～60には口縁部が欠失しており、底部付近のみ残存するものも多い。全体的に高台は低い。53の高台は低いだけでなく、径も小さい。54は低く径の小さい高台を伴い、その内部と残存する外面の一部も黒色だが全容は不明で、該当箇所にもミガキは施されていない。意図的な着色かは不明である。全面に意図的な黒色化した内面ではミガキの単位の幅は非常に細かい。55の高台の裾部が屈曲して開き、見込の広い器形である。56の高台は橙褐色で2次的に被熱しているとみられる。57の器壁は厚く、良好な遺存状態である内面にミガキは見られない。高台の内部もやや黒色化している。58の高台は特に低く径が小さい。高台形成時の輪状にした粘土紐両端の接合部に亀裂が生じている。59の高台は非常に低く、見込中央部に小さな穿孔が施される。60は両黒で、高台は非常に低く径も小さい。高台内に糸切り痕が見られる。

61～71は須恵器である。61はつまみのある須恵器杯蓋で、完形である。内外面ともに重ね焼きによる円形の融着痕が見られ、その外側には焼成時の付着物が多量に見られる。62～65は高台が貼付される杯身である。62の高台は非常に小さい。63の高台は底部の外縁部を廻る。64は高台や径が小さいため杯身と判断したが、器壁は非常に厚いため小型の壺という可能性もある。65の高台内には回転ケズリの痕跡が見られる。66は長胴の瓶子形壺の肩部から口縁部にかけての部位とみられる。口縁端部は上方へ突出する。頸部の接合箇所が内面では明瞭である。67の器壁は厚く、高台が貼付され、壺と考えられる。68は壺の肩部から頸部にかけての部位で、頸基部では強く屈曲して上方へ延びる。内面および断面から頸基部の接合状況がうかがえる。69は皿の口縁部付近の小片で、体部中位で強く屈曲して口縁部へと至る器形とみられる。内面および外面の屈曲部より上位では灰被りが見られる。70は甕の小片で胴部から口縁への屈曲部が上端に残る。外面には平行タタキがある。71は平底の鉢で、外面には回転ケズリが施される。

72～89は緑釉陶器で、72～85は碗、86～89は皿である。72～78は碗の口縁部付近の破片で、口縁端部はいずれもわずかに外反気味に開く。胎土はいずれも精良・軟質で灰白褐色である。72には釉が遺存しておらず、胎土にはわずかに淡黄褐色の斑文が見られる。73の器表にはわずか



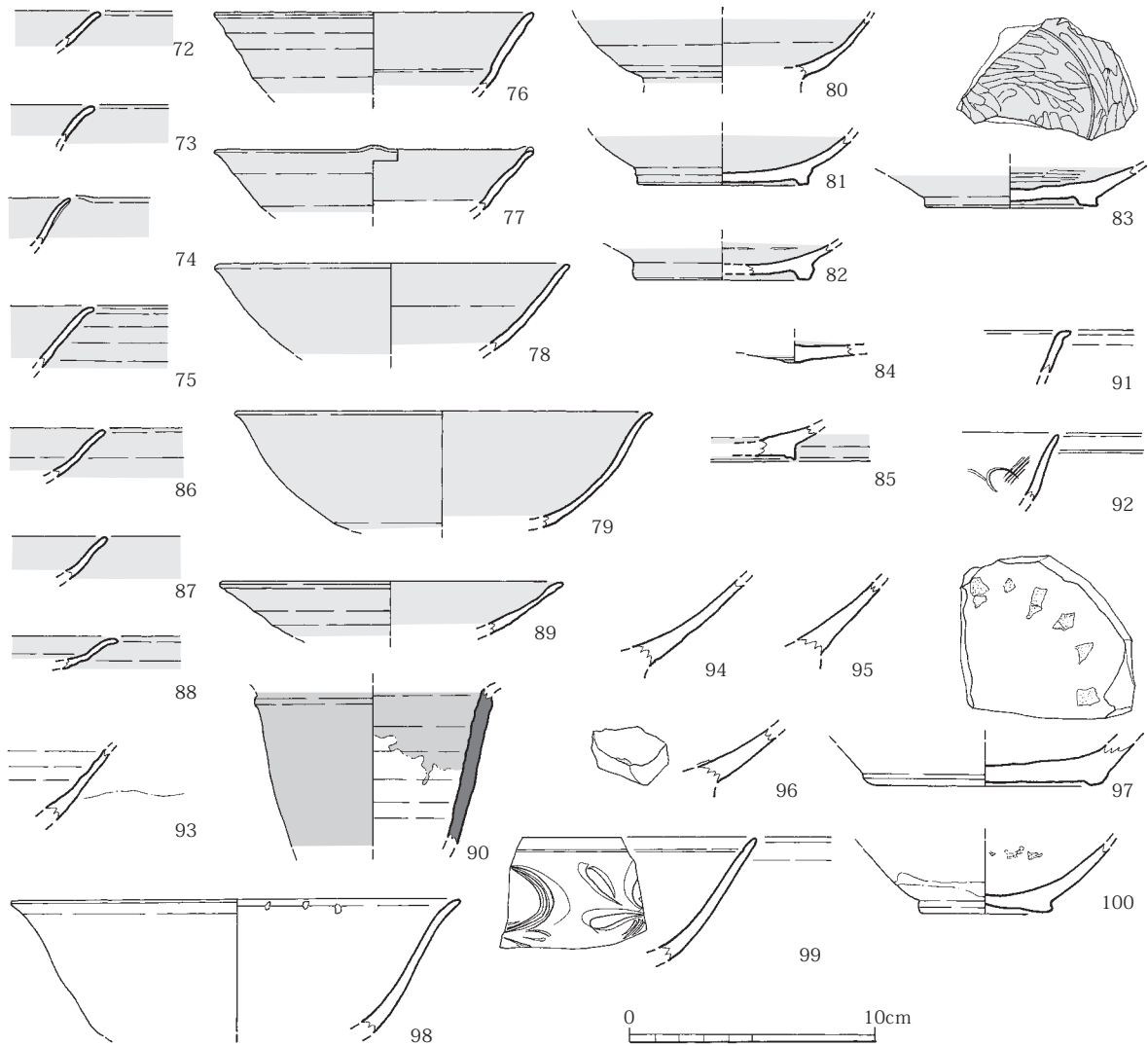
第92图 谷部包含層出土土器実測図②(1/3)

に薄い淡黄緑色の釉が遺存しており、胎土にはわずかに淡黄褐色の斑文が見られる。74の内面には釉が遺存していないが、外面には全体的に薄い淡緑色の釉が残る。口縁端部に外面から押圧した輪花が部分的に見られる。75の器表にはわずかに薄い淡黄緑色の釉が遺存する。76の釉は淡黄緑色で、非常に薄く剥離が目立つ。内面下位でわずかに屈曲する。77の釉は淡黄緑色で、非常に薄く剥離が目立つ。口縁端部に外面から押圧した輪花が見られる。78の釉は淡黄緑色で非常に薄く、大半が剥離している。胎土には淡黄褐色の斑文が見られる。79は複数の小片からなり、接合しないものも複合して図化している。胎土は前述の78までとは大きく異なり硬質の黒灰褐色である。釉も濃緑色の特徴的なもので、ほとんど剥離していない。口縁端部はやや強く外反して開き、残存部の外面下位で稜が廻る。80は椀の体部片で、下端に残る屈曲から高台に移行するとみられる。淡黄緑色の釉は両面ともによく遺存しており、淡黄灰褐色の胎土は軟質である。81・82は削り出しの高台を伴う椀底部である。81の釉は完全に剥離しており、胎土は精良で淡灰褐色と淡黄灰褐色の部分がある。82の釉は非常に薄い淡黄緑色で全面に施される。淡灰褐色の陶胎は精良である。高台内に回転ケズリの痕跡が残る。83の釉は濃緑色で、削り出しの高台内は無施釉で回転ケズリの痕跡が明瞭である。それ以外の部分には畳付を含め施釉されている。内面にはミガキが施される。胎土は須恵質で細粒の含有が目立っている。84は見込、高台内の小片で、外面には回転ケズリの痕跡がある。淡黄緑色の釉は非常に薄く、ほとんど剥離している。淡灰褐色の胎土は精良である。85は底部の小片で、高台が貼付される。淡黄緑色の薄い釉が全面に施される。86～89は皿の口縁部付近の小片で、端部はわずかに外反して開く。86の釉は淡黄緑色で、ほとんどが剥落している。淡灰褐色の胎土は精良である。87の胎土は精良で、釉は全く遺存していない。88は一度屈曲してから口縁部が外反して開く皿である。淡黄緑色の釉が比較的よく遺存している。精良な胎土は淡灰褐色である。89の釉は淡黄緑色で非常に薄く、ほとんどが剥落している。軟質の胎土は精良で、淡灰褐色であるが淡黄褐色の斑文が見られる。

90は灰釉陶器壺の頸部である。上端の遺存部から、外側へ屈曲して開く口縁部とみられる。陶胎は灰白色の須恵質で、淡緑色の釉は外面では全体に厚い。一方内面では上位で厚く、下位では非常に薄い。

91は白磁碗の口縁部で、端部は屈曲して口唇部は水平の面をなす。また、端部内面には強い稜がつき、外方に尖る。92は青白磁小碗の口縁部で、端部は外反気味に開き、口唇部は鋭い。内外面に圏線をはじめ文様がわずかに残る。

93～100は青磁碗である。93は体部下位で、釉はくすんだ淡緑茶褐色である。外面下半には施釉されておらず、暗茶褐色を呈するが、これは化粧掛けの可能性もある。陶胎は淡灰茶褐色で暗茶褐色粒を含む。内面下端にわずかに目跡が残っており、粗雑な越州窯系青磁という可能性がある。94・95は体部下位で、ともに下端に高台へ移行する段が残り、同一個体の可能性がある。薄くムラの大きい施釉で、発色は悪くくすんだ淡緑色で一見して灰被りのような質感である。胎土は淡青灰褐色、非常に硬質で、越州窯系青磁とみられる。96は体部下位から一部見込にかけての小片である。釉は濃く良好な発色で、胎土は非常に精良・堅緻である。内面下端に目跡の一部が残り、越州窯系青磁とみられる。97は底部付近で、ケズリ出しの非常に低い高台がわずかに残る。釉色については非常にムラがあり、濃緑色の部分がある一方で、見込や高台内は非常に薄く灰被りのような状態である。見込には多数の目跡が残る。なお、近似した高さで連続して欠損するため、意図的に破碎された可能性がある。また、96・97は釉色、目跡、胎土の類似性から同一個体の可能性がある。98は口縁部から体部下位まで遺存しており、口縁部は外反して開く。無文であるが、内面



第93図 谷部包含層出土土器実測図③(1/3)

口縁部付近に工具痕がある。釉色は内外面ともに、上下半で差異が生じており、下半では濃緑色であるのに対し、下半ではそれよりも明るい緑色となる。99は口縁部から体部下位まで遺存しており、口縁端部はわずかに外反気味である。釉の発色は良好で、全体的に均質である。胎土はやや黄色身をおびた灰褐色で堅緻である。内面に蓮花劃花文がある龍泉窯系青磁である。100はやや上げ底気味の円盤状の高台を有する底部である。高台内には丁寧なナデを施している。釉はくすんだ淡緑色で全体的にムラがあり、外面の体部下位から高台にかけて無施釉の中で淡灰茶褐色の化粧掛けが確認できる。胎土は軟質の黄灰褐色で暗茶褐色粒をわずかに含み、一見して陶器であるが、畳付および内面の目跡から非常に粗雑な越州窯系青磁と考える。

⑤ピット出土の土器 (第94図1～20)

1はピット120出土の土師器小皿である。外底部には糸切り痕がある。2ピット119出土の土師器小皿である。外底部には糸切り痕とともに、板状圧痕と縄状の圧痕も見られる。3はピット76出土の土師器杯(小鉢の可能性もある)の底部付近で、見込は平坦で体部との境は屈曲で明瞭である。外底部には糸切り痕が見られる。4はピット75出土の土師器杯で、底部は円盤状に突出し

ている。外底部にはヘラ切りの痕跡とともに、ほぼ直径に沿った沈線が見られる。5はピット108出土の土師器杯で、わずかに残存する見込には余した粘土小片が貼りついたとみられる部分がある。外底部には糸切り痕が見られる。6はピット119出土の土師器杯で、器表の磨滅が著しい。7はピット118出土の土師器杯で、体部は緩やかに立ち上がる。外底部には糸切り痕と板状圧痕が見られる。8はピット74(1号溝内)出土の土師器碗で底部付近のみが残存する。高台が貼付される。9はピット15出土の土師器で、小形の鉢とみられる。長胴で尖底の器形である。10はピット32出土の土師器鍋で、短い口縁部が屈曲して開き、体部の立ち上がりは直線的である。外面に縦ハケ、内面に強い横ハケが施される。外面のみ煤の影響かやや黒色化する。

11はピット74(1号溝内)出土の畿内系黒色土器碗で、接合しない数片からなり体部のみが残存する。両黒で、口縁部付近は下位よりもやや器壁が薄くなり、その境で外面に微かで不鮮明な稜が生じる。また、内面の端部近くには、微かであるが明瞭な段が廻る。

12はピット33出土の須恵器杯で、小さな高台が貼付される底部小片である。

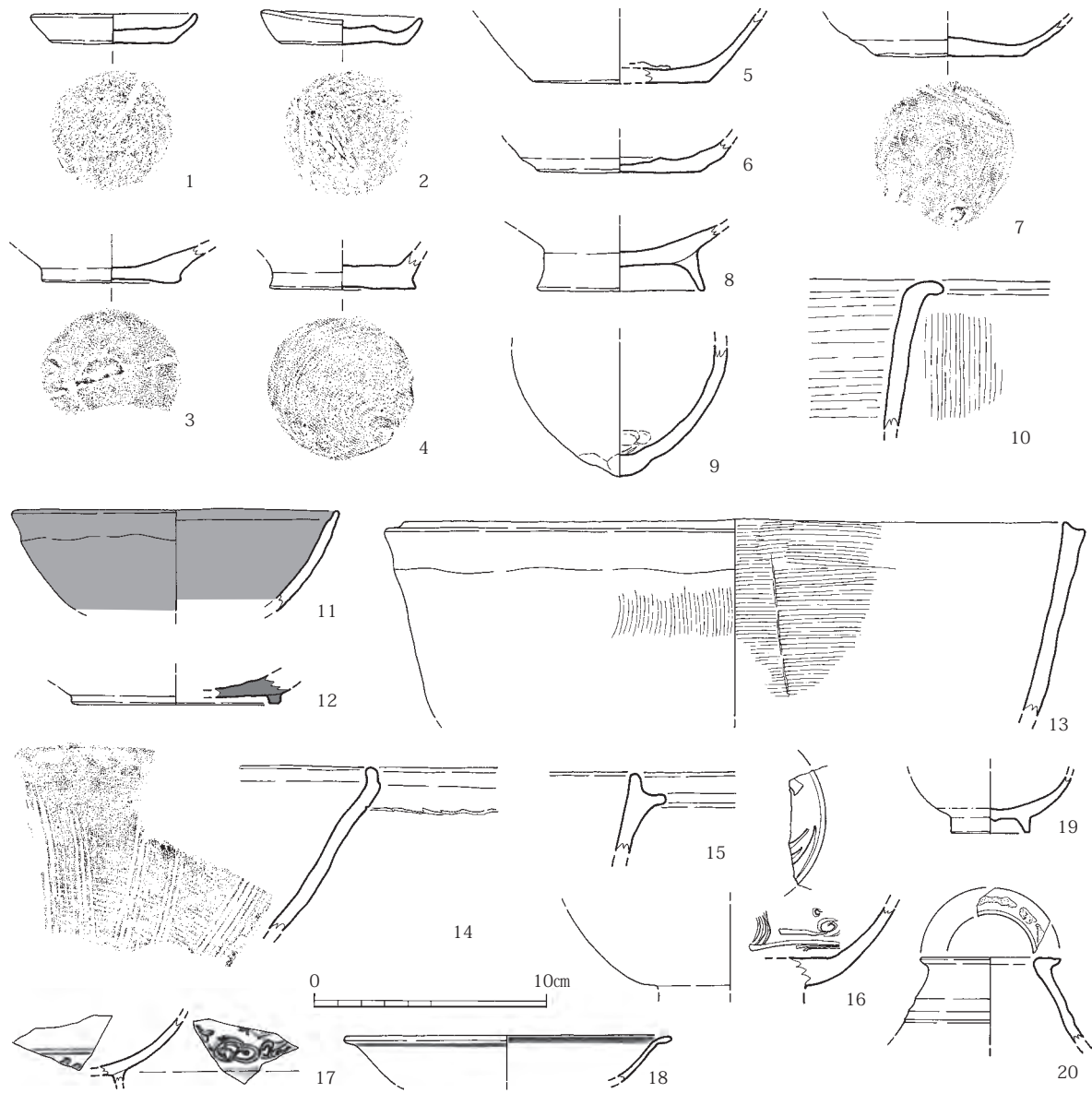
13はピット90出土の瓦質土器鍋で、内面の調整は横ハケで特に口縁部は強く施される。外面には部分的に縦ハケが残る。口縁部へと直線的に立ち上がり、幅のある口唇部は窪む。14はピット96出土の瓦質土器挿鉢で、体部は直線的に開きながら延び、短い口縁部は屈曲して直上へ立ち上がる。外面はナデ調整され、内面には挿目とともに横ハケも見られる。15はピット10出土の瓦質土器羽釜の口縁部片で、短い口縁部は直上へ延びて端部は面をなす。口縁のすぐ下位に鏝が廻り、鏝の下面以下は煤の影響で黒色化する。

16はピット50出土の青磁碗で、体部下位と見込がわずかに残存する。体部内面には縦および横方向に分割線があり、わずかに飛雲文も見られる。見込にも文様が部分的に残る。17はピット117出土の青花碗の小片である。高台がわずかに残存し、部分的ながら内外面ともに文様が見られる。18はピット103出土の青花皿の口縁部付近の小片である。口縁部は短く、屈曲して開く。内外面ともに屈曲部付近で圏線が廻る。19はピット59出土の磁器碗で、鉛釉が施されるが、削り出された高台付近は露胎する。20はピット109出土の鉄釉が施される磁器茶入である。体部は頸部へとすぼまり、短い口縁部は外方へ延び、目跡を伴う水平な面をなす。

なお、ピットの分布位置としては、ピット90・96・103・108・109・117・118・119・120(1・2・5・6・7・17・18・20出土)は北東部の11・12号土坑周辺で非常にピットの集中する地点にあたる。また、図示していないが、同一範囲のピット136からは東播系須恵器鉢の口縁部や土師器小皿の小片が出土している。ピット50・59(16・19出土)は丘陵上北側で、調査区内に残ったままとなった樹木の北側に当たる。ピット74・75・76(3・4・8・11出土)は1号溝内および周辺に当たる。ピット32・33(10・12出土)は丘陵上西側の2号溝周辺に当たる。ピット10・15(9・15出土)は丘陵上北西部にあたる。

⑥丘陵上の包含層および検出時出土の土器(第95図1～21)

1～6は、調査区内の傾斜の強い斜面部分よりも北側にあたる丘陵上面の南西隅部分(2号溝の南、南西側周辺)にまとまって堆積していた包含層からの出土資料である。1は土師器碗で、底部付近のみが残存する。貼付された高台は非常に低い。高台内にはヘラ切りの痕跡がある。2は土師器丸底杯とみられ、口縁部は外反気味にやや開く。橙茶褐色の胎土である。3は土師器甕で、口縁部は短く外反して開く。煮沸等の使用によるためか、内外面ともに黒茶褐色となっている。また、外面下端の表面の剥離は、被熱の影響と考えられる。4は土師器甕で、口縁部は短く外反して開く。外



第94図 ピット出土土器実測図(1/3)

面には平行タタキが残る。胎土には角閃石が目立つ。5は土師器甕の胴部片で、外面には密に平行タタキが見られ、内面の凹凸は当て具の痕跡と考えられる。胎土には角閃石が目立つ。6は須恵器杯身で、底部付近のみが残存する。高台は外底部の外縁よりもやや内側に貼付される。高台は裾に向かって広がり、下端は外方へわずかに突出する。

7～15は、谷部へ落ち込む傾斜の強い斜面部分の中で、最も西側にあたる調査区西壁付近で傾斜の緩やかでテラス状となる部分（8号土坑周辺）に堆積する包含層から出土した資料である。7は土師器の高台付皿で、高台が高く、器高の半分程度を占める。口縁部は直線的に延びて開く。8は土師器杯で、口縁は外反気味に延びて開き、丸みのある外底部である。器表の磨滅が激しいが、外底部にはヘラ切りの痕跡が残る。9～12は高台を貼付する土師器碗である。9～11は底部付近のみ遺存しており、10・11は見込が広く平坦である。また、11の高台は薄く低い。12の口縁部はわずかに外反気味に開き、高台は非常に低く小さい。13は黒色土器碗で、高台が貼付され、口縁端部は外反して開く。基本的に内黒であるが、外面もわずかに残る口縁部から2cm程度の幅で黒

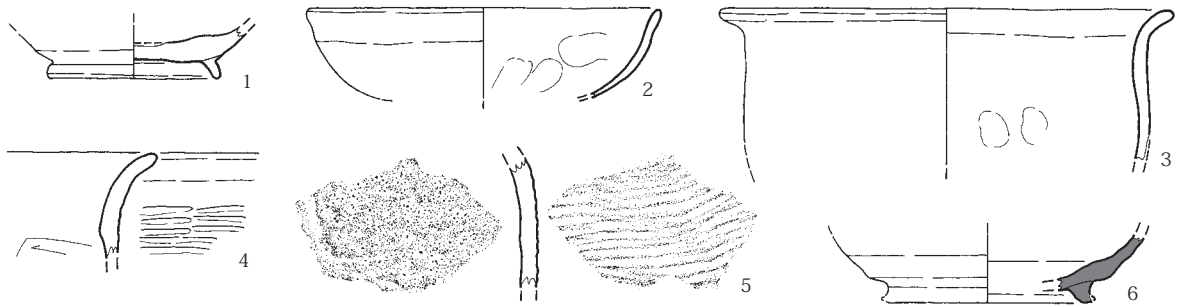
色化が見られる。内面は磨滅が激しいがミガキの痕跡が見られる。外面の体部下位では、最終的に回転ナデを施しているが、稜の強さから回転ケズリを施しているとみられる。14は緑釉陶器で碗もしくは皿である。底部の断面には接合部と対応するとみられる段差や小さな空隙があるが、高台自体はケズリ出しによって成形された低いものである。釉は淡黄緑色で非常に薄く、剥落が目立つ。胎土は非常に精良で、淡灰褐色主体であるが、高台部は淡黄褐色である。15は青磁の底部付近で、ほぼ平底に近いが、ごくわずかに上げ底状で露胎しており、ケズリが施される。釉はくすんだ淡緑色で非常にムラがある。内面には横に長い目跡が複数残り、越州窯青磁大碗とみられる。

16～21は調査区内丘陵上の検出時出土の資料である。16は土師器甕の胴部片で平行タタキが密に施され、内面の窪みは当て具痕とみられる。17は瓦質土器碗で、断面逆台形の低い高台が貼付される。内面には小剥離が目立ち、体部外面には横位のミガキが施される。18は碗の底部付近で、胎土は非常に硬質な須恵質である。緑色釉が内外面に施されるが、見込には重ね焼きで融着した別個体を引き剥がしたような輪状の痕跡があり、その内部は無施釉となっている。外面では高台の接合部よりやや上位で釉が認められる。灰釉陶器とも考えられるが、高台径が非常に小さく類例に乏しい。19は同安窯系青磁碗で、断面逆台形の高台がケズリ出され、高台のほとんどと一部の体部下位では施釉されない。内面見込と体部の境に段がある。内面にはヘラによる沈線や櫛によるジグザグの点描文、外面には縦位の櫛目文を有する。20は焼き締めによる無釉陶器の播鉢の口縁部とみられる。端部は外方と上方へ二又に分かれて延びるような形状で、広い上面を伴っている。体部には、破断面にしては、整った平滑な面と蛇行しない自然なラインを生じている部分があり、もしこれが透かし孔等となるならば他の器種としてみるべきであろう。21は磁器碗の口縁部で、絵付の施文の後に化粧掛けが行われる。

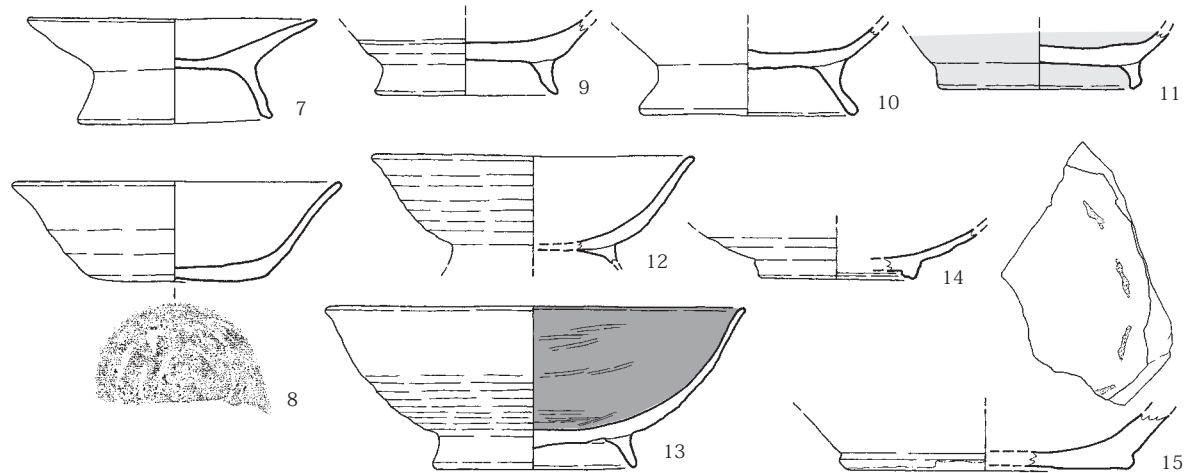
⑦その他の出土遺物（39・40、第95図1～12）

1～3は土製品である。1は丘陵上南西部の2号溝周辺の包含層から出土した管状の土錘で淡茶褐色を呈す。断面は円形で、長軸に沿って中央部の径が最も大きく、両端に向かって徐々に小さくなるラグビーボール状の外形をなす。長軸3.5cm、最大径2.0cm、孔の径は0.4cm程度、重さ11.8gである。2は谷包含層から出土した管状の土錘で灰茶褐色を呈す。断面は円形で、全体に幅・径の差は小さい棒状の外形である。2次的な被熱のためか、鬆が集中して見られる部分がある。長軸4.0cm、最大径1.7cm、孔の径は0.3～0.4cm程度、重さ7.7gである。3は谷部土器集中地点出土で、球形の土錘で橙茶褐色を呈す。径は2.4cm前後で、径0.4～0.5cm程度の孔が通る。表面には穿孔と同一軸に沿った2条の浅い樋が通る。重さ12.9gである。

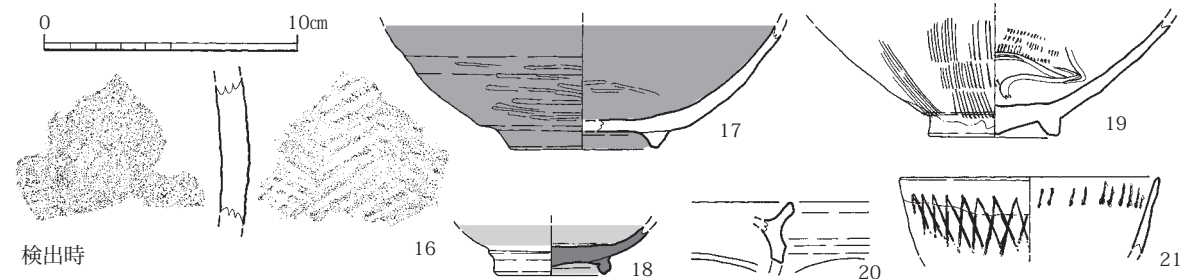
4～7は石器・石製品である。4はサヌカイト製の搔器である。出土地点は9号土坑の北側にあたり、谷部の平坦面に至る直前の斜面上である。トレンチ状の掘削部分のすぐ西側において、降雨後に調査面で採集された。片面側で両端部に分かれて原礫面が見られ、またわずかに新たな欠損部が生じている。刃部は片面側から連続した剥離によって形成される。長さ7.3cm、幅7.5cm、厚さ0.9cmで重さ66.2gである。5は丘陵上南西部の2号溝周辺の包含層から出土した砥石で砂岩製である。大きく欠損しており、上下面以外の側縁も全体的に平滑となっている。長さ8.2cm、幅4.6cm、厚さ2.1cmで重さ97.0gである。6は谷部土器集中地点出土の軽石製品である。表面に明瞭な加工痕は見られないものの立方体に近い6面体であるため人工的に成形されたものと考えられる。一辺4.2～4.8cm程度で33.9gである。7は谷部東側の包含層出土の軽石製品で、平坦面が1面ある。その他は曲面からなり明瞭な加工痕も確認できないため、どの程度成形されているかは不明である。長



丘陵上面南西隅



斜面西端テラス状部分

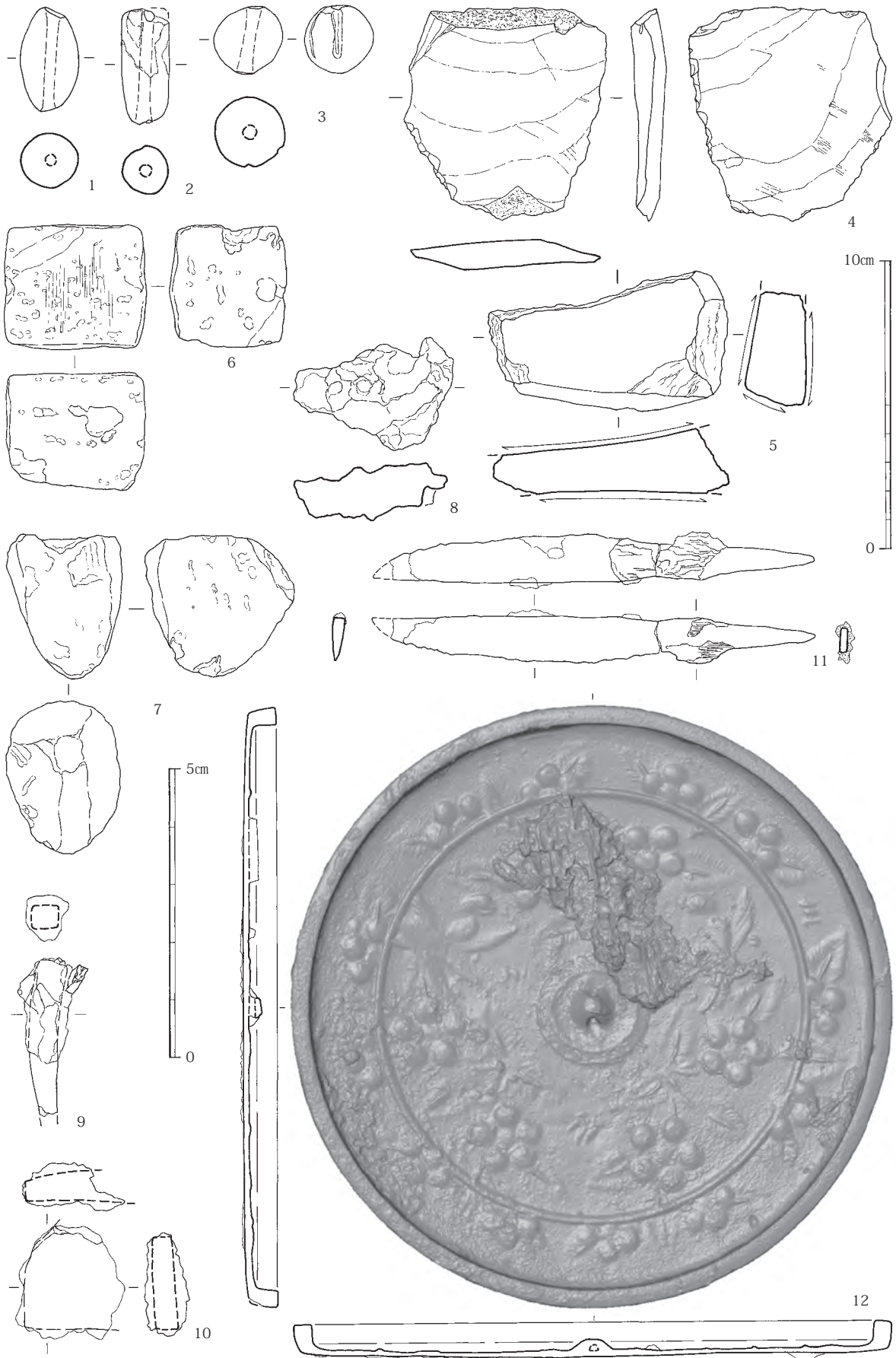


検出時

第95図 丘陵上の包含層および検出時等出土土器実測図(1/3)

さ 5.3cm、幅 3.9cm、高さ 4.9cm で重さ 18.7 g である。

8～12は金属製品である。8は谷部土器集中地点出土の鉄滓である。メタルチェッカーには反応せず、磁着度0である。気泡で膨らんだ部分が欠損したための空隙がある。長さ5.5cm、幅3.6cm、厚さ1.9cmである。9は1号溝出土の鉄釘である。断面は方形で、上端部は残存しているものの先端部側は欠失し、またわずかに湾曲している。上端付近の銹化部分に土器小片が付着している。長さ5.5cm、幅・厚さは最大で0.5cm程度である。10は谷部土器集中地点出土の鉄板状製品である。側縁の残存状況から角部分にあたとみられ、外形では側縁の直線的ではない部分もある。製品組織の外縁部分が残っていても、その内部が劣化して遺失している部分が目立ち、その特徴から鑄造製品とみられる。長さ3.9cm、幅3.8cm、厚さ1.5cmであるが、実際の製品部分は0.7～1.0cm程度である。11は5号土坑出土の鉄刀子で、墓への副葬品である。先端部分が欠失しており、基部と刃部との境付近で折損している。基部部分の断面は方形で、わずかに木質が残存する。長さ14.7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.45cmである。12は5号土坑出土の青銅鏡で、墓への副葬品である。周縁の幅0.3cmの直立中縁鏡で面径10.4cmを測る。鏡胎は非常に薄く、厚さは文様のない部分で



第96図 出土土製品、石製品および金属製品実測図(12は1/1、他は1/2)

0.1cm 未満、鈕部分で 0.3cm、周縁で 0.5～0.55cm である。径 0.1cm 程度とみられる鈕孔には土が詰まった状態である。鋳あがりの非常に良好な優品であるが、鏡面の広い範囲、鏡背の一部で緑錆が生じている。鏡背表面に部分的に付着する木質は、副葬時に納めていた木箱等の痕跡の可能性はある。遺構からの取り上げ後、接していた土柱にも木質が付着しており、同様の痕跡と考えられる。捩菊花座鈕は明瞭で、文様部の盛り上がりは非常に薄い。界圏は明瞭であるが、それを挟んで内区と外区で連続する文様も見られる。山吹文を 3 単位巡らす山吹双鳥鏡で、その間の 2ヶ所に置かれる双鳥は明瞭で、もう 1ヶ所の文様は不明瞭であるが蝶の可能性はある。その諸特徴から 12 世紀後半の所産とみることができる。

(4) 小結

馬場仁王免遺跡の調査の結果、出土遺物を取めたパンケース数こそ 12 箱分と限られているが、多種多様な遺構・遺物が確認され、またそれらはある程度の時期幅があった。ここでは、基本的に出土土器に基いて時期を捉えながら（末尾参考文献、特に（佐藤 1991、63 頁、第 10 図）を参照）遺跡内の変遷を整理する。

まず遺跡内でもっとも時期の古い遺物は、第 96 図 4 のサヌカイト製の搔器で、旧石器時代に当たる可能性がある。また、遺構としては、丘陵上に複数の落とし穴とみられる 2～4 号土坑が検出された。残念ながら遺物は全く伴っていないが、縄文時代のものと考えられる。これらの土坑は、各個の軸等の統一性はないが、概ね近似した位置に分布している。単に内部だけでなく、床面に掘削されたピット内からも礫が検出されたものがあり、特異な例である。弥生時代の確実な遺物は、第 89 図 77 の弥生土器甕の底部のみである。削平前には近隣に該当時期の遺構があり、古代の遺物が豊富な包含層中に 2 次的に埋没した可能性はあるが、著しく限られたものであり判断は難しい。

古代になると急激に遺物量が増加し、主に谷部の土器集中出土地点・包含層の出土資料が顕著なものである。完形の杯蓋（第 92 図 61）や高台を有する杯身・壺の底部をはじめとした須恵器で明瞭に確認できる 8 世紀代、奈良時代が急増期に当たる。出土土師器の傾向をまとめると、小皿は非常に少なくその中で高台付皿が多い。杯の外底部については、糸切りが回転ケズリ・ヘラ切りに比べ多数を占める。また、杯・碗の体部にはほとんどミガキが施されていない。黒色土器碗は、谷部ではほぼ内面のみ黒色に限られ、緑釉陶器や越州窯系青磁の出土量は、希少遺物としては目を見張るものである。これらの様相の整合性から、谷部の遺物は 8～9 世紀に比べ 10 世紀のものが多く占めていると想定され、11 世紀には減少するとみられる。第 93 図 99 の龍泉窯系青磁をはじめとして 12 世紀代以降の出土遺物もあるが、極めて限定的である。なお、谷部土器集中地点では、多量の完形土器や礫が検出され、軽石製品、動物遺体、鉄板片や鉄滓といった出土品に加え、土坑・杭の配置など、祭祀的な場としての可能性を指摘した。特にここでの糸切り底部の土師器杯が多数であり、祭祀行為があったならば、10 世紀代が主体であったとみることができる。

谷部で急増する 8～11 世紀頃の遺物は、丘陵上でも堆積した包含層からほぼ同種のもので出土しているが、削平されていることもあるためか僅少である。ほぼ確実にその時期にあたる遺構も 1・2 号溝に限られている。ただ、丘陵上では谷部と異なり黒色土器は内外面ともに黒色のものが出土する。また、和鏡を伴う土壙墓（5 号土坑）やピット等からの同安窯系（第 95 図 19）・龍泉窯系（第 85 図 5、第 94 図 16）の出土青磁で 12 世紀後半、1 号土坑の蓮弁文様の青磁碗小片（第 85 図 1）から 13 世紀代への連続性を辿ることができる。なお、出土遺物のない 6・13 号土坑も 5 号土坑と同様の埋土、長方形プランから土壙墓とみられ、墓地として利用されたことをうかがわせる。

以降では、丘陵上の北東部に遺構・遺物が集中、急増し、11・12号土坑とその周辺のピット群からは、土師質土器杯・小皿、瓦質土器、青花が出土し、15～16世紀にあたと考えられる。この時期の遺構が丘陵上西部に展開していないのは、削平のためともとれる。しかし、丘陵上東部にしても削平を受け、それでもある程度の深さ故に遺構が残存したのであり、また埋土はそれ以前ものとは色調やしまり等の質が明らかに異なる。したがって、この時期の遺構が、調査区西側に集中する理由があった可能性が高いとみる。

以上、旧石器・縄文時代に始まり、8～12世紀の痕跡が色濃く、16世紀に至るまでの調査地点の変遷を整理したが、その中で豊富な緑釉陶器、越州窯系青磁と和鏡の出土は特筆すべき点である。緑釉陶器の釉・胎土は様々で、高台は貼付・ケズリ出しともにあり、防長産や京都産など多様な産地から流通したと考えられる。灰釉陶器もわずかながら見られる。遺跡の立地する丘陵は、到津駅から京都峠を経て豊前国府へとつながる官道の復元ルートを眼前にする（日野 1974、1977、1989、2001）。その復元に依拠すると、交通の要衝にあたり、出土遺物から見た生活の顕在化する時期と官道の整備された時期は符合する。また、最盛期は官道自体が廃れた後とみられるが、依然重要地点として、ある程度の長期にわたり勢力を保持して富を集積する原動力の一つであったと考えられる。現在近隣の内尾山相圓寺の薬師堂に安置される丈六の薬師如来坐像の製作年代は11世紀末から12世紀前半で、今回の調査結果で表れた遺跡の盛行期とも符合して両者の関連性が注目される。

《参考文献》

- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
木本雅康 2012 「古代駅路と国府の成立」『古代文化』第63巻第4号 古代学協会
坂本嘉宏 2006 「中世大友城下町跡の発掘調査」『日本考古学』第21号 日本考古学協会
佐藤浩司 1987 「奈良時代の須恵器と土師器—旧豊前国を中心として—」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下 同朋舎
佐藤浩司 1989 「北部九州における黒色土器の生産と流通 —豊前北部地域とその周辺—」『横山浩一先生退官記念論文集 I 生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会
佐藤浩司 1991 「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 日本中世土器研究会
高橋照彦 1993 「防長産緑釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館
太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
谷口俊治 1987 「豊前国企救郡における中世土器成立の契機について」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下 同朋舎
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
飛野博文 2004 「京築地域の古代官道」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会
日野尚志 1974 「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」『研究論文集』第22集 佐賀大学教育学部
日野尚志 1977 「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」『研究論文集』第25集（I） 佐賀大学教育学部
日野尚志 1989 「豊前国の郡家について」『研究論文集』第37集（I） 佐賀大学教育学部
日野尚志 2001 「豊前国企救郡の駅路について」『研究論文集』第5集 佐賀大学文化教育学部
前川 要 1989 「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41巻第5号 古代学協会

第8表 馬場仁王免遺跡出土土器類一覧表2

図	番号	遺構名	遺物種類	器形	口径	器高	底径	図版	底部調整	遺物番号	図	番号	遺構名	遺物種類	器形	口径	器高	底径	図版	底部調整	遺物番号
91	12	谷包含層1	土師器	杯			(5.8)		糸切り	4	93	77	谷包含層	緑釉陶器	椀	(13.0)			巻頭11		264
91	13	谷包含層1	土師器	杯			5.6		糸切り	5	93	78	谷包含層	緑釉陶器	椀	(14.4)			巻頭11		254
91	14	谷包含層4	土師器	杯・椀	(12.2)					62	93	79	谷包含層	緑釉陶器	椀	(17.0)			巻頭11		239
91	15	谷包含層1	土師器	杯・椀	(12.8)					32	93	80	谷包含層	緑釉陶器	椀				巻頭11		253
91	16	谷包含層3	土師器	杯・椀	(13.6)					41	93	81	谷包含層1	緑釉陶器	椀			(6.4)	巻頭11		250
91	17	谷包含層1	土師器	杯・椀	(13.4)					24	93	82	谷包含層	緑釉陶器	椀			(7.2)	巻頭11		3
91	18	谷包含層1	土師器	丸底杯・椀	(17.6)					23	93	83	谷包含層4	緑釉陶器	椀			(7.0)	巻頭11		251
91	19	谷包含層5	土師器	丸底杯・椀	(17.0)					67	93	84	谷包含層4	緑釉陶器	椀				巻頭11		59
91	20	谷包含層1	土師器	椀	(12.1)	5.1	6.7	38		26	93	85	谷包含層	緑釉陶器	椀						256
91	21	谷包含層1	土師器	椀	(13.6)	6	(7.0)			11	93	86	谷包含層	緑釉陶器	皿						259
91	22	谷包含層1	土師器	椀	13	5.3	6.6	38		36	93	87	谷包含層	緑釉陶器	皿						261
91	23	谷包含層5	土師器	椀			7			63	93	88	谷包含層1	緑釉陶器	皿						29
91	24	谷包含層3	土師器	椀			7.8			42	93	89	谷包含層	緑釉陶器	皿	(14.0)			巻頭11		265
91	25	谷包含層1	土師器	椀			7.8		へら切り	17	93	90	谷包含層1	灰釉陶器	壺						34
91	26	谷包含層3	土師器	椀			6.3			46	93	91	谷包含層	白磁	碗						220
91	27	谷包含層3	土師器	椀			7.1			44	93	92	谷包含層	青白磁	小碗				巻頭12		221
91	28	谷包含層4	土師器	椀			7.2		へら切り	54	93	93	谷包含層	青磁	碗				巻頭12		269
91	29	谷包含層	土師器	椀			7.8			8	93	94	谷包含層	青磁	碗				巻頭12		266
91	30	谷包含層4	土師器	椀			(8.8)			56	93	95	谷包含層	青磁	碗				巻頭12		268
91	31	谷包含層1	土師器	椀			7.4			20	93	96	谷包含層	青磁	碗				巻頭12		267
91	32	谷包含層3	土師器	椀			(8.8)		板状圧痕	43	93	97	谷包含層3	青磁	碗				巻頭12		255
91	33	谷包含層3	土師器	椀			7.8		へら切り	45	93	98	谷包含層1	青磁	碗			(9.0)	巻頭12		33
91	34	谷包含層4	土師器	椀			7.4			52	93	99	谷包含層1	青磁	碗				巻頭12		31
91	35	谷包含層1	土師器	椀			(10.0)			21	93	100	谷包含層1	青磁	碗			5.5	巻頭12		30
91	36	谷包含層4	土師器	椀			10	38		53	94	1	丘陵上部南西隅包含層	土師器	椀			6.6	へら切り		160
91	37	谷包含層1	土師器	壺	(8.8)			38		6	94	2	丘陵上部南西隅包含層	土師器	丸底杯	(14.0)					158
91	38	谷包含層5	土師器	甕						66	94	3	丘陵上部南西隅包含層	土師器	甕	(18.0)					156
91	39	谷包含層4	土師器	甕						61	94	4	丘陵上部南西隅包含層	土師器	甕						157
91	40	谷包含層4	土師器	甕						60	94	5	丘陵上部南西隅包含層	土師器	甕						230
91	41	谷包含層	土師器	甕						7	94	6	丘陵上部南西隅包含層	須恵器	杯身			(7.8)			159
92	42	谷包含層3最下層	土師器	甕	(17.6)					212	94	7	斜面西端7A部包含層	土師器	高台付皿	(11.8)	4.1	7.6			173
92	43	谷包含層1	土師器	甕・鍋	19.2					37	94	8	斜面西端7A部包含層	土師器	杯	(13.0)	4	7	へら切り		163
92	44	谷包含層5	土師器	甕						216	94	9	斜面西端7A部包含層	土師器	椀			7.2			165
92	45	谷包含層	土師器	甕						223	94	10	斜面西端7A部包含層	土師器	椀			8.2			166
92	46	谷包含層1	土師器	羽釜	(24.8)					231	94	11	斜面西端7A部包含層	土師器	椀			7.4			167
92	47	谷包含層	製塩土器							219	94	12	斜面西端7A部包含層	土師器	椀	(12.8)					168
92	48	谷包含層5	土師質	焼塩壺?						225	94	13	斜面西端7A部包含層	黒色土器	椀	(16.6)	6.3	7.8			164
92	49	谷包含層	土師質	焼塩壺?	(6.0)					222	94	14	斜面西端7A部包含層	緑釉陶器	椀・皿			(6.2)	巻頭8		270
92	50	谷包含層1	黒色土器	椀	(16.8)	7.6	(9.8)			35	94	15	斜面西端7A部包含層	青磁	大碗			(11.2)	巻頭8		271
92	51	谷包含層1	黒色土器	椀	(17.0)	7	(8.8)			9	94	16	丘陵上検出時	土師器	甕						230
92	52	谷包含層1	黒色土器	椀			(8.0)			13	94	17	丘陵上検出時	瓦質土器	椀			(5.6)			154
92	53	谷包含層5	黒色土器	椀			(6.8)			65	94	18	丘陵上検出時	灰釉陶器	椀			4.2	巻頭8		217
92	54	谷包含層1	黒色土器	椀			(6.8)			12	94	19	丘陵上検出時	青磁	碗			5	巻頭8		157
92	55	谷包含層4	黒色土器	椀			7.9			51	94	20	丘陵上検出時	陶器	搦鉢						218
92	56	谷包含層	黒色土器	椀			7.3			18	94	21	丘陵上検出時	磁器	碗	(10.2)					244
92	57	谷包含層4	黒色土器	椀			8.5			55	95	1	ビット120	土師器	小皿	7.1	1.2	5.2	37	糸切り	182
92	58	谷包含層1	黒色土器	椀			6.7			19	95	2	ビット119	土師器	小皿	6.9	1.4	5.4	37	糸切り→板状・掘圧痕	181
92	59	谷包含層1	黒色土器	椀			(7.0)			27	95	3	ビット76	土師器	杯			6	へら切り	177	
92	60	谷包含層4	黒色土器	椀			(6.4)			227	95	4	ビット75	土師器	杯・小鉢			6.2	糸切り	176	
92	61	谷包含層1	須恵器	杯蓋	13.8	2.4		38		16	95	5	ビット108	土師器	杯			(7.4)	糸切り	180	
92	62	谷包含層4	須恵器	杯身			(9.1)			48	95	6	ビット119	土師器	杯			(7.0)	糸切り→正産	175	
92	63	谷包含層5	須恵器	杯身			(9.6)			226	95	7	ビット118	土師器	杯			6.2	糸切り→板状圧痕	178	
92	64	谷包含層4	須恵器	杯身			(7.2)			48	95	8	ビット74(溝1)	土師器	椀			(7.0)			188
92	65	谷包含層	須恵器	杯身			(6.6)			2	95	9	ビット15	土師器	鉢						185
92	66	谷包含層1	須恵器	壺	(10.4)			38		25	95	10	ビット32	土師器	鍋						184
92	67	谷包含層4	須恵器	壺						50	95	11	ビット74(溝1)	黒色土器	椀	(14.0)					240
92	68	谷包含層1	須恵器	壺						15	95	12	ビット33	須恵器	杯			(9.0)			236
92	69	谷包含層1	須恵器	皿						228	95	13	ビット90	瓦質土器	鍋	(30.0)					189
92	70	谷包含層	須恵器	甕						209	95	14	ビット96	瓦質土器	搦鉢						179
92	71	谷包含層	須恵器	鉢			(14.6)			196	95	15	ビット10	瓦質土器	羽釜						183
93	72	谷包含層	緑釉陶器	椀					巻頭11	262	95	16	ビット50	青磁	碗				巻頭8		186
93	73	谷包含層	緑釉陶器	椀					巻頭11	263	95	17	ビット117	磁器(青花)	碗				巻頭8		235
93	74	谷包含層	緑釉陶器	椀						260	95	18	ビット103	磁器(青花)	皿	(14.0)			巻頭8		234
93	75	谷包含層	緑釉陶器	椀						258	95	19	ビット59	陶器	椀			3.4			187
93	76	谷包含層	緑釉陶器	椀	(13.0)					257	95	20	ビット109	陶器	茶入	(6.0)					237

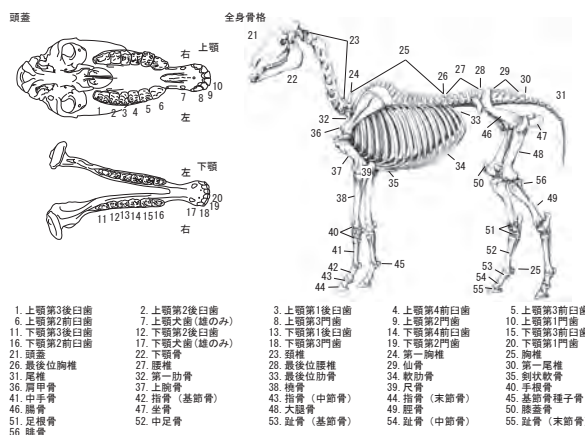
※()内は復元値

(5) 馬場仁王免遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の自然科学分析では、馬場仁王免遺跡で出土した骨について、その種類を明らかにし、動物利用に関する情報を得ることにした。



第97図 ウマ骨格各部の名称
(全身骨格は、加藤・山内,2003 に加筆)

1. 試料

試料は、8世紀～10世紀とされる谷包含層土器集中部から検出された2試料(試料番号1,2)である。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

2. 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、骨格各部の名称については、ウマを例として第97図に示す。

3. 結果

結果を第9表に示す。脊椎動物門 (Vertebrata) 哺乳綱 (Mammalia) のウマ目 (奇蹄目 :Perissodactyla) ウマ科 (Equidae) ウマ (*Equus caballus*)、ウシ目 (偶蹄目 :Artiodactyla) シカ科 (Cervidae) ニホンジカ (*Cervus Nippon*) である。以下、試料ごとに結果を記す。

<試料番号 1; 谷包含層土器集中部>

ニホンジカの破損した右距骨である。内側最大幅 32mm 前後を測る。

<試料番号 2; 谷包含層土器集中部>

ウマの左上顎第2～3後臼歯、左下顎第3～4前臼歯、左下顎1～3後臼歯、右下顎2～3前臼歯、右下顎第2～3後臼歯、下顎臼歯片、門歯、歯牙片である。左下顎第2後臼歯が臼歯高 65.9mm、右下顎第2後臼歯が臼歯高 61.9mm を測る。

第9表 馬場仁王免遺跡の骨同定結果

試料番号	採取位置等	時期	種類	部位	左右	部分	数量	被熱	備考
1	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ニホンジカ	距骨	右	破損	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	上顎第2後臼歯	左	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	上顎第3後臼歯	左	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第3前臼歯	左	破片	1 +		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第4前臼歯	左	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第1後臼歯	左	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第2後臼歯	左	破損	1		h65.9
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第3後臼歯	左	破片	1 +		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第2前臼歯	右	破片	1 +		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第3前臼歯	右	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第2後臼歯	右	破損	1		h61.9
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎第3後臼歯	右	破損	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	下顎臼歯	左	破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	門歯		破片	1		
2	谷包含層土器集中部	8世紀～10世紀(10世紀中心)	ウマ	歯牙		破片	7 +		

4. 考察

谷部土器集中出土地点からは、ニホンジカ、ウマが確認された。ニホンジカは、距骨がみられ、大きさから幼獣と推定される。部分的な産出であるが、人間が食料資源等として利用していた可能性もある。

ウマは、家畜などとして飼育されており、労働力等として利用されていたとみられる。下顎歯牙の大半がみられることに加え、上顎歯牙も含まれることから、頭蓋が存在していたと考えられる。臼歯高から推定される年齢は、西中川ほか(1991)を参考とすると、臼歯高からみて5～6歳程度と考えられる。松井(1997)によると、ウマやウシの出土例を整理・分類したところ、自然死・事故死、屠殺、犠牲などに分類されると述べている。今回の場合、この内のどれにあたるか判断できず、出土状況等を併せて今後の検討が必要になるであろう。

引用文献

加藤 嘉太郎・山内 昭二,2003,新編 家畜比較解剖図説 上巻.養賢堂,315p.

西中川 駿・本田 道輝・松元 光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究.平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書,99p.

写真 16 馬場仁王免遺跡の出土骨





1 遺跡東方から西方
京都峠方面を望む



2 遺跡全景
(上空から)



1 基本土層①
〔A-A'〕(東から)



2 基本土層②
〔B-B'〕(東から)

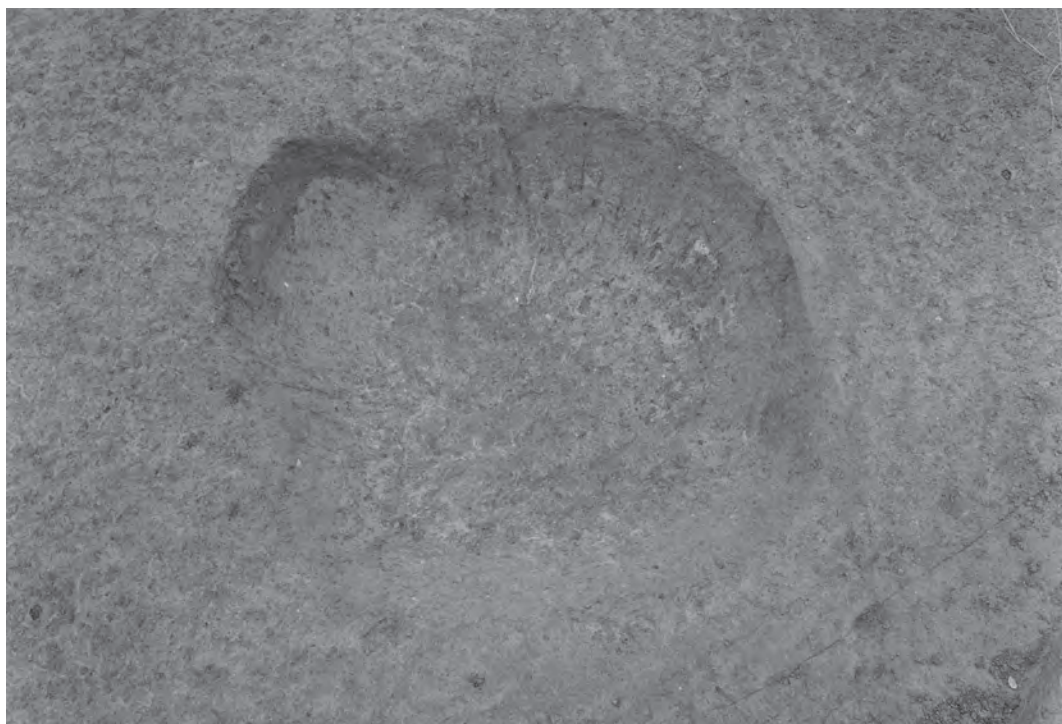


3 基本土層③
〔C-C'〕(東から)



4 基本土層④
〔D-D'〕(3号溝含む)
(東から)

1 1号土坑 (南西から)

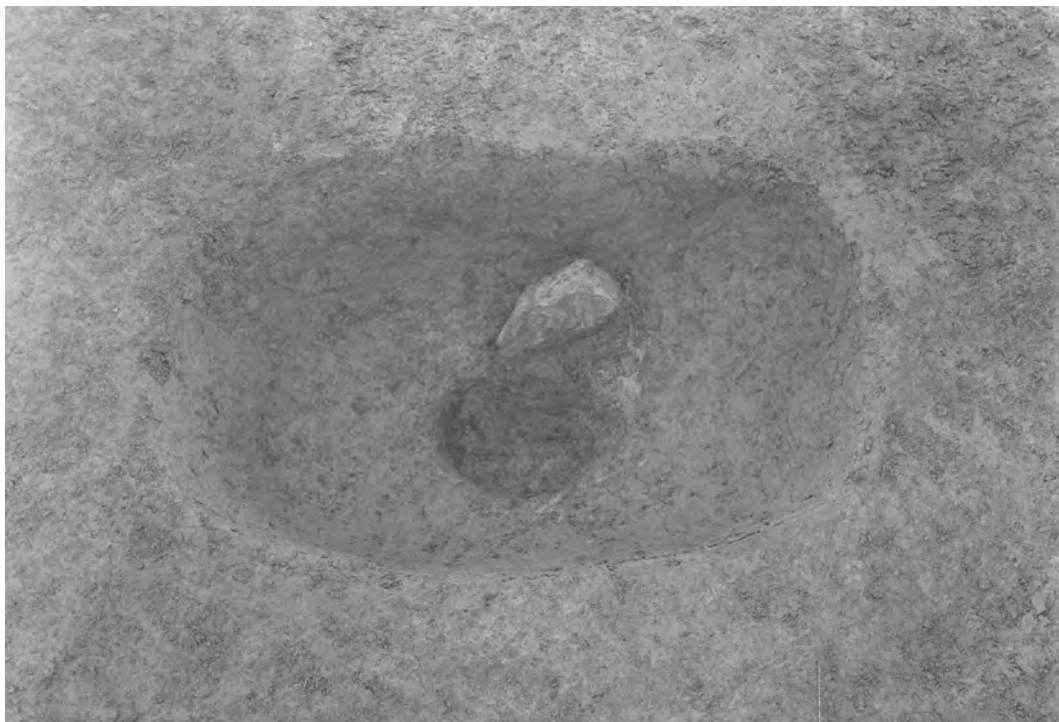


2 2号土坑 (北から)

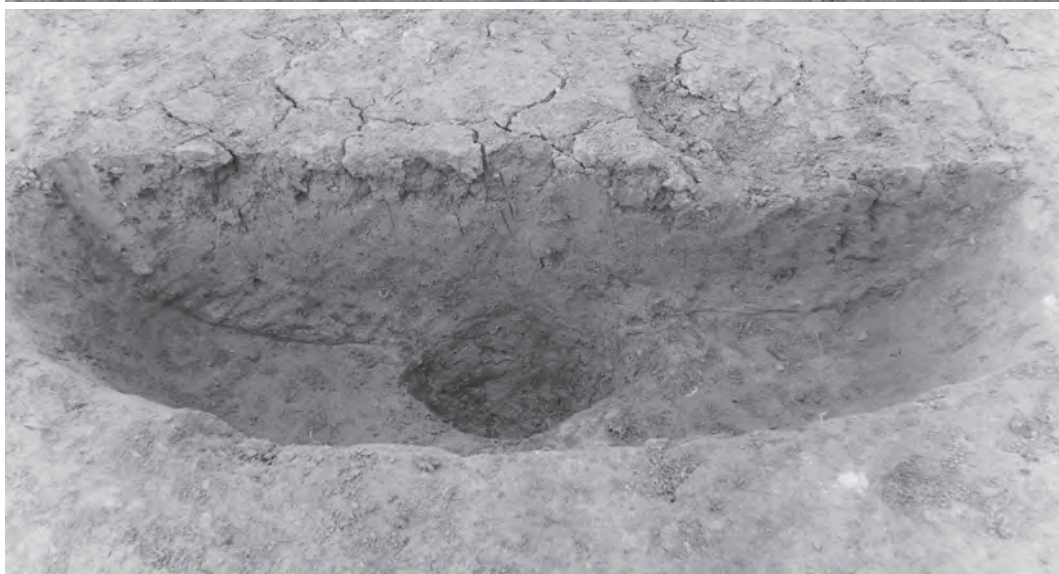


3 3号土坑 (南から)





1 4号土坑（南西から）

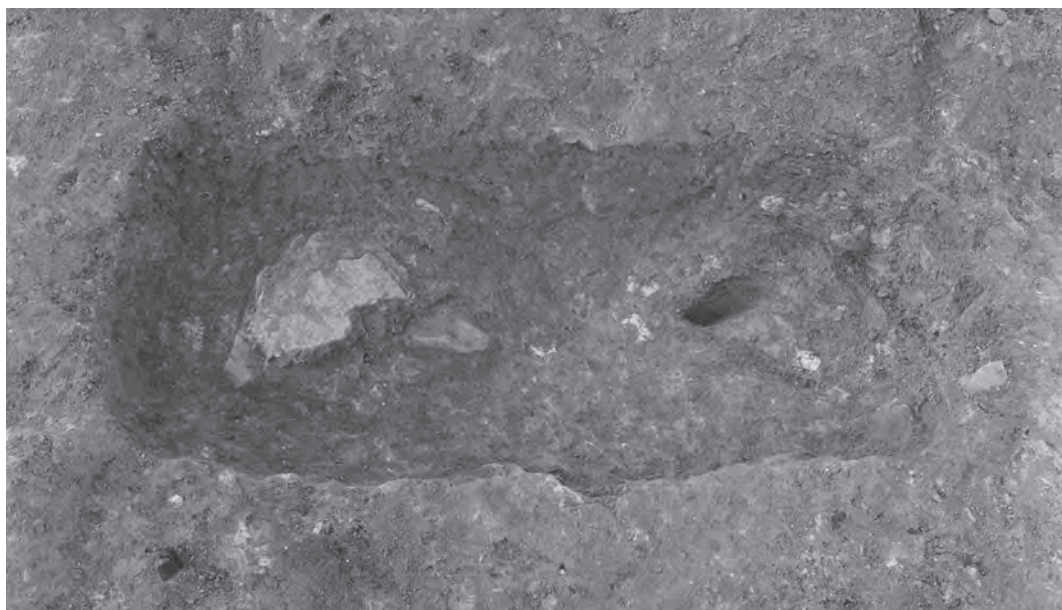


2 4号土坑土層（南西から）

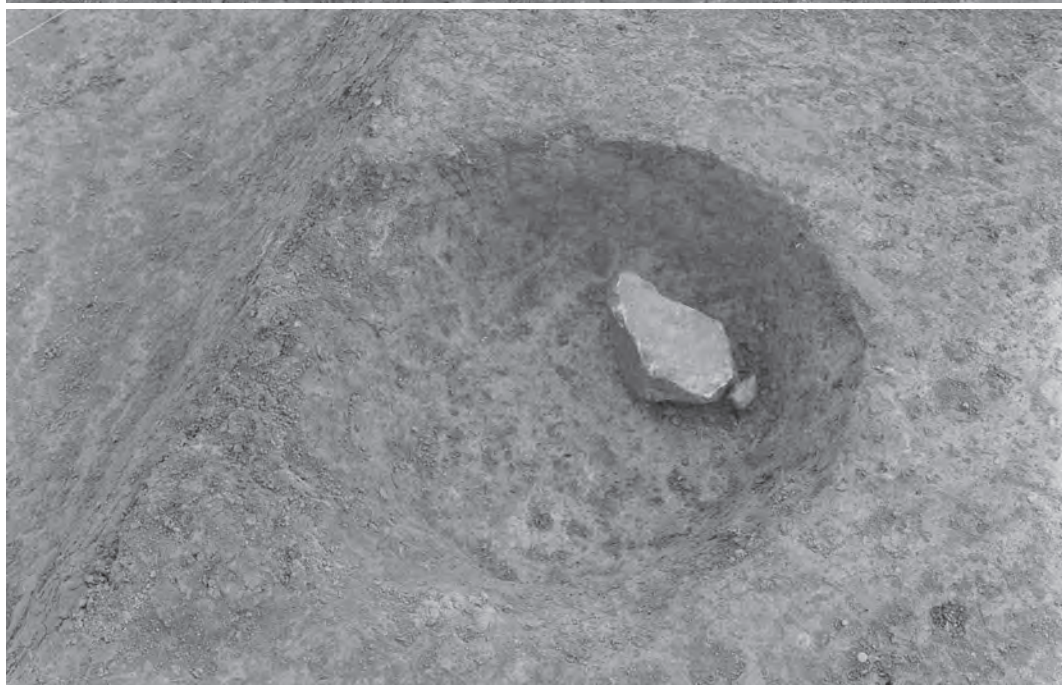


3 5号土坑（西から）

1 6号土坑 (南から)



2 7号土坑 (北西から)



3 8号土坑 (北から)





1 9号土坑（北から）



2 10号土坑（南から）



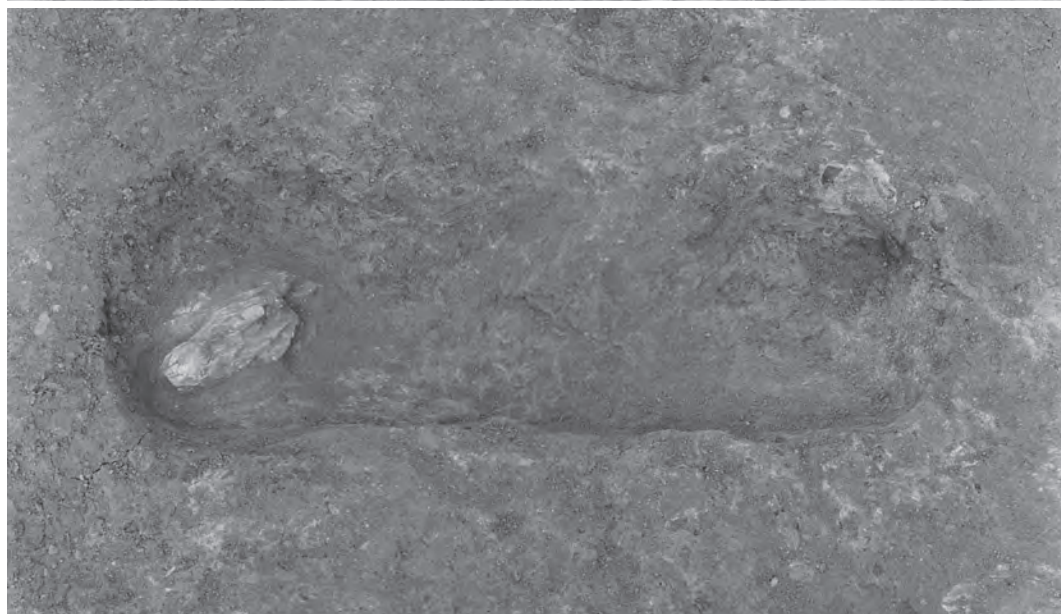
3 11号土坑（北西から）



1 12号土坑 (南から)



2 12号土坑土層 (東から)



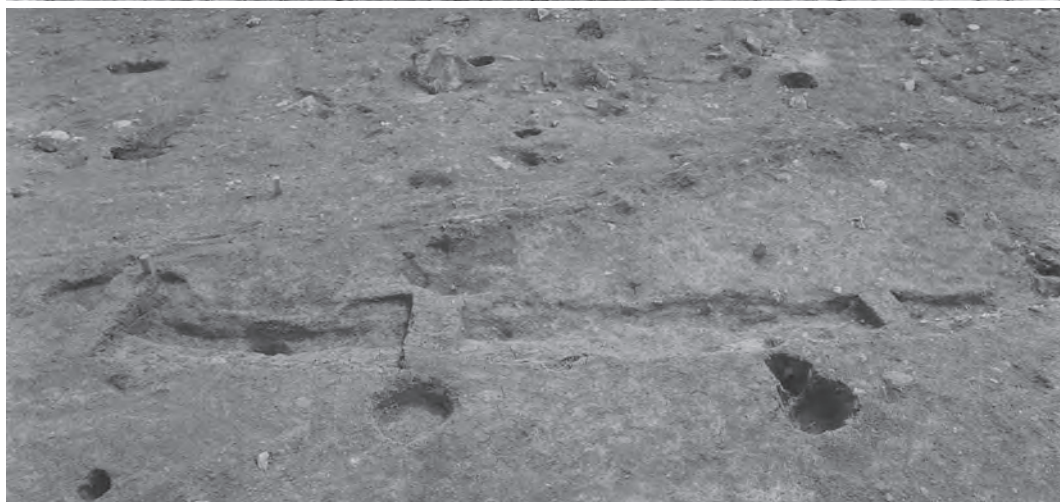
3 13号土坑 (南から)



1 1号溝 (北から)



2 1号溝土層
〔a-a'〕 (東から)



3 2号溝 (北から)



4 2号溝土層
〔b-b'のベルト裏〕
(西から)



1 谷部① (東から)



2 谷部② (西から)



3 谷部土器集中出土地点の
包含層堆積状況および
3号溝土層 [c-c']
(西から)



1 谷部土器集中
出土地点① (南から)



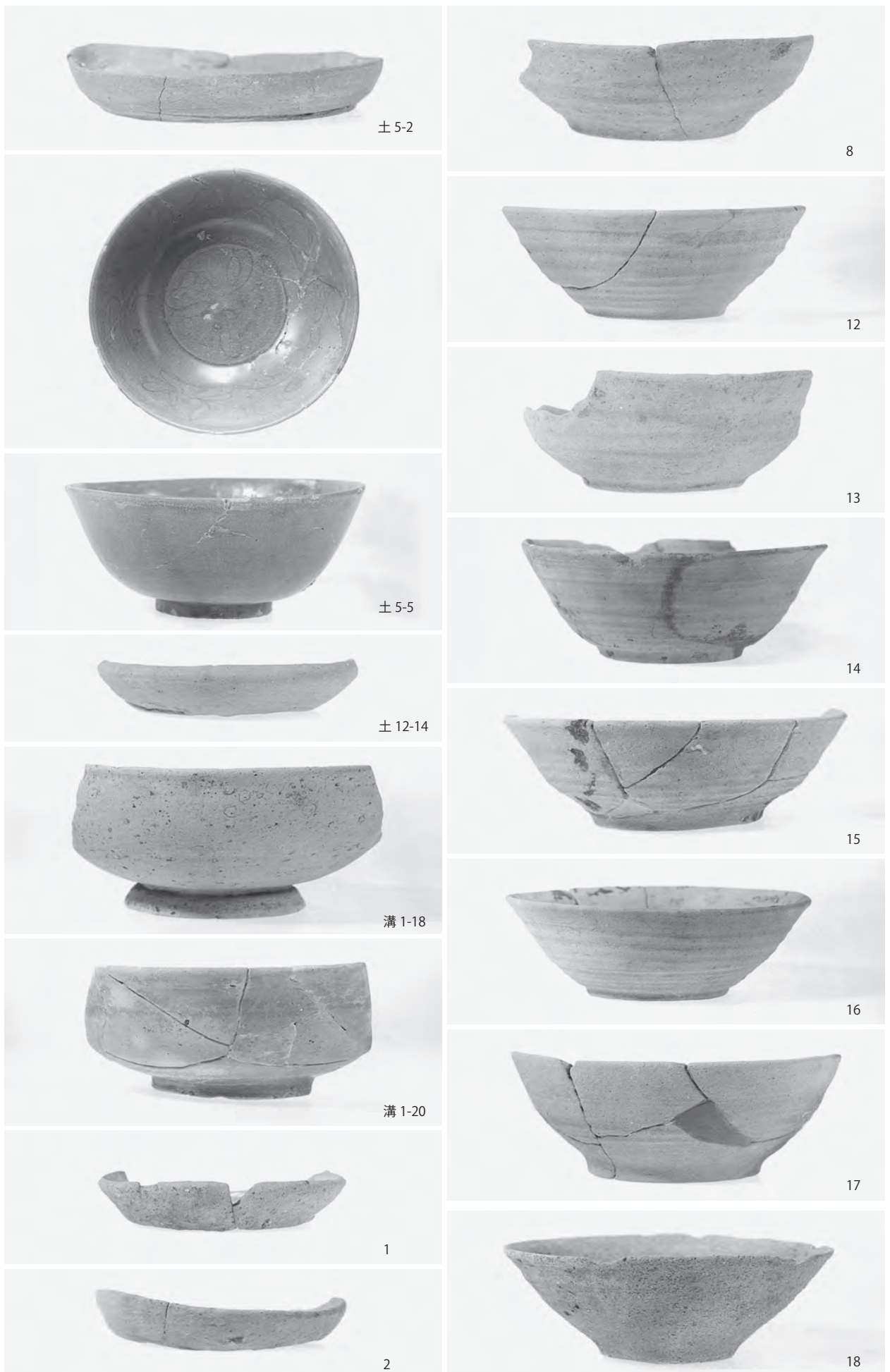
2 谷部土器集中
出土地点② (東から)



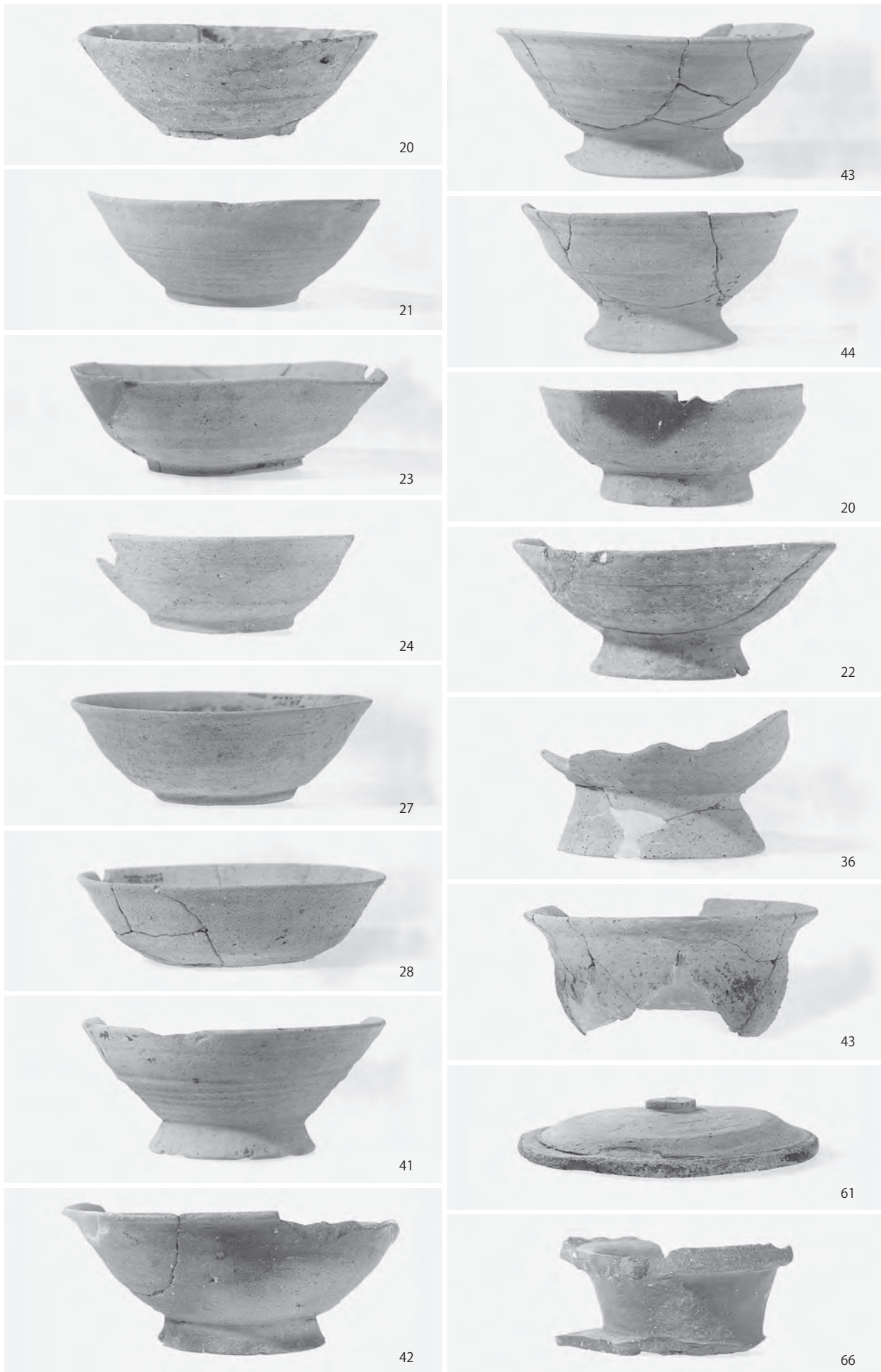
3 谷部土器集中出土
地点東側杭 (南から)



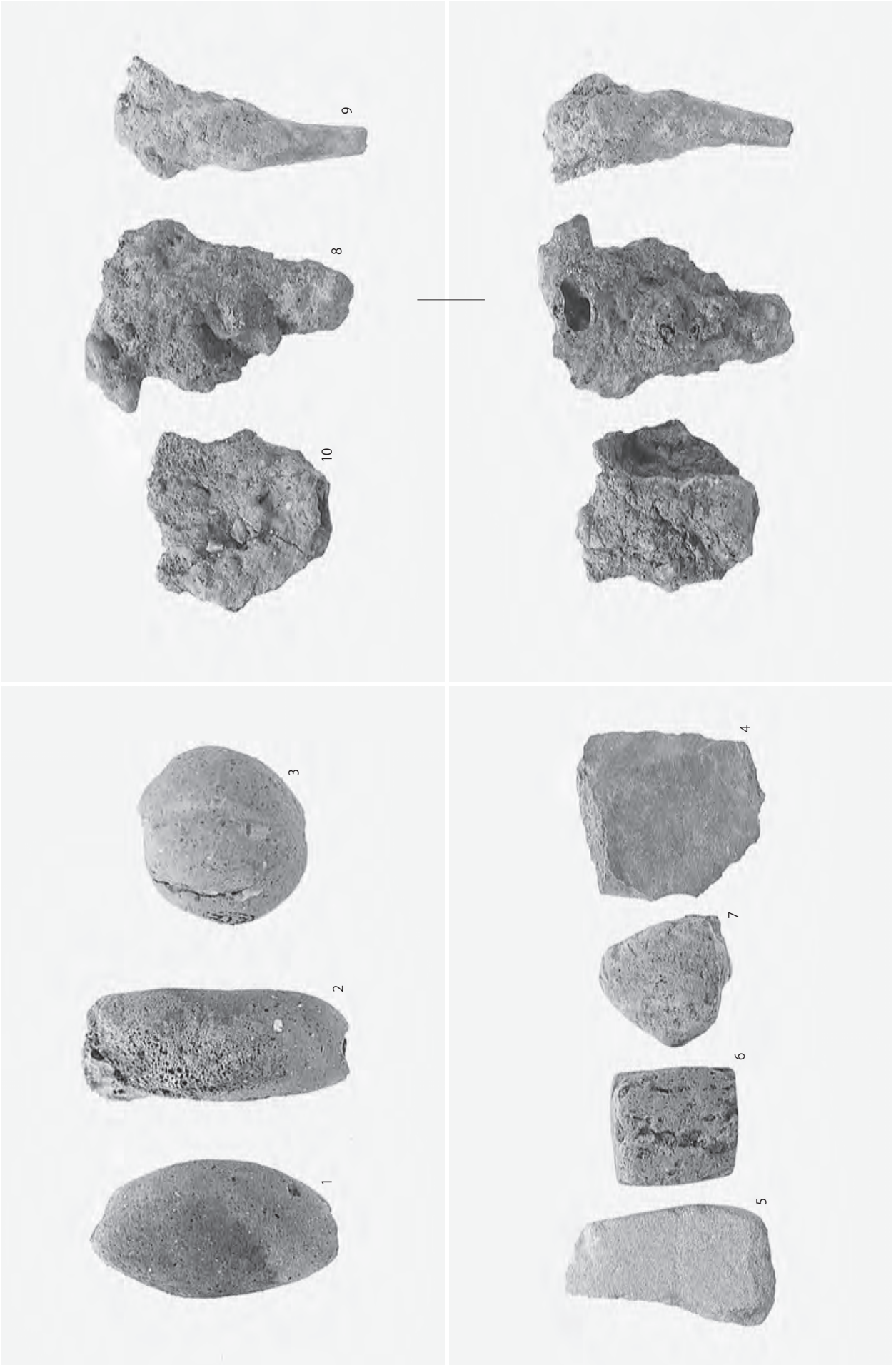
4 谷部土器集中出土
地点西側杭 (南から)



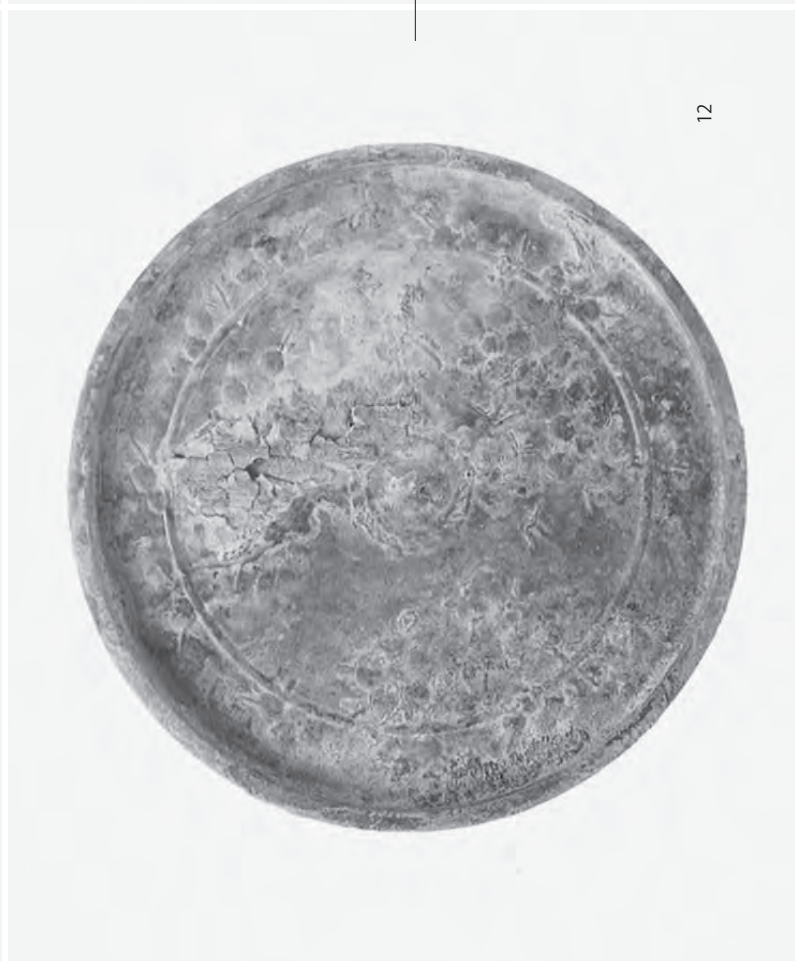
遺構および谷部土器集中地点出土土器



谷部土器集中地点および包含層出土土器



土製品、石製品および金属製品



11

12

5号土坑出土鉄製刀子および青銅鏡

IV おわりに

馬場長町遺跡・仁王免遺跡で見られた最も古い生活の痕跡は、旧石器と思われる打製石器であり、仁王免遺跡からは落とし穴遺構が発見されている。丘陵尾根に沿って谷に水を飲みにきた動物の狩猟場として適地であったのだろう。それ以降の時期のものはほとんど見られず、8世紀前葉から急激に多くの遺物が見られるようになる。

8～9世紀の馬場長町遺跡出土遺物の検討から、丘陵裾に有力者の居宅跡が存在した可能性を指摘したが、その有力者はどのような人物だろうか。

第98図のように、馬場遺跡群の東側と南側に古代官道の推定路線がある。本遺跡の所在する京都郡には「苺田郷」「草野郷」「諫山郷」「本山郷」の4郷があり、馬場地区は「苺田郷」に属し、「本山郷」と「草野郷」へ行く官道の合流地点にあたる。特に、「本山郷」へは京都峠を越えることになるため、峠の出入口にあたる馬場地区は物流の中継地点であったことが推察される。

馬場地区では、現在の土地区画や小字名からは官道路線を推定できないため、京都峠へ向かうルートを横断する東九州高速道路の路線内で道路状遺構が検出されることが期待されていたが、試掘調査では遺構は確認されなかった。仁王免遺跡の立地する丘陵尾根から殿川に向かって緩斜面があった旧地形が推定されるが、これが削平されて段々の水田に造成されている。しかし、完全に削平されるほどの造成ではないので、本来遺構がないか、希薄であったと推定される。殿川沿いの県道苺田採銅所線の付け替え用地の試掘データからは、丘陵が川側まで張り出していた地形が復元できるので、殿川の北側に官道がないとすれば、現在の県道苺田採銅所線そのものが官道であったと考えられる。

この馬場仁王面が立地する台地の先端には西恩寺推定地や宇原神社があることから、官道に近いこの台地の先端が馬場遺跡群の中心地と見られる。馬場遺跡の東部と浜町遺跡からは土馬が採集されており、官道沿いになんらかの施設が存在する可能性は高い。

遺跡の性格に迫りうる材料に墨書土器がある。馬場長町遺跡から出土した8世紀後半の「吉備」・「吉」・○が三角形に配置された記号の墨書は、北九州市長野 A 遺跡に類例がある。長野 A 遺跡は大型建物こそ発見されていないが、出土遺物から企救郡の郡衙と関わりのある遺跡と見られており、その遺跡と同じ墨書土器が出土したことから、馬場長町遺跡の有力者も公的な性格を帯びていた可能性が高い。したがって、馬場遺跡の官道沿いに存在する公的施設に出仕した官人の居宅であったと推察される。また、土師器の丸底杯や企救型甕が多く存在することは企救郡との関係が深かったことを意味する。

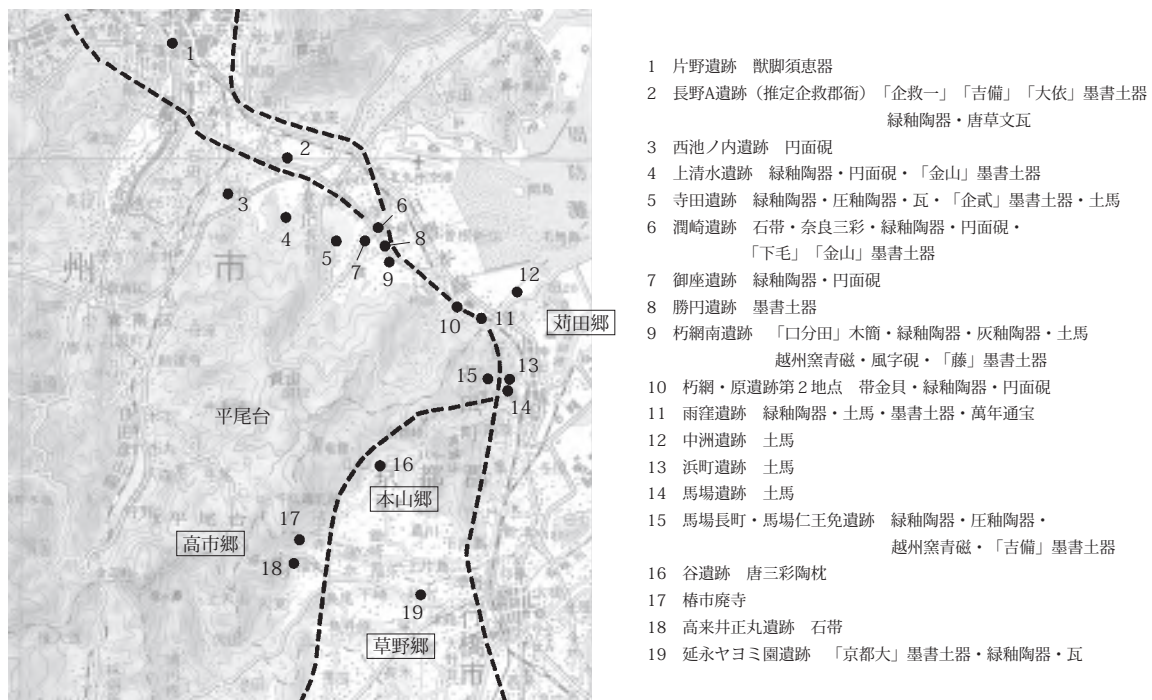
10世紀には、馬場仁王免遺跡側で遺物量が増加し、緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯青磁などの希少遺物の出土量は、長町遺跡出土品と合わせると京築地域でも有数なものとなる。12世紀後半には和鏡を伴う土壙墓も見られ、これは官衙的施設にかわって宇佐宮弥勒寺領の宇原庄が成立したことを暗示している。

丘陵部の利用方法については、遺構の削平が著しく不明な部分が多い。少なくとも、壑穴遺構の存在から、中世前期には作業場所として利用されたことが伺える。物証はないがこのころから石灰岩の利用が始まったのかもしれない。15世紀の井戸からは鶴嘴とともに石灰岩が出土したことから、少なくともこの時期には確実に利用されている。その後は近代に石灰岩の焼成窯が作られ、石灰岩の肥料用への利用を明らかにできた。

今回の調査では、官道や官衙的施設そのものは発見されなかったが、多くの貴重な資料からその

縁辺部の様相を知ることができた。また、これまで京都郡で希薄だった9世紀から11世紀にかけての資料も蓄積された。さらに、苅田町の重要資源である石灰岩の利用の歴史を知ることができたことは、興味深い成果であった。

最後に、長期間にわたる発掘調査に際しては、騒音や泥水の流出により周辺住民の方々にはたいへんなご迷惑をお掛けしました。発掘作業に参加していただいた方には、炎天下での重労働や急斜面地での作業などのご苦勞に感謝申し上げます。今回の調査が、豊前地方の調査研究に役立つことを望みます。



第 98 図 豊前北部地域の官道推定路線と主要遺跡分布図 (1/200,000)

報告書抄録

ふりがな	ばばながまちいせき ばばにおうめんいせき
書名	馬場長町遺跡 馬場仁王免遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第4集
編著者名	秦 憲二(編) 坂元雄紀
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
発行年月日	平成 25(2013) 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ばばながまちいせき 馬場長町遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 かんだまちおおあざばば 荇田町大字馬場	40621		33°	130°	2008.5.7 ~2008.12.19	1・2区 560㎡ 3区 3,700㎡	東九州自動 車道建設
				46'	58'			
				48"	16"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
馬場長町遺跡	集落	奈良	掘立柱建物跡	1	土師器	木製品	イイダコ壺	北九州市長野 A 遺跡出土と 同じ墨書土器 肘木 多量のイイダコ壺 多量の焼塩壺
		平安	土坑	6	須恵器	石製品	墨書土器	
		鎌倉	井戸	3	黒色土器	金属製品		
		戦国	溝状遺構	23	陶磁器	焼塩壺		
		明治・大正	流路跡	1	土製品	獣骨		

遺跡の概要

奈良時代有力者の館跡と、平安時代の荘園に関する集落遺跡で、丘陵部では戦国時代まで存続している。イイダコ壺を作って漁を行い、焼塩を焼き、狩猟も行っていた。陶磁器や墨書土器も出土した

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ばばにおうめんいせき 馬場仁王免遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 かんだまちおおあざばば 荇田町大字馬場	40621		33°	130°	2007.12.4 ~2008.3.27	2,850㎡	東九州自動 車道建設
				46'	58'			
				45"	15"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
馬場仁王免遺跡	集落 墓地 散布地	奈良	土坑	8	須恵器	旧石器	青銅鏡・刀子・青磁碗・土師器 小皿が副葬された土壙墓	
		平安	溝状遺構	2	土師器	弥生土器		
		戦国	落し穴	3	陶磁器	獣骨		
			土壙墓	2	青銅鏡 刀子			

遺跡の概要

8世紀から12世紀を主体とする集落遺跡で、16世紀まで存続している。緑釉陶器・越州窯青磁が出土し、和鏡が副葬された土壙墓などが特筆される。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 3

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第4集

馬場長町遺跡 馬場仁王免遺跡

平成25年(2013年)3月31日

発行 九州歴史資料館

福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

福岡県朝倉市馬田336